

みんなのデジタルリポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

2. 研究および共同利用

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5050

2 研究および共同利用

概観

本館の研究は2004年度の法人化以降、「機関研究」「共同研究」「各個研究」という3種類の研究を柱としている。「機関研究」とは近年の研究動向や問題の所在を調査した上で、研究テーマを設定し、本館が全館規模で取り組む研究活動である。2010年4月より法人化第2期を迎えるにあたり、2009年10月から新たな研究領域「包摂と自律の人間学」と「マテリアリティの人間学」を設定し、研究プロジェクトを開始した。

「共同研究」はある共通の研究テーマの下に複数の研究者が集まって研究会などを開催し、共同で研究を行う活動で、本館の研究活動の柱の1つであるとともに、大学共同利用機関としての「共同利用」の一環でもある。機関研究が研究テーマの設定やプロジェクトの選定から、その運営、成果の公表まで本館主導で行うのに対して、共同研究は研究テーマと組織について、館員のみならず、本館を共同利用する研究者の自主的な提案に基づく。すなわち、館員（客員教員を含む）を対象とした館内募集に加えて、公募も行っている。応募された共同研究の提案は、公募、館内募集の区別なく共同利用委員会で審査され、選定される。また、2010年度から「若手研究者による共同研究」が制度化され、一般の共同研究と同様に公募している。さらに、2004年度以来、当の共同研究会のメンバーだけではなく研究者、学生、一般への研究会の公開を推進している。

「各個研究」は館員（客員教員を含む）が自主的にテーマを設定して、個人で実施する研究活動である。すなわち、館員個人の研究活動も、申請することによって館の公的な研究活動の一環に組み入れているわけである。

また、本館が属する人間文化研究機構が主催する研究として「連携研究」が2005年度から本格的に始動した。連携研究は人間文化研究機構を構成する6機関（国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国立国語研究所、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所、国立民族学博物館）が連携してさらに高次の研究を目指すもので、「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」と『人間文化資源』の総合的研究」という2種類の大型プロジェクトが実施されている。

館の研究活動である「機関研究」や個々の研究者による「各個研究」を資金面でサポートするのが館長のリーダーシップ支援経費と科学研究費補助金などの外部資金である。前者では特に機関研究の推進のために「機関研究推進経費」という枠組みがあり、大規模なシンポジウムの準備と開催のためにこの経費を使用することができる。同じくリーダーシップ支援経費には「研究成果公開プログラム」という枠組みもある。機関研究プロジェクト以外の大規模なシンポジウムの実施をはじめ、共同研究や各個研究の成果を公開するための研究フォーラムや国外の学会、研究集会での発表を支援するものである。

しかし、7件の機関研究プロジェクト、42件の共同研究、客員教員や外国人研究員、機関研究員などを含めると100を超える各個研究の研究資金を運営交付金だけから捻出することは到底できない。さらに研究に客観性、社会性を担保していく上でも、科学研究費補助金などの競争的外部資金の導入を積極的に行っている。そのほか、学振以外の独立行政法人が募集する助成金や民間の助成団体による奨学寄付金なども積極的に受け入れている。

また、これら外部資金に付随する間接経費も貴重な研究支援経費となっており、それらを使用した館内の研究環境整備事業が実施されている。なお、リーダーシップ支援経費の「事業調査経費」という枠組みも同じ目的で使われる。

本館における研究成果公開の一環である刊行物に関しては、2012年度には『国立民族学博物館研究報告』37巻1～4号が刊行されるとともに、SES (Senri Ethnological Studies)、SER (『国立民族学博物館調査報告』または Senri Ethnological Reports)、『国立民族学博物館論集』、『民博通信』、『研究年報2011』が刊行され、外部出版制度を利用した成果公開も行った。さらに、研究成果を広く市民に公開するための学術講演会が、東京と大阪で開催されている。

2004年度に共同利用に関してその強化を目的とする改革を行った結果、本館の共同利用では共同研究の公募、公開の推進と資料・設備の共同利用の促進を強調するようになった。なお、従来から、共同利用を積極的に推進するために、「外来研究員」「特別共同利用研究員」といった研究員制度を設けている。

本館の資料は2004年度より標本資料、映像音響資料、文献図書資料、民族学研究アーカイブズ資料に大きく4分類されている。それぞれの整備および利用状況をみると、まず標本資料は、文化資源プロジェクトの一環として海外資料収集が行われており、寄贈等により新たに加わった資料もある。映像音響資料の収集も文化資源プロジェクトの一環として行われている。文献図書資料に関しては、継続的な事業として国立情報学研究所 NACSIS-CAT (全国共同利用総合目録データベース) への登録作業を推進しており、日本語をはじめとし、ロシア語、英語、ドイツ語、フランス語などの図書資料や難解語図書などの遡及入力を行った。遡及入力事業で登録された所蔵情報は、本館の図書システムの蔵書データベースとして、インターネットを介して検索するシステム (OPAC) により、広く一般に公開され利用されており、本館所蔵の図書資料の相互利用での貸出受付が2012年度は1,091件、文献複写受付

は2,414件と、共同利用に貢献していることがわかる。さらに、2008年9月より館外貸出を開始し、一般利用者にも館外貸出利用可とした。

2007年度より民族学研究アーカイブズの共同利用を促進するため、ホームページを開設し、各アーカイブの目録を公開してきた。2012年度は、木内信敬アーカイブ資料について整理を終えた。また、土方久功アーカイブ資料のうち、ノート全40冊のデジタル化を完了した。

2006年度に「民族学資料共同利用窓口」を設置し、利用に関する多様な問い合わせを1つの窓口で対応できるようにし、利用者に対するサービス向上を図った。2012年度には422件の問い合わせに対応し、利用促進に寄与した。

共同利用を促進させるために、実査を兼ねた資料IDラベルと不正持ち出し防止用磁気テープの貼り付けを2010年度より3か年計画で進めている。2012年度にはその第3期として約20万冊を処理した。また、書架資料落下防止テープ貼付、書庫階段部壁塗装、図書館シャッター改修、書庫エレベーター内へのレスキューキャビネットの設置などを行った。

そのほか、大学や研究機関等の研修・授業、あるいは学会の開催のために、展示場や講堂、セミナー室などの本館の施設が利用されている。

2-1 みんなの研究

機関研究

●機関研究の意義

本館では、現代世界が直面する学術的かつ社会的に重要な諸課題に、文化人類学・民族学の立場から組織を挙げて重点的に取り組む機関研究として、共同研究や国際研究集会などを組み合わせた、大型で公開性の高いプロジェクトを実行している。この機関研究には、全国の大学や研究機関に所属する研究者も参加するなど、大学共同利用機関、さらには我が国における文化人類学・民族学の研究拠点としての機能を高める役割も果たしている。また、実施プロジェクトの内容は、大学・研究機関等の外部者からの意見を取り入れつつ研究戦略センター会議や機関研究運営会議において検討しており、大学共同利用機関として研究者コミュニティの意見が十分に反映されるような体制がとられている。

2009年度に学術的かつ社会的な要請に基づいて、「包摂と自律の人間学」と「マテリアリティの人間学」という2つの研究領域を機関研究として新たに設定し、国際性と機関間連携を重視した館全体が取り組む重点型の共同研究として位置づけた。前者は人と人の関係に、後者は人とモノの関係に研究の焦点をあわせつつ、新たな社会観や人間観の創出をめざして関連諸分野の研究者と協力しながら研究を実施している。2012年度には、研究領域「包摂と自律の人間学」では「支援の人類学——グローバルな互恵性の構築に向けて」（代表者：鈴木 紀）、研究プロジェクト「近代ヒスパニック世界における国家・共同体・アイデンティティ——スペイン領アメリカの集住政策の研究」（代表者：齋藤 晃）、「ケアと育みの人類学」（代表者：鈴木七美）、「中国における家族・民族・国家のディスコース」（代表者：韓 敏）の4つの研究プロジェクトが、研究領域「マテリアリティの人間学」では「モノの崇拜——所有・収集・表象研究の新展開」（代表者：竹沢尚一郎）、「布と人間の人類学的研究」（代表者：関本照夫）、「民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究——ロシア民族学博物館との国際共同研究」（代表者：佐々木史郎）の3つの研究プロジェクトが実施された。

研究領域「包摂と自律の人間学」では、2012年7月にオーストリアにおいて国際シンポジウム『スペイン領南米における集住政策と先住民社会へのその効果』、同年11月に国際シンポジウム『ヒーリング・オルタナティヴス——ケアと養生の文化』、同『中国の社会と民族——人類学的枠組みと事例研究』、2013年3月にはアメリカ合衆国において国際ワークショップ『グローバル支援の人類学——市民社会間で互恵的紐帯をいかに形成するか』など合計8件の研究集会を開催した。また、成果の一部として Nanami Suzuki (ed.) *The Anthropology of Aging and Well-being: Searching for the Space and Time to Cultivate Life Together* (SES No.80, 2012, National Museum of Ethnology) などが出版された。

研究領域「マテリアリティの人間学」では、2012年11月に国際ワークショップ『アジアの布と生きる』、2013年1月にはフランスにおいて国際シンポジウム『21世紀の民族学博物館』、国際ワークショップ『民族学資料の保存と修復——博物館バックヤードの利用効率向上と自然素材資料の修復』、同年3月には『博物館は悲惨な記憶をどう展示するか』など合計6件の研究集会を開催した。

2012年度機関研究一覧

領域	プロジェクト	代表者	研究年度
1 包摂と自律の人間学 (領域代表：岸上伸啓)	支援の人類学——グローバルな互惠性の構築に向けて	鈴木 紀	2009～2012
	近代ヒスパニック世界における国家・共同体・アイデンティティ——スペイン領アメリカの集住政策の研究	齋藤 晃	2011～2013
	ケアと育みの人類学	鈴木七美	2011～2013
	中国における家族・民族・国家のディスコース	韓 敏	2012～2014
2 マテリアリティの人間学 (領域代表：寺田吉孝)	モノの崇拜——所有・収集・表象研究の新展開	竹沢尚一郎	2009～2012
	布と人間の人類学的研究	関本照夫	2010～2012
	民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究——ロシア民族学博物館との国際共同研究	佐々木史郎	2012～2014

●機関研究の領域とプロジェクト

1 「包摂と自律の人間学」 領域代表：岸上伸啓

グローバル化が進む状況において人と人の関係を、人類学を核としつつ学際的に再検討して、新しい社会の構築を展望する。現代社会においては、マイノリティの自律性を保つとともに、社会的公正をめざす思想や方策が求められている。具体的には、公共圏や市民運動、ネットワーク、トランスナショナル、無国籍・重国籍、福祉、支援などが主要な研究テーマとなる。

「支援の人類学——グローバルな互惠性の構築に向けて」

代表者：鈴木 紀 2009～2012

研究目的

本研究は2つの目的をもつ。第1に、経済と情報のグローバル化がすすむ現代世界を読みとくキーワードとして「支援」に着目し、グローバル化の弊害にたいするさまざまな支援の在り方を民族誌的に比較検討しながら、地球規模の互惠性の在り方を構想することである。第2に、その互惠性の中に人類学者の営為自体をも取り込み、人類学者による支援研究が実際の支援活動にどのような貢献ができるかを問うことにより、問題解決の実践的ツールとしての人類学の性質を研磨することである。

本研究で支援に着目する理由は、機関研究の領域 1 包摂と自律の人間学の方法論を明確にするためである。包摂と自律という課題は、社会から排除されたマイノリティをマジョリティに包摂しつつも、マイノリティの自律性を維持し、同時にマジョリティの在り方自体にも変容をもたらすことを求めるものである。本研究は、このようなマイノリティの包摂と自律、およびマジョリティの変容のための学習の契機として、個別具体的な支援活動を想定する。そして支援の現場に焦点をあて、そこに関与する支援者と被支援者の関係性を民族誌的に解明することにより、包摂と自律の過程を実証的に把握し、それが達成される条件を考察することが可能になる。

また本研究で人類学の実践性を重視する理由は、前機関研究「文化人類学の社会的活用」を継承発展させるためである。前研究では、『みんぱく実践人類学シリーズ』にて、主として開発途上国の社会、経済問題に対する文化人類学の活用を提示したが、本研究では、先進国と開発途上国双方に関わる、まさにグローバルな取り組みを必要とする領域へと研究対象を広げていく。

実施状況

- 2012年6月23日、第46回日本文化人類学会研究大会（広島大学）の分科会の形で、『グローバル支援の人類学——支援研究から人類学的支援へ』ワークショップを開催した。ワークショップでは、プロジェクトリーダーの鈴木 紀の趣旨説明に続き、岸上伸啓「カナダにおける都市先住民イヌイットをめぐる支援活動」、関根久雄（筑波大学）「人類学的評価という協働——ある『支援』の試み」、白川千尋「青年海外協力隊をめぐる支援活動」、鈴木 紀「フェアトレードの『支援の言説』と人類学的支援」、および陳 天璽「日本における無国籍者をめぐる支援活動」の5つの研究発表をおこなった。これに対し亀井伸孝（愛知教育大学）と清水 展（京都大学）がコメントした。会場には約50名の参加があった。
- 2012年12月15日、国立民族学博物館にて国際ワークショップ『グローバル支援のための実践人類学——研究と実践のキャリア・プランニング』を開催した。鈴木 紀の趣旨説明の後、リオール・ノラン（パデュー大学）「Practicing Anthropology: Challenges, Rewards, and Career Planning（実践人類学——挑戦、報酬、キャリア・

プランニング)、佐藤 峰 (JICA 研究所)「当事者の声を反映させる小さな仕組み作り——開発実践・援助実務・学際研究での試み」、福武慎太郎 (上智大学)「日本の国際協力 NGO の課題と未来——東ティモールにおける NGO 活動の経験から」、藤掛洋子 (横浜国立大学)「国際協力の実践と研究の往還を超えて——パラグアイとの 20年間の関わりを振り返る」の 4 つの発表をおこなった。最後の総合討論では、参加者との質疑応答がおこなわれた。参加者は 41 名。

- 3) 2013年 3月21日、第73回応用人類学会 (Society for Applied Anthropology) (米国コロラド州デンバー市) の分科会の形で、国際ワークショップ『グローバル支援の人類学——どのように市民社会間に互恵的絆を育むか? (Anthropology of Global Supporting: How Can We Forge Reciprocal Bonds between Civil Societies?)』を開催した。鈴木 紀の趣旨説明の後、岸上伸啓「カナダ都市部のイヌイト・ホームレス——モントリオール調査の結果から (Homeless Inuit in Urban Centers of Canada: Results from Montreal Research)、陳 天璽「無国籍者の調査と支援——人類学の役割 (Research and Support of Stateless People: The Role of Anthropology)」、内藤直樹 (徳島大学)「長期滞在するソマリア難民と地元ケニア人コミュニティとの社会経済的関係——下からの平和構築に学ぶ (The Socioeconomic Relationships between Somali Protracted Refugees and Host Communities in Kenya: Lessons from Peace Building Practices from Below)」、鈴木 紀「フェアトレード観光——市場主導の倫理的消費からグローバル市民間の倫理的出会いへ (Fair Trade Tourism: From Market-Driven Ethical Consumption to Ethical Encounter between Global Citizens)」の 4 つの発表をおこなった。

成果

本年度は研究 4 年目、最終年度にあたり、第 2 の研究目的、すなわち人類学的研究の支援活動への貢献について、過去 3 年度にわたる研究成果を振り返りながら検討してきた。6 月 23 日のワークショップでは、主として人類学者が研究成果をどのように支援活動に反映させるか、人類学者ならではの貢献はなにかをめぐって議論した。フィールドワーク、文化相対主義、民族誌などの人類学の方法論を支援のツールとして活用すること、調査と支援の不可分性、および長期にわたる情報提供者との付き合いの重要性などが指定された。2012年12月15日の国際ワークショップでは、実践人類学者 (支援活動を専門に行う人類学者) に焦点をあて、そうしたキャリア形成の方法と、実践人類学者の役割としての支援事業に関連した「異文化」間翻訳、実務批判、学術的活動への貢献などの論点が提示された。

2013年 3月21日の国際ワークショップでは、これらの論点を整理して再提示し、国際的な場で議論をおこなった。

機関研究に関連した成果の公表実績

- 1) 実施状況でのべた 3 回のワークショップ
- 2) 鈴木 紀「機関研究のアウトリーチ——みんなくワールドシネマの試み」『民博通信』138: 2-7, 2012
- 3) 鈴木 紀「人類学的支援とは」『民博通信』140: 10-11, 2013

「近代ヒスパニック世界における国家・共同体・アイデンティティ——スペイン領アメリカの集住政策の研究」——

代表者：齋藤 晃 2011～2013

研究目的

集住政策とは、広範囲に分散する小規模な集落を、計画的に造られた大きな町に統合する政策であり、16世紀以降、スペイン統治下のアメリカ全土で実施された。その目的は、先住民のキリスト教化を促進し、租税の徴収と賦役労働者の徴発を容易にすることだが、それに加えて、人間は都市的環境でのみ、その本性を発現する、という考え方が背景にある。およそ 3 世紀にわたって数百万の人びとを数千の町に強制移住させたこの政策は、スペインによるアメリカ支配の基礎を固めるとともに、在来の居住形態、社会組織、権力関係、アイデンティティを大きく変えたといわれている。

本研究は互いに関連するふたつの目的をもつ。

- 1) 集住政策の先住民社会への影響の解明。この点に関しては、研究者のあいだでいまだ合意ができていない。先住民の多くが新設の町から逃亡した事実をもって、政策は失敗したと唱える者がいる反面、同政策は地域ごとに多様だった先住民社会を画一化し、今日の共同体構造の基礎を築いたと主張する者もいる。本研究では、さまざまな地域の事例を比較検討することで、集住政策が先住民社会に与えた影響の全貌を解明する。
- 2) ヒスパニック世界における国家と共同体の関係の解明。アメリカにおいて集住政策が実施されていたとき、スペイン本国では、中央集権国家の建設が進むとともに、中世以来の自治共同体が根強く存続していた。本研究では、集住政策をスペイン帝国版図における国家と共同体の緊張関係の一局面ととらえる。そして、スペイン本国や南米以外の植民地の事例も参照しながら、両者の関係について新たな像を構築する。

実施状況

以下の実施状況には、機関研究経費に頼らず外部資金のみで実施した事業も記載されている。

2012年6月30日、国立民族学博物館において、集住化の成否をテーマとした国内研究集会を開催した。

2012年7月15日から20日にかけて、ウィーン（オーストリア）のウィーン大学において、第54回国際アメリカニスト会議の一環として、『La política de reducciones y sus impactos sobre la sociedad indígena en los dominios españoles de Sudamérica』（日本語訳：スペイン領南米における集住政策と先住民社会へのその効果）と題する国際シンポジウムを開催した。

2012年8月23日、リマ（ペルー）の教皇庁立ペルーカトリカ大学において、同大学大学院アンデス研究プログラムとの共催で、Roberto Tomichá (Universidad Católica Boliviana) を講師として、『La política de reducciones y sus efectos en la sociedad chiquitana (siglos XVII-XVIII)』（日本語訳：チキタノ社会における集住政策とその効果（17～18世紀））と題する公開セミナーを開催した。

2012年9月6日、リマの教皇庁立ペルーカトリカ大学において、同大学大学院アンデス研究プログラムとの共催で、Steven Wernke (Vanderbilt University) を講師として、『Un orden improvisado: el emplazamiento y la construcción de una reducción en el Valle del Colca (Arequipa, Perú)』（日本語訳：即興の秩序——コルカ渓谷（ペルー、アレキパ）のある集住区の位置と建築）と題する公開セミナーを開催した。

2012年12月27日、国立民族学博物館において、集住化と社会空間の変容をテーマとした国内研究集会を開催した。

成果

2012年7月にウィーンで開催した国際シンポジウムは、国際共同研究員を含めたメンバーが一堂に会し、それまでの研究の成果を発表し、直接議論を交わす重要な機会だった。このシンポジウムでは、数日にわたる集中的な討議を通じて、スペイン領南米の集住政策の効果について、通説とは異なる新たなモデルを構築することができた。従来の研究では、集住政策は南米の先住民の社会と文化を全面的に否定し、西欧的な制度や価値を強制するものとみなされてきた。そして、その効果はもっぱら攪乱や破壊などの否定的なものだったと考えられてきた。しかし、本研究では、しばしば先住民が集住政策の客体から主体へと転身し、本来抑圧的な制度を飼い慣らし、支配と被支配の狭間で自分たちの利益を追求したこと。そして、集住政策により先住民に押しつけられた制度や価値が、在来の制度や価値と予想外のかたちで接合し、そこから社会の再編と文化の再生の複雑なプロセスが生じたことを、さまざまな事例の検討を通じて明らかにすることができた。

機関研究に関連した公表実績

1) 出版

Diez, Alejandro (ed.)

Tensiones y transformaciones en comunidades campesinas. Lima: Cisepa / Dpto de CCSS, PUCP, 2012.

Diez, Alejandro

Conceptos políticos, procesos sociales y poblaciones indígenas en democracia: estudio binacional Perú-Bolivia. Lima: Movimiento Manuela Ramos/Ciudadanía, 2012.

Diez, Alejandro

Gobierno comunal entre la propiedad y el control territorial: el caso de la comunidad de Catacaos. En Raúl Asencio, Fernando Eguren y Manuel Ruiz (eds.) *Perú: el problema agrario en debate — Sepia XIV*, Lima: Sepia, pp.115-148, 2012.

Diez, Alejandro

Nuevos retos y nuevos recursos para las comunidades campesinas. En Alejandro Diez (ed.) *Tensiones y transformaciones en comunidades campesinas*. Lima: Cisepa/Dpto de CCSS, PUCP, pp.14-38, 2012.

Glave Testino, Luis Miguel y Roberto Choque Canqui

Mita, caciques y mitayos. Gabriel Fernández Guarache: memoriales en defensa de los indios y debate sobre la mita de Potosí (1646-1663). Sucre: FCBCB/ABNB, 2012.

松森奈津子

「近代スペイン国家形成と後期サラマンカ学派——ルイス・デ・モリナの権力論を中心に」孝忠延夫・安武真隆・西平 等編『多元的世界における「他者」(上)』大阪：関西大学マイノリティ研究センター，pp.239-260，2013。

Moreno Jeria, Rodrigo

Reformismo borbónico y el extrañamiento de los jesuitas: consecuencias misionales en Chiloé. *Boletín de la Academia Chilena de la Historia* 122, 2012.

齋藤 晃

「国際共同研究の枠組みの構築——機関研究：近代ヒスパニック世界における国家・共同体・アイデンティティ——スペイン領アメリカの集住政策の研究」『民博通信』138: 10-11, 2012。

Saito, Akira

Resettlement Policy and Its Impact on Native Society in Spanish South America. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 35: 14, 2012.

Takeda, Kazuhisa

Cambio y continuidad del liderazgo indígena en el cacicazgo y en la milicia de las misiones jesuíticas: análisis cualitativo de las listas de indios guaraníes. *Revista Tellus* 23, 2013.

Wilde, Guillermo

Relocalisations autochtones et ethnogenèse missionnaire dans la frontière sud des empires ibériques: le cas des réductions Guarani au Paraguay (1609-1768). *Recherches Amerindiennes au Québec* 41(2-3): 13-28, 2011.

Wilde, Guillermo

Indios misionados y misioneros indianizados en las tierras bajas de América del Sur: sobre los límites de la adaptación cultural. En Salvador Bernabeu, Christophe Giudicelli y Gilles Havard (coords.) *La indianización: cautivos, renegados, « hombres libres » y misioneros en los confines americanos (siglos XVI a XIX)*, Sevilla: CSIC/EEHA/EHESS/Editorial Doce Calles, pp.291-310, 2012.

Zuloaga Rada, Marina

La conquista negociada: guarangas, autoridades locales e imperios en Huaylas, Perú (1532-1610), Lima: IEP/IFEA, 2012.

2) 公開シンポジウム

国際シンポジウム『La política de reducciones y sus impactos sobre la sociedad indígena en los dominios españoles de Sudamérica』(日本語訳：スペイン領南米における集住政策と先住民社会へのその効果)、2012年7月15～20日、ウィーン大学(ウィーン、オーストリア)、実行委員長：齋藤 晃、Claudia Rosas Lauro

「ケアと育みの人類学」

代表者：鈴木七美 2011～2013

研究目的

近年、ウェルビーイングに配慮した生活の場のありかたが、国家単位の福祉のみならず、人々の権利を視野に収めたグローバルな視点に基づく市民社会の目的という観点から注目され、ウェルビーイングの指標も提示されている。だが、ウェルビーイングは多様であり、また、終わりの見えない紛争や著しい格差拡大など、「よい状態」や「幸福」・「希望」を思い浮かべることすら難しいという状況を考えると、画一的な「ウェルビーイング」を目指すだけでは、人々が希望を失わず安心して生きる場を共有する道を拓くことには繋がらない。

そこで私たちは、個々人の状況や望むことがらを掬いとる人類学研究として、「ケア」という言葉で表現される領域に注目している。「ケア」は、人々が、他者とは限らず、自分や環境について、思いを馳せる、配慮するという意味で使われてきた。これら「ケア」は、「良い・正しい」という価値観に基づくものではなく、気にする、大切に思う等、固執する人々の姿を照らし出す。したがって、多様なケアの検討は、人々が守りたいものや価値観、そして、それらが齟齬や争いを引き起こす過程や共存する姿に迫るものである。

本研究の目的は、個々人の生をめぐる関心やこだわりとしての多様な「ケア」を出発点として、これらが表現され議論される機会を得ることによって、生きる場を共有することに繋がる幾つもの道を、生命を継承してきた各地域の葛藤と共生の軌跡から探ることである。

実施状況

1) エイジングから考える「養生」時間

2012年度は、第1に、「年を重ねること」「養生」という意味をもつ“aging”について議論を深め、論文集 *The Anthropology of Aging and Well-being*, (Senri Ethnological Studies (SES) No.80), 2013においてその成果を提示した。

この論文集の特徴は、心身の変化や移動によって新たな文化に遭遇する高齢期へのケア(関心・配慮)が、さまざまな世代の人々や環境へのケアへと展開する様相を、国内外のフィールドワークと第1次資料に基づいて描き出すことにある。生活環境を問い直し整える共同作業としての高齢期ケアが、新たな地域文化を生み出す過程

を照射し、すべての世代の人々が、人生時間の使い方を柔軟に選択できることによって、差異を活かし、多様な希望に応える生活環境を構想する可能性について明示した。

2) 教育の現場から考える「養生」空間

2012年度は、第2に、多様な人々が文化を創造しつつ共存する方途を構想できるのかという教育の人類学のテーマについて検討し、論文集 *The Anthropology of Education and Well-being in Multicultural Societies* の原稿をまとめた。この論文集の目的は、急速に多文化化が進行しつつある社会で、人々のウェルビーイングと、社会における価値観を基盤とした次世代育成を目指す実践との関係および課題について、検討することである。各論文は、一方で自律、平等、包摂など現代市民社会において重視される価値観に基づく教育が、多文化社会の教育現場において排除の要素を生み出している現状を指摘し、他方で、エスニシティに関わる文化的価値観を次世代に継承することを明確な目的として掲げている教育の場にあっても、議論に開かれた空間を生み出す可能性について、具体的な情報を提示している。

3) 「ヒーリング・オルタナティヴス」における養生と選択

2012年度は、第3に、国際シンポジウム『ヒーリング・オルタナティヴス——ケアと養生の文化』（2012年11月11日）を開催し、地域の歴史のなかで、ヒーリング・オルタナティヴスの位置づけと果たしてきた役割を検討することをとおして、近代的な「治療」に包括されないケアと養生の考え方、および実践の多様性とその変動に関し考察を加えた。現代の科学知識によって薬剤の有効性が十分に確認され得なくても、治療が有効であるという経験が蓄積されているケースにおいて、この治療法を選択する人々の「自由」を尊重する場合の具体的な方法に関しても知見を深めた。

4) 紛争と「宗教的社会運動」から考える共生と希望

2012年度は、第4に、国際シンポジウム『グローバル化における紛争と宗教的社会運動——オセアニアにおける共生の技法』（2013年1月26日 企画代表者：丹羽典生、企画協力者：藤本透子）を開催した。このシンポジウムの目的は、近年のグローバル化のなかで生起している紛争や宗教運動を、〈人々の生きる場を確保する運動〉と捉え、多元化の波にさらされている人々が共生の空間をいかに形成しているのか、その特質と過程を、「希望」などをキーワードとして検討した。この成果の出版（SES）に向けて、編集作業を進めた。

5) 抗議レパトリーによる知識・実践・アイデンティティの創出と共生

2013年度に開催する国際シンポジウム『東アジアにおける社会運動の人類学』（2014年2月開催予定 企画代表者：平井京之介）の準備をおこなった。このシンポジウムでは、国家統治や資本主義の拡大によって生じた矛盾に抵抗する幅広い形態の集合的実践（抗議レパトリー）について、知識や実践、アイデンティティの生産媒体という観点から、議論する。

6) 多様な文化的存在を活かす空間デザインの思想と実践

2011年度におこなった国際シンポジウム『インクルーシブ・デザインとはなにか——ケアと育みの環境を目指して』国際ワークショップ『包摂した社会空間の実現にむけて——課題とインクルーシブ・デザインの解決モデル』（2012年3月3日～4日 企画代表者：野林厚志）の成果を、学術論集（日本語）として出版する準備を進めた。この学術論集では、多文化共生に向けた環境の創出という観点から、インクルーシブ・デザインの思想と具体的実践について検討する。本研究の特色は、1980年代後半にアメリカで提唱されたユニバーサルデザインのような共通項を見いだす立場とは異なり、多様な文化的存在を活かして新たな共存の場を構想しようとするところである。本研究は、博物館や美術館における経験の共有のためのプログラムや展示デザイン、障害者の自立を支援から協働へと変えていく社会的なデザインについて、思想と実践について情報を蓄積し考察を加える。

成果

プロジェクト「ケアと育みの人類学」は、グローバル化・多様化する社会において、人生のみちゆきにおける諸課題に応えるために育まれてきた文化に焦点をあて、共生の軌跡を辿り、共有可能なかたちで具体的に提示することを目指している。人々の多様なウェルビーイングに応える環境を醸成するために、一人ひとりのニーズを十分に活かす方法を考察することは、社会の福祉（ウェルフェア）を考えるうえでも重要なテーマとなっている。

本研究では、第1に、「ウェルビーイングの人類学」を検討することの意義について、人間文化の多様性という観点に留まらず、とくに20世紀半ば以降、人々の権利との関わりで提示されてきた「ウェルビーイング」の画一性に関わる問題点について、「ウェルビーイング」の歴史的意味の変遷の検討とフィールドワークをとおして指摘している（Suzuki ed. 2013）。

そのうえで、生活者のウェルビーイング観を掬い取る方法として、配慮する、気にする、拘るなどの広い意味を有する「ケア」の考え方と実践について、調査研究の対象として重視している（藤田 2005; 鈴木 2005; 工藤 2009 等）。1980年代以降、とくに社会の高齢化の認識のもとに、「ケア」は2者間の関係性として把握され検討される傾

向が顕著となっている（上野『ケアの社会学』等）。だが、本研究は、「ウェルビーイング」観の検討の成果でもある「生きて今日あることの喜び」に向けた「養生」が、すべての年代の人々に開かれる社会を、地域に生きる人々が対面的・非対面的な関係性や環境との関わりの中で創り続けることができるのか、をテーマとしている。

「豊かな」「よりよい生活」を目指す高齢者の「ケア」の展開に注目したSuzuki (ed.) 2013では、高齢者が望むことを実現しようとする試みが、他の世代の人々にも、影響を与える変革となることを明示した。

現在編集中のSuzuki (ed.) 2014は、問題や文化葛藤を抱える高齢者や子どもたちの生活の場に注目し、ホスト社会の中心的な価値観に基づく「ウェルビーイング」への「同化」的対処では、多様な文化的背景をもつ高齢者や子どもたちのニーズに応えることが困難であること、またその困難さとジェンダーとの関わりについて指摘した。

宗教的社会運動に関するシンポジウムでは、グローバル化する社会において、「独自の文化」を守り生かすために紡がれてきた生活全般をめぐるコミュニケーション技法について議論を深めた。表現手段を持つ人々以外の声を聴くことやそれを反映した研究のありかたが、課題として指摘された。本観点については、2013年度に予定しているシンポジウムにおいても、課題として共有される。また、インクルーシブ・デザインに関する研究においても、同様の問題に関わる実践について、考察を続けている。

また、ウェルビーイングにおける養生という観点と、近年の生涯教育への注目に関わる問題群に関しても、2013年度の課題として考察を深める。本観点に関する基礎的視点については、ヒーリング・オルタナティヴスに関する研究においても、提示してゆく。

シンポジウムの成果に関しては、英語の論文集を出版し、全体構想に関しては、日本語の文献として提示する。

機関研究に関連した公表実績

1) 出版

Suzuki, Nanami (ed.)

2013 *The Anthropology of Aging and Well-being: Searching for the Space and Time to Cultivate Life Together* (Senri Ethnological Studies 80). Osaka: National Museum of Ethnology.

2) 公開シンポジウム

① 国際シンポジウム『ヒーリング・オルタナティヴス——ケアと養生の文化』

(2012年11月11日 国立民族学博物館)

主企画メンバー：鈴木七美・沢山美果子・白水浩信

主催：国立民族学博物館

共催：同志社大学人文科学研究所

協力：Institute for the History of Medicine of the Robert Bosch Foundation (Germany)

The Section of the History of Medicine at the Yale University School of Medicine (U. S. A.)

後援：日本医史学会、日本文化人類学会

② 国際シンポジウム『グローバル化における紛争と宗教的社会運動——オセアニアにおける共生の技法』

(2013年1月26日 国立民族学博物館)

主企画メンバー：丹羽典生・藤本透子

主催：国立民族学博物館

後援：日本文化人類学会・日本オセアニア学会

「中国における家族・民族・国家のディスコース」

代表者：韓 敏 2012～2015

研究目的

家族・民族・国家は、人類の普遍的現象である。特に中国において、家・族・民族・国・国家などの概念は、複合的社会関係を生み出す仕組みとして機能してきた。また、中国の歴史を貫き、社会構造の連続性と非連続性を作り出す重要な要素でもある。上記の概念の中に家、族、国のような、歴史において中国人が自ら形成したものもあれば民族、国家のような外部から導入され、制度化されたものもある。王朝体制から共和制、社会主義国家へ、農耕社会から工業化・情報化社会への移行の中、上記の2種類の概念は複数の主体によって様々な状況に応じて再構築されている。グローバル化が進む近年、これらの概念は開発、福祉、移動、観光、文化遺産化などにおいて、人びとの関係や行動パターンを規制するディスコースとして再構築される局面をむかえている。

本研究の目的は、日本、中国、韓国、アメリカの中国研究者による国際共同研究を通して、中国の国民国家の成立と社会主義政権の誕生以降の家族・民族・国家の概念と動態を検討するところにある。またグローバルな観点か

ら、中国の家族・民族・国家のディスコースの特殊性と普遍性の議論を通して非欧米型の人類学の視点と理論を構築する作業も射程に入れる。

実施状況

今年度は予定通りに2つの企画を実施した。

1) 準備会合の実施

2012年5月19日民博で開催された機関研究の初回研究会において、国内のメンバーが集まり、代表の韓敏が本機関研究プロジェクトの趣旨、問題意識および方法論について、説明をおこなった後、各メンバーが趣旨に沿って今後どのように個別の研究を展開していく予定であるかを報告した。

機関研究のメンバー、鄧曉華客員教授から「世界文化遺産客家土楼からみる家族と国家のインタラクションと競合」の発表があり、メンバー約30名が議論・検討をおこなった。

また2012年度11月開催の国際シンポジウム『中国における家族・民族・国家のディスコース』の内容と形式について議論した。

2) 国際シンポジウムの実施

2012年11月24日～11月25日、日本文化人類学会の後援を得て、中国社会科学院民族学・人類学研究所と韓国のソウル大学から研究者を招き、国際シンポジウム『中国の社会と民族——人類学的枠組みと事例研究』を、国立民族学博物館の第4セミナー室で開催した。

成果

1) 2012年5月19日民博で開催された機関研究の初回研究会において、問題意識の共有、ならびに研究の役割分担の明確化がおこなわれた。各メンバーがどのように研究を進めていくかについて認識や展望を交換でき、各自の方向性を確認することができた。またプロジェクトメンバーとの意見交換の機会を持つことができ、本機関研究の今後の新しい展開の一助となった。

2) 2012年11月24日～11月25日、2日間にわたり開催された国際シンポジウムでは、中国、韓国および日本各地から幅広い年齢層の94名の研究者と参加者が集り、家族・民族・国家の概念やその動態を扱う人類学的方法について、理論的な枠組みを検討し、再構築を図った。さらに、民族に焦点を当て、華夷秩序、近代国家、社会主義国家における民族の生成、およびグローバル化における民族文化の再構築について、各地の事例を通して検討をすすめた。

本国際シンポジウムの開催において、中国の社会関係に関する主要な概念である家、民族、国家について、歴史のかつ民族誌的な視点から研究をおこない、さらに日本・旧ソ連・西洋との比較を通してより広い視野で近代とグローバル社会における国家と社会、民族とエスニシティという普遍的な課題について国際共同研究を展開することができた。

同時に中国およびアジアにおける人類学の研究連携とそのネットワークを強化し、アジアおよび世界の人類学・民族学研究に関する本館のプレゼンスを示すことができた。

シンポジウムの参加者が口頭で発表したものについては論文にまとめている段階である。国立民族学博物館のSenri Ethnological Studiesの1冊として中国語で研究成果を出版することを準備している。

機関研究に関連した公表実績

韓敏

2012a 「家族・民族・国家のディスコース——社会の連続性と非連続性を作りだす仕組み」『民博通信』137: 8-9。

2012b 「国際シンポジウム 中国の社会と民族——人類学的枠組みと事例研究」『民博通信』139: 31。

2 「マテリアリティの人間学」 領域代表：寺田吉孝

グローバル化が進む状況においてモノと人の関係を、人類学を核としつつ学際的に再検討して、新しい人間観の構築をめざす。モノと人の関係を、産業化や都市化、越境化などの脈絡で問い直し、また長期的時間軸を視野にいれて歴史的にも究明する。物神化の問題、人によるモノの収集と所有の問題、人工知能や情報技術など先端的科学技術と人の関係などが主要な研究テーマとなる。

「モノの崇拜——所有・収集・表象研究の新展開」

代表者：竹沢尚一郎 2009～2012

研究目的

後期近代ないし大量消費社会の到来とともに、規格化された製品が世界中にあふれている。その反面、「モノの崇拜」とも呼ぶべき、モノの所有・収集・表象に関する異常な熱意が存在するのも事実である。モノの収集・展示・

評価に特化した施設としての博物館が世界中で増殖していること、アート作品に対する常軌を逸した価格の付与、文化遺産に関する世界的な関心の高まりや、ブランド品に対する異常なまでの嗜好は、どのように考えればよいのか。さらに、整形医療やピアス、タトゥー等の身体加工の流行は、人間の身体を操作可能なモノとみなし、過剰なまでに関心と情緒を投入する身体=モノ崇拝の一形態ではないのか。

本研究は、後期近代において新たな形態をとりつつある人間とモノとの関係性について、多角的かつ斬新な視点から理解を深めようとするものである。とりわけ、モノに対して特権的価値が付与される場としての博物館、モノとその記憶、アートとアーティファクトの関係性等について、一段と深い理解を得ることを目的とするものである。

実施状況

2012年5月26日に、日本アフリカ学会と共催で国際シンポジウム『アートと博物館は社会の再生に貢献しうるか?』を国立民族学博物館で実施した。

2013年1月15～16日に、パリ人間科学館で国際シンポジウム『21世紀の民族学博物館』を実施した。

2013年3月24日に国立民族学博物館で、国際シンポジウム『博物館は悲惨な出来事をどう展示するか』を実施した。

成果

5月26日のシンポジウムからは、アートが社会のなかでどのように生きることが可能であり、とくに平和構築にどのように貢献しうるかについて、アフリカ・モザンビークの事例から多くの示唆と理解を得られた。

1月15～16日のシンポジウムでは、ヨーロッパの民族学博物館の関係者9名の発表が行われ（私も加えれば10名）、ヨーロッパの民族学博物館の抱える課題と今後の展示の方向性等について掘り下げた議論がなされた。

「布と人間の人類学的研究」

代表者：関本照夫 2010～2012

研究目的

この共同研究は、モノと人との関係を布に焦点を当てて考察する。参加者はいずれも世界の各地において、伝統染織、それに関連する工芸、あるいは衣服の研究を行い、個々に研究成果を発表してきた。こうした成果を総合し、国際的な学術集会、実践家・愛好者等を加えたワークショップ、さらにこの領域で人類学上新たなスタンダードとなるような書物の刊行、マルチメディア的な資料集の公開を通じ、布から出発しモノと人の関係を論ずる新たな人類学的領域を築く。現代世界における布・衣服について生産、流通、消費の諸相にわたって検討することにより、人の身体性、環境規定性、実践的・状況的知識、地域性、人與人、モノと人のネットワークについて、新たに具体的な知見を生み出すことが目標である。

実施状況

- 1) 国際ワークショップ「アジアの布と生きる」を2012年11月3日に本館講堂で開催し、全国から170人の参加者があった。
- 2) 国際シンポジウム「布を作る人、布に包まれる身体」を2013年2月23日に本館第4セミナー室で開催し、全国から57人の参加があった。
- 3) 本プロジェクトのメンバーによる成果公開のための2回の準備会合を、2012年7月21～22日および2013年3月22～23日に本館で開催し、それぞれ11月と2月の国際ワークショップ、国際シンポジウムのための準備討議と役割の分担、その後の成果公刊などについて討議した。
- 4) 2012年11月27日～12月26日のあいだ、本機関研究プロジェクトの国際共同研究員である中国・蘭州大学の王 建新教授が、外国人研究員客員として本館に滞在し、中国雲南省・貴州省少数民族の刺繍布作りを巡って討議を交わしたほか、人類学におけるモノ研究についても、中国・日本その他の国々での研究状況を互いに確認し、今後の方向を議論した。

成果

今年度は2回の公開シンポジウム、ワークショップを開催した。11月の国際ワークショップ「アジアの布と生きる」では、大学・研究機関に身を置かず在野の研究や実践を行っている6人の方々（内インドネシアから2人、オーストラリアから1人）を招き、現代アジア太平洋地域における伝統染織の展開と今後の方向について、実践と理念・価値観をつなぐ議論を行った。伝統染織の製作・流通・マーケティングに関わる人々、愛好家が多く会場に集まり、研究者、院生と1つの場で議論を行って、新しいつながりを作った。2月の国際シンポジウムでは、文化人類学者と並んでファッション史・ファッション研究の専門家など6人の発表を受け、「着る」ことの現象学、「ファッション」概念の解剖が行われた。これは今後テキスタイルと衣服を巡る人類学研究を進める重要なステップとなるものだった。これらの成果は英文ないし日本語での出版を準備している。

機関研究に関連した公表実績

1) 出版

関本照夫

「今日のインドネシアバティック産業」 窪田幸子・松井 健編著『アジア工芸の〈現在〉——工芸と人類学の基礎研究』pp.65-70, 東京大学東洋文化研究所, 2012。

関本照夫

「捨てるもの、捨てられないもの——国際ワークショップから」『民博通信』138: 12-13, 2012.

Ogawa, Sayaka

Regaining 'Fashion' Value: The Transborder Trading of Second-hand Clothing in East Africa. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 35: 9-10, 2012.

Sekimoto, Teruo

Consuming Textiles through their Uses and Reuses, International Workshop, February 7-8, (Conference Report). *MINPAKU Anthropology Newsletter* 34: 14-15, 2012.

Sekimoto, Teruo

Discardable and Undiscardable Textiles and Clothing. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 35: 1-3, 2012.

Sugiura, Miki

Shifting Functions of Two Major Second Hand Clothing Markets in 17th-18th Century Edo: Tomizawa and Yanagihara. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 35: 5-7, 2012.

Tamura, Ulara

Sacred Rag, Shoddy Rag. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 35: 7-8, 2012.

van Damme, Ilja

Urban Transformations in the Value of Used and Old Textiles. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 35: 3-4, 2012.

2) 公開ワークショップ、シンポジウム

国際ワークショップ「アジアの布と生きる」2012年11月3日、国立民族学博物館講堂

国際シンポジウム「布を使う人、布に包まれる身体(からだ)」2013年2月23日、国立民族学博物館第4セミナー室

「民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究：ロシア民族学博物館との国際共同研究」

代表者：佐々木史郎 2012～2015

研究目的

本研究プロジェクトの目的は、民族学資料（標本資料と映像音響資料から構成される）の収集、保存、修復、情報化、そして利活用までを包括する総合的研究と実践を通じて、本館の大学共同利用機関としての機能と博物館としての機能を高め、その存在感を向上させることにある。そして、この目的を達成するために、2010年度に協定を締結したロシア民族学博物館（ロシア連邦サンクトペテルブルク市）との国際共同研究を実施する。

実施状況

2012年6月3日にサンクトペテルブルクに出向き、4日、5日、6日の3日間にわたって、ロシア民族学博物館側との協議とバックヤード視察を行った。それに続き、当博物館の紹介により、7日と8日には同市にある人類学民族学博物館、エルミターージュ美術館のバックヤードも視察し、研究者と意見交換を行った。

さらに、2013年1月24日～28日の日程で、ロシア民族学博物館から3名の研究員を招聘して、元興寺文化財研究所での修復作業の実演と、奈良国立博物館と国立民族学博物館でのバックヤード視察を交えた国際ワークショップ『民族学資料の保存と修復——博物館バックヤードの利用効率向上と自然素材資料の修復』を実施した。

成果

サンクトペテルブルクでの視察と意見交換、そして奈良と大阪でのワークショップを実施した結果、民族資料あるいは民族学資料の保存と修復の基本方針について、ロシア側と日本側との間で議論と意見交換が行われ、相互に新しい知見を得るとともに、情報を共有することができた。

機関研究に関連した公表実績

奈良と大阪で実施した国際ワークショップの抽象集を編集するとともに、その主要な内容をWebで公開した。

共同研究

2012年度の応募・採択状況

課題1：文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究

課題2：本館の所蔵する資料に関する研究

研究会の区分		2012年度				
研究代表者	課題区分	申請	採択	継続	計	
一般	館内	課題1	5	4	11	16
		課題2	1	1		
	客員	課題1	1		3	3
		課題2				
	公募	課題1	8	2	14	16
		課題2				
若手 ※10	課題1	6	3	4	7	
	課題2					
計		21	10	32	42	

共同研究課題一覧

○印は公募による実施課題、□印は特別客員教員（申請時）による実施課題、●印は若手による実施課題

研究課題	研究代表者	課題区分	研究年度
朝鮮半島北部地域の民俗文化に関する基礎的研究	朝倉敏夫	1	2009～2012
言語の系統関係を探る——その方法論と歴史学研究における意味	菊澤律子	1	2009～2012
オセアニアにおける独立期以降の〈紛争〉に関する比較民族誌的研究	丹羽典生	1	2009～2012
○ サファリングとケアの人類学的研究	浮ヶ谷幸代	1	2009～2012
○ プラント・マテリアルをめぐる価値づけと関係性	落合雪野	1	2009～2012
○ アジア・アフリカ地域社会における〈デモクラシー〉の人類学——参加・運動・ガバナンス	真崎克彦	1	2009～2012
○ 映像の共有人類学——映像をわかちあうための方法と理論	村尾静二	1	2009～2012
中国における民族文化の資源化とポリティクス——南部地域を中心とした人類学・歴史学的研究	塚田誠之	1	2010～2012
驚異譚にみる文化交流の諸相——中東・ヨーロッパを中心に	山中由里子	1	2010～2013
□ 人類学における家族研究の新たな可能性	小池 誠	1	2010～2013
日本の移民コミュニティと移民言語	庄司博史	1	2010～2013
手織機と織物の通文化的研究	吉本 忍	1	2010～2013
○ 非境界型世界の研究——中東的な人間関係のしくみ	堀内正樹	1	2010～2013
○ 日本の「近代化」をアジア・アフリカ諸社会との比較で再検討する	川田順造	1	2010～2013
○ 海外における人類学的日本研究の総合的分析	桑山敬己	1	2010～2013
○ 日本におけるネイティブ人類学／民俗学の成立と文化運動——1930年代から1960年代まで	重信幸彦	1	2010～2012
● 映像資料を活用したイスラームの多様性に関する地域間比較研究	吉本康子	1	2010～2012
● 交錯する態度への民族誌的接近——連辞符人類学の再考、そしてその先へ	岩佐光広	1	2010～2012

● 内陸アジアの宗教復興 ——体制移行と越境を経験した多文化社会における宗教実践の展開	藤本透子	1	2010～2012
梅棹忠夫モンゴル研究資料の学術的利用	小長谷有紀	2	2011～2013
パレスチナ・ナショナリズムとシオニズムの交差点	菅瀬晶子	1	2011～2014
実践と感情——開発人類学の新展開	関根久雄	1	2011～2013
人の移動と身分証明の人類学	陳 天璽	1	2011～2014
NGO 活動の現場に関する人類学的研究 ——グローバル支援の時代における新たな関係性への視座	信田敏宏	1	2011～2014
□ 物質性の人類学（物性・感覚性・存在論を焦点として）	古谷嘉章	1	2011～2014
○ ストリート・ウィズダムとローカリティの創出に関する人類学的研究	関根康正	1	2011～2014
○ ネパールにおける「包摂」をめぐる言説と社会動態に関する比較民族誌的研究	名和克郎	1	2011～2014
○ グローバリゼーションの中で変容する南アジア芸能の人類学的研究	松川恭子	1	2011～2014
○ 現代の保健・医療・福祉の現場における「子どものいのち」	道信良子	1	2011～2014
○ 音盤を通してみる声の近代 ——台湾・上海・日本で発売されたレコードの比較研究を中心に	劉 麟玉	2	2011～2014
● 帰還移民の比較民族誌的研究——帰還・故郷をめぐる概念と生活世界	奈倉京子	1	2011～2013
○ 災害復興における在来知——無形文化の再生と記憶の継承	橋本裕之	1	2012～2014
熱帯の「狩猟採集民」に関する環境史的研究 ——アジア・アフリカ・南アメリカの比較から	池谷和信	1	2012～2014
贈与論再考——「贈与」・「交換」・「分配」に関する学際的比較研究	岸上伸啓	1	2012～2014
肉食行為の研究	野林厚志	1	2012～2014
触文化に関する人類学的研究——博物館を活用した“手学問”理論の構築	廣瀬浩二郎	1	2012～2014
明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動——国立民族学博物館所蔵のアイヌ、ウイльта、ニヴフ資料の再検討	齋藤玲子	2	2012～2015
アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類学的研究 ——資源利用と物質文化の時空間比較	小野林太郎	1	2012～2015
「統制」と公共性の人類学的研究 ——ミャンマーにおけるモノ・情報・コミュニティ	土佐桂子	1	2012～2015
● 現代消費文化に関する人類学的研究 ——モノの価値の変化にみるグローバル化の多元性に着目して	小川さやか	1	2012～2014
● ランドスケープの人類学的研究——視覚化と身体化の視点から	河合洋尚	1	2012～2014
● 「国家英雄」から見るインドネシアの地方と民族の生成と再生	津田浩司	1	2012～2014

「朝鮮半島北部地域の民俗文化に関する基礎的研究」

内容

世界各地を研究対象とする文化人類学という学問分野は、人間の文化についての普遍的な洞察はもちろん、地域研究として各地の民俗文化に関する個別的な見地を蓄積することによっても、広く社会に貢献してきた。本研究の目的は、これまで欠落してきた朝鮮半島北部地域の民俗文化を研究対象とすることで、こうした文化人類学の蓄積をさらに補完することにある。

朝鮮半島北部地域についての研究は、朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）が成立して以来、その政治・外交・経済に関しては進められてきたが、民俗文化の研究は特に日本においてまだ欠落している。現地調査が行えないためである。しかし、朝鮮半島北部地域の民俗文化が研究できないわけではない。1つには、北朝鮮が成立する以前に作られたこの地域の民俗文化に関する資料もあるし、北朝鮮の生活文化に関する先行研究も韓国においては少なからず出版されており、それらを通じた基礎的研究が可能である。また、中国の東北地方、中央アジア、日

本などの北朝鮮系の人びとを通して、周縁から内情を知ることという方法もある。

本研究は、こうした方法を介することで、朝鮮半島北部地域の文化人類学的研究を日本においても始動させようというものである。

代表者 朝倉敏夫

班員 (館内) 太田心平 小長谷有紀
(館外) 李 愛俐娥 伊藤亜人 浮葉正親 岡田浩樹 川上新二 河上(小谷)幸子 韓 景旭
高 正子 島村恭則 林 史樹 秀村研二

研究会

2012年9月15日

岡田浩樹 「北朝鮮避難民受け入れと日本社会——『難民』『難民性』の観点から」

河上(小谷)幸子 「移住履歴から見る朝鮮半島北部——在米コリアン高齢者の語りから」

2012年12月8日

鈴木文子 「日朝京都友好ネットワーク訪朝報告(人類学班)」

秀村研二 「韓国キリスト教(プロテスタントイズム)と北朝鮮」

2013年2月23日

小長谷有紀 「モンゴルから見た朝鮮半島」

浮葉正親 「朝鮮学校卒業生の祖国訪問体験と祖国像の表出」

成果

今年度の活動としては、一昨年度から引き続き行ってきたように、メンバーが各自のテーマを発表した。また、これとあわせて「日朝京都友好ネットワーク」で訪朝した鈴木文子教授(仏教大学)を招いて、北朝鮮の現状についての知見を得た。

それぞれのテーマ発表は、北朝鮮でのフィールド・ワークができない現状にあって、韓国キリスト教が北朝鮮のキリスト教をどうみているか、在米コリアン、モンゴル、日本の朝鮮学校などと北朝鮮の関係性をみることで、北朝鮮の現状にアプローチしようというものであった。

また、北朝鮮が崩壊前後に予想される「北朝鮮難民」は、日本においてどのような問題をもたらすのか、この問題を検討することにより見えてくる人類学的課題とは何かを検討した。

「言語の系統関係を探る——その方法論と歴史学研究における意味」

内容

現在地球上で話される約7,000という言語は「語族」と呼ばれるいくつかの系統に分類されており、それぞれの語族ではさらに、系統図で示されるような言語間の「系統関係」が呈示されている。語族や系統関係は、本来の定義では、共通する祖先となる言語(祖語)から発達したことが比較方法(Comparative Method)を用いて検証できるかどうか、によって決まる。ところが、実際の言語の系統分類では、類型論の特徴や地理的区分、歴史に関する記録なども手掛かりとされることもある。本研究では、それぞれの語族における1)最新の系統分類がどのようなもので、何を手掛かりにどのような方法で系統関係が議論されているのか、2)1)で出てきた手法の妥当性と他語族への適用の可能性、3)各地域における言語の系統分類の先史・歴史研究における意味づけについての現状を把握し、方法論を検証・一般化することで、科学的でより汎用性の高い言語の系統分類研究の手法を探ること、またその成果を先史・歴史研究への関連付けに結びつける道を探ることを目的とする。

代表者 菊澤律子

班員 (館内) 庄司博史 西尾哲夫 八杉佳穂 大杉 豊(客員)
(館外) 蝦名大助 神山孝夫 木部暢子 佐藤知己 中山俊秀 稗田 乃 福田静香
松森晶子 吉田和彦 吉田 豊 Lawrence Andrew Reid
Robert R. Ratcliffe 渡邊 己

研究会

2012年5月26日

中道静香 「アラビア語方言における『b(i) ——未完了形』の歴史的経緯——現代方言記述と Middle Arabic 資料からわかること」

菊澤律子 「類型論的一般化と形態統語論における比較再建——オーストロネシア諸語における能格・対格変化をめぐって」

2012年5月27日

大滝靖司 「日本語の借用語適応における通時的変化——分節音・母音挿入・重子音化を中心に」

佐藤知己 「日本語とアイヌ語間の借用」

2013年1月12日

松森晶子 「日本語複合語アクセントの記述と日本語史研究」

大杉 豊 「古鹿児島手話語彙集から探るろう教育黎明期の手話語彙形成」

ディスカッション（出版計画について）

2013年1月13日

蝦名大助 「ケチュア語とスペイン語との言語接触」

鈴木博之 「音標文字による制約と音変化——チベット系諸言語の前鼻音の歴史」

成果

本年度は視点を広げて、系統樹等では表すことのできない言語接触や借用関係等も視点にいれながら、言語変化全般に関して検討した。メンバーが対象言語グループにおいてそれぞれが研究を進めている内容を報告することで、成果出版物の具体的な方向についての検討をすすめた。2月9～10日には、成果公開および締めくくりとして、生物学や遺伝学の研究者と共に「系統樹について考える」というテーマで国際シンポジウムの開催を行った。なお、歴史言語学における聴覚障害者に対する情報保障として、研究会はすべて筑波技術大学「情報保障に関する研究基盤構築——日本語—手話コーパスの作成」事業と連携して開催したことを記しておく。

「オセアニアにおける独立期以降の〈紛争〉に関する比較民族誌的研究」

内容

冷戦以降の第三世界における民族紛争の増加や、低強度紛争という新たな戦争形態の出現という近年の変化と、応用研究に対する関心の高まりと相即して、広い意味での紛争に関する人類学的研究は、増加傾向で、人間の安全保障、平和構築などの新たな視点からの理論構築や事例分析がなされている。本研究では、こうした理論的な先行研究を踏まえた上で、オセアニア地域研究という視点から紛争に関する比較民族誌的な考察を行いたい。ことにオセアニアにおいては、植民地時代の政治闘争以降の政治的に安定した時期を経て独立をはさみ、1990年代後半から暴動から民族紛争、クーデターまでさまざまな政治的問題が起きている。しかし、オセアニア地域の政治的不安定性に関わる諸問題をどう理解するか、あるいはそれらをどう記述・分析するかに関して総合的な見地からの研究は不足している。そこで、本研究ではそうした諸問題をひろく〈紛争〉としてとらえ、〈紛争〉とその処理及び常態への回復の様態について、比較民族誌的に検討することを通じて総合的な見地から見直しをはかると同時に、記述する側と対象社会の関係をも視野に組み込んだ新たな〈紛争〉の民族誌を案出することを目的としている。

代表者 丹羽典生

班員 (館内) 須藤健一

(館外) 石森大知 岩本洋光 小柏葉子 風間計博 行木 敬 比嘉夏子 深川宏樹
深山直子 三田 貴 宮澤優子 山本真鳥 吉岡政徳

研究会

2012年11月17日

全 員 「成果とりまとめと出版について」

2012年12月26日

参加者 「成果とりまとめと出版について」

成果

本年度は、昨年度まで開催した研究会の成果を踏まえつつ、また、各人の発表以降の〈紛争〉の動向にも注意しつつ、議論を重ねることで、研究成果の公開に向けた作業を行った。研究会を2回開催することで、〈紛争〉にかかわる理論という一般的な軸と、オセアニアという具体的な地域的枠をかけることがみえてくる、一般的な特徴と個別的な要因が交叉する現状がみえてきた。また、共同研究終了後の研究計画の立案に向けた討議も行った。

「サファリングとケアの人類学的研究」

内容

最終年度は、「現代社会での生活の場や臨床の場から生まれるサファリングの意味を問い、サファリングをめぐるケアのあり方を再検討することで、『人間の生を構成する根源的なスタイル』としてのサファリングとケアの概念の再検討する」という共同研究の目的を成就するための総括の年度とする。共同研究会を2回開催する。第1回は「近代の制度的専門家」のサファリングとケアについて医師と作業療法士を例に検討する。第2回は、フィンランドと北米における高齢者介護サービスのあり方とライフケア・コミュニティについて比較検討する。第2回の後半は、3年半の共同研究成果の報告内容について検討し、具体的な成果の媒体形式（論文集）と手続き、刊行について話し合う予定である。また、日本文化人類学会第46回研究大会で、制度的専門家（医療、福祉、葬祭業の専門家）のサファリングとケアについて、分科会「界面に立つ専門家——専門家のサファリングとケアの人類学」（代表者：浮ヶ谷幸代）を企画している。12月末に、研究成果の発表形態として論文集を刊行するために、共同研究員全員で各自の掲載論文についての報告会を開催する予定である。

代表者 浮ヶ谷幸代

班員 (館内) 鈴木七美 廣瀬浩二郎
(館外) 渥美一弥 阿部年晴 沖田一彦 加藤直克 川添裕子 近藤英俊 田中大介
濱 雄亮 福富 律 星野 晋 松繁卓哉 村松彰子

研究会

2012年5月12日

宮口英樹 「リハビリテーション医療における生活リスクコミュニケーション」

日本文化人類学会第46回研究大会分科会 「界面に立つ専門家——専門家のサファリングの人類学」のプレ発表
(浮ヶ谷・沖田・田中・松繁・星野)

2012年5月13日

山上実紀 「医師の失敗経験と対処プロセス」

2012年7月14日

高橋絵里香「互酬と消費——フィンランドの高齢者介護サービスからみる福祉国家の論理」

鈴木七美 「北米における高齢期ライフケア・コミュニティの展開——新たな専門家の創出と生活者のウェルビーイング」

2012年7月15日

共同研究成果報告書の打ち合わせ

2012年12月22日

ワークショップ：共同研究成果報告書用の論文企画の報告

趣旨説明 浮ヶ谷幸代

I. サファリングとケアの理論的再構築

星野 晋：サファリングの生態学

加藤直克：ケアにおける暴力性と創造性

阿部年晴：病気の原因の観念をめぐって——現代社会におけるサファリングとケア

II. ソーシャルサファリングと回復

渥美一弥：サファリングとしての「植民地的状況」、ケアとしての「居留地」——カナダ先住民サーニッチに
とってのアルコールとライフコース

浮ヶ谷幸代：苦悩とその創造性——ピアサポートによる回復の継承性

III. サファリングと共同性

濱 雄亮：「病縁論」の射程と課題

村松彰子：根源的受動性と人と人との〈つながり〉をめぐる試論

IV. 専門家のサファリング

沖田一彦：理学療法士のサファリング

福富 律：援助専門職の専門性・対人援助や専門職と社会との関係とは

松繁卓哉：専門家（現代の制度的職能者）のサファリング

V. 展望

田中大介：死をめぐるサファリングとケア——その人類学的研究の射程と展望

総合ディスカッション

成果

2回の定例の共同研究会、そして共同研究の総括として開催したワークショップ（共同研究員12人の報告）を通して、本共同研究の成果の全体像を構想した。成果の発表方法として、1) 制度的専門家のサファリングとケアについての論文集と、2) 現代社会における生活の場におけるサファリングが生まれる社会背景とその様態、そしてサファリングに対処するケアのあり方についてのエスノグラフィックアプローチによる論文集、という2つの論文集の刊行を目指すこととした。1)の論文集は、『文化人類学』（77-3）の特集論文を軸として、コアメンバーと特別講師の執筆者を加えて、『苦悩することの希望——専門家のサファリングとケアの人類学』と題した論文集を刊行する予定である。読者層として専門家と研究者、そして一般の人を対象とするという設定で、出版社との打ち合わせに入っている。また、2)の論文集に関しては、まず2013年度の日本文化人類学会第47回研究大会で分科会「サファリングとケア、その創造性」と題して成果発表を予定している。これらの報告を基にした論文を軸として、コアメンバーと特別講師の寄稿論文で構成し、『サファリングとケアの人類学（仮題）』と題して刊行する企画である。こちらは民博の『国立民族学博物館論集』での刊行を視野に入れている。

「プラント・マテリアルをめぐる価値づけと関係性」

内容

本研究の目的は、植物に由来する種々のモノ [=プラント・マテリアル] に対してその外見的变化と意味的変容の両面からアプローチし、対象と主体がせめぎあう境界面における相互作用の結果としてモノをとらえることにより、空間的・時間的広がりの中で変化していく価値づけという行為と主体間の関係性を明らかにすることにある。

本研究ではさまざまな目的のために植物種が利用され、民族集団間、民族集団内でやりとりされてきた東南アジア大陸部山地、すなわちミャンマー、タイ、ラオス、ベトナム、中国雲南省が国境を接する地域を対象とする。当該地域では近年、市場経済の発展にともなって中規模グローバル圏のような様相を呈し、やりとりが量的質的に拡大するなどの実態が生じている。このような状況を背景に、自然科学分野、人文科学分野の共同研究者が対象となる植物と植物を利用する主体とをたがいに関連づけながら議論し、具体的なモノを手がかりに植物と人の相互作用、またその表われとしての生活世界を実証的に記述することを目指す。

代表者 落合雪野

班員 (館内) 樫永真佐夫 白川千尋
(館外) 綾部真雄 飯島明子 加藤 真 神崎 護 Christian Daniels 佐々木綾子
高井康弘 田中伸幸 土佐桂子 馬場雄司 速水洋子 松田正彦
柳澤雅之 横山 智

研究会

2012年10月20日

速水洋子 「植物と人と生命の交わり——山地居住カレンの場合」

飯島明子 「マイ・ヒヤツ竹の行方——チェンマイの手工業を支えるタケをめぐる」

全 員 成果取りまとめに関する打合せ

2012年10月21日

綾部真雄 「価値の源泉——タイ山地民リスにおけるケシの社会的位置づけをめぐる」

全 員 総合討論

2013年2月16日

全 員 成果取りまとめのための論文構想発表と打合せ

成果

本年度は2回の共同研究会を開催した。第9回研究会（10月20～21日開催）では、共同研究員3名が発表をおこなった。飯島明子によるタケを素材にした上座仏教の供具カント、綾部真雄によるケシを原料にしたアヘン、その変形としての覚醒剤については、共同研究員の発表3群（『民博通信』134: 11）のうち、第2群「ある特定の植物に着目し、これを原料や素材につくられるプラント・マテリアルの変化の諸相を論じる」にあたるものとなった。速水洋子によるイネとカレンについては、3群のいずれにもあてはまらない、existentialな関わりを論じるものとなった。さらに、国立民族学博物館収蔵庫において、標本資料に用いられた植物素材や加工方法を観察した。

第10回共同研究会（2月16日開催）では、これまでの発表と討論を総括し、その成果を論文集（単行本）の形で公開することを確認し、共同研究員全員が担当する原稿のタイトルと内容についてその構想を発表した。最後に論文集のテーマや内容について検討し、共同研究会を締めくくった。

「アジア・アフリカ地域社会における〈デモクラシー〉の人類学——参加・運動・ガバナンス」

内容

民主的な制度や民主化運動の展開が、アジア・アフリカの地域社会にどう受容され、人びとの生活をどう変えたのか（あるいは変えなかったのか）という問題について、地域の歴史文化的な文脈を踏まえつつ、その場所で生活する人びとの具体的な関係性に注目して検討する。既存のデモクラシー論では、権利や正義、あるいは共同体規範といった概念が中心に据えられてきた。そのため、人びとがそれぞれの生をよりよく生きようとする試みに、それら概念がどういった影響を与えるのかについては充分注意が払われてこなかった。本研究会では、民主的な制度や運動の展開が、人びとの具体的なつながり方や関わり方にどう干渉してきたのかについて考察する。

代表者 真崎克彦

班員 (館内) 信田敏宏 宮本万里
(館外) 石山 俊 黒崎龍悟 白石壮一郎 菅野美佐子 武貞稔彦 内藤直樹 西 真如
増田和也 丸山淳子 南出和余 目黒紀夫

研究会

2012年9月29日

丸山淳子 「多層的〈デモクラシー〉のなかで——サン社会のウチ／ソトの政治」

南出和余 「『まつりごと』——下からみたバングラデシュ選挙空間」

田中正隆 「ベナンにおけるジャーナリズムとデモクラシー——ジャーナリストと視聴者参加番組の事例から」

2013年3月9日

西 真如 「〈デモクラシー〉の人類学」とは？」

総合討論 議論のまとめ、今後の展望

成果

政治理論では、民主主義の制度的妥当性について、また正義が実現される条件について綿密な議論が行われてきたが、中には「身体を持つ、具体的な生」への配慮に着目するものもある。「身体を持つ、具体的な生」への配慮は、たとえば福祉制度から排除しないこと、家父長的イデオロギーから解放されていること、ナラティブに耳を傾けることなどに結びつけて論じられる。しかし「具体的な生」への配慮を謳いながら、政治理論における議論は往々にして、制度論や抽象的な人格論にとどまり、さまざまな価値や利害のせめぎ合う中を生きる人たちの生活感にまで踏み込めていない。したがって、政治理論における「具体的な生」についての議論に呼応しつつ、人類学のフィールドより、「具体的な生」への配慮がどのように確保され、あるいは見過ごされてきたのかを示すことは有意である。

「映像の共有人類学——映像をわかちあうための方法と理論」

内容

人類学では、民族誌映画の制作をはじめとする研究、教育、そして成果の公表に至るまで、映像が積極的に活用されるようになった。一方、このような状況が、映像に関する共通理解がないままに進行しているのもまた事実である。なかでも研究者と調査地の人々は映像をいかに共有しうるのか、映像制作にまつわる倫理とは何かという問題は、いま本格的に議論すべき課題である。

これまで民族誌映画の制作に関して主に議論されてきたのは、撮影と編集の方法論であった。それに対して本研究が問題とするのは、共有という視点から映像制作の各過程を捉えなおす認識論である。映像制作とは 1) Pre-Production「立案」2) Production「調査地での交渉」「撮影と折衝」3) Post-Production「編集」「調査地での試写」「成果の公表」「保存」からなる複合的な活動である。本研究の目的は、この映像制作の各過程を対象とし、人類学映像をささえる倫理と権利、受容と共有の方法についての多角的な議論へと発展させ、映像人類学の可能性を拓くことにある。研究者と調査地の人々はともに映像制作の主体であるとする考え方は、人類学と映像との新しい関係を築いていくうえで重要なものになると考えている。

代表者 村尾静二

班員 (館内) 飯田 卓 久保正敏 清水郁郎 (客員)
(館外) 大村敬一 大森康宏 木村裕樹 坂尻昌平 中村真里絵 南出和余 宮坂敬造
箭内 匡

研究会

2012年7月7日

南出和余 「『子ども』と映像——映像による個人の記録と社会の記憶」

村尾静二 「映像の共有人類学——方法と理論」

大森康宏 「ジャン・ルーシュと民族誌映画教育」

2012年7月8日

清水郁郎 「映像による返礼——フィールドでの映像上映をとおした空間共有の可能性」

中村真里絵 「技術映像がつたえるもの——焼き物づくりの事例から」

飯田 卓 「テレビによる共有人類学」

木村裕樹 「消えゆく文化の記録——洪沢敬三の記録映画が問いかけるもの」

総合討論

2013年1月27日

全体討論 「研究成果原稿の読み合わせ」

2013年1月28日

全体討論 「研究成果原稿の読み合わせ」

成果

これまで共同研究会では、人類学映像を共有という視点から捉えなおし、多角的に議論してきた。なかでも、人類学者（制作者）は調査地の人々といかに関わり合うなかで映像を制作しているのか、あるいは、人類学者による映像制作は調査地の人々にはどのように映っているのか、といった問題は、複数の事例を取り上げ、検討してきた。

本年度は、各メンバーがこれまで共同研究を通して考察してきたテーマを順番に発表し、議論した。「共有」を共通のテーマとして、民族誌映画の歴史と現状、映像人類学と教育、民族誌映画の制作過程、撮影地において現地の人々と映像を共有することの諸問題、映像人類学による技術・身体知識の研究手法、写真の活用、文化人類学とマスメディア、映像の保存と活用（アーカイブズ）、など、その内容は多岐にわたる。

現在、各メンバーはこれらの内容を論文にまとめており、刊行準備中である。

「中国における民族文化の資源化とポリティクス——南部地域を中心とした人類学・歴史学的研究」

内容

中国は少数民族や漢族など多くの民族集団が存在する多民族国家である。それら民族集団の文化は、近現代において資源化され続けてきたのであり、グローバル化の進む現在もその動きが進行中である。文化資源の多様性やその生成と変貌のありようについては前回の共同研究で一定程度明らかにし得た。その成果をふまえて、現代の流動的な中国諸民族の社会において、文化がどのように資源化されて利用されているのか、またそこにいかなるポリティクスが働いているのかのダイナミズムについて深く掘り下げた検討が必要である。本プロジェクトでは華南地域の諸民族の文化資源について、文化がどのように保存・発展・利用され資源化されているのか、また文化の資源化に際してさまざまな主体、すなわち中央、地方の各級政府、知識人、企業、一般民（都市住民、農民等）の間でいかなるせめぎあいが見られるのか、民族学と歴史学の共同作業を通じ検討を加えて解明するとともに、文化資源論への新たな展望を得ることを目指したい。

代表者 塚田誠之

班員 (館内) 榎永真佐夫 韓 敏 横山廣子
 (館外) 稲村 務 上野稔弘 片岡 樹 兼重 努 瀬川昌久 曾 士才 孫 潔
 高山陽子 武内房司 谷口裕久 長谷千代子 長沼さやか 野本 敬 長谷川 清
 松岡正子 吉野 晃

研究会

2012年 6月16日

廖 国一 「キン(京)族の伝統文化の資源化とその影響——中国広西東興市万尾村を事例として」
 瀬川昌久 「氏姓のポリティクス——現代中国における文化資源としての族譜とその活用」

2012年11月17日

塚田誠之 「国境地域における観光をめぐる諸問題——徳天跨国瀑布観光の事例から」
 横山廣子 「湖南ペー族における民族文化とポリティクス」
 曾 士才 「生態博物館の17年」

2012年 1月26日

研究成果のとりまとめに関する打合せ
 吉野 晃 「中国ヤオ族の民族文化資源に関する動向の一端」
 長谷川 清 「〈森〉の資源化と精霊祭祀——中国・西双版纳、タイ族の事例から」

2013年 3月 2日

長谷川 清 「文化をめぐるポリティクス——雲南徳宏タイ族自治州を事例として」
 研究成果のとりまとめに関する打ち合わせ

成果

第1に、民族文化のさまざまな側面が資源化されている現状と問題点が明らかにされた。

廖は、広西のキン族の国家無形文化遺産「哈節」(歌祭り)の近年の実情について検討した。瀬川は、広東の漢族やシヨオ族の族譜を検討した。塚田は、中越国境地域にある著名な観光地・徳天瀑布を事例として、国境の瀑布観光の現状を検討した。横山は、13世紀半ばに雲南省からモンゴル軍の遠征に参加して湖南省に移住したペー族について、移住先での民族文化の再構築について検討した。曾は、民族文化の保護を目的に貴州で創設された4か所の生態博物館の歴史と現状について検討した。吉野は、中国のヤオ族の文化資源の動向として、ヤオ族の故地「千家洞」の資源化や、伝承上の祖先「盤王」の多義性について検討した。長谷川は、雲南西双版纳のタイ族地区の原生林の保護をめぐる近年提唱されている「竜林文化」に関する議論や精霊祭祀の変遷について検討した。また、長谷川は雲南徳宏タイ族自治州の内部資料に基づき、文化に政治が関わっている現状を検討した。

第2に、文化資源をめぐる、一般の人々、知識人や企業、さらには各級政府といった諸主体間でのせめぎあいや協同など複雑な関係が見られることが明らかにされた。廖は、政府主体の祭りの商業化や民族文化とは無関係のイベントの開催によって人々との間にせめぎあいが生じていることを検討した。塚田は、瀑布の資源化をめぐる、企業が主導し、政府が管理し、村人が参与するという協同関係を検討した。

第3に、政府や知識人が資源化に果たす役割が大きいことが明らかにされた。瀬川は、シヨオ族の少数民族籍獲得運動や客家の漢族としての正統性の主張といった動きの中で族譜が重要なツールとして用いられているが、そうした動きに地方政府や学者が参与していることを検討した。横山は、ペー族の文化の再編や創造に知識人が重要な役割をはたしていることを検討した。曾は、生態博物館が学者が提言し政府が取り組んでいる実態を検討した。吉野は、「千家洞」の資源化に湖南や広西の各県の政府や学者が参与していることを検討した。

このように資源化の諸相、資源化をめぐる諸主体のありよう、政府や知識人の役割など、中国諸民族の文化の資源化の実態と特徴が、幅広い民族・地域の事例から明らかにされた。

「驚異譚にみる文化交流の諸相——中東・ヨーロッパを中心に」

内容

本研究が対象とする「驚異譚」とは、ラテン語で mirabilia、アラビア語・ペルシア語で 'ajā'ib と呼ばれる、辺境・異界・太古の怪異な事物や生き物についての言説である。未知の世界の摩訶不思議を語るこのようなエピソードは、東西の歴史書、博物誌・地誌、物語、旅行記・見聞記などに登場するが、これらの多くは古代世界から中世・近世の中東およびヨーロッパに継承され、様々な文化圏で共有されてきた。

本共同研究は中東およびヨーロッパの文学・歴史の専門家によって構成されており、これらが協力して各時代・地域の「驚異譚」を比較し、伝播の過程、世界観の相違、文化交流のダイナミズムなどを次の3つの主要軸を中心として解明してゆく。

- 1) ジャンルの枠組とモチーフの分類
- 2) 知識の伝播と世界観の変遷
- 3) 宗教・言語・文化的な特異性と超域的な包括性

代表者 山中由里子

班員 (館内) 菅瀬晶子

(館外) 池上俊一 大沼由布 小倉智史 亀谷 学 黒川正剛 小宮正安 杉田英明
鈴木英明 辻 明日香 二宮文子 林 則仁 見市雅俊 守川知子 家島彦一

研究会

2012年5月26日

大沼由布 「『マンデヴィルの旅行記』と『見る』ことの権威」
池上俊一 「彷徨の詩人——中世ヨーロッパにおける魔術師ウエルギリウス伝説」
山中由里子 「驚異の媒介者としてのアレクサンドロス」
「境界を見た人びと」事例提供・全体討議

2012年9月30日

全体討論 「東洋文庫資料にみる驚異のイメージ」
林 則仁 「イスラーム絵画史の中のカズウィーニー著『被造物の驚異』の挿絵」
金沢百枝 「聖堂美術と驚異譚——南イタリア・オトランド大聖堂の床モザイクを中心として」
「驚異の視覚化」事例提供・全体討議

2012年12月9日

大沼由布 「知識の集約と編纂——ヴァンサン・ド・ボーヴェの『大いなる鏡』」
見市雅俊 「情報・驚異・好奇心——ロバート・プロットと17世紀イギリスの自然誌」
守川知子 「トゥーサーのペルシア語著作『被造物の驚異』と12世紀の西アジア社会——『イスラーム的宇宙観』による初の百科全書編纂の時代」
「驚異の編集」事例提供・全体討議

成果

5月の会では、驚異を媒介する「目撃者」としての旅人のトポスを採りあげた。驚きは「見る」という視覚体験によってまず目撃者に生じ、その目撃の共有が驚異譚であるともいえる。誰かが「見てきた」、すなわちそれは存在したという前提がなければ、読者は驚きを共有できない。作り話とわかっている話は、悲哀や熱情、興奮などの感情を喚起したとしても、日常的にはあり得ない奇異の存在に対する驚きにはつながらない。

9月の会では「驚異の視覚化」というテーマを採りあげた。驚異を描いて「見せる」ことは、二次的な目撃者を作り出すという行為に等しい。中世の場合、画家自身が驚異を目撃しているわけではなく、驚異譚のテキストから想像し、自身が知っているもののかたちの誇張や、通常はありえない奇妙なものの組み合わせで視覚的なイメージが創生されていった。

12月の会では、「驚異の編纂」をテーマとした。旅行記などに含まれていた驚異の目撃譚がもとの文脈から抽出され、博物誌や百科事典といった知識の集大成として編纂される過程をヨーロッパと中東の場合で比較した。

今年度から、各会のテーマに関連した事例紹介を発表者以外からもつり、充実した議論を行うことができた。

「人類学における家族研究の新たな可能性」

内容

本研究の目的は、人類学における家族の研究を現代的な課題に答えられるように見直すことである。生殖医療、国際養子縁組、国際結婚、Transnational family、高齢者のケア、開発・近代化に伴う家族の変容の問題など、現代世界で生起する多様な問題を取り上げ、親子関係や家族とは何かという根源的な問いを念頭に置きつつ、家族研究の最前線を切り開きたい。一見バラバラに映る上記の問題群を「家族」という視点から捉えなおすことを意図している。人類学の家族・親族研究の蓄積と断絶するのではなく、シュナイダー以降の親族研究、とくにM・ストラザ

ーン、J・カーステンなどの研究成果も視野に入れて研究を進めたい。家族という分析概念の有効性自体に疑念が呈されていることを考え、その限界も検討し、また家族・親族に代わる概念、たとえば「つながり」(relatedness)の有効性も議論し、新たな家族研究のパラダイムを構築したい。

代表者 小池 誠 (客員)

班員 (館内) 丹羽典生 信田敏宏 森山 工 (客員)
(館外) 伊藤 眞 岩本通弥 上杉富之 木曾恵子 久保田裕之 高橋絵里香 津上 誠
出口 顯 森 謙二 横田祥子

研究会

2012年 5月19日

工藤正子 「トランスナショナル・ファミリーにみる家族の分散と〈つながり〉——パキスタン人男性と日本人女性の国際結婚の事例から」

横田祥子 「台湾の国際結婚——代替不可能な家族へ」

2012年 7月14日

深海菊絵 「インティメイト・ネットワーク——ポリアモリー実践が形づくる関係性」

小泉明子 「婚姻防衛法 (Defense of Marriage Act) の意味するもの——婚姻概念をめぐる論争」

2012年12月 1日

上野加代子「ラブゲイン——シンガポールの住み込み外国人家事労働者にみる親密性の変容」

南出和余 「バングラデシュ農村の出稼ぎ家族——海外で働く若者と送り出す家族を繋ぐ」

2013年 2月23日

飯高伸五 「現代パラオにおける家族の動態——現地人の米国・米領内移動と外国人労働者の流入の分析から」

丹羽典生 「隠された民族間通婚——フィジーにおける先住系とインド系の『婚姻』の事例から」

成果

2012年度は、現代における家族と婚姻の変容を大きなテーマに掲げて4回の研究会を開催した。第1回の研究会では、工藤正子(特別講師)と横田祥子が、国際結婚とそれが作り出す家族の「つながり」について人類学の立場から発表した。第2回の研究会では、アメリカ合衆国における従来とは異なる婚姻の概念について、深海菊絵(特別講師)がポリアモリー実践を人類学の立場から、そして小泉明子(特別講師)が同性婚に関する議論を法学の立場から取り上げた。第3回の研究会では、上野加代子(特別講師)と南出和余(特別講師)が、労働者の海外移住に伴う、移住先における親密性と家族の「つながり」の変容について、それぞれ社会学と人類学の立場から発表した。第4回の研究会では、現代オセアニアを取り上げ、飯高伸五(特別講師)が国際人口移動と家族の変容について、そして丹羽典生が民族間関係と婚姻について、人類学の立場から発表した。

「日本の移民コミュニティと移民言語」

内容

今日日本では移民の流入にともない多くの言語(移民言語)が用いられているが、それらの日本語との接触における変容、使用実態、さらに維持や教育に関して、全体像は明らかにされていない。本研究では、日本の移民言語の現状を総合的に研究する上で前提となる、個々の移民言語の現状把握、さらにそれらに関与する諸要因を移民コミュニティ、言語政策、教育、言語とジェンダーとのかかわりから考察する。具体的には、日本における代表的な移民言語に関し、1)言語接触、干渉、コードミキシング・変化などの言語実態、2)言語領域・言語機能など言語使用、3)言語維持、言語教育状況の把握を主たる目的とする。また以上と並行して、移民が現実社会参加、社会上昇においてかかえる言語問題のうち、特にジェンダー、識字、学校教育とかかわる部分に焦点をあて考察する。

代表者 庄司博史

班員 (館外) 井上史雄 大上正直 オストハイダ・テーヤ 川上郁雄 金 美善 窪田 暁
宋 実成 高橋朋子 陳 於華 中田梓音 中谷潤子 中野克彦 野元弘幸
平高史也 福永由佳 安田敏朗 山下暁美 渡戸一郎

研究会

2012年6月9日

山下暁美 「ハワイ日系人の日本語の特徴」

福永由佳 「滞日パキスタン人の社会生活と言語事情」

2012年7月28日

中田梓音 「飲食メニューに見られる日本語に関する一考察」

川上郁雄 「移民の子どもはどのように語られてきたか——ことばとアイデンティティに注目して」

杉村美紀 「日本の中華学校における多様化と母語教育の変容」

2012年11月11日

中野克彦 「多言語メディアによる新たな異文化コミュニケーションの可能性と課題——ニューコムの事例分析」

井上史雄 「日本（語）にまつわる多言語表示の象徴機能」

庄司博史 「試論——資産としての移民言語」

2013年3月16日

野上恵美 「ベトナムコミュニティの言語状況について——神戸の事例より」

窪田 暁 「ドミニカ人の言語使用と言語意識——在米移民を中心として」

福永由佳 「移民を対象とした親子の識字教室——アメリカの事例より」

成果

日本における移民コミュニティの言語状況としては、パキスタン人、ベトナム人について最近の調査にもとづく報告がなされた。一般に移民コミュニティにとって社会参加は定住の要件とみなされ、日本語学習はその必須の条件とされている。この観点からみて、必ずしも日本語能力に依存せず生業を営むパキスタン人経営者たちの存在はある意味で、議論の前提へ再考をうながすものであった。また移民コミュニティの中の弱者である子どもたちや非識字者に焦点をあてた報告では、語り手の意識や認識により幾通りにも語られてきた言説から彼らのことばやアイデンティティを研究する際の課題、米国に多数存在する非識字者を子どもの学習支援をつうじて識字学習にとりこむ試みなどが紹介された。またホスト社会における移民言語教育への公的支援および学習動機の維持の観点から、移民言語の資産性についての問題が提起された。その他、エスニックメディアと移民コミュニティのかかわり、中華学校の多言語学習の場としての展開の事例、ハワイでの日本移民の言語変容や米国における南米移民の言語状況にかんする報告も移民言語について新たな知見を提供した。11月11日の明海大学での研究会は、首都大学東京および明海大学の大学院研究会と合わせて開催され、特に移民言語のもたらした言語景観に関する報告や情報交換が活発に行われた。

「手織機と織物の通文化的研究」

内容

本共同研究は、研究代表者である吉本 忍が1987年に『国立民族学博物館研究報告』12巻2号で発表した論文「手織機の構造・機能論的分析と分類」にもとづき、吉本をはじめとする共同研究の参加者が、これまでに蓄積してきた世界の諸民族のもとで使用されてきた手織機と、それらの手織機によって織られてきた織物を研究対象として、人類史の中核技術のひとつとして位置づけられる機織り技術の通文化的、かつ歴史的な展開をあきらかにするとともに、産業革命やIT革命と深くかかわってきた機織り技術の実態をあきらかにすることをおもな目的としている。また、本共同研究においては、産業革命、そしてIT革命によって進展している機械化や大量生産によって、人類が古代から培ってきた手仕事の存続が危ぶまれる今日的な状況を、機織り技術を基軸として精査し、今後のデジタル化時代における手仕事というアナログシステムのあるべき姿を模索することも計画している。

代表者 吉本 忍

班員 (館内) 上羽陽子

(館外) 井関和代 内海涼子 大野木啓人 金谷美和 ひろいのおこ 藤井健三 柳 悦州

研究会

2012年4月14日

鳥丸知子 「中国・貴州省のカード織り新発見について」

全 員 「特別展の展示に関する研究討論」

全 員 「特別展の展示解説とカタログ、および特別展開連事業について」

2012年 6月 2日

全 員 「特別展の展示に関する研究討論」

全 員 「特別展の展示解説とカタログ、および特別展開連事業について」

2012年 6月 3日

全 員 「糸素材と織構造の関係性について」

2012年 6月23日

全 員 「民博所蔵の織物資料に関する研究討論-1」

全 員 「特別展の展示解説とカタログについて」

2012年 6月24日

全 員 「民博所蔵の織物資料に関する研究討論-2」

全 員 「体験型展示のアクティビティに関して」

2013年 1月14日

吉本 忍 「織りの定義と織機の分類について」

上羽陽子 「染織文化とものづくりワークショップについて」

全 員 「来年度の成果報告について」

2013年 3月27日

吉本 忍 「成果報告に関する打ち合わせ」

行松啓子 「日本と東南アジアの絹の現状について」

全 員 「総合討論」

2013年 3月28日

ひろいのぶこ 「韓国とウズベキスタンの細幅織物用織機」

上羽陽子 「ラバーリーのからだ機について」

全 員 「総合討論」

成果

本共同研究では、共同研究員が実行委員として2012年秋の特別展『世界の織機と織物——織って！みて！織のカラクリ大発見』を9月13日から11月27日まで開催し、会期中に特別展示場内で織りの体験展示をおこなうとともに、共同研究員や研究協力者ほかが講師として、特別展開連イベントとしてのみんぱくゼミナール（3回）、みんぱくウィークエンド・サロン——研究者と話そう（9回）、ワークショップ（9回）、ミニレクチャー（15回）、機織りの実演（5回）をおこなった。また、特別展開連書籍として『世界の織機と織物』を出版した。

「非境界型世界の研究——中東的な人間関係のしくみ」

内容

アラブ諸国では、いわゆる「コネ」が社会を動かす基本的な手段になってきた。しかしその背後には、絶えざる交渉によって作り上げられる諸個人のあいだの、必ずしも功利的とばかりとは言えない複雑な関係が横たわっている。ともあれ組織や制度ではなく、具体的な顔をもった人間関係が社会の主役なのである。そうした実名性に担われた人間関係は、中東を起点として8世紀以来今日まで、三大陸を舞台に国家や民族、言語、宗教、地勢などの境界を超えて、切れ目のない世界規模の人間のネットワークを生み出してきた。人々の、境界に拘泥しないフレキシブルな意識構造がそれを可能にしている。そうして結びついた広大な多文化複合空間を「非境界型世界」と呼ぶことにする。本研究は、その世界で実際にどのように人間関係が営まれているのかをネットワークのハブである中東各地にさぐり、非境界的な人間関係のしくみとその成立条件を当の人々の感覚や世界観にまで踏み込んで解明することを目的とする。

代表者 堀内正樹

班員 (館内) 西尾哲夫

(館外) 新井和広

小田淳一

池田昭光

荻谷康太

井家晴子

小杉麻李亜

宇野昌樹

齋藤 剛

大川真由子

錦田愛子

大坪玲子

水野信男

奥野克己

米山知子

研究会

2012年 5月19日

井家晴子 「私の身体と医学的リスク——モロッコ農村部におけるオーラリティとリテラシー」

2012年 5月20日

西尾哲夫 「言語と文化の境界——言語人類学の再構築のために」

2012年 7月21日

全 員 「中間総括：問題の再定義」

2012年 7月22日

全 員 「中間総括：非境界的研究指針について」

2013年 1月26日

錦田愛子 「イスラエル調査報告」

2013年 1月26日

佐久間 寛 「見せる顔、隠される顔——非境界型世界の末端から」

2013年 1月27日

溝口大助 「マリ共和国南東部セヌフォ社会における夢と埋葬儀礼」

2013年 1月27日

堀内正樹 「非境界型世界をどう表現すべきか」

成果

本年度は、非境界型世界を支える「文化情報の非中心性と非拘束性」という特徴を検証した。井家晴子はモロッコで、妊娠や出産にかかわる文化情報の矛盾や不整合や曖昧性がなんの問題も引き起こさない例を通して、重要な語彙が拘束的な言辞の対極に位置することを論じた。西尾哲夫はエジプトでのフィールドワークに基づいて独自の言語的文化認識モデルを示し、言語と文化の境界をめぐる言語人類学の再構築を提案した。その後全員による本研究の中間総括を踏まえて、錦田愛子は、可視的な政治的・社会的境界が堅固に張り巡らされたイスラエルで不可視の境界が形成されるプロセスと、それを乗り越えるプロセスの重要性を論じた。境界の可視化と不可視化は本共同研究の根幹に関わる問題でもあるため、外部から特別講師を招聘し、この点に関する知見を求めた。佐久間寛はニジェールの開発に関わる場面で具体的な顔が意図的に隠される、つまり不可視化される局面の重要性を論じ、溝口大助は逆にマリの村落において不断に社会的・文化的境界が可視化されるプロセスを論じた。堀内正樹は今後こうした多様な局面を総合的に表現してゆくための問題点を整理した。

「日本の『近代化』をアジア・アフリカ諸社会との比較で再検討する」

内容

明治維新によって形成された大日本帝国が、アジアの近隣諸国にも日本自身にも大きな災厄をもたらして77年で崩壊した事実から見ても、日本の「近代化」が、大きなゆがみを内包していたことは明らかだ。東アジアの一国である日本が、アジア・アフリカ諸国（以下 AA と略記）の中で、これからどのように自らを位置づけて行くのか、「歴史認識」など、中国、台湾、韓国等との間に対応を迫られている諸問題を考える上でも、広い視野に立った認識が、いま問われている。この共同研究は、AA の視点から日本の近代化を検討できるほど、それぞれの地域に通じた研究者と、AA を含む広い比較の視野をもつ研究者とを選びすぐって、この認識のあり方を根底から再考することを目的としている。講師は招かず、徹底討論によって成果を得て刊行し、学界だけでなく、政治・外交・経済・文化の諸領域の識者に投げかけ、批判を受けたいと考えている。

代表者 川田順造

班員 (館内) 小長谷有紀 佐々木史郎 田村克己
(館外) 伊藤亜人 白杵 陽 勝俣 誠 金子正徳 栗本英世 桑山敬己 清水 展
濱下武志 古田元夫 三尾裕子 水島 司 宮崎恒二 吉澤誠一郎

研究会

2012年 6月17日

三尾裕子 「植民地台湾における『近代』——迷信を事例に」

コメンテーター 古田元夫

2012年9月17日

古田元夫 「ヴェトナムの植民地化と『近代化』」

コメンテーター 三尾裕子、伊藤亜人

2012年12月2日

田村克己ほか 「居住地社会論——イギリス、オランダの東インド会社にさかのぼってのセトルメントの比較」

金子正徳 「インドネシアのエリート（特に地方エリート）の成り立ちと教育との関係」

コメンテーターは定めず、出席者全員で討論

2013年2月3日

濱下武志 「グローバリゼーション下の中国に見るナショナリズムの多様な形態」

コメンテーター 吉澤誠一郎

成果

本年度は4回の研究会で、特に東アジア、東南アジアをとりあげたが、常に他のアジア地域やアフリカの問題も踏まえながらの広い視野で検討でき、この研究会の特色を生かすことができた。例えば、「近代化」期における新宗教の誕生とその役割の問題など、幕末から明治にかけていくつもの新宗教を生んだ日本も含む、アジア・アフリカ共通の問題の1つとして、比較研究が期待される。その際、16世紀から19世紀にかけて世界に進出したヨーロッパ世界の根底にあった、キリスト教の普遍性に対する信念、植民地支配と重ね合わされた「文明化の使命」の、action/reactionの様相を、アジア・アフリカの視野でまず検討することは、将来、オセアニアや南北アメリカも含めた世界大の視野に到る一步の意味をもちうるだろう。また被植民地的状況における「エリート」の問題は、三尾報告における台湾、金子報告におけるインドネシア、前年度までの伊藤報告における朝鮮、吉澤報告における中国などに加えて、アフリカ社会の問題としても、来年度には取り上げたい課題の1つである。

「海外における人類学的日本研究の総合的分析」

内容

本共同研究の最大の目的は、海外における人類学的日本研究の実態を把握し、異文化としての日本の表象にまつわる問題を検討することにある。地域的には研究蓄積のもっとも多い英語圏を中心とする。そのため、メンバーの半数以上は英米の大学で日本を研究対象に学位を取得した者であるが、日本を自文化として研究してきた日本民俗学の視点を活用すると同時に、日本が位置する東アジアにおける日本研究との比較も視野に入れる。以下は本共同研究会の具体的目標である。1) 綿密な文献リストおよび文献解題の作成：徹底的な文献調査を行って研究会の基礎資料とする。2) 知的系譜の同定：主要な著作の理論的・民族誌的・政治的背景などを検討して、かの地における日本観の流れを明らかにする。3) 文化研究全般の再検討：自文化が異文化として外部者に描かれたときの問題を通じて、文化研究の在り方そのものを再検討する。4) 対話の場の形成：描かれた者が描いた者といかに対話して、双方に満足のいく文化像を提示するかを考える。

代表者 桑山敬己

班員 (館内) 太田心平

陳 天璽

(館外) 岩崎まさみ

太田好信

岡田浩樹

加藤恵津子

川橋範子

James E. Roberson

菅 豊

住原則也

泉水英計

竹沢泰子

中西裕二

中牧弘允

沼崎一郎

研究会

2012年5月19日

太田好信 「『菊と刀』に内在する文化理論の限界とその可能性」

2012年5月20日

岡田浩樹 「韓国人類学から見た日本社会」

2012年9月21日

James Roberson 「英語圏における沖縄の民族誌について」

2013年1月26日

中牧弘允 「谷口シンポ『文明学』の日本研究」

2013年1月27日

陳 天璽 「日本における国籍・戸籍のない人びと」

2013年1月27日

菅 豊 「民俗学の世界史的展望」

成果

前年度（2011年度）に引き続き、メンバーの個人発表を主な活動とした。共同研究会発足当初の計画では、海外における人類学的日本研究の知的系譜を辿ることを1つの目的としたが、メンバー間の討議の結果、後世に影響を及ぼした主要な作品を中心に据えて、今日的観点から振り返ることで合意を見た。太田好信がベネディクトの『菊と刀』を取り上げたり、桑山敬己がエンブリーの *Suye Mura* とピアズレー他 *Village Japan* に焦点を当てて『民博通信』第139号に「第2次世界大戦前後のアメリカ人研究者による日本村落の研究」を寄稿したりしたもの、そうした合意の反映である。その一方で、主要作品を特定しにくい分野や国もあるので、当初の計画の骨格は生かされている。

「日本におけるネイティブ人類学／民俗学の成立と文化運動——1930年代から1960年代まで」

内容

本研究は、アカデミックシステムを整える以前の民俗学が、各地の多様な文化運動と共鳴しながら存在していたという事実に着目し、民俗学の形成を、それら民間における多様な文化運動のなかに位置づけなおすことを目的としている。1960年代以前の民俗学は、文学（短詩型文学、小説）、歴史（郷土史）、考古学、それら人文系の知と深く関わっていた博物学など、各地域を拠点とした民間の多様な知の実践の選択肢の1つとして存在していた。そうした、地域を拠点とした運動は、学校のOB、職域などの多様な人脈や、雑誌刊行などを通じて外部と交渉しながら、他地域の知識人と重層的に関わりながら展開していた。さらに初期の人類学者たちもまた、これらの文化運動と少なからず接点をもっていた。口碑や伝承文化、古老の記憶の発見などを通して、自らの生活を自省的に見直す民俗学という実践は、こうしたローカルな文化運動のなかに胎動した。本研究を通して、民俗学も含め、広く近代日本の民間における人文学的知の展開を、多元的な重なりと動態から見直す地平を切り拓くことを目指している。

代表者 重信幸彦

班員 (館内) 森 明子

(館外) 飯倉義之 岩本通弥 門田岳久 菊地 暁 小池淳一 小国喜弘 佐藤健二
中西由紀子 久野俊彦 松本常彦 室井康成

研究会

2012年7月29日

佐藤健二 「ある民間学者の仕事——十二階の喜多川のケーススタディ」

中西由紀子 「北九州の雑誌文化」

真鍋昌賢 「民間〈知〉の実践のかたち——関心と想像力の共有とネットワーク」

2012年10月28日

松本常彦 「雑誌の領分——中島利一郎の場合」

門田岳久 「文化運動のなかの宮本常一——1970年代南佐渡における対抗文化と民俗学的実践」

2012年12月25日

森 明子 「民俗学実践のかたち——ミュンヘン協会の変遷を事例として」

全員討論 「文化運動のかたちを見渡すために——成果報告にむけて」

2013年3月9日

坂野 徹 「雑誌という場をひもとく——『ドルメン』『ミネルヴァ』『あんとろぼす』と甲野 勇」

2013年3月10日

全員報告・討論 「最終報告に向けて——テーマと視点」

成果

最終年度である2012年度は、主に以下の1)～4)に整理した問題について議論を深めた。1)ローカルな文化運動における雑誌の捉え方について、北九州地域を例に同人雑誌群の相関を網羅的に把握することや(中西報告)、一方福岡の中島利一郎を例に、1人の実践家が複数の雑誌の編集に携わる過程を探ること(松本報告)など、雑誌媒体の分析の仕方について検討した。また、雑誌という場を媒介に、どのように文化運動のネットワークが構築されるか、

その捉え方について『民俗芸術』を例に議論した（真鍋報告）。2)次にローカルな文化運動に関わる主体の、アカデミックな調査研究の技法と異なるリテラシーのあり方について、蒐集家・時代考証家である喜多川周之を例に議論した（佐藤報告）。そしてまた、外部から関与しローカルな文化運動が生起する媒介としての役割を果たす主体について、宮本常一と佐渡の文化運動の関わりを素材に議論した（門田報告）。今年度はさらに3)民族学とローカルな文化運動との関わりについて、考古学・民ソク学が相互に場を共有し展開していた雑誌『ドルメン』等を素材に検討した（坂野報告）。4)そして、本研究は日本を主なフィールドとしてきたが、ミュンヘンにおける民俗学協会のあり方の歴史的展開を踏まえ、ローカルな文化運動の組織のかたちについて、私的な同人組織を中心とした日本の場合と比較検討することもできた（森報告）。

「映像資料を活用したイスラームの多様性に関する地域間比較研究」

内容

本研究は、様々なテーマに基づいて撮影・記録された映像資料を通して、東アジア、西アジア、中央アジア、東南アジア、アメリカ合衆国、西アフリカ、そして日本の各地で展開しているイスラーム的宗教実践の実態を知り、「イスラームの統一性と多様性」といった枠組みを再検討しようとするものである。とりわけ、イスラームの「共通項」として自明視される傾向にあったクルアーンの朗誦法、礼拝に伴う動作、ラマダンに過ごし方、モスクの構成要素や機能などの地域的展開に焦点を当てることで、各地域において解釈されている「普遍性」を地域横断的に考察することを第1の目的としている。その為の方法として、報告者が、調査地の人々にとって「ムスリム」としてのアイデンティティを顕在化する効果のある儀礼や行為を、映像資料を用いて紹介し、既存の宗教用語を用いるだけでは十分に説明できるとは限らない、その地域独自の文脈の中で説明されるべき概念や情報があるという事例をメンバー間で共有することを出発点とする。文字媒体による情報の伝達の限界を認識した上で、イスラームをめぐる従来の概念枠組みについて討論する。また、宗教実践の地域間比較研究を可能にするための方法として映像資料の可能性を検討することを本研究の第2の目的とする。

代表者 吉本康子

班員 (館内) 相島葉月 菅瀬晶子 藤本透子 山中由里子
(館外) 阿良田麻里子 伊東未来 熊谷瑞恵 黒田賢治 小杉麻李亜 椿原敦子 福田義昭
村尾静二 米山知子 今中崇文

研究会

2012年6月1日

阿良田・今中・黒田・菅瀬・吉本 「文化人類学会分科会——映像資料にみるイスラーム的宗教実践のプレ発表1」
山中由里子 「コメント」
全体討論 「研究成果の公表準備にむけて」

2012年6月2日

米山知子 「トルコ・都市におけるアレヴィーの儀礼ジェムのセマー——コミュニケーションとしての映像という視点から」
阿良田・今中・黒田・菅瀬・吉本 「文化人類学会分科会——映像資料にみるイスラーム的宗教実践のプレ発表2」
中西裕二 「宗教実践をめぐる記述と分類の問題——日本とベトナムの事例にみる」
全体討論

2012年10月8日

成果発表の検討・打ち合わせ
熊谷瑞恵 「ムスリムの国へ行ったムスリム——トルコ・イスタンブールに住む中国新疆ウイグル族の事例から」
久志本裕子 「マレーシアの預言者生誕祝い（マウリド）——民衆のイスラーム実践において誦まれるもの」
白川琢磨 「文化資源論からの提言」
全体討論

2013年1月27日

見市 建 「インドネシアにおける宗教『伝統』とメディア、政治」
ハリチハン・パタル 「在日インドネシア人ムスリムの宗教生活に関する社会学的考察——国際結婚をしているインドネシア人ムスリムへの聞き取り調査に基づいて」
全体討論

2013年3月3日

成果発表の検討・打ち合わせ

福田義昭 「昭和戦前・戦中期の在日ムスリム・コミュニティとモスク建立」

川崎のぞみ 「在日ムスリムのナシード（宗教歌）の実践について」

長津一史 「インドネシア・境域のイスラーム実践——言語使用を中心に」

全体討論

成果

本共同研究の最終年度に当たる2012年度は計4回の研究会を開催し、第46回日本文化人類学会において分科会『映像資料にみるイスラーム的宗教実践——地域間比較研究における「家族的類似」概念の可能性をめぐって』を主催した。研究会の成果としては、以下のものを挙げる事が出来る。

- 1) 1回目及び2回目の研究会においては、トルコおよびマレーシアの事例が新たに報告された。また上記の分科会のプレ発表を行い、これまでの各地域の報告を踏まえた上で、様々な指標によって存在する実態としての「イスラーム」や「ムスリム」を、ひとつの弁別特性も共有しない多配列分類ないし家族的類似という概念で捉え直すことの可能性を討論した。
- 2) 3回目及び4回目の研究会においては、インドネシアおよび日本国内のムスリムの事例が報告された。各回では「越境」や「移民」という新たなキーワードが浮上し、イスラーム的な知識ないし表象の伝達媒体としての映像という側面についても議論した。
- 3) 全回を通して、それぞれの地域において展開するイスラーム的宗教実践の実情と、「共通性」ないし「普遍性」の解釈の多様性について、各報告から得られた知見を共有することができた。また地域にとって「正当」なムスリムの実践を示すとされるクルアーン朗誦の節回しや動作についての報告等を通し、映像資料の有効性が確認できた。

「交錯する態度への民族誌的接近——連辞符人類学の再考、そしてその先へ」

内容

近年、医療や開発などの言葉で人類学を修飾する「連辞符人類学」が急増し、関連領域を含む再帰的な議論が展開されている。だがこれらの研究は、各領域における近代知批判という図式のもとで特定の場面を断片的に切り取り、そこでの目的遂行的な行為のみに焦点化し記述する傾向が指摘されている。本共同研究では、民族誌研究がもつ本来の魅力、つまり様々な当事者がそれぞれの立場や利害から現場に関わり、目的外の行為も含めて進行する現場の全体性を通時的／共時的に捉えるという視点に立ち返り、人類学者が他専門領域と関わる際に共有可能な基盤の再考を目的とする。

その際、ある対象や状況に対する行為の準備状態あるいは感情的傾向である「態度」、とくに現場の物事の経過を「流す態度」（看過、いなす、諦めるなど）と「澁ませる態度」（配慮、拘る、悩むなど）に注目する。当事者のそうした態度を、その現場に特有の言語表現、感情管理のやりとり、そして調査者自身の経験を手掛かりに探り出し、目的遂行的／目的外の諸行為とともに記述し直すことで、現場の全体性への民族誌的再接近を試み、その作業を通じて、人類学が他領域と関わるための共通基盤を探求する。

代表者 岩佐光広

班員 (館内) 伊藤敦規 小川さやか

(館外) 伊藤まり子 工藤由美 佐川 徹 松尾瑞穂

研究会

2012年7月7日

伊藤まり子 「道徳と情感——ベトナム北部地域の宗教組織における『対抗的道徳』をめぐる態度を事例として」

工藤由美 「当事者たちの一貫性のない態度と人類学者——マプーチェのフィエスタをめぐって」

2012年7月8日

全 員 「最終年度の計画について」

2013年1月27日

松尾瑞穂 「苦悩のエイジェンシー——インド女性にとっての流産にみる応答の模索」

佐川 徹 「東アフリカ牧畜民ダサネッチが戦いに臨む態度と感情」

全体議論

2013年2月18日

伊藤敦規 「民族誌資料情報のデジタル共有——ズニ博物館によるフォーラム型データベース構築の取組」

成果

本年度は、これまでのキー概念の整理を踏まえつつ、メンバーがフィールドワークを行ってきた地域の具体的な事例をとりあげながら検討を行った。それらの事例の検討を通じて、刻々と変化する現場の状況が人びとの応答／態度を喚起し、いっぽうでそれに人びとが応え続けることで現場は現在進行形の社会状況として立ち現れるという、現場とそこに関わる人びとの相互性が明らかになった。また、その相互性の今・ここにおける具体的な現れとして人びとの応答／態度に注目することで、現場におけるアクチュアリティへの接近の可能性を見出すことができた。こうした研究成果を踏まえ、日本文化人類学会第47回研究大会（2013年6月8～9日、慶応大学）に分科会「応答／態度の人類学——現場のアクチュアリティへの民族誌的接近に向けて」を申請し、採択された。

「内陸アジアの宗教復興——体制移行と越境を経験した多文化社会における宗教実践の展開」

内容

本研究は、グローバル化が進展し多文化状況にある現代を読み解く重要なカギとして宗教に着目し、越境と流動化の進む現代社会における宗教復興のメカニズムを明らかにすることを目的とする。特に、最近20年間に社会主義体制からの移行と越境というはげしい社会変動を経験した内陸アジアの多文化社会の事例をとおして、宗教復興にみられる地域固有の歴史社会的・政治経済的諸要因、越境と宗教実践の多様な展開、地域社会に生きる人々にとってローカル／グローバルに宗教を復興することの意味の解明を目指す。本研究の意義は、第1に複数の国家における社会主義の経験と宗教復興の関係性の解明に寄与すること、第2に国民国家の枠組みを超えて再編される宗教・民族・地域の連関を越境という角度から解明すること、第3に生と死という人間存在の根本に関わる問題に着目し宗教復興現象から他者との共生という現代的課題に貢献する点にある。

代表者 藤本透子

班員 (館外) 王 柳蘭 菊田 悠 小島敬裕 小西賢吾 小林 知 島村一平 趙 芙蓉
和崎聖日

研究会

2012年5月12日

小林 知 「セイマーとバロメイ——宗教空間にみるカンボジア仏教再生の動態」

小西賢吾 「越境するボン教徒——普遍性と個別性からみる『伝統』の存続」

総合討論

2012年6月9日

藤本透子 「社会主義をへた宗教の再構築（趣旨説明）」

藤本透子 「越境空間におけるイスラームの再構築」

島村一平 「感染するシャーマン」

小西賢吾 「宗教の再構築における指導者と地域社会再編の関係」

小島敬裕 「中国雲南省徳宏州における仏教実践の断絶と再構築」

王 柳蘭 「中国雲南系ムスリムの越境と宗教ネットワークの再構築」

総合討論

2012年12月15日

和崎聖日 「中央アジア定住ムスリムの婚姻と離婚——シャリーアと民法典の現在」

成果報告について討議

2013年1月13日

成果報告について討議

井上大介 「社会主義体制下で発展する新宗教運動——キューバにおける創価学会を事例として」

滝澤克彦 「モンゴルにおけるキリスト教への改宗をめぐる」

総合討論

2013年3月2日

研究成果原稿の読み合わせ

成果

文化人類学会で分科会「社会主義をへた宗教の再構築——地域社会の分断／再編と越境からのアプローチ」を開催したほか、国立民族学博物館で5回の研究会を行った。ユーラシア内陸部の歴史動態をふまえて民族誌データを分析することで、シャマニズム（シャーマニズム）、仏教、ボン教（ボン教）、イスラームという多様な宗教が、それぞれ災因論的感覚、浄域の観念、在家信徒、師弟関係、移民のネットワークなどに依拠することで、社会主義経験をへて再構築され、地域社会の再編に特定の役割を果たしたことが明らかとなった。宗教の重要性は、結婚／離婚に関する国家の制定法に対するイスラーム法の優位や、シャマン（シャーマン）による病気治療など、日常生活に密接にかかわる諸側面にみられる。宗教実践はしばしば国境を越えて再構築されるが、近年ではボン教のヨーロッパ布教やキリスト教のモンゴルにおける布教などのように、遠隔地における布教、改宗、新宗教運動も社会動態との関連から重要となっていることが論じられた。

「梅棹忠夫モンゴル研究資料の学術的利用」

内容

本館の創設に尽力し、初代館長をつとめた梅棹忠夫ののこした資料は「梅棹アーカイブズ」とよばれている。それらのうち写真資料およそ3万5千点はすでに登録されたが、その他の資料については2011年度より順次デジタル化作業がおこなわれている。本研究は、そうした資料整備によっていかなる学術的な活用を展開しうるかを具体的にしめす先例となるように、アーカイブズ資料の学術的な利用を目的とする。

梅棹忠夫ののこした資料のうち、もっとも多大なまとまりは1944年から46年にかけて中国内モンゴル自治区などで調査研究がおこなわれたときの資料である。本研究は、それらの梅棹忠夫モンゴル研究資料に関するデジタル・データ化作業を活用して、それらの記載内容について、学術的に整理し、分析するものである。分析にあたっては、国際学術交流協定にもとづき、中国関係諸機関とともに、別途、国際的な共同研究を実施し、その成果を公開して、地元にも還元する。

代表者 小長谷有紀

班員 (館外) 大野 旭(楊 海英) 呉人 恵 那沁 縄田浩志 堀田あゆみ

研究会

2013年1月9日

小長谷有紀・堀田あゆみ 「2012年5月の中国内モンゴルでの調査結果について」

那沁 「梅棹草稿論文における放牧論について」

2013年2月16日

小長谷有紀・堀田あゆみ 「遊牧図譜の原画集の刊行について」

縄田浩志 「フィールドノート47号および48号における研究企画について」

成果

昨年の共同研究の成果にもとづいて、現地調査を実施するために、別途、館長リーダーシップ経費を申請し、これにより、2012年5月に中国内モンゴル大学を訪問し、新たに学術交流協定を締結するとともに、それにもとづいて共同で現地調査を実施した。

その学際的かつ国際的な成果は「梅棹忠夫のモンゴル調査におけるスケッチ資料」『国立民族学博物館研究報告』37巻1号として刊行され、物質文化の変容が明らかになった。またさらに、『梅棹忠夫モンゴル調査スケッチ原画集』（国立民族学博物館調査報告111号）を刊行した。1990年の梅棹著作集編集時の誤りをただすなど、資料としての底本をつくることができた。

那沁は、梅棹の放牧に関する論文草稿を分析し、GPSや衛星画像など今日的な方法によって再検討できる可能性を示した。また、縄田浩志は、現地調査前に書かれた2冊のフィールドノートの詳細な分析から、遊牧論の成立過程を明らかにできる可能性を示した。

「パレスチナ・ナショナリズムとシオニズムの交差点」

内容

本研究会の目的は、パレスチナ・ナショナリズムとシオニズム、アラブ・ナショナリズムの比較研究を、人類学的、歴史学的、政治学的、地理学的視点から多角的におこなうことにある。

パレスチナ・ナショナリズムの起源は1834年、オスマン帝国治下のパレスチナの主要都市で起こった民衆蜂起にさかのぼるといわれている（Kimmering and Midgal 1995）。しかしながら、これについては批判も多く、列強によるシリア行政州の分割と植民地化が契機であるとする反論がなされてきた。なかでも、シオニストとの対峙によってパレスチナ人アイデンティティが形成されたとする、ハーリディの説（Khalidi 1997）が有名である。いずれにせよ、同じくオスマン帝国治下にあった周辺アラブ地域におけるアラブ・ナショナリズム、およびロシア・東欧地域からのシオニストによる入植活動に触発されて、パレスチナ・ナショナリズムが発生したことについて、疑問を差し挟む余地はないであろう。本共同研究会は、この三者を扱う研究者をメンバーに迎え、互いに情報を提供しあうことで、三者の相関関係を解明してゆくことを目的とする。

代表者 菅瀬晶子

班員 （館外） 赤尾光春 池田有日子 今野泰三 白杵 陽 奥山真知 金城美幸 田浪亜央江
田村幸恵 鶴見太郎 奈良本英佑 早尾貴紀 藤田 進 細田和江 森 まり子
山本 薫 横田貴之

研究会

2012年 7月22日

鶴見太郎 「シオニズムとナショナリズム論——いかにパレスチナ問題を論じるか」

田浪亜央江 「パレスチナ文化における『オーセンティシティ』の行方——ラクスを事例として」

2012年10月14日

金城美幸 「植民地化／植民地主義とシオニズム——概念の洗練化に向けての試論」

池田有日子 「ユダヤ人問題からパレスチナ問題へ——暴力連鎖の構造」

2013年 2月10日

蒲生裕恵 「パレスチナの都市に生きるシングル女性——仕事と結婚を中心に」

菅瀬晶子 「本年度までのまとめと今後について」

成果

2年目の今年度は、パレスチナとイスラエル双方のナショナリズムの比較と、パレスチナ人アイデンティティの表象のありかたという、2つの研究テーマを軸として研究発表をおこない、討議を重ねた。このうち後者については、今年度はヨルダン川西岸地区の事例を中心に取り上げ、前年度おこなったイスラエルにおけるアラブ人市民の事例と比較しつつ、そのアイデンティティ表象にみられるあらたな潮流の動向や、世代間の格差、イスラエルを含む非アラブ圏からの影響などについて確認した。

前者については、今年度はおもにシオニズム成立初期の歴史に注目し、ヨーロッパにおけるナショナリズム論や植民地主義の影響を洗い直すという作業をおこなった。パレスチナ・ナショナリズムとの接点をさぐる本格的な作業は、次年度に受け継がれることになるであろう。次年度末に予定している国際シンポジウムの開催にむけて、より議論を集約し、洗練化してゆくことをめざしたい。

「実践と感情——開発人類学の新展開」

内容

本研究は、開発や開発援助の文脈における人々の「感情」に注目した実践的人类学の可能性を検討することを目的とする。社会開発や人間開発に係る諸実践において、調査者が可能な限り支援の対象となる人々の目線に近づきながら「リアリティ」を捕捉することの重要性が指摘されて久しい。それは、一面において開発実践のプロセスを、人々の心のうねりと感情の動態の中で把握することを意味する。しかし実際には、これまでそれは、感情語や開発ジャーゴンに還元され、客観化されてきた。例えば、「人々のモチベーションを高め、持続させる」ことを開発援助の実務における主要な課題の1つとして示されることが多いが、そのような一般的表現では開発の場において「やる気を高められない」、あるいは「高めない」人々の抱く「リアルな」感情が浮かび上がってこない。そこで本研究では、ODA、NGOの海外における実践や国内での広報、啓発活動も含むさまざまな開発事例に関係する人々の行

為や思考、語りに現れる感情を、感情語（例えば「怒り」「喜び」「やる気」など）によって示される一般的・抽象的レベルだけでなく、その元にある個々の生きられた感情経験そのものにおいて捉える。

代表者 関根久雄（客員）

班員 （館内）岸上伸啓 白川千尋 鈴木 紀 信田敏宏
（館外）青山和佳 井上 真 小國和子 亀井伸孝 佐藤 峰 鷹木恵子 玉置泰明
内藤順子 縄田浩志 藤掛洋子 真崎克彦

研究会

2012年9月29日

関根久雄 「『怒り』を管理する——ソロモン諸島における開発実践と感情経験」

2012年10月13日

小國和子 「共感と合理——インドネシア南スラウェシ農村灌漑の『水守り人』の意義と機能を事例に考える」

鈴木 紀 「嫉妬と妬み——メキシコの参加型農村開発のサステナビリティ（自立発展性）を巡って」

2013年2月2日

縄田浩志 「村入りで『感情的になる』——現地調査の流儀をめぐって」

白川千尋 「感情と信頼関係——青年海外協力隊の事例より」

2013年3月2日

《共同研究『NGO活動の現場に関する人類学的研究——グローバル支援の時代における新たな関係性への視座』
（代表：信田敏宏）と合同開催》

藤掛洋子 「連帯から分裂へ——パラグアイ農村部における国際協力活動より（1993-2013）」

上田直子 「援助とソーシャル・キャピタル——中米シャーガス病対策でのサシガメをめぐるセンチメント」

成果

本年度第1回研究会において関根久雄（筑波大学）は、ソロモン諸島における農村開発事業を事例として取りあげ、現地の人々が開発に関わる事態を前にしていかにして「怒り」の感情を抱き行為化させるのか（感情経験、感情実践）、どのように怒りを管理しているのか（感情の文化的管理の実践形態）ということについて考察し、人々の感情経験と開発プロジェクトの実践活動との接点を明示した。

第2回研究会では、小國和子（日本福祉大学）がインドネシア南スラウェシ農村における灌漑水路管理における「水追い人」に係る事例に注目し、現地の人々がプロジェクトの過程で経験する近代合理性と社会的リアリティとの葛藤において生み出される社会的感情（例えば「共感」）が人々の行為や関係にどのように作用し、プロジェクトの持続性に貢献しうるかについて考察した。また鈴木 紀は、メキシコで実施された国際協力機構（JICA）の農村開発プロジェクトのフォローアップ研究のデータを取りあげ、それを人々の感情に着目して再評価を試み、プロジェクトの自立発展性の阻害要因として感情による説明が有効であることを示した。

第3回研究会では、白川千尋が青年海外協力隊員に注目し、村落開発活動に関わる彼ら（彼女ら）が現地の人々との信頼関係と感情的な関係を通じて活動を展開している様相について報告した。また、縄田浩志（総合地球環境科学研究所）は調査者である縄田自身のフィールドにおける感情経験に注目し、開発人類学における実践と感情をめぐる新たな考察の視角を提示した。

第4回研究会では、藤掛洋子（横浜国立大学）が長年携わっているパラグアイ農村における実践活動を取りあげ、藤掛自身の研究と実践の往還過程において生じる現地の人々との感情的もつれについて考察を行った。また、上田直子（横浜国立大学）は中米ホンジュラスの寄生虫感染症であるシャーガス病への対策活動に注目し、援助プロジェクト終了後においても援助の成果の持続的展開が可能となった事例を社会関係資本の視点から検証し、持続性を有する援助と社会関係資本との関係を感情の視点から明らかにした。

いずれの発表、報告においても、実践活動の起点及びその様々な事象との結節点に人々の感情経験が介在していることを明確に示す好例であり、本研究会の方向性をメンバー間で具体的に共有することができた。

「人の移動と身分証明の人類学」

内容

本研究は、人の移動・越境・滞在と身分証明をめぐる法的・行政的制度、またそれらを利用する実践のあり方について明晰化することを狙いとする。具体的には、生から死に至るまで、人の移動と在留管理に基づく身分証明が、

移動する人々の人生と次世代にどのような影響を与えるのかという視点に立ち、旅券、渡航証、身分証といった身分証明は、個人のアイデンティフィケーションや社会のトランスナショナリズムにどのように関わっているのかを解明する。身分証明が、越境の時代、ボーダーレスな経済社会にどのような影響を与えているのかは、研究価値の非常に高いテーマである。そのテーマを直視し、グローバルなネットワークが進行する過程で、国籍や在留資格など身分証明が果たしている役割と管理される側の一人ひとりの人権を人類学・社会学・法律学など各分野の研究者が学際的視点で議論、研究する。

代表者 陳 天璽

班員 (館内) 庄司博史 南 真木人
(館外) 明石純一 李 仁子 石井香世子 大西広之 郭 潔蓉 川村千鶴子 窪田順平
小林真生 小森宏美 近藤 敦 佐々木てる 館田晶子 中牧弘允 錦田愛子
西脇靖洋 付 月 松田睦彦 南 誠 柳下宙子 柳井健一 山上博信
山田美和 林 泉忠

研究会

2012年6月2日

川村千鶴子 「ライフサイクルの視座」
大西広之 「身分証明書の分類」
近藤 敦 「『多文化共生社会』における身分証明のあり方」
山田美和 「タイにおけるミャンマー人移民労働者と国籍・身分証明」

2012年9月15日

佐々木てる 「移動と身分証明の社会学」
Takamori Ayako “Positioning US-Japan Relations: Japanese American Cultural Citizenship”
小林真生 「スポーツ選手の国籍選択——トンガ人ラグビー関係者を事例として」

2012年12月1日

李 仁子 「脱北、脱南、そして難民——身分証明をめぐるあくなき闘い」
大川洋子 「米国における国籍取得および身分事項の立証」
総合討議

2013年2月23日

山上博信 「導入・小笠原諸島における人の移動とその国籍について」
DVD鑑賞 『知られざる国境・小笠原』とその討論
嘉陽ジャネット 「小笠原復帰の前後を経験した欧米系島民のくらしと身分証明」

2013年2月24日

長谷川 馨 「小笠原復帰に先立ち派遣された東京都職員の間接的記憶」
デービッド チャップマン 「海外からみた小笠原諸島の人びとと戸籍」
ディスカッション

成果

本年度の前半は、まず、本共同研究会の基本的な理論的枠組みとして設定しているライフサイクル、ライフステージなどの理論的概念について提案者（川村）の発表をもとに研究会メンバーで議論を行った。また、本共同研究会のもう1つの柱として注目している身分証明書についても概念を整理し、分類方法を検討した。さらに、グローバル化、多文化化する現代社会における身分証明の意味についても議論を行った。

概念整理を踏まえ、年度の後半は各共同研究会メンバーの専門分野やフィールドに基づき、ケーススタディ報告を行った。その内容は、タイにおけるミャンマー人移民労働者、日系アメリカ人、脱北・脱南者、小笠原復帰と欧米系島民などに及ぶ。また、スポーツ選手の国籍選択やアメリカにおける国籍取得や身分事項についても議論を行った。

「NGO活動の現場に関する人類学的研究——グローバル支援の時代における新たな関係性への視座」——

内容

グローバルな支援の輪が地球規模で広がっている今日、NGOの活動域は、人類学が伝統的に研究のフィールドと

してきた世界各地の周辺地域にまで及んでいる。人類学が対象とするフィールドの人びとは、NGOによるボランティア活動や支援活動を媒介として、血縁や地縁に基づく従来の関係性を超えて新たな関係性を構築するようになってきており、NGO活動に関わる人びとは、グローバルな社会的ネットワークの中に自らを世界とつながる存在として位置づけるようになってきている。一方、人類学者はフィールドワークの傍らで、ローカルNGOや国際NGOが様々な支援活動を行っているのを目にするようになり、時には人類学者自身もNGOの活動に深く関わり、場合によっては自らが支援のエージェントとなっている。こうしたNGOと人類学が接近しつつある今日の状況を鑑みて、本研究では、NGO活動の現場における人びとの新たな関係性とグローバル支援のメカニズムを、人類学のミクロな視点を生かしてローカルな現場から解明していくことを目的とする。また、新しい電子メディアを通じて人びとが国境を越えて直接むすびつく「草の根レベルのグローバリゼーション」が進行する中で、国家や世界秩序の変革・再編にNGOをはじめとする市民社会の諸アクターがどのような役割を果たしているのかを探究することも大きな目的となっている。

代表者 信田敏宏

班員 (館内) 宇田川妙子 白川千尋 鈴木 紀 関根久雄 (客員)
(館外) 綾部真雄 小河久志 加藤 剛 清水 展 杉田映理 内藤直樹 中川 理
子島 進 福武慎太郎 藤掛洋子 増田和也 三浦 敦 渡邊 登

研究会

2012年6月16日

子島 進 「国際協力を地続きのものとする理念と実践——JFSA 西村光夫さんの事例から」

2012年7月21日

宇田川妙子 「イタリアの『第三セクター』の動き」

中川 理 「コメント」

2012年7月22日

信田敏宏 「問題提起——グローバル支援とは何か？」

加藤 剛 「人類史からグローバル支援を考える」

鈴木 紀 「グローバルな互惠性と人類学的支援」

2012年12月16日

秋保さやか 「開発とクメール農民の『革命の時』——NGO—農民関係の変容に着目して」

信田敏宏 「<パブリックスケープ>という視座」

2013年3月2日

《共同研究『実践と感情——開発人類学の新展開』(代表：関根久雄)と合同開催》

藤掛洋子 「連帯から分裂へ——パラグアイ農村部における国際協力活動より(1993-2013)」

上田直子 「援助とソーシャル・キャピタル——中米シャーマン病対策でのサシガメをめぐるセンチメント」

成果

研究が本格化した本年度は、メンバーおよび特別講師による研究発表に加えて、メンバー間で共有すべき諸概念(「グローバル支援」「パブリックスケープ」等)について集中的に討議した。NGO活動が世界各地で展開している時代背景を意味する「グローバル支援」については、グローバルに展開する支援活動という字義通りの意味に留まらず、普遍的でグローバルに受け入れられている価値(人権、環境保全、貧困、疾病、教育、災害、民主主義など)に基づいた支援活動という意味づけも共通認識となりつつある。また、試みの段階にある「パブリックスケープ」については、さしあたり、公式/非公式のアクターが介在し、人びとの関係性が変化し新たな形で活性化しているフィールドの状況と定義し、さらなる検討を加えることになっている。メンバーの間に共有すべき概念や認識等が浸透し、次年度以降のさらなる理論的精緻化に向けて準備が整ったことで、本共同研究は第一段階をクリアし、次の段階に進んだと言える。

「物質性の人類学(物性・感覚性・存在論を焦点として)」

内容

インターネットをはじめとするテクノロジーの革新による仮想現実の蔓延の結果、人文社会科学の領域においても、人間にとっての物質世界の重要性が急速に低下しているかに見える。しかし、人間は依然として、(それぞれ特

定の物性をもつ生物や無生物、自然物や人工物から構成される)物質世界のなかに存在し、その物質世界に物質たる身体の感覚を介して物質的に関与する、それ自身徹頭徹尾、物質的存在でありつづけている。本研究は、人間の生活と人生の基盤をなす「物質性」(materiality)が人類学においてこれまで不当に看過されてきたとの認識に立ち、今後の人類学が問うべき「物質性」に関する問題系を、物性・感覚性・存在論の観点からラディカルに再考察することを通じて明らかにすることと、「物質性」に照準する具体的な手触りのある事例研究を、各自のフィールドワークに基づいて生みだし、今後の研究のために範を示すことを目的とする。

代表者 古谷嘉章(客員)

班員 (館内) 関 雄二 野林厚志
(館外) 秋山 聡 鏡味治也 川田順造 佐々木重洋 武井秀夫 出口 顯 松本直子
溝口孝司 箭内 匡 渡辺公三

研究会

2012年5月12日

全 員 「ゴミと物質性」をめぐるミニ問題提起
全 員 「ゴミと物質性」をめぐる総合討議

2012年7月28日

秋山 聡 「西洋中近世におけるキリスト像の生動性をめぐって」
出口 顯 「エンバーミングと記号化する身体」
武井秀夫 「からだを形作ることば」
全 員 「からだと物質性」についての総合討論

2012年11月10日

松本直子 「考古学からみた物質性——象徴的人工物と物質性」
溝口孝司 「物質性と考古学——社会性の変容との関連から」
野林厚志 「触感という観点からの展示物の解釈」
全 員 「考古学からみた物質性」についての総合討論

2013年2月2日

川田順造 「モノとケガレ——物質が内包する不可触性と不可視性」
質疑応答およびコメント
全体討論

成果

起承転結の「承」にあたる第2期(2012年度)においては、メンバー各自による個別研究の提示と交錯する論点の整理を行い、「物質性」という問題系の多様性ならびに広がりを確認した。具体的には、計4回の研究会を実施し、第1回研究会においては、「ゴミと物質性」というテーマで出席者全員がミニ報告を行った後、世界の物質性について考える際に「ゴミ」という切り口がどのように有効であるのか自由討論を行った。第2回研究会においては、「西欧中近世におけるキリスト像」「現代日本のエンバーミング」「コロンビアのトゥユカ族の身体」についての報告を通して「物質性」という視点から「からだ」について討論した。第3回研究会においては、人の進化とモノとの関わりについての考古学の見地からの2報告ならびに展示物の触感についての一報告が行われた。第4回研究会においては、(不)可視性と(不)可触性という観点からケガレとモノについて報告があった。

「ストリート・ウィズダムとローカリティの創出に関する人類学的研究」

内容

今日、ネオリベラリズムの主導する世界資本主義の浸透は社会に「恒常性の喪失」をもたらしている。しかも、主流社会とアンダークラスという垂直的に分離した「管理型」社会を産出している。アンダークラスや不安定労働者層は、保障なき世界をストリートに近接して剥き出しで生きる現代の前衛と言える。主流ホーム社会の中核の人々さえも現代社会の強い遠心力に不安を募らせている。故に、縁辺のストリートを生き抜く人々のぎりぎりの実践知は、今日すべての人々に要求されている。この図式を現代の地域構造に向ければ、今日のローカリティの盛衰も広義の「ストリート現象」と言える。流動する時間を生きるグローバル・シティの強大化の下で、周辺化されるローカリティはその生き残りをかけて格闘している。この狭義から広義までの「ストリート」現象(敗北と再創造の過

程)の記述分析が本研究の第1の目的となる。つまり、主流社会の設計主義が通用しない、偶有的なフローを資源にしたストリートの戦術的生き延び方のエスノグラフィを作成する。

代表者 関根康正(客員)

班員 (館内)岸上伸啓

(館外)朝日由実子 阿部年晴 小田 亮 姜 竣 北山 修 高坂健次 鈴木晋介
近森高明 トム ギル 内藤順子 西垣 有 根本 達 野村雅一 古川 彰
丸山里美 南 博文 森田良成 和崎春日

研究会

2012年5月13日

サラ・ティーズリー 「グローバルデザイン史の方法論をめぐって」

関根康正 「ローカリティの生産と変質——ロンドンの南アジア系移民のヒンドゥー寺院建設活動」

全員討論と打ち合わせ

2012年7月21日

野村雅一(国立民族学博物館名誉教授) 「冷戦と経済成長・開発(デベロプメント)——ギリシャからの展望」

森田良成(摂南大学非常勤講師) 「映像作品『アナ・ボトル——西ティモールの町と村で生きる』をめぐって」

全員討論と打ち合わせ

2012年12月15日

サラ・ティーズリー 「日本の家具製作に見るグローバルデザインヒストリー」

小田 亮 「災害ユートピアと日常性」

村松彰子 「仮設という暮らし」

総合討論と打ち合わせ

2013年1月13日

門脇 篤(門脇篤まちとアート研究所代表) 「震災後のコミュニティとアート」

高坂健次(関西学院大学名誉教授) 「個体的体験事実と全体的客観事実とのパラドクス—— Frustrated achiever、
民工、セクシャル・マイノリティ」

全員討論と打ち合わせ

成果

サラ・ティーズリーは、通常のワールドデザインヒストリーに対して脱中心化のモメントをもつ「グローバルデザインヒストリー」を提唱している。それは、ローカルな文脈における“design as practice and product”という非常にダイナミックな、あるいはgenerativeな方法論的な見方であり、そのことを具体的には日本の家具製作のフィールドに見出されるローカルデザインとグローバルデザインのトランスナショナルな関係把握において実証してみた。それを通じて、日本における近代デザインの普及過程で既にトランスナショナルな流動の中でプリコラージュ的にローカルなものが産出されていたという指摘がなされ、通常の都市計画にみられるユートピア・デザインに抗して、現代のストリートとローカリティをめぐるヘテロトピア・デザインなるものを構想している本プロジェクトには大きな示唆を与えられた。そこではデザインとは、人とモノの対称性を説くANT的な布置(“history through things”)の中でのan intentional action to change environmentと定義され、阿部年晴の言う、そうした対称性なしには人は育まれない後背地論的な「文化」と人間中心の近代「文明」の区別と交差させてみる価値があることが見い出され、ストリートとホームとの関係理解に脱中心的な把握を持ち込むのに示唆がある。

門脇 篤の大震災以降の宮城での糸を張るアートによるモノと人が対話しながら創造されるような下からの街づくり運動は、この文脈に照らして理解でき、またその方法と実践のイメージを具体的に豊穡化している。

野村雅一の冷戦構造の力の拮抗点に位置する経済危機のギリシャの事例を踏まえた、日本の戦後を冷戦下という見方で相対化する洞察的議論は、間違いなくワールドデザインヒストリーのヘゲモニーを十分相対化したときに初めて可能になるグローバルデザインヒストリーの見方と通じるものであり、日本国家の戦後史を、世界(ワールド)システムの中で半周辺ないし周辺に改めて位置づけ直す。つまり、ローカル・ステイトとして戦後日本における「主体性」とはなんであったか、その無根拠さやその受動性を明るみに出すことで明確化し、その上で、改めて私たちの当事者性を構築しなおす必要があることを唱えた。

さらに、そうしたグローバルシステムの中での移民の生活空間形成に注目したのが関根康正の英国の南アジア系

移民の間での研究である。関根は目下、莫大な資金（資本）をかけてヒンドゥー寺院建設を行う彼らの深い意図を探っている。この意図は、サラ・ティズリーから教示された co-design あるいは open-design という概念の核にあるとされる「サバイバルのためのデザイン」によって説明できる可能性を看取した。

この関根によって提示された一定の資本力を持ったローカルデザインの事例に対して、森田良成はインドネシアの西ティモール社会の街で、まさにグローバルシステムの縁辺の縁辺を生きる廃品回収業に従う村人、つまり資本なき人々の生き様を浮き彫りにする。同じローカルでもこの資本の有無の幅がシステムとの相互作用として行われるストリートのプリコラージュの内容を考察する際の幅にも対応するだろう。すなわち、ローカルな場でのサバイバル・デザインを構成する相互扶助的対応の現出の在り方の閾値の諸段階資本の有無はかかわると思われる。その点にもかかわって、大災害後の被災地域住民や社会的マイノリティーという広義の周辺化された場所（ローカルな場）に注目するとき、上からのシステムの管理的把握という権力行使と当事者個々人の日常生活経験にみられる創発的な実践との関係性を正確に腑分けしていくことが重要である。

この点を理論的に提示してくれたのが、小田 亮の「災害ユートピアと日常性」での慈善と相互扶助の区別であり、その実証部分が村松彰子による被災後の「仮設という暮らし」のシステムと日常の接点での現地調査報告であった。

また高坂健次による相対的剥奪を「個的体験事実と全体的客観事実とのパラドクス」の中で測り出す数理社会学的研究において、当事者の日常的視点への正確な接近方法・理論が模索された。ストリートに立つ、ローカルに立つとは、どういうことかを考察するうえで示唆が多かった。

「ネパールにおける『包摂』をめぐる言説と社会動態に関する比較民族誌的研究」

内容

本研究は、かつてヒマラヤのヒンドゥー王国であり、現在連邦民主共和制に向けた体制転換期にあるネパールにおいて、多種多様な中間集団の存在を前提として展開される種々の政治的な主張と、そうした中間集団に属するとされる様々な人々の行う実践とが織りなす布置を、近年ネパールにおいて急速に普及した翻訳語サマーベシーカーラン（「包摂」）を鍵概念として明らかにするものである。カースト的秩序から一元的な国民統合路線を経て多民族性、多言語性が認められた1990年以降のネパールにおいて、「先住民族」「ダリト」などグローバルに或いは国境を越えて流通する概念に基づいた様々な権利主張の運動と、マオイストから王党派に至るナショナルな水準での政党の主張、さらには人類学的なフィールドワークによって明らかにされる、必ずしもこうした運動や主張により回収されないローカルな水準での人々の状況、以上三者の間の関係と齟齬を多層的、多元的に検討することから、ネパール社会の歴史と現状に関する統合的理解を提出することが目的である。

代表者 名和克郎

班員 (館内) 南 真木人 宮本万里
(館外) 石井 溥 上杉妙子 鹿野勝彦 佐藤斉華 橋 健一 田中雅子 外川昌彦
藤倉達郎 別所裕介 Maharjan, Keshav Lall 森本 泉 安野早己 渡辺和之

研究会

2012年7月7日

中川加奈子「カトマンズにおける民主化・市場化と下からの社会的包摂——「カドギ」によるカースト・イメージの読み替え」

森本 泉 「ガンダルバと社会的包摂——新ネパール再構築過程で/を歌う」

共同討議 「昨今のネパール情勢について」

2012年7月8日

佐藤斉華 「彼女たちはいかにして『仕事に満足』か?——カトマンズ周辺の建築労働者女性の場合」

2012年11月17日

別所裕介 「開発と仏教——ネパールの包摂ポリシーにおけるチベット仏教集団の動向」

安野早己 「あるブラーマンの死亡事件——人民戦争後の村落社会の変化」

石井 溥 「ネパールとブータン——類似と対照」

2013年1月12日

森田剛光 「ネパール、タカリーの民族範疇に関する考察」

丹羽 充 「拡がるアイロニーと共同の可能性、もしくは不可能性——カトマンズ盆地のプロテスタンティズム

を事例に」

渡辺和之 「村に残った人々の暮らしはどう変わったか？ 東ネパール、ルムジャタル村における家畜頭数、耕作地、村落開発委員会における女性とダリットの役割の変化」

2013年3月2日

Khadga K. C. “Civil Military Relations in Nepal”

共同討議 「ネパールの平和構築における『包摂』について」

田中雅子 「人身売買被害者にとっての包摂——村に戻ったサバイバーの暮らしと当事者運動」

全 員 「次年度の研究計画について」

成果

第2年次にあたる本年は、共同研究者との日程調整の結果、4回の研究会を開催することとなった。共同研究者及び特別講師の発表は、特定の間接集団に焦点を当てたもの（森本、中川、森田、別所）、特定の村に焦点を当てて状況の変化とその複雑性を論じたもの（安野、渡辺）、ネパールの「包摂」を巡る既存の議論枠組では容易に捉えられなかった事象を扱ったもの（佐藤、丹羽、別所、田中）、さらには他国との状況比較（石井）に及んだ。さらに、京都大学に滞在中であったネパールの政治学者 Khadga K. C. 先生には、ネパールの軍という、決定的に重要ではあるが外部者には容易に扱いたくない存在を巡る問題について概観する発表をしていただいた。以上の発表とそれに伴う議論から、現在ネパールで「包摂」を巡って議論を行う際に考慮しておくべき事象の幅が大まかに明らかになり、次年度以降、それぞれのフィールドの具体的なデータに基づいて「包摂」を巡る問題をより深く比較検討していく準備が整ったものと考えている。

「グローバリゼーションの中で変容する南アジア芸能の人類学的研究」

内容

本研究の目的は、グローバリゼーションの中で変容する南アジア芸能の現状を、同地域の政治・経済・社会的変化という文脈に位置づけ、人類学的な観点から明らかにすることである。インドで起こった1990年代の経済自由化を端緒として、2000年代に入り南アジアの社会変化は更に進展した。そして、演劇、舞踊、音楽などの南アジア芸能が、多様化する情報メディアの拡大及び人の移動を通じて幅広く受容・消費される状況をもたらした。それに合わせ、芸能の実践形態や実践者の社会経済的な状況に大きな変化が生じていると同時に、海外への芸能の拡散状況や南アジアへの逆輸入という現象がみられる。本研究では、芸能実践者たちが従来の社会関係を越えたネットワークに参入することで生じる、南アジア芸能の再定義と拡張について考察を行う。現代の芸能実践者たちは、様々な観客・消費者の嗜好に応えるため、従来とは異なる美意識とパフォーマンスを身につけ、市場経済原理に合わせたマネジメントとマーケティングを行う必要に迫られている。彼らが新たな需要に応える一方で、既存の芸能形態や社会形態を維持しつつ、南アジア芸能を創発・変容させていく過程を描き出す。

代表者 松川恭子

班員 (館内) 杉本良男 寺田吉孝

(館外) 飯田玲子 岩谷彩子 岡田恵美 小尾 淳 古賀万由里 小西公大 竹村嘉晃

橘 健一 村山和之 山本達也

研究会

2012年8月25日

小尾 淳 「『神々の名を唱える』 芸能の『環流』 状況を考える——ナーマ・サンキールタナの現代的様相」

岩谷彩子 「環流する『ジプシー』 共同体——北西インドの芸能民カルベリアの踊りとコミュニティの生成」

全 員 「全体討論」

2013年1月12日

古賀万由里「バラタナーティヤムのグローバル化と揺れるジェンダー」

村山和之 「スーフィー芸能師たちの大衆音楽的世界——カウワーリーと民謡から」

全 員 「全体討論」

2013年1月13日

松川恭子 「インド、ゴア社会の演劇シアトルにみる地域的想像力の展開」

2013年2月9日

飯田玲子 「メディアの変化とタマーシャーの変容」

竹村嘉晃 「20世紀におけるインド芸能の伝播——あるマラヤーラー・シンガポール人のライフヒストリーを事例に」

全 員 「全体討論」

2013年2月10日

小西公大 「“Folk Music” が生み出される時——『レモン唄』にみるタール沙漠世界のモダニティ」

成果

本年度は研究会を3回開催し、グローバル化の最中にある南アジア芸能の現在について具体的な事例の検討を行った。その結果、以下の3点が明らかになった。1)南アジア系移民の動きにとまらぬ、南アジア地域外で受容されるようになった芸能が現地で変容を遂げ、南アジアに戻っていく、あるいは、更に他地域に広がっていく環流現象がみられる(小尾・古賀・竹村の発表)。その一方で、南アジア外で実践されていても、特定のコミュニティ外に受容されにくいゴア・クリスチヤンの演劇のようなケースもある(松川の発表)。言語の理解が必要な演劇と言語が理解できなくても観賞が可能な音楽・舞踊との違いを考える必要がある。2)英語能力、海外とのコネクションなどを有さないローカルな芸能実践者たちが、公的組織やプロデューサー的役割を担う外部者とのネットワークとのつながりによって、海外公演や海外から来た客へのレッスンを実施することが可能になっている。従来の社会関係を基盤とした観客層とは異なる人々の需要に応えようとする動きがある(岩谷・飯田の発表)。3)CD・DVD、テレビ、映画、インターネットなどのメディアを通じて、芸能自体が大きく変容している(村山・飯田・小西の発表)。その変化に芸能実践者たちが意識的に対応している場合もあれば、芸能実践者たちのやっていることとメディアを通じて消費される芸能が完全に違ったものになっている場合もある。

「現代の保健・医療・福祉の現場における『子どものいのち』」

内容

人類学、社会学、医学および保健医療分野の研究者と実践家による学際共同研究を行い、現代の保健・医療・福祉の現場における「子どものいのち」のありようとそのとらえ方について考察する。具体的には、次のテーマで4回の研究会を行う。1)子どもの死別経験とグリーフ、2)文化人類学におけるこども理解やいのちのとらえ方、3)医療環境や医療資源によって規定されるこどものいのち、4)予防接種行政・感染症対策におけるこどものいのちのとらえ方。これらの研究会を通して、人類学、社会学、医学および保健医療分野におけるこども理解を深め、社会的意義のある取り組みに研究結果を応用することを目指す。

代表者 道信良子

班員 (館内) 白川千尋

(館外) 岩本喜久子 神谷 元 亀井伸孝 木村晶子 波平恵美子 樋室伸顕 藤田美樹
山崎浩司

研究会

2012年6月9日

岩本喜久子「子どもにとっての生と死の経験、子どもの死別体験もふまえて」、山崎浩司 コメント

神谷 元 「日本の予防接種・感染症対策と子どものいのち」、白川千尋 コメント

2012年10月27日

高田 明 「子どものエスノグラフィ——進化、ポリティックス、相互行為」

波平恵美子「こどものいのちと親子の関係、その変化を通しての分析」

2013年1月26日

藤田美樹 「ザンビア共和国プライマリーヘルスケアプロジェクト——踊る大保健教育」

加賀谷真梨「人類学でいじめを読む」

道信良子 「北海道利尻島で生活する児童の身体性——身体と生活環境とのかかわりから」

2013年3月9日

幅崎麻紀子「子どもの『身体の声』を理解するローカルな営み——ネパールを事例として」

道信良子 「今年度共同研究のまとめ」

成果

第1回公開研究会の岩本報告は、グリーンワークにおいてこどもの声を傾聴し、それをおとなの立場から解釈しないことの大切さを指摘した。神谷は「集団予防」という概念を用いて予防接種の社会的意味について述べた。第2回研究会の波平報告は、日本の村落社会において人のいのちは家族、親族、地域社会による承認の上に成り立っていたことを示した。高田は、アフリカのサンの養育者とこどもとのかかわりの詳細を「共同的音楽性」と「ジムナスティックス」という概念を用いて分析した。第3回研究会では、藤田がザンビア共和国における住民参加型の母子保健プロジェクトの内容と効果について、加賀谷が日本の離島の小学校におけるいじめの構造について、道信が小学生児童の身体性について離島の生活環境や学習規律とのかかわりから論じ、フィールドワークによるこども理解の可能性と課題について述べた。第4回研究会では、幅崎がネパールにおける乳幼児のケアにおいて、養育者がこどもの身体動作に応答するような文化的様式があることを指摘した。

「音盤を通してみる声の近代——台湾・上海・日本で発売されたレコードの比較研究を中心に」

内容

現在、私たちが耳にする音楽の大半は録音されたものである。その点において、20世紀のレコード産業の発展は近代の音楽のあり方を決定づけたと言っても良いだろう。

本研究の目的は、国立民族学博物館に所蔵されているレコードを含め、日本、台湾、上海におけるレコード音楽の比較研究を行うことであり、この分野における本研究の重要性は以下の2点にある。

- 1) 1930～40年代の日本のレコード会社は、ハードウェアの仲介者、生産者でありながら、ソフトの制作者でもあった。したがって、日本、台湾、上海の関わりを調べることは、この3地域のレコード史を研究する上で、また東アジア全体におけるレコード産業の歴史を研究する上で重要となる。
- 2) 現在の音楽文化の一部は、台湾、上海の近代音楽の生成をその源とする。したがって、20世紀初頭の音楽に遡って調査し、それらの音楽を研究する際には、レコード産業に関わる側面とレコードによって作り出された音楽という側面を研究することが重要となる。

代表者 劉 麟玉

班員 (館内) 野林厚志 福岡正太
(館外) 今田健太郎 大畑(長嶺)亮子 尾高暁子 垣内幸夫 黄 英哲 西村正男
星名宏修 細川周平 三澤真美恵 四方田(垂水)千恵

研究会

2012年6月9日

三澤真美恵「植民地期台湾映画フィルム資料へのアプローチ」

康 尹貞 「The Formation of Taiwanese Theatrical Theme during 1900s-1930s.」

2012年10月8日

陳 培豊 「郷土文学の声と大衆」

今田健太郎 「日本における物語の音楽的演出についての試論」

2013年1月13日

垣内幸夫 「近現代の評弾——調(流派)の確立と伝承」

細川周平 「『世界音楽としての民謡』の反省と展望」

成果

本年度の研究会では、共同研究員による研究報告が4件と特別講師による研究報告が2件行われた。共同研究員による研究成果は、「映画と音声」と「民謡のあり方と伝承」の2つのカテゴリーに分けることができる。本報告では「映画と音声」に関する研究を中心に述べる。近年台湾で、台湾総督府の宣伝用映画が多数発見された。三澤はその複製とフィルムの整理に携わっており、それらの映画の内容がその時代の政策とどのような関わりがあるのかについて分析した。また、無声映画時代の台湾人弁士による映画解説が収録されたSPレコードが民族学博物館に所蔵されている。この資料に関しては、弁士の声に焦点を当て、弁士の解説の魅力がどこにあるのかを今後解明していく。更に、伝統的な演劇からアニメまで、様々な物語において音楽的演出は不可欠であるが、今田は日本におけるその特徴を「囃子」という語彙を手がかりに説明を試みた。欧米の音楽的演出が、物語世界の外側からコメントするようなものに対し、この「囃子」は物語世界の内側にある音・音楽というだけでなく、それを通じて人々は

物語世界に入り込み、あたかも登場人物のようにふるまう習慣とさえいえるのではないかと指摘した。

「帰還移民の比較民族誌的研究——帰還・故郷をめぐる概念と生活世界」

内容

本研究の目的は、「帰還移民」の生活世界について比較民族誌的に考察をし、「帰還」や「故郷」の概念を通文化的に検討し、概念の再検討を行うこと、同時に「帰還移民」の生活世界について実証的に検証していくことである。

一般的に帰還といった場合、同一人物の往還を意味する。移民について言えば、ある人が母国から移住先国へ行き、移住先国から母国へ戻ることを指す、つまり一世代限りの出身国への帰還である。しかし、移住先国で生まれ育ち、未だ見ぬ「母国」へ「帰国」することになった移民の二世世代以降の人々が存在する。彼ら彼女にとって「故郷」とはどこか、「帰」にはどのような含意があるのか、「帰国」してからどのように日常生活を送っているのだろうか。こういった問題群に我々の関心がある。

本共同研究では、移住先国で生まれ育った二世世代以降の移民の「帰還」に注目し、当事者の視点に立ち、「帰還」という現象がどのように捉えられているかということとを考察し、個人の行動の選択にとって中心的なファクターが何であるのか、といったことを検討することを目的とする。更に、「帰還」という行為や「帰還」後の生活や文化を考察する場合、移住の目的、「帰還」の理由、祖国の側の対応、祖国と移住先国の間の政治的・経済的關係、国際関係上の問題などにより、全く異なる枠組みが必要となる。この点において、比較民族誌的研究を行うことに意義があり、これにより、多元的地域研究の重要性の提唱が期待できる。

代表者 奈倉京子

班員 (館外) 足立 綾 飯島真里子 市川 哲 大川真由子 比留間洋一 山田香織 渡会 環

研究会

2012年4月21日

奈倉京子 前回の議論の整理

市川 哲 「親族・家屋・墓地——パプアニューギニア華人にとっての帰郷にまつわる観念と実践」

松田ヒロ子「植民地台湾を生きた沖縄人——歴史・記憶・表象」

2012年7月29日

松浦雄介 「アルキの『帰還』とフランスポスト植民地主義」

足立 綾 「ピエ・ノワールの『帰還』と『故郷』」

2012年12月9日

浅川晃広 「北朝鮮帰還事業と戦後日本人概念」

飯島真里子「帰還移民の戦争体験と記憶——フィリピン引揚者を事例として」

成果

2012年度は3回の研究会を行い、ゲストスピーカーを含む6人が報告を行った。研究会の中で、まず「帰還」概念について、対象国の行政用語・法律用語での呼称や位置付けられ方、当事者の語りを通して自己認識の仕方、研究者など第三者の捉え方について整理を行い、誰が「名づける」のか、誰が「名乗る」のかに注意しながら比較検討を重ねた。加えて、植民地からの人の移動を表す場合に用いられる傾向にある「引揚」という語を「帰還」と同じ意味で使用してよいのかという問題も提起された。

次に、「入植型帰還移民」の経験に関する事例報告を通して、当事者の経験は「ホスト社会」においてどのように公共的な記憶として想起されるのか、「不可視的移民」とも呼ばれる帰還移民はいかにして可視化されるのか、集合的アイデンティティはどのように形成されるのか、といった問題についてディスカッションを行った。これに付随して、国民国家や国民がもつ両義性についても議論された。

「災害復興における在来知——無形文化の再生と記憶の継承」

内容

被災体験の記録化や記憶の継承は、被災者自身による体験記の執筆や第三者による聞き取り調査などによって、これまでも数多く試みられてきた。近年では、災害発生によって予期せぬ事態に遭遇した際の判断と行動に関して、一般市民だけでなく災害の現場での対応に当たった行政官や消防士などをも対象として、言語記録として残し、そしてそれを災害状況下での教訓として共有化を図るための災害エスノグラフィも実践されている。しかしながら災

害エスノグラフィでは、将来の防災や減災への貢献を目的に、災害発生直後や避難所などの非日常的な環境下での判断・行動にテーマが限定されがちである。本研究は、人びとが自然・社会環境と日々関わる中で形成される実践的、経験的な知（在来知）を、災害発生により被った影響やその再生の活動、地域社会の再建に果たす役割、さらにはそうした経験の継承に注目し、社会的・歴史的背景に照らして、解明することを目的としている。主な対象は東日本大震災における無形文化とする。

代表者 橋本裕之

班員 (館内) 林 勲男 吉田憲司
(館外) 猪瀬浩平 大矢邦宣 川島秀一 木村周平 佐治 靖 寺田匡宏 政岡伸洋
松前もゆる

研究会

2012年6月9日

橋本裕之・林 勲男 「本研究会の趣旨と実施計画」

全 員 「各自研究紹介」

林 勲男 「東北の民俗芸能・鹿踊り再生への支援と被災地復興について」

全 員 「研究会の内容について」

2012年6月10日

橋本裕之 「無形民俗文化財への支援活動」

2012年11月16日

林 勲男 「災害の記憶を残す」

橋本裕之 「東日本大震災と無形文化遺産」

吉田憲司 「記憶の継承」

2012年11月17日

日高真吾 「東日本大震災で被災した有形文化遺産の復興支援」

阿部武司 「記録DVD『3.11 東日本大震災を乗り越えて』について」

2012年11月18日

佐治 靖 「『民俗知』から『在来知』へ——災害研究への、2、3の提言」

日高真吾・吉田憲司・林 勲男 「企画展『記憶をつなぐ』について」

全 員：企画展講評

橋本裕之・林 勲男 「年行司太神楽について」

松前もゆる「東日本大震災と学生による支援活動」

2013年1月27日

木村周平 「人類学における災害研究——これまでとこれから」

総合ディスカッション

2013年2月15日

政岡伸洋 「民俗行事の復活とは何だったのか——宮城県本吉郡南三陸町戸倉波伝谷の春祈祷の場合」

加藤幸治 「脱・文化財レスキュー——救助・復旧活動から地域研究へ」

政岡伸洋・加藤幸治 「東北学院大学博物館・文化財レスキュー資料および関連施設の収蔵設備等について」

文化財レスキュー資料・関連施設の収蔵設備等に関する討論

2013年2月16日

川島秀一 「山口弥一郎の三陸津波研究」

成果

2012年度は4回の研究会を開催した。有形・無形文化遺産の被災状況への対応について実践的な活動が報告され、被災地復興や生活再建プロセスの中での文化遺産のもつ意味・役割について意見交換をした。こうした支援活動の成果の記録化や大学教育での意義についても実践報告がなされた。また、災害の記憶の継承の在り方や媒体をめぐっては、神社の位置や津波碑を例にした議論がなされた。東北の被災地での以上のような具体的な実践事例を踏まえて、在来知をめぐりこれまでの議論や文化人類学における災害研究へのアプローチについての報告があり、今後の研究の展開の可能性について議論された。東北太平洋沿岸被災地の文化と災害という点で、同地域をフィールド

としている政岡が、民俗行事の復活の意味について考察を巡らし、川島が山口弥一郎の研究からキーワードを抽出し、今後の研究で注目すべき問題を提起した。

「熱帯の『狩猟採集民』に関する環境史的研究——アジア・アフリカ・南アメリカの比較から」

内容

本研究は、熱帯の「狩猟採集民」を対象にして彼らの資源利用や民族間関係を環境史の視点から構築することを目的とする。代表者によると、彼らの歴史は、1) 狩猟採集民の時代、2) 狩猟民と農耕民との共生関係や農耕民化の時代、3) 前近代・近代の国家形成の時代、4) グローバル化の時代という4時代に便宜的に区分できる。本研究では、これらの時代状況をふまえて、アジア、アフリカ、南アメリカという3大陸に暮らす「狩猟採集民」の視点からみた世界史を環境史として新たに構築することを試みる。具体的な問いは、時間軸に沿って1) 狩猟採集民は、熱帯雨林や熱帯高地において自給的に暮らしていたのか、2) どういう状況下で狩猟採集民と農耕民との共生関係がみられたのか、3) 前近代の国家形成（ムガル帝国と林産物、コンゴ王国と象牙など）や植民地形成にともない狩猟民はどのように対応したのか、4) 沈香などの森林産物や象牙を求める中国経済の増大などグローバル化が進むなかで、狩猟民社会にどのような変化がみられたのか、などである。これら4つの個別の問題を解くことによって、これまでの都市文明中心の世界史ではなく狩猟採集民の視点からの世界史を、地球の環境史として構築することが研究会のねらいである。

代表者 池谷和信

班員 (館内) 信田敏宏

(館外) 伊澤絃生 稲村哲也 大石高典 大橋麻里子 小谷真吾 小野林太郎 加藤裕美
金沢謙太郎 小泉 都 佐藤廉也 鮫島弘光 関野吉晴 高田 明 鶴見英成
中井信介 那須浩郎 服部志帆 増野高司 松井 章 松浦直毅 八塚春名
山本太郎

研究会

2012年11月3日

池谷和信 「共同研究会の目的、方法、今後の計画」

理論・生態・歴史

佐藤廉也 「生業はヒトの生涯をどれだけ規定するか？」

鮫島弘光 「ボルネオ熱帯林の哺乳類」

鶴見英成 「北部パルー最古の神殿遺跡群にみる経済活動の特徴」

資源利用

高木 仁 「カリブ海沿岸での先住民によるウミガメ捕獲——ニカラグアにおけるミスキートの網漁の事例」

辻 貴志 「フィリピンにおける自然利用活動と資源利用」

小泉 都 「ボルネオのプナンの植物知識」「狩猟採集民が農耕を始めるときの内在的困難——ボルネオのプナンの例」

八塚春名 「タンザニアの多民族混住地域における生業と資源利用——サンダウェとハツツアの比較から」

民族間関係

加藤裕美 「ボルネオの狩猟採集民シハンの資源利用と民族間関係」

中井信介 「タイの農耕民からみた狩猟採集民像」

大石高典 「貨幣経済浸透下のカメルーン東南部における農耕民・狩猟採集民関係」

国家・商品経済

小谷真吾 「商業的狩猟採集民の可能性——マレーシア半島部オランアスリの事例から」

金沢謙太郎 「サラワクの熱帯原生林をまもる人びと——バラム河上流域の狩猟採集民と農耕民」

信田敏宏 「サカイ、アボリジニ、オラン・アスリ——統治される森に生きる「狩猟採集民」

服部志帆 「森と人の共存への挑戦——カメルーンの熱帯雨林保護と狩猟採集民バカの文化の両立に関する研究」

松浦直毅 「アフリカ熱帯林の狩猟採集社会の現代的変容」

増野高司 「東北タイの山村における漁撈活動の実態把握に向けて——ラオ族の事例」

2012年11月4日

那須浩郎 「農耕と環境——文明と環境に関する植物考古学研究」

山本太郎 「人類、感染症、文明」
稲村哲也 「熱帯高地と狩猟採集民」
松井 章 「考古学と狩猟採集民」
コメント：那須浩郎

2012年12月9日

池谷和信 「問題提起——熱帯アメリカ低地」
高木 仁 「カリブ海沿岸での先住民によるウミガメ捕獲——ニカラグアにおけるミスキートの網漁の事例」
コメント：池口明子
山口吉彦 「アマゾン川のカメと人」
伊沢紘生 「アマゾンの自然と動物」
コメント1：鮫島弘光
コメント2：大石高典
関野吉晴 「南アメリカ熱帯低地の自然と人」
コメント1：大橋麻里子
コメント2：佐藤廉也
総合討論

成果

今年度の研究会は、2回開催した。1回目は、メンバーが人類学を中心として考古学、地理学、生態学、社会学、医学などの専門家から構成されるので、研究会の目的やキー概念などの共有化に努めた。そして、申請者によるわが国の研究の動向が概観されて、世界の研究と比べての違いが認識された。また、複数の異なった分野から「狩猟採集民」をどのように規定しているのか、狩猟や農耕などの活動や社会関係からみて「狩猟採集民」と農耕民ではどこが異なるのかなど理論的な問題が議論された。

2回目は、3つの大陸のなかで1つの大陸に焦点が当てられた。例えば、国内でもっとも研究の遅れている南アメリカにおいて、どのような「狩猟採集民」が暮らしてきたのか、彼らと農耕民との生存基盤での違いや類似性はどのようなものであるか、両者の共生関係は存在してきたのかなど、アジアやアフリカの研究では説明できないものを見出すことができた。これによって、熱帯の狩猟採集民像の大きな転換が必要になると考えている。

「贈与論再考——『贈与』・『交換』・『分配』に関する学際的比較研究」

内容

本研究の目的は、アメリカやオセアニア、アジア、アフリカ、ヨーロッパなど世界各地における贈与や交換、分配の民族誌事例を学際的に比較検討することである。また、それによって贈与や交換、分配などの概念と、モースやサーリンズ、テスタールらが提案した説明モデルの内容や有効性を検証する。さらに、グローバル化が進む市場経済の浸透によって、各社会の贈与・交換・分配慣行がどのように変化してきたかについても検討を加えたい。

本研究は、学際的な比較検討を通してこれまでの中心的な人類学概念やモデルを検証することにより、それらの有効性と限界を把握し、理論的な展開につなげることを目指す点に意義がある。さらに、贈与や交換、分配に関する通文化的かつ学際的な研究は、個別の行為の背後にある特定のタイプの社会や人類に共通する側面を解明する手掛かりとなり、新たな人間観や社会観を提起できる可能性がある。

代表者 岸上伸啓

班員 (館内) 小川さやか 小林繁樹 丹羽典生 藤本透子
(館外) 井上敏昭 小田 亮 風戸真理 佐川 徹 立川陽仁 友野典男 中川 理
中倉智徳 仁平典宏 比嘉夏子 深田淳太郎 丸山淳子 溝口大助 山極壽一
山口 睦 渡辺公三

研究会

2012年10月7日

岸上伸啓 「趣旨説明と問題提起」
全 員 「検討および各自の研究紹介」
全 員 「今後の予定の検討」

2013年1月20日

岸上伸啓 「問題提起」
 小林繁樹 「贈物交換活動と地域社会」
 深田淳太郎 「コメント」
 溝口大助 「贈与論と供犠論——『聖なるもの』と『霊的なもの』を手がかりに」
 渡辺公三 「コメント」
 全体討論

2013年3月3日

岸上伸啓 「問題提起」
 立川陽仁 「クワクワカククのポトラッチと贈与・分配」
 井上敏昭 「グイッチン社会における分配・相互扶助・贈与——資本主義国内に包含された狩猟社会における意義について」
 全 員 「次年度の研究計画の検討」

成果

第1回目の研究会では岸上がモースに端を発する贈与論の系譜を概略しつつ、クラ研究、ポトラッチ研究、狩猟採集社会に関する分配研究について概略的な全体像を提示し、分配・交換・再分配・贈与などの概念を再検討するための問題の共有化を図った。

第2回目の研究会ではクラ研究とモースの贈与論をテーマとした。小林がクラの概要とシアン諸島の贈物交換について報告し、検討を加えた。溝口はモースの贈与論を供犠論との関係から論じ、レヴィによるモースへの学問的影響の可能性について指摘した。小林は、クラや贈物交換は社会的活動である点を強調するとともに、マリノフスキーのクラ研究をワイナーの女財の研究を紹介しながら批判した。

第3回目の研究会ではクワクワカククのポトラッチとグイッチンのポトラッチを検討した。立川は、ある時期、社会的序列を決定するために競争的なポトラッチが行われたが、ポトラッチ自体は一方的な贈与である点を指摘した。一方、井上は現在のポトラッチがきわめて先住民社会の内的な社会性や対外的な政治性と結びついている点を強調した。

「肉食行為の研究」

内容

本研究の目的は、人類の採食行動の構成要素の1つである肉食に焦点をあて、その生態学的適応と文化的位置づけとの関係、さらに今日のグローバル消費社会のなかで変質してきた人類の肉食行為の動態を明らかにし、将来の展望を与えることである。人類は進化の過程において、肉食と菜食の双方に生態学的に適応するとともに、それを文化的な行為として社会の中に位置づけてきた。食肉の分配や共食、供犠における利用、肉食の忌避や規範化は、人類学が明らかにしてきた肉食の重要な社会的機能である。食肉の生産や流通が産業化された20世紀後半から、肉食は先進国社会の中で日常化される反面、動物から食肉を得るという光景は希薄となった。こうした社会的背景のもと、欧米では「動物解放論」に代表される倫理的なアプローチを中心に、肉食の是非を含めた動物の権利をめぐる議論が盛んとなった。しかしながら、これらは功利主義と義務論が中心で、異なる社会的、文化的脈絡の中で人間と動物との関係が構築されてきたことについては必ずしも注意がはられていない。本研究では、肉食とそれに関連する行為の背景にある複雑で多様な問題群を明らかにしたうえで、これからのグローバル消費社会における肉食のありかた、さらには、人間と動物との関係のありかたに新たな視座を作り出すことをねらいとする。

代表者 野林厚志

班員 (館内) 池谷和信 岸上伸啓
 (館外) 伊勢田哲治 五百部 裕 鵜澤和宏 内澤句子 梅崎昌裕 永ノ尾信悟 大森美香
 小川 光 加藤裕美 筒井俊之 林 耕次 原田信男 本郷一美 山田仁史

研究会

2012年11月23日

野林厚志 「肉食行為の研究」共同研究の趣旨と見通し
 参加者全員 「自己研究紹介、研究会の方向性についての意見交換」

2012年3月16日

五百部 裕 「ヒト上科における肉食行動の進化」

池谷和信 「現在の狩猟採集民の狩猟行動と肉食——アフリカの事例を中心として」

2012年3月17日

鶴澤和宏 「肉食行動と人類進化——先史人類の食性変化と身体・行動・社会の共進化」

参加者全員 「総合討議、次年度研究計画の策案」

成果

第1回目の研究会合では、研究代表者の野林が、研究計画全体の説明と研究課題の背景となる問題群の予察を行った。それをふまえたうえで、参加者が全員による自己研究紹介ならびに本研究会の問題意識との接合点について説明し、研究計画全体の目的ならびにそれぞれの役割分担の確認を行った。第2回目の研究会合では、肉食行為を人類進化史の観点から議論することを目的とし、霊長類、初期人類、狩猟採集民の肉食行為についての研究発表と議論を行った。霊長類の狩猟対象の選択性や食肉獲得そのものが日和見的であるのにたいし、人間の狩猟も含めた食肉獲得の手段の多様性が明らかとなり、肉食が「計画的」「既知」なる行為ゆえに人間が意味付けをする機会が増えていくという、肉食の生態学的側面から文化的側面への変換点がうきあがった。進化的な視点から考えた場合、肉食が生態学的な適応をこえて、生物に変化をもたらせる（具体的には「人類」への進化と「大脳化、人間化」）1つの要因となったシナリオは、肉食のインパクトがいかに強いものであるかがあらためて示されたと言える。草食動物の肉食行動や肉食動物の肉食による変化（進化上）についても今後の問題群に加え、比較進化的にもとらえる必要があることが明らかとなった。

「触文化に関する人類学的研究——博物館を活用した“手学問”理論の構築」

内容

本共同研究は、2009～2011年度に実施した科学研究費プロジェクト「誰もが楽しめる博物館を創造する実践的研究——視覚障害者を対象とする体験型展示の試み」を発展的に継承し、人類学的視点から「触文化」（さわらなければわからない事実、さわって知る物の特徴）について考察することを目的としている。上記科研プロジェクトの成果としてまとめられた廣瀬編『さわって楽しむ博物館——ユニバーサル・ミュージアムの可能性』（青弓社、2012年5月）は、「ユニバーサル・ミュージアム＝誰もが楽しめる博物館」の入門書、実践事例集と位置づけることができる。この本の内容を敷衍する形でユニバーサル・ミュージアム、さらには21世紀の多文化共生社会の具体像を指し示すための理論構築を試みるのが本研究の狙いといえよう。これまでの人類学においては、視覚（映像）・聴覚（音響）などに比較して、触覚に注目する研究は少なかった。本研究では、博物館展示を活用した“手学問”理論を切り口として、「触文化」にアプローチする。

代表者 廣瀬浩二郎

班員 (館外) 石塚裕子 及川昭文 大石 徹 大高 幸 小山修三 五月女賢司 鈴木康二
原 礼子 藤村 俊 堀江典子 真下弥生 増子 正 宮本ルリ子 山本清龍

研究会

2012年11月11日

廣瀬浩二郎 「共同研究の趣旨と目標」

石塚裕子 「触る街並み観光の効果に関する基礎的研究」

大石 徹 「都市のモニュメント調査から」

堀江典子 「公園の博物館的機能とユニバーサルデザイン」

山本清龍 「野外リクリエーションの質を問う」

2013年3月2日

原 礼子 「湯浅八郎と民芸品コレクション」

堀江武史 「文化財の修復と複製——府中工房の活動から」

2013年3月3日

尾関育三 「視覚障害者の大学進学——過去・現在・未来」

高橋玲子 「体験発表Ⅰ 1980～1990年代の状況」

安原理恵 「体験発表Ⅱ 1990～2000年代の状況」

増子 正 「インクルーシブ教育の未来を展望する」

成果

本共同研究は、「1)ユニバーサル・ミュージアムの普及をめざして——“手学問”の確立」「2)博物館から社会へ——“手学問”の展開」の2つを課題としている。まず今年度の第1回研究会ではメンバーの自己紹介（研究テーマの確認）ののち、1)の課題について議論した。「視覚障害者の美術鑑賞」に関して活発な意見交換がなされ、「さわる絵画＝二次元表現の三次元への翻案」の研究の必要性（可能性と問題点）が確認できた。

第2回の研究会では2)の課題を意識し、「高等教育のユニバーサルデザイン化」に関する体験発表を元に討論した。障害学生支援という福祉的な文脈でなく、視覚障害者の触覚活用術（手学問）を積極的に教育現場に導入してみよう、触文化理論は大学教育を活性化する潜在力を持っているはずだ、というのが研究会を企画した意図である。研究会のディスカッションを通じて、情報技術の進展により視覚障害学生の学習環境が飛躍的に改善されたこと、その一方で学生と大学の教職員、ボランティアの関わりが希薄化していること、個々の学生のニーズへの対応が難しくなっていることなどが浮き彫りとなった。触文化論から高等教育を問い直す試みは、来年度以降も継続する予定である。

「明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動

——国立民族学博物館所蔵のアイヌ、ウイルタ、ニヴフ資料の再検討」

内容

国立民族学博物館が所蔵する北海道、樺太、千島の民族資料のうち、第二次世界大戦終戦までに収集されたことが明らかなものは、アイヌが1000点以上、ウイルタで280点以上、ニヴフで70点以上ある。これらは、素材や製作技法などに伝統的な特徴をよく残しており、物質文化研究を進めるうえで重要であるとともに、現在では収集できない貴重なものが多数含まれている。

ただ、当時の調査・収集時の誤解・誤認や資料管理の限界、また、数度の管理替えによる情報の紛失、転記・入力時のミスなどにより、データの欠けているものや誤りが少なくない。しかし、これらの資料は収集者が明らかなものが大部分で、その足跡をたどることによって、情報を再検討し、修正・追加できる可能性が十分にある。

本研究では、各民族の物質文化、言語等に関する専門家が共同で研究をおこない、資料に適正な情報を付すとともに、あわせて明治から終戦までの人類学または民族学者と被調査者・資料提供者との関係など、資料が集められた当時の研究状況と社会的な背景を明らかにする。

代表者 齋藤玲子

班員 (館内) 近藤雅樹 佐々木史郎
(館外) 大塚和義 小川正人 加藤 克 北原次郎太 木名瀬高嗣 小西雅徳 田村将人
丹菊逸治 津曲敏郎 手塚 薫

研究会

2012年10月20日

齋藤玲子 「趣旨および民博所蔵のアイヌ、ウイルタ、ニヴフ資料の概要説明」

全員・自己紹介と研究テーマについて

2012年10月21日

全員・自己紹介と研究テーマについて

研究計画打ち合わせ

2013年1月18日

齋藤玲子 「東京大学理学部人類学教室旧蔵のアイヌ、ウイルタ、ニヴフ資料とその付随情報に関する検証」

2013年1月19日

齋藤玲子 「東京大学理学部人類学教室旧蔵のアイヌ、ウイルタ、ニヴフ資料とその付随情報に関する検証」

大矢京右 「馬場 脩の研究・収集活動」

小西雅徳 「石田収蔵資料——特に北方民族調査について」

加藤 克 「東大人類学教室台帳とみんぱくデータベースの照合結果——今後の検討課題」

2013年2月26日

齋藤玲子 「民博所蔵の鳥居龍蔵収集アイヌ、ウイルタ、ニヴフ資料について」

高島芳弘 「徳島県立鳥居龍蔵記念博物館の概要」
鳥居龍蔵収集のアイヌ、ウイльта、ニヴフ資料の実見と討論
田村将人 「鳥居龍蔵のサハリン・樺太調査に関するいくつかの資料」
手塚 薫 「千島列島の考古学——鳥居の研究成果をどのように活用すべきか」
今年度のまとめと次年度研究計画打ち合わせ

成果

2012年度は3回の研究会を開催し、民博のアイヌ、ウイльта、ニヴフ資料の概要を把握し、役割分担などを検討するとともに、主な収集者の足跡などの研究発表をおこなった。

資料については、東京大学理学部人類学教室旧蔵資料に関する目録や出版物の情報と現在のデータベースの比較をおこなった。また、資料の実見により、資料そのものや貼付された紙などに書かれた情報があるが、一部はデータベースに反映されていないことも確認した。

収集者については、岡 正雄とともに昭和12~13年に樺太などで約170点の民具を収集した馬場 脩、明治~昭和初期にかけて樺太での調査と収集を重ね、ノートや日記などの関連資料が残る石田収蔵、千島と樺太で貴重な資料収集と研究成果を挙げた鳥居龍蔵の研究歴や調査収集の足取りについての発表があった。これらに基づいて討論をおこない、今後の課題を検討した。

「アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類学的研究——資源利用と物質文化の時空間比較」—— 内容

アフリカ大陸で誕生した現生人類は、約5万年前頃までにはアジアやオセアニアの島嶼海域に移住・拡散した。島嶼海域に進出した人類は、自然資源や加工生産物を交換するために海を渡る移動を繰り返し、その過程で広範囲に及ぶネットワークを形成してきた。アジア・オセアニアには、そうした海域ネットワークを生活基盤とする社会が各地にみられる。本研究の目的は、この海域ネットワーク社会の普遍性と地域性を、物質文化と資源利用の様式ならびにその分布に関する時空間の双方の面からの比較を通じて、人類史的な視点で検討するところにある。このうち時間面では、5万年程度の幅の考古学的時間と約100年程度の幅の民族誌的時間を、空間面では、日本を含む東アジア、東南アジア、オセアニアの海域を、それぞれ比較の準拠軸と、主な検討事項としては資源利用と物質文化をテーマに検討を進め、海域ネットワーク社会の普遍性と地域性を明らかにするのが狙いである。

代表者 小野林太郎

班員 (館内) 飯田 卓 印東道子
(館外) 赤嶺 淳 秋道智彌 片桐千亜紀 島袋綾野 鈴木佑記 田中和彦 長津一史
橋村 修 山形真理子 山口 徹

研究会

2012年11月11日

小野林太郎「共同研究会の目的、方法、今後の計画、メンバー紹介」
長津一史 「東南アジア海域研究が拓く可能性——海民論と境域論を手がかりに」

2012年11月12日

小野林太郎「東南アジア海域からオセアニア海域世界の海民とネットワーク社会——先史時代における事例の検討」

2013年1月29日

片桐千亜紀「沖縄諸島における更新世——完新世期の人類史と資源利用」
田中和彦 「フィリピン諸島における更新世——完新世期の人類史と資源利用」
山口 徹 「オセアニアにおけるサンゴ礁の発達と人類の資源利用史」

成果

本年度の主な研究成果としては、2回の共同研究会の開催があげられる。このうち1回目の共同研究会は2012年の11月11日から12日にかけて開催し、研究代表者である小野より本研究会の目的や方法、今後の計画について各メンバーに紹介した上でメンバー紹介を踏まえながら、各メンバーがどのようなテーマ、方法、時間・空間軸より本研究に貢献できるかを検討することができた。また1回目の共同研究会では、民族誌的な時間軸の事例としてメンバーの長津による研究事例の紹介と総合討論を行い、対する考古学的な時間軸の事例として小野による研究事例の

紹介と総合討論を行った。

また2回目の共同研究会は2013年1月29日に開催し、この研究会では考古学的時間軸による各海域の資源利用に関する研究事例の紹介と総合討論を目的とし、沖縄海域に関する事例としてメンバーの片桐、フィリピン海域の事例として田中、オセアニア海域の事例として山口による研究発表を踏まえた上で、各海域における共通性や独自性について検討することができた。

『統制』と公共性の人類学的研究——ミャンマーにおけるモノ・情報・コミュニティ』

内容

ミャンマー（ビルマ）は1962年ネーウインの軍事クーデター以来、半世紀の間に3つの政治体制（社会主義、軍政、大統領制）と2つの経済体制（社会主義体制における統制経済、経済制裁下の市場経済）を経験したが、一貫して物の流れや人的移動、情報などを中心に厳しい統制が課せられてきた。本研究会で扱う「統制」とは比較的可視化されやすい国家政策に留まらず、宗教、ジェンダーといった多様な領域に及ぶ不可視のイデオロギーと支配装置、さらに、隣組的な相互監視システムや言論統制などを通じて身体化された統制をも含む。他方、それぞれのコミュニティ内で、例えばミャンマーであれば、僧院を核とする宗教ネットワークや在家組織、精霊信仰の霊媒や信者たち、各少数民族や国際・国内NGOなどの組織やその参加者、その他ジェンダーや「親しい（キン）」を媒介とする繋がりの中に、「統制」をすり抜け、オルタナティブなネットワークを作る戦略的实践が存在してきた。本研究会では、こうした実践に着目し、「統制」と公共性という2つの観点から、統制解除へと急激に移行しつつあるミャンマーを中心に、社会的再編成、コミュニティの公共性やその変容を明らかにすることを旨とする。

代表者 土佐桂子

班員 (館内) 白川千尋 田村克己
(館外) 飯國有佳子 伊野憲治 岡本正明 藏本龍介 斎藤紋子 高谷紀夫 田村慶子
テツテツステイ 松井生子

研究会

2012年10月14日

土佐桂子 「統制」と公共性の人類学的研究——趣旨説明

全 員 今後の研究計画についての討論

2013年1月26日

テツテツステイ 「軍事政権末期におけるヤンゴン市内の動き——『批評空間』の再編をめぐって」

田村克己 『『ビルマ式社会主義』下の農村社会、そしてその後』

総合討論

成果

本研究会では、各研究者のフィールドにおける従来の研究や民族誌を、統制ないし公共性といった観点から再検討することから始めた。2012年度は時代の幅も考慮しつつ、どのような議論が生じうるかといった点を考察した。社会主義政権下では、厳しい物資・情報が統制されたなかで、人類学的調査そのものの政治性をもとらえつつ、「社会主義」を実践、経験としてとらえる視点の重要性が指摘できる（田村）、また、「ムラ」の再考も必要となろう。政治の末端でもあり、一種の「公共空間」ともいえるが、他方では、ネットワークとムラの境界との関係など、今後考察すべき重要な視点が多々存在する。一方、近年では、ネットや新たな情報機器利用に伴う「空間」やそのなかに存在する公共性をいかにとらえるかも重要な課題となる。軍事政権下で物資の統制はかなり解除されたものの言論統制は厳しく続いた。一方ネットの使用は2000年代半ばから飛躍的に拡大し、国内のインターネット識字層、さらにはディアスポラでもある難民、海外移民、あるいは留学者等が意見交換できる「批評空間」が生じた（テツテツステイ）。今後こうした「批評空間」を射程に入れた公共性、民主化の広がり、影響関係といった考察も必要となろう。

『現代消費文化に関する人類学的研究——モノの価値の変化にみるグローバル化の多元性に着目して』

内容

本研究の目的は、モノの流通・消費をめぐるグローバル化現象の多元性に注目した、現代消費文化に関する人類学的研究の新しい可能性を提起することにある。具体的には、アフリカにおける中古品やコピー商品、タイに輸入

される日本アニメ、ガーナやラオスのフェアトレード製品、ネパールの宝石、既製服化される中国ミャオ族の民族衣装、トルコの手織り絨毯、エジプトに浸透する空手や化粧品、学校教育、鯨肉の流通・消費における日本人論の消費といった多様なモノの流通・消費にかかわる事例報告をおこない、以下の2つの課題に取り組む。第1に、先進諸国・新興国・研究対象地域のあいだをモノが動くプロセスと、そこでのモノの価値変化を明らかにし、グローバルな経済システムの再編・再創造のあり方を考察する。第2に、モノの流通・消費の実践にみられる研究対象地域の自己表現のあり方やアイデンティティの変容、新しい環境観・ジェンダー観、階層化や世代間関係を析出し、研究対象地域間、および日本をふくむ先進諸国におけるそれらとの共通性・異質性を考察する。

代表者 小川さやか

班員 (館内) 相島葉月

(館外) 牛久晴香 田村うらら 鳥山純子 箕曲在弘 宮脇千絵 若松文貴 渡部瑞希

研究会

2012年12月23日

小川さやか 「(趣旨説明) 現代消費文化をめぐる人類学的研究」

共同研究員参加者全員 「これまでの研究と本共同研究会での研究テーマ」

全体討論

2013年2月16日

前回欠席者 「これまでの研究と本共同研究会での研究テーマ」

小川さやか 「現代消費文化をめぐる人類学的アプローチの検討——消費社会論との違いに着目して」

小川さやか 「非正規品の世界からみる現代アフリカの消費文化」

若松文貴 (ハーバード大学) 「日本における鯨肉の流通・消費と文化ナショナリズム」

全体討論

成果

第1回の共同研究会では、消費を対象とした人類学的調査・研究の困難性として、生産者や流通業者とは異なり、消費者はモノを消費するにあたり必ずしもまとまりやコミュニティを形成しない点について確認し、これを打破する人類学的なアプローチとして、1)モノの移動とその過程におけるモノの価値変化に着目するという視点、2)日常的な消費を通じた自己や集団のアイデンティティの構築・変容に着目する視点、3)モノが消費される場面におけるモノと人のエージェンシーの相互関係を微細に観察するという視点について検討した。これらの議論を踏まえ、『民博通信』No.141に本共同研究会の紹介を投稿した。また、個人発表として小川が第1の視点および消費者が商品に付与する価値・実践を生産者や流通業者が商品に付与する価値・実践との連続性のうえで捉える視座について、また若松が第2の視座について、鯨肉をめぐる商品フェティシズムと文化ナショナリズムとの交差を検討する報告をおこなった。

「ランドスケープの人類学的研究——視覚化と身体化の視点から」

内容

グローバル化の進展に伴い世界各地で地域的特色をつくりだす動きが顕著になっているが、なかでも自然、建築、公園などの景観は、現地の歴史文化や民族文化と結合し、その特色を示すランドマークとなっている。しかし、こうした景観と文化のポリティクスの関係性について、我が国の人類学はいまだに十分な議論を展開しておらず、景観人類学という分野も定着していない。本共同研究は、多様な行為主体による景観への意味付与や競合に焦点を当てることで、景観研究における人類学の意義と役割を考察する。

本共同研究は具体的に、主に2つの視点から、世界各地における景観形成のメカニズムを検討する。まず、地方政府、プランナー、開発業者、旅行会社、マス・メディアなどが、紋切型の現地文化を可視化し、現地らしい景観を物理的に構築していく「視覚化」の力学1)について探求する。次に、そうした景観が住民、観光客、芸能集団の身体経験に基づき再解釈されていく「身体化」の過程2)を、民族誌的記述により探求する。さらに、この2つの枠組みを統合する理論モデル3)を導き出すことで、日本における景観人類学の促進を図ることを、本共同研究の目的とする。

代表者 河合洋尚

班員 (館外) 石村 智 大西秀之 小西公大 小林 誠 里見龍樹 椿原敦子 土井清美
安田 慎 辻本香子

研究会

2012年10月14日

趣旨説明

河合洋尚 「景観人類学の理論と射程」

全体ディスカッション 「景観人類学の方法論、課題、可能性について」

今後の計画について

成果

景観人類学をめぐる課題を認識し、議論の土台をつくるため、特に1990年代欧米諸国で展開されてきた議論を整理し、討議した。具体的には、景観人類学の基本的視座、概念や台頭した理由、研究史、射程について発表し、現段階における問題点や課題について、社会文化人類学、生態学、考古学などの視野から議論した。

景観人類学は、ここ20年間多くの研究成果を生み出しているが、とりわけ景観の「視覚化」と「身体化」をめぐる2つの方向に乖離している。しかし、これらの方向性はいずれも認知論に偏重しているため、他分野との対話を促進し、また、景観人類学の脱領域的な方向性を模索するためには、物質論をより重視すること、さらに認知性と物質性の間の関係性をより明確にしていく必要があることを確認することができた。他方で、この研究会では、「視覚化」と「身体化」をめぐるアプローチだけでなく、両者の相関関係を探求する第3のアプローチに取り組んでいく課題も確認され、地域的な多様性、および時間的な変遷などを考慮した研究をより促進していく方向性が、理論と事例の両面で示された。

『『国家英雄』から見るインドネシアの地方と民族の生成と再生』

内容

現代インドネシアでは、中央の民主化と地方分権化政策に呼応した地方の小地域社会や民族集団が、独自の文化や歴史を創生し、国家レベルの認証制度を活用しながらその権威づけを目指す動向が顕在化している。本研究では、これらの諸動向を複数の地域・民族間で比較検討することで、対象社会が国家中央との関係を模索しながら文化的自己呈示を行い、そこから「地方」や、特定地域への帰属によらない「民族」といった人間集合が生成、再生する動態を、文化、歴史、政治、開発など複眼的に考察する。具体的には、本来は国民統合の手段であった「国家英雄」認定制度に注目することで、1) 近現代の国民国家の形成過程を再検討し、2) 国民統合とは異なる次元で進む「国家英雄推戴運動」による地域振興や文化創生の現状、3) その動機と背景となる各対象社会の歴史過程を共通の問題として探求しながら、脱中央集権を標榜する国民国家と「地方」や「民族」との関係を、グローバルな政治経済的状況や民主化動向を視野に入れながら明らかにすることを目指す。

代表者 津田浩司

班員 (館外) 太田 淳 岡本正明 小國和子 金子正徳 津田浩司 中野麻衣子 見市 建
森下明子 森田良成 山口裕子 横山豪志

研究会

2012年12月23日

津田浩司 「共同研究会趣旨説明」

金子正徳 「データにみる『国家英雄』」

山口裕子 「東南スラウェシにおける『国家英雄』推戴運動の事例」

津田浩司 「インドネシア近現代史の再考と国家英雄」

佐々木拓雄 「“Pahlawan Nasional” をめぐる言説」

成果

本年度は研究集会を1回開催した。各発表からは、国家英雄という制度を媒介としながら、地域社会・少数民族・宗教団体そして国家が、自らの過去・現在・未来を創造する社会文化動態や、その論理が明らかになった。議論を

通じた成果をいくつか挙げるならば、1) 国家英雄の地理的な偏差や特性の時代変化、2) ナショナリズムの論理が、抵抗の称揚から統治・馴化へと変容したこと、3) 周辺地域社会における転倒した周辺意識という、中央対地方の構図では説明できない動機が存在、4) 国家英雄の語りと公定のナショナル・ヒストリーにおける事後の必然性や目的論的語りという共通性、5) 国家英雄が、イスラーム急進派には「イスラームの闘士」という英雄価値を矮小化するものである一方で、穏健派には信仰とナショナリズムとを接合する装置として機能すること、6) エリート主義的な国家英雄像への一般大衆の抵抗感、7) スハルト体制期におけるナショナリズムの語り为国軍を支持勢力としたため武力闘争に中心をおいたという事実、などが挙げられる。

人間文化研究機構連携研究

「人間文化資源の保存環境研究」

代表者：園田直子

目的

本研究は、これまで人間文化研究総合推進事業で進めてきた「文化資源の高度活用：有形文化資源の共同利用を推進するための資料管理基盤形成」（2006～2008年度）、「保存環境解析法の再検証」（2009年度）の研究成果を発展的に継承し、より広範囲な資料群を対象とした保存環境研究を行うことを目的としている。研究対象はモノ資料にかぎらず、映像音響資料、図書文書資料、さらには電子データなど多様な形態から構成される研究資源に広げ、それぞれの形態に応じた保存環境モデルを構築するための保存環境分析システムを研究開発する。

成果

1) 研究成果の概要

本研究等で開発してきた保存環境分析システム（生物生息調査分析システム、温度・湿度分析システム）を、より汎用的・効率的に使用できるように改良した。この改良をもって、現時点で必要とされている操作性の問題はほぼ解決できたと考える。今後は基盤機関の国立民族学博物館だけでなく各連携機関においても、保存環境分析システムを資料管理の業務、そして保存科学研究で利活用できる段階にはいった。

2) 論文名

園田直子・日高真吾・和高智美・河村友佳子

2012 「過去20年間の生物生息調査からみる捕獲虫の推移と傾向——国立民族学博物館でのゾーニング別分析」『文化財保存修復学会第34回大会 in 東京発表要旨集』（日本大学文理学部百周年記念館、6月29～30日）pp.296-297。

Sonoda, N.

2012 Preventive Conservation for Museum Collection. In N. Kamba and M. Menu (eds.) *French-Japanese Workshop "Science for Conservation of Cultural Heritage"*, pp.143-150. Paris: Hermann.

3) 研究会・シンポジウム等

2012年11月12日 2012年度第1回研究会（東京国立博物館）

園田直子 「2012年度版温度・湿度分析システムの概略——操作性向上に向けた改良その②」

河村友佳子「2012年度版温度・湿度分析システムの操作説明」

神庭信幸 「東京国立博物館の環境制御に関する取り組み」

東京国立博物館保存修復関連施設の調査

4) その他

その他のシンポジウム、研究会、講義等

2012年10月7日 2012年度文化庁文化芸術振興費補助金（文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業）公開シンポジウム「市民とともにミュージアム IPM」、一橋講堂

園田直子・和高智美「国立民族学博物館における IPM の実践とその協力体制」

日高真吾ほか10名（ディスカッション）「ミュージアム IPM の実践と課題」

2012年11月2日 NPO 法人 大阪府高齢者大学「世界の文化に親しむ科」、国立民族学博物館

園田直子「みんなの舞台裏」

2012年12月10日 東京藝術大学大学院美術研究科 集中講義、東京藝術大学

園田直子「博物館における予防保存」

2013年1月27日 国立民族学博物館 機関研究<マテリアリティの人間学>「民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究：ロシア民族学博物館との国際共同研究、国際ワークショップ『民族学資

料の保存と修復：博物館バックヤードの利用効率向上と自然素材の修復』、国立民族学博物館
園田直子「予防保存と資料管理：国立民族学博物館の事例から」
橋本沙知「露出展示における資料の事故分析」
和高智美「国立民族学博物館における生物生息調査の捕獲虫の推移と傾向」
河村友佳子「温湿度モニタリングの現状と制御レベル」

「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」

代表者：福岡正太

目的

一定の視点から芸能の動きと音を記録し、再生することができる映像は、第三者に具体的に芸能の姿を伝えることができる。その性質により、学術資料であっても、多くの人に活用され、芸能のイメージを広めることにひと役買う可能性も持っている。一方、芸能の関係者にとって、外部の人間が撮影編集した映像を見ることは、外からのまなごしを意識し、自己イメージを再形成する機会ともなる。この研究は、映像による芸能の民族誌的記録が、芸能を支える人々や研究者、映像を視聴する第三者など、立場を異にする人々のあいだにどのような相互関係を築き、どのように芸能の上演と伝承に影響を与えうるのかを実践的に明らかにし、学術的な民族誌映像の作成および活用の望ましいあり方を探ることを目的としている。

成果

1) 研究成果の概要

これまでの研究活動により、硫黄島のような小規模なコミュニティ、徳之島のような複数の町からなる地区、東南アジアのような大きな規模の地域など、調査記録の対象とする社会の規模や性質により、映像記録作成における視点や有効な映像活用の方法が異なりうることが明らかになってきた。硫黄島については、これまで中心的に調査記録をおこなってきた八朔太鼓踊りに加え、今年度は盆行事と九月踊りと呼ばれる芸能の調査撮影をおこなった。2013年度に、地元の関係者の意見を入れながら映像のとりまとめをおこなう予定である。徳之島については、本年度にてほぼ当初想定していた調査撮影を終え、最終的な映像のとりまとめ段階に入っている。ただし、地元教育委員会からの要請があり、教育委員会との共同研究という形で、今後追加調査と撮影をおこなう可能性も協議している。また、地元の文化施設において流す映像を今年度末をめどに作成している。東南アジアにおいては、主に科研費より、本年度から本格的な調査と撮影を開始した。なお、刊行予定であったシンポジウム報告書は、まだ一部の原稿が揃わないため、2013年度に印刷を見送った。

2) 著作物名

笹原亮二編『チャンメラを作る』(DVD付)、発行：国立民族学博物館音楽展示プロジェクトチーム、人間文化研究機構連携研究プロジェクト「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」2012.10

3) 論文名

現在とりまとめ中

4) 研究会・シンポジウム等

① 「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」研究会

開催日：2012年7月8日

場 所：国立民族学博物館 第3演習室

内 容：研究発表「映像記録事業を伝承の支えとするために——無形民俗文化財記録映像の事例から考える」俵木 悟（成城大学）、「徳之島における芸能の映像記録作成について」笹原亮二、「ジャワ島とバリ島におけるゴング製作と流通に関する調査について」梅田英春（静岡文化芸術大学）ほか。

② 東洋音楽学会西日本支部第258回定例研究会「八代妙見祭のチャンメラの復元製作をめぐる」

研究発表「チャンメラを作る」笹原亮二、「チャンメラの唱歌」寺内直子（神戸大学）、「チャルメラ系楽器の分布と演奏の場」寺田吉孝、「芸能の映像記録とその活用について」福岡正太

5) その他

笹原亮二監修、マルチメディアコンテンツ「徳之島の唄と踊りと祭り」、2013年（これまでの徳之島で撮影した映像を整理編集したコンテンツ。昨年度製作のものに新たな映像素材を加えて発展させたもの）

人間文化研究総合推進事業

『筌』を通してみる学際的研究

代表者：近藤雅樹

目的

渋沢敬三により開拓された漁撈用具の調査研究、古文書の発掘の一環として、漁撈民のみならず広く農民による河川池沼にも供された筌の研究は、第二次世界大戦の激化によって中断を余儀なくされた。今日まで、その体系的な研究はなされてこなかった。本研究は戦時下にもかかわらず遂行しようとした渋沢と、彼が主宰するアチックミュージアム同人たちの遺業を、国立民族学博物館に伝世された実物資料ならびに現今の筌製作・筌漁の調査を通じて、筌の形態分類、用途、用法、食物禁忌伝承、伝説や、絵画・文芸作品に表された史資料を、多角的な観点から調査して学際的に融合した成果を獲得しようとするものである。

成果

1) 研究成果の概要

国内において製作使用されてきた筌類の概略分布状況が判明した。

2) 論文名

執筆中

3) 研究会・シンポジウム等

班員がそれぞれ滋賀県、栃木県、宮城県、熊本県、広島県、沖縄県の筌を調査、分析した。埼玉県では班員による合同調査をおこなった。また、2013年秋の渋沢コレクションに関する特別展示で、成果の一部を展示公開する予定である。

4) データベース等の公開

予定なし。

「画中画の世界」

代表者：宇田川妙子

目的

「画中画」とは、なんらかのテーマをもって描かれた絵画作品の中に背景あるいは点景として描かれたものである。日本画であれば、絵巻物・屏風・襖絵、衝立などの調度、錦絵・引札類に描きこまれた掛軸、襖絵、屏風などがある。欧米諸国では、王侯貴族とその家族の肖像画や静物画などの背景にあしらわれた額絵・タピストリー・装飾家具、また飾戸棚に並べられた絵皿などがある。それらの中には、オリエンタリズムなどが反映している作品も多々あるが、異国趣味以外にも、さまざまな幻想的・牧歌的な風景や神話の場面が描かれている事例も少なくない。

「画中画」は、絵画本来の主題とどのようなかかわりをもって描かれるのだろうか。この連携研究は、従来美術史の範疇で論じられてきた諸説に拘束されることなく、学際的な観点から自由な着想により考察し、意見交換して成果を得ようとするものである。意図的な暗喩、あるいは格別の意図はなく偶然に描きこまれたものだったのか、いずれの場合もあり得る「画中画」は、時代・地域・階層を問わず人びとの日常的な「あこがれ」や「祈り」などを可視化し、自己実現の擬似行為を図ろうとした、その点を、いみじくも描き出していると考えられる。

如上のように、この連携研究では「画中画」のさまざまな態様に着目し、新研究領域の創出をめざして多面的なアプローチを試みるものである。

成果

1) 研究成果の概要

日本の資料では絵巻物を中心に古典の中に表現されている画中画の検索データを整理中である。西洋画においても古典作品の中から検出作業をすすめており、画中画の多様性と多義性がおおむねあきらかになった。

2) 研究会・シンポジウム等

国立民族学博物館で7月24日、11月9日、2月12日の3回の研究会を開催した。また、最終年度に公開研究フォーラムを開催するための準備を進めている。

3) データベース等の公開

予定なし。

「手話言語と音声言語のシンポジウム(1)『言語の記述・記録・保存』の開催」

代表者：菊澤律子

目的

本研究では、言語の記述・記録・保存に関するラウンドテーブルおよびシンポジウムを開催する。これまで危機言語の文脈でとりあげられなかった手話言語に焦点をあて、音声言語の状況と対照することにより、国内外の研究現場および話者コミュニティにおける現状を総合的に把握し、今後の方向性を明らかにすることを目的とする。

成果

1) 研究成果の概要

本シンポジウムは、手話言語と音声言語の国際シンポジウムシリーズの第1回という位置づけで行った。使用言語は英語、アメリカ手話、香港手話で、内容を一般参加者にも公開するため、日本語、日本手話の同時通訳を加えて行った。参加者数は初日（参加登録は定員で締め切り）は122名、2日目は204名の参加となった。

1日目は、第4セミナー室でのラウンドテーブル会議とし、菊澤、大杉 豊（筑波技術大学、国立民族学博物館特別客員）より、「手話に関する研究拠点ネットワーク構想」の説明を行い、各国から招待した手話言語学や言語の記述・記録・保存に関する専門家からの提案や意見を聴くためのきっかけとした。また、ネットワーク構想参加の同意を得ている香港中文大学およびハワイ大学言語学部から、関連教育課程や研究活動について、また前者の教育過程で学んでいるろうの学生によるプレゼンテーションが行われた。最後に、手話言語に関するコーパス作成に関する紹介があった。各発表後の質疑応答は、時間および通訳の関係で事実関係確認のみに限定したが、ディスカッションの時間には、一般参加者からの質問や意見に対してディスカッサントが自由に回答する形で進めた。一般からの質問等の受付は、質問フォーム（日本語・英語）およびビデオ撮影（日本手話・アメリカ手話）を通して行った。

2日目のシンポジウムでは、手話のフィールドワークの現場からさまざまな報告を受けた。報告は手話に関するものを中心とし、各地の手話の記述・記録に携わる研究者からの報告を依頼、同地域の音声言語の研究者からのコメントを組み合わせることで、手話言語と音声言語の研究者間での情報交換の糸口とした。1日目同様、一般参加者を含むフロアからの質問を受ける形でのパネル・ディスカッションを行い、まとめとした。

本シンポジウムのすべての内容はインターネットで生中継を行った。これは、総合研究大学院大学学融合推進センターのプロジェクト「手話言語学を世界へつなぐ—メディア発信とe-learning開発に向けて」（研究代表者：菊澤律子）によるもので、合計アクセス数600、各配信へのアクセス数は常時、12から30を数えた。国内外でのインターネットによる聴講者からも、修了後、さまざまなコメントや感想が届き、配信側にとっても有意義な試みとなった。

今回のシンポジウムは、2013年9月末開催を検討している。

2) 著作物名

Senri Ethnological Studiesとして出版のため、現在準備中。

3) 研究会・シンポジウム等

『手話言語と音声言語のシンポジウム(1)「言語の記述・記録・保存」』

開催日 2012年7月28日～29日

場 所 国立民族学博物館（同時通訳（英語／アメリカ手話／日本語／日本手話）付）

主 催 人間文化研究機構／国立民族学博物館、共催 筑波技術大学、協賛 香港中文大学

後 援 日本言語学会、日本手話学会、社会福祉法人全国手話研修センター日本手話研究所、財団法人全日本聾唖連盟

4) その他

総合研究大学院大学学融合推進センターのプロジェクト「手話言語学を世界へつなぐ—メディア発信とe-learning開発に向けて」（研究代表者：菊澤律子）による。以下のサイトに掲載するために準備中。<http://www.minpaku.ac.jp/sokendai/ssl/index.html>

「文化遺産の復興に向けたミュージアムの活用のための基礎的研究——大学共同利用機関の視点から」

代表者：日高真吾

目的

本研究は、大規模災害において壊滅的な被害を受けた文化遺産を被災地の大学機関やミュージアムと連携し、どのように復興させ、活用していくのかを調査・研究するものである。そして、そのような活動に研究機関である大学共同利用機関がどのような役割を果たせるのかを明らかにしていくことを目的とする。

成果

2012年度は、「1.有形の文化遺産の恒久的な保管体制の構築について」では、一時保管場所として、東北学院大学、気仙沼市旧月立中学校の環境モニタリングを実施し、また、塩分除去法の開発として石巻所蔵の民俗文化財を対象に処理実験をおこなった。「2.無形の文化遺産への支援と社会貢献」ではみんぱく公演として、「南部藩松壽院年行事太神楽」、「鶴鳥神楽」を国立民族学博物館で実演した。「3.震災の記録・記憶の継承」では、三陸沿岸、紀伊半島沿岸の津波碑等のデータベースの作成をおこなった。なお、これらの進捗の成果は、国立民族学博物館と国文学研究資料館、国立歴史民俗博物館共催による、連携展示「記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産」で展示公開した。なお、「4.災害時におけるミュージアムの連携体制の構築」では引き続き、「東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会」との連携を模索している。

1) 研究成果の概要

なお、これらの進捗の成果は、国立民族学博物館と国文学研究資料館、国立歴史民俗博物館共催による、連携展示『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』で展示公開した。また、関連イベントとして下記のように、公演とシンポジウムを開催した。

2012年5月31日～8月21日 『写真で見る東日本大震災と被災文化遺産のレスキュー』企画展関連写真展

2012年10月21日 『鶴鳥神楽』みんぱく公演

2012年11月18日 『南部藩松壽院年行司支配太神楽』みんぱく公演

2) 著作物名

日高真吾編 『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』千里文化財団、2012年。

3) 論文名

青木 陸 「国文学研究資料館における東日本大震災の支援活動と今後」『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』pp.87-94, 千里文化財団, 2012。

阿部武司 「民俗芸能を記録する」『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』pp.52-53, 千里文化財団, 2012。

岡田 健 「被災した文化遺産のレスキュー活動——東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会と国立民族学博物館」『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』pp.56-67, 2012。

加藤幸治 「大学生と取り組む文化財レスキュー」『月刊みんぱく』36(9): 9, 2012。

「東北学院大学における被災文化財への支援活動」『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』pp.68-86, 2012。

川島秀一 「三陸の海と信仰」『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』pp.18-25, 2012。

小池淳一 「国立歴史民俗博物館における東日本大震災の支援活動と今後の課題」『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』pp.95-102, 千里文化財団, 2012。

小谷竜介 「波の伝わる谷——開村伝承と津波」『月刊みんぱく』36(9): 8, 2012。

「契約講と春祈祷——震災前のくらしと後」『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』pp.36-43, 2012。

西岡圭司 「思い出は流れない写真救済プロジェクト」『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』pp.166-172, 千里文化財団, 2012。

橋本裕之 「民俗芸能と地域社会——岩手県沿岸部における秘密」『月刊みんぱく』36(9): 4-5, 2012。

「岩手県沿岸部の民俗芸能——東日本大震災以前の鶴鳥神楽と釜石虎舞」『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』pp.44-51, 2012。

「岩手県沿岸部における無形民俗文化財への支援と今後の課題」『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』pp.122-133, 2012。

「岩手の伝統芸能と復興への取り組み」『東日本大震災、文化芸術の復興・再生の取り組み——被災と支援の実態調査と事例からこれからのを考える』pp.181-188, 文化芸術による復興推進コンソーシアム設立準備事務局, 2012。

「祭を再開する理由——東日本大震災以降の現状と課題」『建築雑誌』127(1631): 25, 2012。

「沿岸の心意気」『とりら』(第6号特別版ふるさと岩手の芸能と震災) pp.78-81, ふるさと岩手の芸能とくらし研究会, 2012。

「津浪と芸能——東日本大震災以降の現状と課題」『演劇学論集 日本演劇学会紀要』54, pp.44-57, 日本演劇学会, 2012。

「体験を経験に昇華させる方法」『民博通信』137: 24-25, 2012。

「細く長く続けたい——民俗芸能支援の現在進行形」『日本ナショナルトラスト報』490: 2-4, 2012。

「南部藩松壽院年行司支配太神楽と国立民族学博物館——企画展『記憶をつなぐ——津波災害と文化

遺産』関連イベント『南部藩壽松院年行司支配太 神楽みんぱく公演』に寄せて』『季刊民族学』142: 71-84, 2012。

林 勲男 「災害を伝える——記憶と記録をこえて」『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』pp.173-181, 千里文化財団, 2012。

「文化遺産支援を通じたネットワークづくり——鹿踊りの研究公演を例に」『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』pp.134-138, 千里文化財団, 2012。

「民俗芸能の再生——鹿踊りへの支援から」『HUMAN』3: 83-90, 2012。

Folk Performing Art in the Aftermath of the Great East Japan Earthquake, *Asian Anthropology* vol.11, pp.75-87, 2012.

「鹿の涙、人の涙——笹崎鹿踊りの復活」『月刊みんぱく』36(11): 22-23, 2012。

「仮のすまいとコミュニティ——その連続と断絶」『建築雑誌』127(1633): 4-5, 2012。

日高真吾 「震災と保存科学」『月刊みんぱく』36(9): 6-7, 2012。

「被災した文化遺産のレスキュー活動——東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会と国立民族学博物館」『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』pp.56-67, 千里文化財団, 2012。

「東日本大震災における民俗文化財のレスキューと将来への課題」『日本文化財科学会第29回大会 研究発表要旨集』pp.414-415, 2012。

平川 新 「歴史資料と災害への備え」『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』pp.103-111, 千里文化財団, 2012。

森本 孝 「三陸沿岸の漁村と漁業」『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』pp.26-35, 2012。

吉田憲司 「記憶をつなぐ——過去・現在・そして未来」『月刊みんぱく』36(9): 3, 2012。

「記憶の伝承——津波災害と文化遺産」『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』pp.140-165, 千里文化財団, 2012。

4) 研究会・シンポジウム等

2012年11月16日～11月17日 国際シンポジウム『大規模災害とコミュニティの再生』、国立民族学博物館

2012年9月27日～11月27日 連携展示『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』、国立民族学博物館

2013年1月30日～3月15日 連携展示『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』、国文学研究資料館

「国際シンポジウム『樹について考える』の開催」

代表者：菊澤律子

目的

国立民族学博物館の共同研究「言語の系統関係を探る——その方法論と歴史学研究における意味」の最終年度にあたって、とりまとめの研究会および成果公開の一環として国際シンポジウム『樹について考える』を開催する。

成果

1) 研究成果の概要

2月9日に通訳との打ち合わせ及び準備作業、2月10日に一般公開でシンポジウムを行った。シンポジウムでは、系統樹モデルの持つ意味や、歴史、表現方法や表現内容について活発な議論が交わされ、真の意味で学際的な性格の強いディスカッションをすることができた。会場参加者数は65名であった。会議の内容については、ストリーム配信を行った。視聴者数のべ427名、同時視聴平均人数25人、最大35人という高い数字が見られる結果となった事は、このテーマへの関心の高さを反映しているといえる。

2) 研究会・シンポジウム等

国際シンポジウム『樹について考える』

開催日：2013年2月10日

場 所：国立民族学博物館

プログラム：

菊澤律子「(趣旨説明) 言語学における系統図——なぜ今、樹について考えるのか」(英語)

言語学におけるツリーモデル

セーレン・ウィッチマン (マックスプランク進化人類学研究所)「言語学におけるさまざまなツリー (および他の) モデル」(英語)

遺伝学におけるツリーモデル

木村亮介 (琉球大学亜熱帯島嶼科学超域研究推進機構)「進化遺伝学における系統解析」(日本語)

系統学

三中信宏（農業環境技術研究所／東京大学大学院農学生命科学研究科）「生物・写本・言語におけるツリーとネットワーク：系統推定論における構造モデル選択について」（日本語）

歴史言語学

ウィーラ・オスタピラト（タイ・マヒドール大学）「東アジアにおける大言語族の系統樹を見直す」（英語）

文献学

吉田 豊（京都大学）「死語の方言と系統樹モデル——中世イラン語東方言を例に」（日本語）

オーストロネシア諸語をめぐるケーススタディ 1

ローレンス・A・リード（ハワイ大学）「異系統の言語を樹形図に組み込む——フィリピン・ネグリート族の言語を例に」（英語）

オーストロネシア諸語をめぐるケーススタディ 2

シヴァ・カリヤン（ノーザンブリア大学）、アレクサンドル・フランソワ（CNRS/LACITO）「樹形モデルの限界——北ヴァヌアツの言語を例に」（英語）

ディスカッション

コメント：斎藤成也（国立遺伝学研究所／総合研究大学院大学／東京大学大学院理学系研究科）

コメントに対する回答：各発表者

人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド地域研究」

人間文化研究機構は、わが国にとって学術的、社会的に重要な意義を有する地域の文化、社会を総合的に理解、解明するため、関係大学・機関と協力して2006年度から「地域研究推進事業」を開始した。本事業は、機構が関係大学・機関と研究拠点を共同設置し、拠点間のネットワークを構築して研究を推進する方式の研究事業である。2006年度から「イスラーム地域研究」事業、2007年度からは「現代中国地域研究」が始められているが、これに加え2010年度より「現代インド地域研究」事業が開始された。

「現代インド地域研究」事業においては、京都大学を中心拠点とし、これに東京大学、広島大学、東京外国語大学、龍谷大学、および国立民族学博物館の5拠点が加わってネットワーク型の研究推進が図られている。

以下では「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点の2012年度の事業概要を記載する。

【拠点の整備】

国際的共同研究の基盤整備と推進

2010年度に応募・採択された日本学術振興会「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」（「現代南アジア研究の国際的ネットワークの形成」）の主担当研究機関となり、「現代インド地域研究」プロジェクトと密接に関係を保ちながら本事業を推進した。2012年度は「現代インド地域研究」プロジェクトに携わる6名の若手研究者をインドおよびイギリスに派遣し、各自の研究の推進を通じてデリー大学、インド国立統計研究所、ロンドン大学政治経済学院（LSE）、エジンバラ大学等との国際研究ネットワークの形成・強化を図った。また本事業の成果公開の一環としてエジンバラ大学において国際研究ワークショップ、またインド・ナガランド州コヒマ市において国際シンポジウムを開催した。後者のシンポジウムの実施にあたっては本拠点の予算も活用して外国人研究者を招聘した。

2010年度にエジンバラ大学南アジア研究センターと締結した研究交流のための覚書に基づき、同センターと協力してRoutledge社から刊行する予定の叢書の編集作業を行った。国立民族学博物館拠点はこの事業の交渉窓口としての役割を果たした。

インド研究アーカイブ資料の整備

1970年代からインド各地の祭礼や民俗芸能、絵画等に関する写真撮影を行ってきた写真家沖守弘氏の写真資料と写真取材に関連する文書資料を一括して受け入れデジタル保存し、広く研究用に公開するためのデータベースを作成する計画を立て、必要な交渉を行った。交渉に基づき、沖氏から資料を本拠点に仮受け入れし、資料の点検・調査を行うとともに、沖氏から取材の目的・経過・成果等についての聞き取り調査を行った。拠点は、2013年度以降も民族学博物館と協力し、デジタル化やデータベース化にあたり、条件が整い次第公開を始める計画である。

【拠点の活動と成果】**国際シンポジウムの共催**

「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」(「現代南アジア研究の国際的ネットワークの形成」)の成果公開の一環として企画された国際シンポジウム(“Looking beyond the State: Changing Forms of Inclusion and Exclusion in India”)を、本拠点予算の経費で支援し、共催した。シンポジウムは12月21日、22日の2日間、インド・ナガランド州コヒマ市にあるジャブ・クリスチャンカレッジで開催され、グローバル化の進むインドにおける社会的マイノリティーの包摂と排除をめぐる、日本、インド、イギリスからの計16本の研究発表に基づいて討論が行われた。

現代インド・南アジアセミナーの開催

「現代インド地域研究」プロジェクトでは毎年全国の南アジア研究を志す若手研究者を対象として若手セミナーを行っており、2012年度は国立民族学博物館拠点が開催拠点となって第3回目のセミナーを9月22日～24日の3日間、国立民族学博物館2階第5、第7セミナー室で開催した。セミナーは毎年南アジア研究の各分野の専門家を講師として招く連続講義と、大学院生とポスト・ドクターおよび推薦を受けた学部生を対象とする研究発表会によって構成される。今回は歴史学、経済学、文化人類学、地理学、生態学を牽引する8名の講師陣による講義が展開され、一般参加者を含め3日間で総計94名が聴講した。また、研究発表会には大学院生を中心に11名が参加を申請し、うち5名が発表を行い、研究員や講師陣を交えて活発な議論が展開された。

研究会活動

研究グループ1および2合同の拠点研究会を合計5回開催した。研究会では、各自の海外調査の中間報告に基づいてグループ相互間で積極的に意見交換を行い、問題意識を共有するとともに今後の調査方針を確認し、次年度以降の調査の深化を図った。また今年度の研究会は、ネットワーク型の拠点研究プロジェクトに参加するのが難しい大学等に所属する若手研究者を積極的に招聘し、研究発表の場を提供するとともに、拠点プロジェクトメンバーとの意見交換を行い、日本における現代インド・南アジア研究の全体としての活性化を図った。

各回の研究会の発表者と題目は下記の通り。

①第1回合同研究会

開催日：2012年6月16日

場 所：国立民族学博物館大演習室

報告1：ヴァルヴァラ・フィルソヴァ（国立民族学博物館外来研究員）「在日するインド商人ディアスポラ」

報告2：前島訓子（名古屋大学）「生きられる『仏教聖地』——『聖地』構築への社会的影響」

②第2回合同研究会

開催日：2012年7月19日

場 所：国立民族学博物館大演習室

報 告：工藤正子（京都女子大学）「パキスタン系移住者ネットワークにおける日本——日本人女性との家族形成を中心に」

③第3回合同研究会

開催日：2012年9月27日

場 所：国立民族学博物館大演習室

報 告：鎌田由美子（早稲田大学高等研究所）「グローバルな商品としてのインド絨毯と日本の祭礼」

④第4回合同研究会

開催日：2012年10月15日

場 所：国立民族学博物館第6セミナー室

報告1：B. Balasubramanian（米国ウェスリヤン大学）“Indian Music in North America: History and Current State”

報告2：Nair Achuthan Raman Unni（ブーゲンビリヤ音楽院）“Deteriorating Usage of Indian Classical Music in Popular Music Culture”

⑤第5回合同研究会

開催日：2013年2月16日、17日

場 所：国立民族学博物館 第6セミナー室

報告1：小日向英俊（国立音楽大学）「インド音楽・舞踊の日本における受容」

報告2：小尾 淳（大東文化大学大学院博士課程）「タミル地方におけるマラーティー歌謡の受容——ナーマ・サンキールタナの現代的様相をめぐる」

報告3：松尾瑞穂（新潟国際情報大学）「代理出産の文化論」

報告4：田中铁也（関西大学博士課程後期課程）「商業集団マールワリーによるヒンドゥー寺院運営——2つのサティール寺院を事例として」

海外調査

拠点の研究メンバーをのべ17回インド、パキスタン、スリランカ、アラブ首長国連邦、タイ、シンガポール、ベトナム、イギリス、フランス、カナダ等に派遣し、海外現地調査や学会等での研究成果発表や意見交換にあたらせた。派遣先やテーマの詳細は下記の通り。

①ゾロアスター教徒コミュニティの比較調査

出張期間：2013年2月10日～2013年2月16日

出張先：カラチ市（パキスタン）

出張者：香月法子（中央大学政策文化総合研究所準研究員）

②キリスト教改宗問題とコミュニズムに関する調査

出張期間：2012年12月26日～2013年1月4日

出張先：タミルナードゥ州チェンナイ、オリッサ州カンダマル

出張者：アントニサーミー・サガヤラージ（南山大学人文学部准教授）

③スリランカにおける民族・カースト・宗教をめぐる現代的流動状況の事例調査

出張期間：2012年11月18日（日）～2012年12月1日（土）

出張先：キャンディ市周辺（スリランカ）

出張者：鈴木晋介（関西学院大学先端社会研究所専任研究員）

④ラージャスターン州のローカルな憑依霊信仰とメディアの関係に関する現地調査

出張期間：2012年7月24日～2012年8月13日

出張先：ラージャスターン州ウダイプル市

出張者：三尾 稔（国立民族学博物館准教授）

⑤エジンバラ大学南アジア研究センター・セミナーでの研究報告

出張期間：2012年10月18日～10月22日

出張先：エジンバラ大学南アジア研究センター

出張者：三尾 稔（国立民族学博物館准教授）

⑥英国におけるブータン関連資料の調査および英ネパール系ブータン難民に関する予備調査

出張期間：2012年2月11日～2013年2月25日

出張先：マンチェスター大学、エジンバラ大学南アジア研究センター

出張者：宮本万里（国立民族学博物館現代インド研究拠点拠点研究員）

⑦中東におけるネパール移民の生活調査

出張期間：2012年12月6日～2012年12月21日

出張先：南カタール（アラブ首長国連邦）

出張者：南 真木人（国立民族学博物館准教授）

⑧インドとタイの宗教施設に関する調査

出張期間：2012年8月16日～2012年9月4日

出張先：ティルッチラーッパッリ、マドゥライ、チェンナイ（インド）、バンコク（タイ）

出張者：山下博司（東北大学大学院国際文化研究科教授）

⑨シンガポール市内のタミル系ヒンドゥー寺院における寺院儀礼の撮影・観察

出張期間：2013年2月1日～2013年2月12日

出張先：シンガポール市（シンガポール）

出張者：山下博司（東北大学大学院国際文化研究科教授）

⑩南インドのポピュラー・カルチャーとナショナリズムの関係についての調査研究

出張期間：2012年12月15日～2012年12月23日

出張先：チェンナイ（タミルナードゥ州・インド）

出張者：杉本良男（国立民族学博物館教授）

⑪ケーララ州北部に伝わる神霊信仰の脱領域的な拡がりに関する調査

出張期間：2012年8月31日～2012年9月25日

出張先：コチン市、カンヌール市、ムンバイ市、デリー市（インド）

- 出張者：竹村嘉晃（国立民族学博物館外来研究員）
- ⑫「エピック・ウーマン2012」会議への出席とインド・シンガポールの芸能に関する調査
出張期間：2012年12月20日～2012年1月8日
出張先：チェンナイ、バンガロール（インド）、シンガポール
出張者：竹村嘉晃（国立民族学博物館外来研究員）
- ⑬インド人世襲音楽家一族のグローバルネットワークと音楽活動に関する調査
出張期間：2012年8月16日～2012年9月3日
出張先：パリ市、アンジェ市（フランス）
出張者：田森雅一（東京大学非常勤講師）
- ⑭トロント市とその周辺地域におけるインド音楽・舞踊に関する予備調査
出張期間：2012年8月22日～2012年8月31日
出張先：トロント市（オンタリオ州・カナダ）
出張者：寺田吉孝（国立民族学博物館教授）
- ⑮植民地期インドにおける商家建築の装飾様式に関する比較調査
出張期間：2013年1月28日～2月20日
出張先：シンガポール、ホーチミン市・ミトー市（ベトナム）、タミルナードゥ州シヴァガンガイ県・西ベンガル州コルカタ県・ラージャスターン州ジュンジュヌー県、シーカル県（インド）
出張者：豊山亜希（国立民族学博物館外来研究員）
- ⑯インドの「宗教産業（Religious industry）」に関する調査
出張期間：2012年8月6日～2012年8月31日
出張先：マハーラーシュトラ州（インド）
出張者：松尾瑞穂（新潟国際情報大学講師）
- ⑰食文化と遺産に関する国際会議への参加
出張期間：2013年1月2日～2013年1月5日
出張先：香港中文大学（中国）
出張者：松川恭子（奈良大学准教授）

資料整備

現代インドの宗教と文化の動態に関する文化人類学およびその関連分野の研究図書および民族誌のなかから、国立民族学博物館にすでに所蔵されていないものを14冊を購入した。購入書籍は、本拠点事務局内の書架に配架した。

1970年代からインド各地の祭礼や民俗芸能、絵画等に関する写真撮影を行ってきた写真家沖 守弘氏の写真資料と写真取材に関連する文書資料を一括して受け入れデジタル保存し、広く研究用に公開するためのデータベースを作成する計画を立て、必要な交渉を行った。交渉に基づき、沖氏からスライド写真2万点あまりとその関連文書資料を本拠点に仮受け入れし、資料の点検・調査を行うとともに、沖氏から取材の目的・経過・成果等についての聞き取り調査を行った。

日本関連在外資料調査研究

「ロシアと北欧における日本関連アジア資料の調査研究」

代表者：近藤雅樹

目的

19世紀に収集されたことが確実な日本関連資料のうち、まとまりがあり同時代の日本文化や歴史を表象することのできるコレクションを、可能な限り総合的に調査研究する。その際、少なくとも資料に関する詳細なデータを、できる限り多く共有することで、同時期の「規準」となる「もの資料」を明確にする。19世紀のコレクションのうち、いくつかのモデルケースを設定し、国内外の研究者コミュニティが、詳細な「記録」というかたちであれ、「実物」のままであれ、未来にわたって「共有」するために、長期にわたって継続でき、かつ成果を広く共有しうる調査方法と実現できる調査計画と公開方法を立案、実行する。同時に、すでに目録が整備されているもののうち、相互利用に関する合意ができる場合は、協定など利用規程を定めたくて「共用」化を進める。さらに、資料群の現状（状態）を把握することで、今後の長期的保存・修復計画を策定することも目指す。

毎年度海外の博物館等の研究者を招聘し、国際フォーラムを開催する。この国際フォーラムは「ロシアと北欧における日本関連アジア資料の調査研究」（代表：近藤雅樹、人間文化研究機構「日本関連在外資料の調査研究」の一

環)の企画である。その目的は、バルト海沿岸地域の諸都市を中心に博物館などが所蔵する日本および東アジア関連の民族資料(物品、写真、映像、文献など)を6か年計画で幅広く調査し、未紹介資料を含めて概要を明らかにしようとするものである。

成果

- ・ビョートル大帝記念人類学民族学博物館(ロシア)において江戸時代の絵画資料などを2週間かけて調査した。
- ・国立諸文化博物館(フィンランド)の展示物及び収蔵庫調査、タリン歴史博物館(エストニア)の収蔵庫調査を実施した。
- ・ロシア・北欧の上記の調査において、調査先博物館で日本資料に関する教示を求められることがあり、必要に応じて日本国内で調査を継続した。
- ・2012年度プレゼンポジウム報告書を発行した。
- ・2013年2月2日から3日にかけて国立民族学博物館でフィンランド、スウェーデン、デンマークから研究者を招聘して国際フォーラムを開催した。このフォーラムの報告書は次年度に刊行する予定である。
- ・国際フォーラムで来日したスウェーデン・デンマークの研究者と、次年度の海外調査に先立ち、調査協力要請および事前打ち合わせを実施した。

研究成果公開プログラムによる館のシンポジウム、研究フォーラム、国際研究集会への派遣

●館のシンポジウム

国際シンポジウム「手話言語と音声言語のシンポジウム(1)『言語の記述・記録・保存』の開催」

2012年7月28日～29日 国立民族学博物館

代表者：菊澤律子

趣旨

言語の記述・記録・保存に関するラウンドテーブルおよびシンポジウムを開催する。これまで危機言語の文脈でとりあげられてこなかった手話言語に焦点をあて、音声言語の状況との対照から、国内外の研究現場および話者コミュニティにおける現状を総合的に把握し、今後の方向性を明らかにすることを目的とする。

手話については、音声言語と比べ、フィールドワークによる記述研究が少なく、また、話者自身が記録・保存に取り組む場もほとんどない。その対応の必要性および緊急性は、国際的に強く認識されており、2011年7月の国際ワークショップ(手話の歴史言語学)で国内外の研究ネットワークの形成が提案された。今回のシンポジウムは、その具体化に加え、手話研究を音声言語研究と意識的に付き合わせ、言語の総合的な把握を試みる点で、従来の手話に関する取り組みとは異なる。

シンポジウムは一般公開とする。手話が「言語」であるとは認められにくい現状において、国立の研究機関において手話をも含んだ言語学に関するシンポジウムを開催することは、社会的な意義も大きいと考える。

実施状況

予定通り、7月28日および29日にシンポジウムを行った。

- 1) 最終プログラムおよび講演要旨等については、日本語および英語で本館のホームページに掲載した。
<http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/news/rm/20120728-29> (日本語)
<http://www.minpaku.ac.jp/english/research/activity/news/rm/20120728-29> (英語)
- 2) 使用言語は英語、アメリカ手話、香港手話。これに一般参加者を考慮して、日本語、日本手話の同時通訳を付けた。
- 3) インターネット配信については、累計アクセス人数が600名、各セッションのアクセス数は、12～30名。
- 4) その他詳細については、「成果」参照。

成果

本シンポジウムは、手話言語と音声言語の国際シンポジウムシリーズの第1回という位置づけで行った。使用言語は英語、アメリカ手話、香港手話で、一般参加者に公開するため、日本語、日本手話の同時通訳を加えて行った。参加者数は初日(参加登録は定員で締め切り)は122名、2日目は204名の参加となった。

1日目は、第4セミナー室でのラウンドテーブル会議とし、菊澤、大杉 豊(筑波技術大学、国立民族学博物館特別客員教員)より、「手話研究に関する研究拠点ネットワーク構想」の説明を行い、各国から招待した手話言語学や言語の記述・記録・保存に関する専門家からの提案や意見を聴くためのきっかけとした。また、ネットワーク構想参加の同意を得ている香港中文大学およびハワイ大学言語学部から、関連教育課程や研究活動について、また前者の教育過程で学んでいるろうの学生によるプレゼンテーションが行われた。最後に、手話言語に関するコーパス作

成に関する紹介があった。各発表後の質疑応答は、時間および通訳の関係で事実関係確認のみに限定したが、ディスカッションの時間には、一般参加者からの質問や意見に対してディスカッサントが自由に回答する形で進めた。一般からの質問等の受付は、質問フォーム（日本語・英語）およびビデオ撮影（日本手話・アメリカ手話）を通して行った。

2日目のシンポジウムでは、手話のフィールドワークの現場からさまざまな報告を受けた。報告は手話に関するものを中心とし、各地の手話の記述・記録に携わる研究者からの報告を依頼、同地域の音声言語の研究者からのコメントを組み合わせることで、手話言語と音声言語の研究者間での情報交換の糸口とした。1日目同様、一般参加者を含むフロアからの質問を受ける形でのパネル・ディスカッションを行い、まとめとした。

本シンポジウムのすべての内容はインターネットで生中継を行った。これは、総合研究大学院大学学融合推進センターのプロジェクト「手話言語学を世界へつなぐ——メディア発信とe-learning開発に向けて」（研究代表者 菊澤律子）によるもので、合計アクセス数600、各配信やのアクセス数は常時、12から30を数えた。国内外でのインターネットによる聴講者からも、修了後さまざまなコメントや感想が届き、配信側にとっても有意義な試みとなった。次のシンポジウムは、2013年9月末開催を検討している。

国際シンポジウム「大規模災害とコミュニティの再生」

2012年11月16日～17日 国立民族学博物館

代表者：杉本良男

趣旨

東日本大震災などの大規模等災害被災地における「ローカル・メディアによる情報発信」、「文化遺産の復興支援」、「災害の記憶の継承」の活動に注目し、大規模災害からのコミュニティの再生について、海外の大規模災害への取り組み事例も踏まえながら考える。

実施状況

11月16、17日の両日にわたり、計20の報告、コメントなどを通じて、多角的な議論が行われた。外国からは8名の報告者、コメンテーターが参加し、一般聴講者ものべ111名にのぼった。

成果

シンポジウム初日は、冒頭の趣旨説明ののち、第1部「大規模災害時にローカルメディアが果たす役割」が行われた。本セッションでは、東日本大震災及びインド洋津波災害時におけるローカル・メディアが果たした、あるいは果たすべき役割について、日本、インドネシア、タイからの事例報告と、インド、日本の事例を念頭においたコメント、討論、総括が行われ、いずれの地域でも大メディアよりローカル・メディアのほうが小回りがきいて、より重要な役割を果たしたことが指摘された。2日目は第2部「災害から文化遺産が復興する意義」について、とくに博物館を中心とした日本、インドネシア、タイにおける経験と、復興に果たす意義についての報告と討論が行われ、有形、無形の文化財の復興に果たした、あるいは果たすべき役割の重要性が指摘された。つづく第3部「コミュニティにおける災害の記憶の継承」においては、博物館や公共施設を拠点にした記憶の継承について、日本とアメリカの事例報告及び討論が行われ、とくにハリケーン後のアメリカの博物館の事例が、今後の博物館の可能性の1つとして関心を集めた。最後に全体討論が行われ、各セッションをまたぐ比較と討論を通じて、今後の展開について実践的、学知的に考えていく方向性が議論された。今後もアカデミックなレベルにおいて、人類学を中心とした、広く外国の比較事例を含めた学際的、総合的な検討の必要性があらためて強調され、全体が閉じられた。今回は、日本、アメリカそれにアジア諸国のさまざまな事例が報告され、またこれらを比較、総合した議論が熱心に行われた。日本の研究者、実践者を含めて、各国からの参加者にも強いインパクトを与える意義があった。民博における復興関連プロジェクトは今後とも継続されるが、将来を見ずえたさらなる研究の展開をはかる必要があることが確認された。

各報告者からのフル・ペーパーとコメンテーターのペーパーを加えて、来年度中に民博の出版物等で成果刊行を行う。

国際シンポジウム「グローバル化時代の包摂と排除——インドにおける社会的包摂と排除の新しいかたち」

2012年12月21日～22日 インド、ジャプフ・キリスト教大学

代表者：三尾 稔

趣旨

本館を経費受け入れ機関とする日本学術振興会「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」（事業名「現代南アジア研究の国際的ネットワークの形成」）の研究成果公開の一環として、インド・ナガランド州にお

いてグローバル化の進む現代インド社会における包摂と排除をテーマに国際研究フォーラムを開催する。ナガランドはインド先住民が多数居住する州の1つで、フォーラムのテーマと関係の深い地域だが、辺境地帯にあるためこれまであまり国際研究集会在が開催されてこなかった。このような地域で、日本発のインド研究の成果を問い、なおかつ国際的な研究者コミュニティとの意見交換の機会を設ける意義は大きい。

実施状況

2012年12月21日と22日の2日間にわたり、インド・ナガランド州のコヒマ市にあるジャプフ・キリスト教大学において上記の国際シンポジウムを開催した。申請時に招聘する予定だった英国の研究者のうち1名はスケジュールの調整がつかなくなり、招聘ができなかった。予定変更が11月初旬であったため代替の研究者を招聘することは不可能で、結局本支援経費で招聘した研究者は英国からの1名となった。

それ以外の経費で参加予定であったインド人研究者も数名がやむを得ない事情により参加を直前になって取りやめた。しかし、シンポジウム自体は基本的なプログラム構成を変更することなく、無事に発表と質疑応答、討論を行い、終了した。

成果

インドにおける社会的包摂と排除に関する社会学的研究においては、カースト制度の下での被差別民や先住部族民を国家の枠組みのなかでいかに包摂し、彼らにどのような権利を認めるべきかが大きな論点とであった。しかし、グローバルな人、資本、情報のフローが活性化する中で国家の境界は流動化し、国家のみが包摂と排除をめぐる交渉のアリーナではなくなっている。差別からの解放を求める運動も国際化し、新しい理念や方法のもとでの運動や交渉が行われるようになってきている。

シンポジウムでは、このような状況認識の下で具体的にどのような情報や人、モノのフローがインドの社会的包摂と排除をめぐる議論や運動に影響を与えているのかを探り、新しい社会状況のもとでどのような新たなコンフリクトが生まれているのかについて議論した。カーストによる差別や先住民族への差別は依然として深刻な社会紛争の対立点ではある。しかし、人の移動の活発化はそれまで隣人関係になることのなかった者同士の接触を生み、新しい民族間の軋轢を生じさせている。また経済・社会の変容は、従来とは異なる形での貧富格差やジェンダー関係を生み出している。その結果、従来の対立軸だけではない多様な亀裂が社会に生じつつあることが浮き彫りとなった。

一方、社会主体の多様化はインドの社会や国家の分裂・解体に必ずしも直結しない。新しい社会的なステーク・ホルダーが次々に誕生するなかで、従来の対立軸にせよ新しい対立軸にせよ、そこで生じている人びとの政治経済的・社会的要求は柔軟なインドの民主制のなかに声をあげる余地を見出している。社会運動の活発化とインドの民主制のヴァナキュラー化や深化の様相もまた本シンポジウムにおいてさまざまな発表で浮き彫りにされた。最終的な議論においては、このような動きを「インド型の発展経路」の基礎と見なすのか、それともそれは結局のところグローバルな政治経済体制のもとに回収されるものと見るのかに関して活発な議論が戦わされた。この論点は、容易に結論を得られるものではなく、次の同種のシンポジウムでの課題となることが確認された。

インドの辺境に位置し、長らくインド国家からの分離独立闘争が続いてきたナガランド州において、このようなテーマで国際シンポジウムが開催されたことは画期的な意義を持つ。それは現地の英字新聞3紙でこのシンポジウムの内容が詳報されたことから傍証される。シンポジウムへの出席者も初日が65名、2日目が62名にのぼり、関心の高さがわかる。本館のイニシアチブで、インドにおいて日・印・英の研究者を派遣・招聘し注目度の高いシンポジウムを開催でき、国際的な現代インド研究の進展に貢献することができた。

さらに討論を踏まえ、論点を練り直した論文を編集し、英文論文集を刊行する。2013年度、本館の外国人客員教授として来日する Abhijit Dasgupta 教授（本シンポジウムの実行委員でもあった）が編集に協力する。また論文集は、これも本館とエジンバラ大学南アジア研究センターの研究協力のもとで企画が進んでいる南アジア研究の英文叢書シリーズの中の1巻として出版する計画である。

国際シンポジウム「文化を展示すること——日本とヨーロッパの遠近法を考える」

2013年3月17日 国立民族学博物館

代表者：森 明子

趣旨

日欧の文化展示に携わる民族誌研究者／展示制作者が集い、日本におけるヨーロッパ展示、ヨーロッパにおけるヨーロッパ展示、ヨーロッパにおける日本展示、日本における日本展示のそれぞれについて、展示される文化と、展示を見る側の文化の関係を検証する。文化の遠近法という視点から民族誌展示の生産的なあり方について議論する。

実施状況

3月15日、16日の両日、海外からの参加者が、館内の博物館施設と研究施設を視察し、研究打ち合わせを行った。3月17日、国際シンポジウムを開催した。まず参加者全員がヨーロッパ展示場を、製作に関わった3名の研究者の解説のもとに視察した。その後、シンポジウム会場にもどり、研究発表と討論を行った。参加者は合計40名であった。3月18日、シンポジウムの総括を行い、成果公開について打ち合わせを行った。

成果

シンポジウムでは、みんぱくのヨーロッパ常設展示（2012年3月、全面改修し公開）、ベルリンのヨーロッパ諸文化博物館における新しい常設展示（2011年12月、初公開）、ロンドンのジェフリー博物館における日本の家に関する特別展（2011年、春公開）、みんぱくの日本常設展示（2013年3月、一部改修し公開予定）をとりあげた。それぞれの展示制作者は、完成した展示場写真を示しながら、展示のねらいと実際の展示制作にあたって遭遇した諸条件を報告し、さらに完成した展示を来館者がどのように受容したかについても明らかにした。また、当該展示が配置されている博物館の歴史的背景や社会的な位置づけについても報告した。こうして4つの報告は、相互に参照しながら議論する枠組みのなかに配置された。

議論には、展示制作に直接的に携わった研究者と、ヨーロッパ文化に造詣の深い文化人類学者、歴史学者が参加した。そこで、展示される文化と来館者の担っている文化の関係、常設展示と特別展示の使命、展示場を構成するストーリーと個々の標本に関する詳細情報のバランス、民族学博物館の役割などのテーマをめぐって、密度の濃い意見交換が行われた。また、自己の文化では気が付かない視点が異文化展示で生かされること、その一方で自己の文化の展示が外国人には難解になりうることも再認識された。展示トピックとしての食とその保存・廃棄や、展示における画像の可能性、来館者の体験を展示にフィードバックする実験などをめぐっても、さまざまな提案や意見が出された。

これらのテーマのそれぞれについて議論をつくす十分な時間はなかったが、いくつものテーマについてさまざまな視点が提示され、実験的な試みが紹介されたことは、きわめて有意義であった。また、専門的な国際シンポジウムとしては、一般の参加希望者が多かったこと、そこに隣接分野の若手研究者が多く含まれていたことも特筆される。シンポジウムで口頭発表された論文を編集し、『国立民族学博物館研究報告』に投稿する計画である。

●研究フォーラム

国際研究フォーラム「漢族社会におけるヒト、文化、空間の移動——人類学的アプローチ」

2012年11月3日～4日 国立民族学博物館

代表者：田村克己

趣旨

これまで漢族をめぐる人類学的研究は、中国における特定の漢族社会を研究する「中国漢族研究」と、非華人社会へ移民した漢族を研究する「華僑・華人研究」とに区分されてきた。しかし、グローバル化が進む現在、中国南部の漢族社会と東南アジア華僑社会は、相互に影響を与えつつ文化を構築しており、両者の間の文化の流動性を捉える視点が重要となってきた。田村は、アモイ大学・鄧 曉華氏を本館客員教授として招聘し、この点につき共同で研究を進め、また、共同提案者の河合洋尚も日本文化人類学会課題研究懇談会「文化のフロー」のセッションで館外研究者とともにこの研究を深めた。

本シンポジウムでは、こうした主題の研究に取り組む日中の若手研究者を発表者として招聘することで、「中国漢族研究」と「華僑・華人研究」の枠を超えて、新たな研究の展開をめざすとともに、田村がこれまでおこなってきた東アジアと東南アジアの社会や文化（宗教など）についての研究相互間の架橋をめざす。またシンポジウムの成果を、本館の中国展示新構築の華人文化の展示につなげていくとともに、機関研究と連動して、本館の漢族社会研究を深める効果が期待される。

実施状況

日程：2012年11月3日～4日

会場：国立民族学博物館第4セミナー室

使用言語：日本語、中国語（同時通訳）

11月3日

10：30～12：00 座長：田村克己（国立民族学博物館教授）

館長挨拶 須藤健一（国立民族学博物館館長）

趣旨説明 田村克己（国立民族学博物館教授）

基調講演 鄧 曉華（中国・アモイ大学教授）

第1セッション<中国漢族と国際ネットワーク>

座長：芹澤知広（奈良大学教授）

13：00～13：40

俞 雲平（アモイ大学准教授）「移民のエスニック・アイデンティティと地域アイデンティティ——福建省松坪華僑農場を例に」（中国語題目：移民の族群認同与地域認同——以福建松坪華僑農場為例）

13：40～14：20

河合洋尚（国立民族学博物館機関研究員）「客家都市の建設——梅州市における華僑ネットワークと経験創造」

座長：韓 敏（国立民族学博物館教授）

14：30～15：10

川口幸大（東北大学准教授）「香港から国内都市部へ——珠江デルタにおける移動ベクトルの現在」

15：10～15：50

稲澤 努（東北大学教育研究支援者）「広東の一地方都市における『香港』の役割」

16：00～17：00

コメンテーター：志賀市子（茨城キリスト教大学教授）、飯島典子（広島県立大学准教授）

質疑応答

11月4日

第2セッション<東南アジア華僑における中国>座長：韓 敏（国立民族学博物館教授）

10：00～10：40

櫻田涼子（京都大学GCOE研究員）「華字紙『星州日報』創刊時の東南アジア華僑と中国本土の関係」

10：40～11：20

陳 碧（玉林師範大学准教授）「民間団体と脱地域文化交流——シンガポール道教総会およびその廟会員の活動を例に」（中国語題目：民間団体与跨地域文化交流——新加坡道教総会及其宮廟会員活動為例）

11：30～12：10

呉 雲霞（広東外語外貿大学講師）「ベトナム北部における村落民俗の中国記憶」（中国語題目：越南北部の郷村民俗展演的中国記憶）

12：10～13：10

コメンテーター：陳 天璽（国立民族学博物館准教授）

質疑応答

14：10～16：40

総合討論

座長：田村克己（国立民族学博物館教授）

コメンテーター：芹澤知広（国立民族学博物館客員教授）

16：40～16：50

閉会の挨拶 塚田誠之（国立民族学博物館教授）

11月5日

10：00～13：00

今後の成果とりまとめ及び学術交流の打ち合わせ

成果

本シンポジウムでは、田村克己による趣旨説明、鄧 曉華による基調講演の後、7名の若手研究者による研究発表が展開された。具体的に、本シンポジウムは、2つのセッションに分け、1) 華人社会の影響による中国漢族社会の動態的な変化、および、2) 中国漢族社会の影響による東南アジア華人社会の動態的な変化について、それぞれ議論を展開した。

まず、1)については、俞 雲平が、マレーシアから中国福建省へ戻った帰国移民の問題を扱い、帰国移民が中国に及ぼす影響について論じた。また、河合と稲澤は、たとえヒトの移動がなくても情報技術を通して、海外華人社会の影響を受けつつ中国漢族社会が構築されていることを示した。例えば、河合は、広東省梅州市における都市景観の建設を扱い、当該市における景観イメージが、むしろ台湾や東南アジア諸国の華人を引き寄せるためにつくられている点を指摘した。稲澤は、同じ広東省東部の汕尾市に着目するが、ここでは香港が先進的な文化として理想化とされており、西洋＝文明＝香港の図式より地元文化が刷新されているプロセスを論じた。それに対して、川口の研究する広東省中部の広州市では、ここが華南地方最大の都市であるにもかかわらず、ヒトや文化の流動性が比較的小さいことが指摘された。他方、2)については、櫻田が、戦前の華字新聞を扱うことで、今から100年近く前

にはすでに、東南アジアの華人社会が中国を意識しながら自社会を位置づけていたことを明らかにした。また、陳碧は、シンガポールの廟活動を題材とし、その廟が「真正なる」文化をもつ中国漢族社会とのネットワークを重視して活動を行ってきたことを紹介した。そして、呉雲霞は、ベトナムの廟においても「中国らしさ」が意識されており、それに応じて儀礼のあり方が刷新されていることを論じた。

中国漢族社会と華僑華人社会の間のネットワークについては、これまで全く議論がなかったわけではなく、コメンテーターの芹澤、志賀らが先駆的な事例報告をなしていた。しかし、この問題について複数の人類学者が集まり、理論的・体系的に議論がなされたのは、おそらく日本においても中国においても今回が初のことである。総合討論で塚田が指摘していたように、今回のシンポジウムで集まった若手研究者が今後、中国漢族研究と華僑華人社会の枠組みを超えた、漢族社会をめぐる新たな研究組織を国際的につくっていく必要性が改めて確認された。

本シンポジウムにおける以上の発表内容に基づき、田村克己・鄧曉華・河合洋尚の編で書籍『漢族社会におけるヒト、モノ、情報の移動——人類学的アプローチ』（仮）を刊行する予定である。

国際研究フォーラム「日仏研究交流フォーラム——人口学から世界を理解する」

2012年11月30日 国立民族学博物館

代表者：三島禎子

趣旨

本フォーラムは、国立民族学博物館とフランス国立パリ・デカルト大学人口開発研究所（CEPED）とのあいだに締結された学術協定 2012～2015年の第1回目の研究交流を目的として開催された。

今回はCEPED所長のイヴ・シャルビ氏の基調講演をふまえ、国内のアフリカ研究者が異なる学問領域から参加し、社会の変化に対応する今日的な研究のあり方を模索することを試みた。このような学際的かつ国際的な研究の機会をフランスと日本の研究者が共有することによって、あらたなアフリカ研究の方向を見出すことができると期待される。

実施状況

シャルビ・イヴ氏（パリ・デカルト大学人口開発研究所・所長）による「変化と適応の理論——総合的人口学のために」と題する基調講演をふまえ、2人のコメンテータからそれぞれ発表がおこなわれた。シャルビ氏は人口学という一見、無機質な学問領域に、複雑な社会変化にも対応するようなアプローチをもたらす学際的な研究の方向性について講演した。

正木 響（金沢大学）氏からは経済学の立場から「社会の視方——ミクロからマクロへ、マクロからミクロへ」について発表し、鈴木裕之（国士舘大学）は文化人類学の視点から「よりよき他者理解のために——フィールドワークでのふたつの個人的体験から」について意見を述べた。

館外からは8人、館内からは6人が参加して活発な議論が交わされ、充分な人的交流の場となるとともに、今後の計画を確認するうえでの有益な研究フォーラムとなった。

成果

文化人類学において個人や家族が古典的テーマであると同時に、人口学もまたそれらを研究の単位としてきた。前者の特徴は、人間の慣習や社会制度、心理的傾向性、言語、物質文化など、多様な要素からなる広義の文化に焦点をあて、個々の文化的特性を記述すると同時に、民族／社会間の比較研究を行うことである。他方、人口学は出生、死亡、結婚、移動といった変数要因に注目して、人口動態に関する法則性やメカニズムを対象に研究する。両者の関係については、文化人類学が質的データを重視するのに対し、人口学は数量的データに基づいて分析を行うのであるが、今日の複雑な社会を対象とするようになって、人口学においても文化人類学的なデータ収集と分析の必要性が認識されている。すなわち、フィールドワークにおいて取得される直接的なデータを用いることによって、より個別な状況を理解する必要性が人口学において生じている。一方、文化人類学においても、グローバル化社会における個性を理解するための新しいアプローチが求められ、学問領域も応用人類学に代表されるように、現代社会なさまざまな社会問題に対応して多様化している。同様の指摘は、同じようにマクロなアプローチを手法とする経済学においても見られた。

本研究フォーラムでは、シャルビ氏が人口学の立場から学際的な研究の方向性について講演をおこない、経済学と文化人類学からの事例報告とコメントを議論の柱としながら、変化の激しいアフリカ社会に対峙する学際的な方法論について、異なる分野の研究者がそれぞれの立場から模索した。

同時に、学術協定のもとでおこなう研究プロジェクトについて議論をし、来年度のシンポジウムの方向性と内容についてお互いの理解を深めた。

本研究フォーラムは、フォーラムの前日に民博とフランス国立パリ・デカルト大学とのあいだに締結された学術

協定にもとづく3年間の研究プロジェクトのプレ・シンポジウムに位置づけられる。研究成果は2013年度以降開催される2つのシンポジウムを経たうえで、フランス語と日本語でそれぞれ出版する。

国際研究フォーラム「国際共同取材『中国・ロシア・モンゴル国のトゥバ人たち——テュルク系とモンゴル系のあいだ』」

2013年1月8日～9日 国立民族学博物館

代表者：小長谷有紀

趣旨

本館の開発提供してきたビデオテークは、研究者が取材に同行すること、研究資料として映像記録を残すこと、編集作業を経て一般的な映像番組としていること、という3点で、他の一般的な放送番組とは異なり、非常に貴重な情報資源である。にもかかわらず、開館以来30年余を経て、あまり知られなくなっている。このたび、トゥバと呼ばれるロシア、モンゴル、中国の3か国にまたがって居住する民族に関して、現地の研究者がカウンターパートとして協力するばかりでなく、第三国をともに調査するという形で、4か国の研究者が3か国を共同で取材した。この成果は、取材に参加した研究者らによって、日本語のほかにロシア語・中国語・モンゴル語の計4か国語版となり、現地に還元される予定である。国際共同取材と現地還元という試みを紹介することで、ビデオテークそのものの貴重な存在価値を一般に知らしめたい。本フォーラムでは、報道関係者に焦点をあてて公開し、新聞記事を通じて、あまり関心のない人びとにも知っていただくという方法をとる。

実施状況

トゥバでは、マイナス54度の厳寒期を迎えるなか地震が発生し、2012年12月21日に、人口3,753人のホブアスキイという町の暖房システムがダウンした。このため、学校と幼稚園の児童を首都へ避難移送することとなり、予定していたトゥバ文部大臣ビチュエルデイ夫妻の来日は延期され、また、モンゴル国からトゥバ人を代表して来日予定であった、科学アカデミー西方支部のゾルバヤル教授も、パスポートコントロールの誤りにより来日できなかった。

このため、当日、参加した国内のトゥバ研究者たちにより、予定どおり、2013年1月8日と9日に開催した。8日は、編集途上のビデオ映像をもちいて、取材の状況ならびにトゥバについての解説をおこなった。翌9日は、田中克彦氏の講演により、日本および世界におけるトゥバ研究の歴史をひもといた。また、トゥバ料理を紹介した。

なお、トゥバ文部大臣ビチュエルデイ夫妻は、その後、2月6日から11日まで来日し、日本との学術交流を果たすことができた。

成果

当初予定していたトゥバ人の来日日程の変更により、新聞社としてはわずかに朝日新聞および京都新聞の参加にとどまったが、朝日新聞では文化面（2月12日付）で比較的大きくとりあげられ、1) トゥバそのものの紹介、2) 本館におけるトゥバ研究の紹介、3) ビデオテークについての紹介、という3つの目的を果たすことができた。また、トゥバ文部大臣夫妻の来日については、他に日本経済新聞でも紹介された。これらの記事に対する一般読者の反響がみられた。

本フォーラムでは、本館のビデオテーク番組『トゥバに魅せられた人びと』で撮影対象となった日本人研究者4名のうち、現役で研究をしている3名が全員集まった。第一世代1名と第二世代2名である。彼らの交流により、今後の研究プロジェクトのターゲットが定まった。

なお、3か国で取材したトゥバ語資料およびモンゴル語資料のテキスト化を終了し、トゥバ人およびモンゴル人による校閲をおこなった。これらをもちいて映像番組を作成する。

上述の朝日新聞による紹介記事を本館ホームページ上で公開している。

本フォーラムの要件である、ビデオテーク番組は、2013年度に配分される予算に合わせて、日本語版のほかに各国版を作成する。

2013年9月8日の研究公演『喉歌（のどうた）のふるさと』にあわせて、ビデオテーク番組も紹介する。このように、研究公演をビデオテーク番組と連動させることによって、研究成果の集積的な発信としたい。

国際公開フォーラム「古代文明の生成過程——マヤとアンデスの比較」

2013年1月27日 キャンパス・イノベーションセンター東京

代表者：關 雄二

目的

米国アリゾナ大学のマヤ考古学者を招へいし、中米と南米の古代文化における権力生成の比較フォーラムを、科学研究費補助金新学術領域研究「環太平洋の環境文明史」（代表：青山和夫茨城大学教授）、古代アメリカ学会の協

力を得て行う。

これは、科研費プロジェクト(基盤研究(S))「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」代表: 關 雄二)の成果公開を兼ねており、アンデス文明における権力生成とその変容を相対化するために、視点を共有したうえで、文明間の比較を行うことを特色とする。こうした広い視野に立ったテーマ設定を行うことで、学問領域の細分化が進み、個別具体性への関心が高まり、普遍化、一般化への試みが顧みられない現代の学問潮流に一石を投じることができると考えられる。

具体的には、フォーラムを通じ、アメリカ大陸において成立した古代文明の経済的基盤を明らかにするのみならず、権力形成という視点を通して、経済を支えていた農作物、海産物、動物資源、そして他の自然資源の、宗教を含む非経済的側面にまで光を当てる予定である。これにより、生態学、あるいはマルクス主義的歴史観の中で矮小化されてきた先史時代の資源利用をより複合的にとらえることが可能になる。またメソアメリカ地域と比較することで、アンデス文明の特徴が浮かび上がることは間違いない。結果として、これは文明論の新たな研究動向を一般社会に公表し、人類の未来像を探るための機会を提供することにつながると考えられる。

実施状況

プログラム

關 雄二 あいさつ

猪俣 健 (アリゾナ大学) 「セイバル遺跡の発掘成果とマヤ文明の起源」

青山和夫 (茨城大学) 「石器研究からみるマヤ文明の盛衰」

松本雄一 (国立民族学博物館機関研究員) 「遠隔地交流と複雑社会の形成——アンデス中央高地の事例から」

關 雄二 「アンデス文明における権力の発生——最新成果報告」

ディスカッション

成果

中米のマヤ文明と南米のアンデス文明を対象に、最新の調査成果を発表し、さまざまな観点から分析できた意義は大きい。マヤについて、猪俣は、近年発掘調査を実施したセイバル遺跡のデータをもとに、先古典期における低地マヤ社会では、従来考えられていたよりも古くから公共建造物とそれに伴う埋納儀礼が検出され、すでに社会の複雑化が進んでいたメキシコ湾岸地域と地域交流を持っていたことを明らかにした。青山は、石器分析の観点から、社会の複雑化と石材の入手、および石器製作の統御とが関連することを示し。その生産体制が社会的エリート自身に属するものであることを指摘した。松本は、自身の発掘データをもとに、かつて汎アンデス的に広がったと考えられたチャビン文化の実態を地方政体の自立性の点から問いなおし、関は、チャビン同様にアンデス文明初期に出現する大規模建造物を築いた社会の成立基盤に地域性を見いだす発表を行った。

とくに、マヤ、アンデス双方の文明ともに、紀元前にさかのぼる初期段階で公共建造物が出現し、それが時代とともに大規模化していくことが共通点として押さえられた。しかし、そこではマヤとアンデスそれぞれの地域の歴史的背景や生態環境の違いを考慮する必要もあり、村落の共同祭祀空間であったものが、儀礼、饗宴の結果生じる廃棄物を埋め土にしながら建物が拡大する点では同じであっても、無意識の産物であるのか、あるいは指導者の意図により、祖先崇拜を想起させる埋葬や儀礼用具の埋納などの結果、巨大化したのかなど、深く論議する必要性が感じられた。またそうした建造物の巨大化の過程で、王とは特定できずとも、指導的リーダーの誕生が認められる点でも両文明で共通性を持つが、リーダーの権力基盤については、マヤでは一般に石器生産に多くを投資するのに対して、アンデスでは遠隔地交易や金属器製作など、権力者が操作する資源に地域差があるなど、両文明間の違いも大きいことが確認された。こうした比較により、各文明において注目すべき新たな視点が浮き彫りにされた点は大きな収穫といえる。

今回1回のシンポジウムだけでは、議論がまだ煮詰まらないところもあり、科研費による研究期間中に再度討議する場を設け、その結果を市販書として刊行していく予定である。出版関係者、新聞社も数社参加しており、いずれも、記事掲載や刊行に積極的な意見を表明した。

国際研究フォーラム「在外資料の調査研究Ⅲ——バルト海周辺地域の日本コレクション」

2013年2月2日～4日 国立民族学博物館

代表者: 近藤雅樹

趣旨

従来あまり視野に入らずにいたバルト海周辺の民俗資料を中心にその所在状況を調査する。

実施状況

2013年2月2日～4日にかけて国立民族学博物館において公開研究フォーラムを開催した。

成果

今回のフォーラムは、人間文化研究機構が推進している「日本関連在外資料の調査研究」プロジェクトにおいて、6月に実施した「バルト海周辺地域の日本コレクション」調査に関連し、スウェーデン、フィンランド、およびデンマークと日本在住外国人研究者などの招聘研究者及び本館の研究者による報告とコメント、並びに全体討議という形式で進めた。

スウェーデンのペトラ・ホルムベリ氏（ストックホルム東アジア博物館）からは、ストックホルム東アジア博物館所蔵の日本資料の所在と、その由来についてご報告いただいた。

フィンランドのミンナ・エヴァスオヤ氏（ヘルシンキ大学芸術・美学研究所）からは、フィンランド国内の日本関連資料について、包括的なご報告を頂いた。

デンマークのヨアン・ホーンビー氏（デンマーク国立博物館）からは、デンマーク国立博物館の日本資料の所在と、その由来についてご報告いただいた。

「日本関連在外資料調査研究」研究班からは、6月に行ったフィンランド・エストニア調査について報告があった。

ディスカッションの場では、活発に意見が交わされ、さらに、大阪歴史博物館の伊藤廣之氏にコメントを頂いた。また、ヨアン・ホーンビー氏、ペトラ・ホルムベリ氏に、「日本関連在外資料の調査研究」研究班による来年度デンマーク・スウェーデン調査の受入れをご内諾いただくことができた。

報告内容は報告書としてまとめ、2013年度内に刊行する予定である。

●国際研究集会への派遣

「ペー族文化国際学術シンポジウム」

2012年6月30日～7月5日 中国湖南省桑植県

横山廣子

趣旨

中国湖南省の桑植県白族（ペー族）学会が雲南省大理白族自治州白族学会ならびに湖南省張家界市白族学会と共催して桑植県で初めて開催する大規模な学術シンポジウムに参加する。シンポジウムで研究報告および学術交流をおこなうとともに、期間中、桑植県地域のペー族に関する情報を収集し、自身の研究に資する。

実施状況

6月30日に出発し、7月1日から4日まで中国湖南省桑植県で開催された「ペー族文化国際学術シンポジウム」に参加し、7月5日に帰国した。

今回のシンポジウムの参加者は合計33名。中国国外からの参加者は私のみで、湖南省内から桑植県ならびに張家界市の白族学会員を中心に、省内の大学や省、市、県の各レベルの行政部門関係者が計15名、雲南省大理白族自治州からは州白族文化研究所員6名を筆頭に、州内各地の研究・文化部門の研究者計13名、そのほか西安、北京、南京の大学に所属する研究者が4名参加した。研究報告をおこなったのは17名で、不参加だが論文を寄稿して予稿集に収録された者が3名あった。

私は1986年、87年に桑植県を訪れ、短期調査をおこなっている。今回当時の調査から得られた知見を総括するとともに、その後得られた情報と考察を整理し、雲南省大理地域で調査研究を続けてきた者の視点から「大理から見た湖南省のペー族」という論文を提出し、報告をおこなった。

成果

ペー族の公表された最新の中国国内総人口は約193万人（2010年）に上る。唐代に雲南の大理盆地を都として栄えた南詔国、続く宋代の大理国の末裔と言われ、近年でも100万人以上が雲南省大理白族自治州に集中して居住する。ところが、雲南省大理から遠く離れた湖南省桑植県で1984年にペー族4万人余りが、宋代にモンゴル勢力によって大理国が倒された後、モンゴル軍に参加して遠征した人びとの子孫だとして、国家の認定を受けた。つまり、歴史を700年遡っての民族の認定がおこなわれた。その後、当県では漢族や土家族として登録していた人びとが民族的帰属をペー族に変更する事例が増加し、2000年の桑植県のペー族人口は9万5,000人を超えた。大理白族自治州以外の全国の県の中で、最も多数のペー族が居住する地域となっている。つまり、桑植県を中心とするペー族は、特異な存在と言える。

80年代初頭におこなわれた湖南省のペー族の民族識別は、80年代前半に中国でおこなわれた一連の民族識別における典型事例の1つとして注目に値する。また、その後、今日に至るまでの湖南省ペー族の文化発揚・復興・再創造のプロセスも興味深い。

私の論文では、まず、80年代の民族識別の根拠とされた歴史的資料、民族集団名称、言語、その他の文化的特徴のうち、後者3点に関して指摘された大理との共通性について、決定的な根拠とするには問題点が残ることを考察

した。同時に、桑植県のペー族の民族的帰属の変更が成功した背景には、省内の民族識別において先行した土家族の問題の存在、土家族問題にも関与しつつ、ペー族の民族識別を牽引した中心的人物らの存在が重要であったと指摘した。この報告に対しては、他の報告には見られなかった反響があった。今後、報告時点では省いた詳細な論拠を加えて、最終稿を完成させる予定である。大会の主催者では、本シンポジウムの成果を論文集として中国の出版社から刊行する計画を立てている。

「第12回国際オーストロネシア言語学会における研究報告」

2012年7月1日～7日 インドネシア、ウダヤナ大学

菊澤律子

趣旨

菊澤はオーストロネシア言語学を専門とし、記述言語学、比較言語学、オーストロネシアの先史に関する学際的研究をすすめている。第12回国際オーストロネシア言語学会では、昨年度末にマックスプランク進化人類学研究所、ベルゲン大学、オックスフォード大学への派遣時に研究をすすめ、帰国後さらに発展させた形態統語論的研究の内容の中で、とくに同系構文の特定に焦点をあてて研究報告をする。発表タイトルは Identifying Cognate Structures in Austronesian Comparative Syntax (オーストロネシア比較統語論における同系構文の特定)。

実施状況

予定通りの日程で渡航し、研究報告を行い、運営委員会に出席した。

成果

さまざまな関連トピックの中から、データベースを利用して大量のデータを対象とした同系構文の分析をするときに着目すべき特徴に焦点を絞り、どのような観点で、何を基準にデータベース化してゆくことがこのようなアプローチにおいて有効であるのか、インド・ヨーロッパ語族を対象とした格標識の比較統語論的研究とオーストロネシア諸語を対象とする場合の違い等にも触れながら、報告した。

学会で得たフィードバックを、現在、ベルゲン大学の比較統語論研究チームとの協力を検討しているオーストロネシア諸言語の比較統語論的研究のためのデータベース構築に反映させる予定である。

「国際伝統音楽評議会『音楽とマイノリティ』研究グループの第7回国際研究大会における研究発表」

2012年8月6日～13日 イスラエル、ツファット学術大学

寺田吉孝

趣旨

イスラエルのツファット市で開催される国際伝統音楽評議会「音楽とマイノリティ」研究グループの第7回国際大会に参加し研究発表をおこなう。

実施状況

国際伝統音楽評議会「音楽とマイノリティ」研究グループの第7回国際大会は、イスラエル、ツファット市にあるツファット・アカデミア大学を会場として、8月8日から11日まで4日間にわたり開催された。「音楽とマイノリティ研究の方法論」「音楽とマイノリティ・ナショナリズム」「映像メディアにおけるマイノリティ音楽の表象」「音楽教育とマイノリティの文化的アイデンティティ」の4つの研究テーマに沿って23本の研究発表がおこなわれた。申請者は大会1日目の第2セッションの司会を務めると共に、2日目の第3セッションにおいて研究発表をおこなった。

成果

国際伝統音楽評議会 (International Council of Traditional Music) は世界最大規模の音楽・芸能学会であり、傘下にある19の研究グループが定期的に国際大会を開催している。「音楽とマイノリティ」は、特に活発に活動を続けている研究グループの1つであり、大会の報告書も遅延なく刊行されてきた。

申請者は大会統一テーマの1つである「音楽とマイノリティ・ナショナリズム」に沿って、「A circulatory flow of Indian music and minority nationalism」の題目で発表をおこなった。発表では、杉本良男が近年提唱している文化の「環流」の概念を援用して、インド古典音楽・舞踊が世界各地にあるインド人コミュニティにおいて実践されているだけでなく、その活動がインド国内における音楽文化にも多大な影響を与えており、そのような現代的な展開を分析するためには、どちらか一方だけを研究対象とするだけでは不十分であり、複数地域間の双方向的な流れを調査することが必要である点を指摘した。また、「環流」の概念は、音楽の真正性と特定の国家・地域を無批判に結びつける従来の音楽研究の傾向を相対化する点でも有効であることを述べた。

全体討論では、マイノリティ概念の再検討が提案され、2013年7月に上海で開催予定である同評議会の世界大会

で、このテーマに沿ったパネルまたはラウンドテーブルを組織することが決定された。また、研究グループの次回の大会（2014年に開催予定）における研究テーマに関する議論がおこなわれ、これまでの民族や宗教などを軸にしたマイノリティの事例研究に加え、ポストコロニアル理論、文化政策、デジタル・メディア、亡命、セクシュアリティなどをテーマとして加える必要性が議論された。

「アメリカ言語学会大会参加および講演」

2013年1月2日～9日 ポストン マリオネット コーブリー プレイス

菊澤律子

目的

今回の渡航は、アメリカ言語学会の参加、および歴史言語学に関する特別ワークショップでの講演を目的とする。

この特別ワークショップは、世界各国で活躍する歴史言語学におけるさまざまな分野の専門家が一堂に会し、それぞれの分野での最新研究動向等を披露することで、今後の歴史言語学研究の発展に結び付けることを目的として、申請時現在、出版準備がすすめられているルートリッジ（Routledge）出版の学術ハンドブック・シリーズの『歴史言語学に関するルートリッジ・ハンドブック』（*The Routledge Handbook of Historical Linguistics*, ed. by Claire Bowern and Bethwyn Evans）の編集者の発案・企画により、開催されるものである。

実施状況

予定通りの日程で渡航し、講演を行った。

成果

アメリカ言語学会における歴史言語学に関する特別ワークショップで講演を行った。

菊澤はこれまで、オーストロネシア諸語を対象とした歴史言語学的研究を専門としており、このハンドブックでは、「オーストロネシア諸語」（The Austronesian Language Family）という項を担当している。ワークショップに参加することで、『ハンドブック』の出版に先立ち、歴史言語学の諸分野における最先端の研究成果を聞く機会を得、担当項に反映させることができたこと、また、自分の項に関する内容を発表し、出版前にフィードバックを得ることができた。

「第9回国際オセアニア言語学会への出席」

2013年2月4日～8日 オーストラリア、ニューキャッスル大学

菊澤律子

趣旨

菊澤はオーストロネシア言語学を専門とし、記述言語学、比較言語学、オセアニアの先史に関する学際的研究をすすめており、第9回国際オセアニア言語学会で、“The Ergative-to-accusative Hypothesis Revisited: A Response to Ball 2007” というタイトルで研究報告を行うことを目的とする。これは、菊澤が学位論文以来、取り組んできたテーマに関する発表であるが、今回は特に Kikusawa 2002, 2003への批判記事（Ball 2007）に対して公の場で学術的に回答する。

実施状況

予定通りの日程で渡航し、研究報告を行い、座長をつとめた。

成果

オセアニアの言語を専門とする研究者が集まるもっとも大きな国際学会の場で研究内容を報告しフィードバックを得たこと、また、現在進行中の関連研究に関する発表を聞き、それに関する質疑を行うことで、当該研究をよりレベルの高いものにし、また、新たな研究分野における視点を取り入れることができた。

学会で得たフィードバックを反映させた response article を *Oceanic Linguistics* に投稿予定である。

総合研究大学院大学若手教員海外派遣事業

総合研究大学院大学の教育研究の中核を担う若手教員を、海外の独創的・先進的な教育研究を行っている大学・研究機関等に派遣し、専攻する学問分野等の調査研究を通じて教育研究能力等の向上を図り、本学の国際的通用性の向上に資することを目的とし、併せて総研大国際ネットワークを構築するものとして、総合研究大学院大学若手教員海外派遣事業がある。

2011年4月19日～2012年4月18日 フランス

三島禎子

これまで西アフリカを故地とするソニンケ民族について、文化人類学的な立場から数々の調査研究を積み重ねてきた。その成果は、「家族形態の研究」、「村落開発に関する研究」、「労働移民に関する研究」、「商業と移動に関する研究」という4つの大きなテーマに集約される。そのもっとも大きな成果は、この研究において調査の対象としたソニンケ民族が経済的な動機で頻りに移動していたために、かれらの母村と移動先で調査をおこなっただけでなく、それに加えて移動ルート上にある複数の滞在地においても調査をおこない、20世紀以降のソニンケの移動についておよそその全体像を把握できたことである。すなわち、各時代に経済の中心となった地域に移動していたという事実、移動には商業という経済活動を常にともなっていた事実、そしてアフリカにおける20世紀の移動ルートから、今日におけるアジア経済の発展に対するソニンケの対応としての移動ルートまでを明らかにした。

今回の調査研究の拠点となるパリは、20世紀中葉以降のソニンケの主たる移動先である。そして植民地支配という歴史的つながりからソニンケがパリのアフリカ系移民のなかでも大多数を占めてきたという事実において、本研究において重要な場所となっている。他方、フランス社会においては政治的なレベルでソニンケの同化あるいは統合という点が問題となってきた。またフランスの移民研究においてもソニンケ研究はフランスのアフリカへの窓口としての重要なテーマであり、そのような植民地支配に始まった歴史的な蓄積をもっている。さらに労働移民の帰還という関心から、ソニンケの母村の社会インフラの整備や経済開発もまた移民研究の大きなテーマである。

それに対して三島の研究範囲は、今日の労働移民という一面にとどまらず、世界中で貿易を展開する大商人としてのソニンケ、また歴史を通じて地域経済の中心的役割を担いながら移動と商業を営んできたソニンケという側面におよぶ。その点においてフランスを中心とした旧宗主国によるソニンケ研究とは異なり、それを超える方向をめざしている。

今回はフランス国立パリ・デカルト大学の客員研究員として調査研究に従事した。同大学の人口開発研究所には2009年5月から11月の半年間、客員研究員としての招聘を受け、国立民族学博物館の「リーダシップ支援経費」の援助を得て滞在した経緯がある。そこでは「アジアにおけるセネガル人の商業ネットワークについて」の研究を深め、その成果は小川 了編著『セネガルとカーボベルデを知るための60章』に3篇の論文（2010年刊行）として、また三島禎子「民族の離散と回帰——ソニンケ商人の移動の歴史と現在」小倉充夫・駒井 洋編『ブラックディアスポラ』明石書店（2011年刊行）に発表した。今回はその成果を踏まえ、同大学の人口開発研究所が主催する「アフリカ出身者の国際移動に関する比較研究」についての連続セミナーの運営にたずさわり、自らも参加した。同セミナーには世界各国から研究者が集まり学際的な意見交換をおこなう。そこにおいて上述のような国際移動に関する斬新な見解を提示し、有益な議論を交わすことができた。

本研究は、アフリカの一族を対象にしたケーススタディとして、あるいはまた労働移動という側面からグローバル化された世界における今日的な現象の研究のひとつにすぎないとみなされがちである。しかし、本研究は以下の点において普遍的なテーマにつながる学際的な研究である。第1に、ソニンケという民族がアフリカという地域において果たしてきた歴史的役割を考えると、アフリカ経済の再発見につながるものである。ソニンケによる商業の展開をとおしてアフリカ地域が歴史的にどのような経済的活力を内包していたのかを探ることによって、低開発といわれる今日のアフリカ経済が異なった意味を提示することがわかる。それはまた、今後のアフリカ経済の発展にとっても重要なポイントになる。第2に、従来の移民研究の分析枠ではエマニュエル・トッドというフランスの人口学者が主張したように、移民は社会にとって「同化か排除か」という課題をもたらすだけであるが、本研究では、人はなぜ移動するのかというような個人的な動機や民族文化的な要因について具体的な問いを提出する。その問いは、国民国家の存続や、地球上の経済格差といった従来の分析枠を超え、移動における文化的、あるいは宗教的な側面がうきほりになる。そしてさらに、移動する人がどのように政治に関与するのかという点において、アフリカおよび他地域の民族との比較研究を可能にする視座を提示する。このように、本研究はケーススタディと比較研究という両面をもち、さまざまな学問的広がり内包する。

本研究では「アフリカ人商人の国際移動に関する歴史人類学的研究」をさらに深めるとともに、フランスの研究機関との密接なる提携において国際的交流の成果を生み出す重要な機会を得ることができた。具体的には、個人的業績のほか、2012年度にパリ・デカルト大学の人口開発研究所と学術協定を結び、同年11月には同研究所・所長を招いて日仏研究フォーラムを開催し、これを発展させて2013年度に国際シンポジウムを開催する旨を了解した。

2012年4月5日～2013年2月2日 アメリカ・カナダ

太田心平

20世紀の100年間で、朝鮮半島からは人口の10%もの人びとが海外に流出した。前半の植民地期には、旧日本の政

策による移住や、抵抗としての移住の歴史があり、後半には、貧困からの脱出や、クオリティー・オブ・ライフを求めた移民が目立った。数こそ凄まじいが、いずれも政治経済的な解放を求めたもので、移民の動機としては他の地域の人びとにも共通して広く見られるものだった。

ただ、21世紀に入ってから、状況が一変した。第1に、韓国を後にする国外移民者たちの勢いは、20世紀よりもさらに急増している。ここ10年間には、毎年平均で人口の少なくとも0.3%もの人びとが国外に移民しており、この勢いが続けば21世紀には韓国の人口の30%以上が他国に流出してしまう計算となる。第2に、移民の目的も、20世紀とは大きく違っているとされる。政治的な難民や亡命、経済的な移民は、ほとんどなくなったが、代りに目立つようになったのが、「絶望移民」と呼ばれる国外移民の形態である。

絶望移民とは、1980年代に民主化学生運動を担った世代の人びとが、民主化（1993年）後の現在に韓国の国家や社会に絶望し、国外に移民することであり、2001年にはすでに大手新聞紙上で話題となった。ここで「絶望」といわれるものは、次にあげるような感情の総体とされる。第1に、青春を運動に費やしたにもかかわらず、その代価を得られていないという損失感があげられる。第2に、民主化前に運動勢力が強く批判していた貧富の格差や権威主義が、民主化後に一部でむしろ助長されているという敗北感がある。第3は、民主化運動が終わったことで、ハビトゥスとしての闘争行動の矛先を失くしたという喪失感である。第4に、この世代が独特の感情や文化をもつ集団として社会から異化されたり、逆にみずから社会に溶け込みたがらないという、他の世代からの疎外感がみられる。

太田は、こうして世代が韓国国内のあらたな社会分化として顕在化している点に着目し、文化人類学的な視座から韓国の政治文化を研究してきた。そのなかでは、大韓民国という国家の政治史や韓国社会の社会史の文脈を雄弁に語りうる文化的な現象として、しばしば絶望移民の存在にも言及してきた。また、社会内集団が集会的感情を政治的にもちいているという側面から、単一民族的で内部葛藤がみえにくい韓国の社会文化を、人類学的な政治文化研究の議論に節合させることにも成功してきた。

今回の調査研究では、彼／彼女らが移民後に経験している社会生活、母国感情、世代対立についてフィールドワークをおこなった。つまり、既存の社会に絶望した者どうしがどのように人間関係を結び、絶望させた社会（母国社会）との関係をどうやりくりし、絶望に共感しない人びととの軋轢をどうやって乗り越えているのかという、移民後の彼／彼女らの日常的な政治実践をひもといた。この意味で、今回の調査研究は、韓国の政治文化研究に寄与するためのものである。

また、これと同時に太田は、米国の人類学界においてセンターとしての役割を担ってきたアメリカ自然史博物館の研究者たちと議論を重ねながら、この独特の移民現象のメカニズムを解明しようとした。この意味で、今回の調査研究は、太田がこれまでの行ってきた研究を、移民研究という新たな方向に発展させるための追跡調査であり、先行研究のない絶望移民に関する萌芽的研究でもあった。1960年代生まれを中心とした韓国系の人びとに独特の絶望移民という行為は、移民研究の分野において旧来から定式化されてきた移民の動機の類型論からいって、どの類型にも当てはまらないものであり、研究者たちの関心を呼んでいる。「絶望移民」の移民動機や移民後の生活を明らかにした本研究は、今後人類学的な移民研究の進展にも寄与するものと期待される。

リーダーシップ支援経費による事業・調査

新広報用ポスター掲載の標本資料の展示

概要：2011年度末に作成した新広報用ポスターの広報効果を高めるため、ポスターに掲載されている標本資料をオセアニア展示場入り口付近に常設展示した。ポスターに掲載された標本資料に興味を示した来館者が実物を観覧することができることによって、本館の展示に対してより一層の興味をもってもらえるようになった。

学術情報リポジトリ運用指針の多言語翻訳

概要：学術情報リポジトリの運用指針は、日本語版、英語版、スペイン語版、ドイツ語版、フランス語版、ロシア語版、中国語（簡体字・繁体字）版、韓国語版が作成されWeb上で公開されている。このうち翻訳の見直しなど英語版の精査がおこなわれたため、英語版をベースとして作成されているスペイン語、ドイツ語、フランス語、ロシア語の各版の再翻訳をおこなった。

学術情報リポジトリの運用方針は、そのWebサイトから誰でも読めるものであるが、本館のように多言語で運用方針を公開している機関は他に無い。今回の翻訳により、本館の学術情報リポジトリがどのような方針で構築され、公開されているかを正しく、広く世界に広報できるようになった。

平成24年度 外国調査研究旅費報告書

共同研究「梅棹忠夫モンゴル研究の学術的研究」の国際化に関わる中国内モンゴル調査

申請者：小長谷有紀（民族社会研究部教授）

概要：国立民族学博物館では梅棹忠夫の残した資料について、民族学・文化人類学の歴史を記録する学術アーカイブズとして整理を進めており、共同研究「梅棹忠夫モンゴル研究資料の学術的利用」はさらにそれを分析して公開する目的をもつ。この共同研究を進めるにあたっては、調査対象地域の現地研究者との研究協力が必要であり、中国内蒙古大学とは国際協定のもと協力を得る環境は整っている。

今回は、事業レベルの協定を締結し具体的な作業を開始することにより、共同研究の国際化という本館の課題を実現する。具体的には、北京では中央民族大学および社会科学院で聞き取り調査、フフホトでは内蒙古大学の学術的支援による内蒙古博物館資料調査をおこない、通遼では内蒙古民族大学の学術的支援による民族博物館資料調査及び、牧畜民宅での資料調査をおこなった。

東日本大震災被災地復興支援のための情報の収集と整理

申請者：林 勲男（民族社会研究部准教授）

概要：2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震とそれによる津波、さらには福島第一電子力発電所の事故による被災地および被災者に対し、民博による支援の在り方を検討するための情報収集と整理を実施する。

本事業では、岩手県・宮城県・福島県内の被災自治体の復興計画並びに実施計画の公開情報および東日本大震災関連の遺構・記念碑・モニュメント・記念公園などの保存・設置・建造をめぐる動きに関してウェブ上の情報を収集し、リストを作成するとともに位置を地図に落とし込む作業をおこなった。その成果を民博HP上からリンクを張り公開することで、情報の活用を広く社会に促すことができた。

東日本大震災被災地における無形文化遺産の復興支援関係資料の緊急収集

申請者：林 勲男（民族社会研究部准教授）

概要：2011年3月に発生した東日本大震災による甚大な被害に対して民博では、有形・無形文化遺産の復興支援をおこなってきており、普代村の鶴鳥（うのと）り神楽、釜石市の虎舞、大船渡市の鹿踊りの装束・道具について、復興制作が進められることとなった。

本事業では6月に開催した研究公演「忘れない絆、絶やさない伝統——震災復興と文化継承を願って」で岩手県大船渡市から招へいた仰山流笹崎鹿踊保存会の仲立（踊り手のリーダー）の衣装・道具一式を復興制作の記録として収集した。衣装・道具類一式を収集するに当たっては現地調査も実施し、製作過程についても詳細な情報を収集し、その調査データは企画展「記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産」に活用した。また同収集資料については「日本の文化」展示の新構築に際して展示をおこなった。

平成24年春季特別展『今和次郎採集講義——考現学の今』

概要：青森県立美術館、パナソニック汐留ミュージアムで開催された「今和次郎 採集講義」展の全資料を展示して多岐にわたる今和次郎の活動を紹介するとともに、民博所蔵・展示資料を併せて取り上げ、本館展示では語り切れない、民族学・文化人類学研究の最前線と民博所蔵資料の豊かさを示し、観覧者に、今和次郎の活動と民博の諸活動を再発見してもらう特別展を開催した。

本事業では、展示施工・資料輸送及び演示・広報物作成、開幕時のオープニングセレモニーをおこない、開幕後は、展示運営と同時に、シンポジウム等のイベント開催、展示記録としてパノラマムービーの作成をおこなった。閉幕後には撤去及びその後の青森県立美術館・パナソニック汐留ミュージアム各借用先への資料返却をおこなった。

研究公演『忘れない絆、絶やさない伝統——震災復興と文化継承を願って』神戸会場

概要：本事業では、東日本大震災で被災した大船渡市の仰山流笹崎鹿踊保存会を招き、阪神・淡路大震災で甚大な被害を受けた神戸市長田区において研究公演を実施した。本研究公演は、東日本大震災被災地の無形文化遺産に関する調査研究とそれに基づく支援の成果を広く紹介するため実施され、以下の成果をあげた。

- ・生活と密接に結びついた民俗芸能の被災とはいかなるものか、その復興にはどのような条件が必要かを示しながら、東日本大震災被災地の長期的な復興過程に継続的な社会の関心を促した。
- ・神戸、東北の2つの大災害被災地であることによるこれまでの支援／受援関係を、共に復興を目指すという新たな「つながり」へと変化させる1つの契機となった。

- ・民博が支援に対する社会的役割を果たそうとの積極的なメッセージを約2,000人の参加者をはじめ、社会に発信した。

夏のみんぱくフォーラム2012関連連続講座『博物館にさわる』

概要：本事業は、2012年3月にオープンした新情報展示（探究ひろば）を広報するため企画された新情報展示PR事業「夏のみんぱくフォーラム2012 「知りたい、触れたい、調べたい——『みんぱく流』探究のすすめ」の一環として実施した連続講座であり、「世界をさわる」コーナー新設のキャンペーンとして、幅広い角度から「さわる展示」の魅力と可能性を来館者に伝えるため6月～8月の土曜、祝日の午後6回の講演とワークショップを実施した。

本事業の実施により、来館者が、情報を集積し、接合し、発信していく空間としての博物館に新たな関心を持ち、その社会的役割について理解を深める機会となるとともに、来館者を新情報展示へと誘導した。

新ヨーロッパ展示PR事業関連研究公演

『神に捧げる響きと民衆の踊り——バッハからバルトークへ』

概要：本事業は、2012年3月にオープンした新ヨーロッパ展示を広報するため企画された新ヨーロッパ展示PR事業の一環として実施した研究公演である。本公演では、新たなヨーロッパ展示に合わせ、クラシック音楽を生み出したヨーロッパの伝統の中で、とくに舞踏音楽を中心とした民衆文化をダイナミックに表現して伝えることとし、バロック音楽の大家と見なされるバッハの音楽における舞踏的要素という観点からクラシック音楽と民衆文化との関連を提示した。

本公演の実施により、来館者が、解説者による古楽、バロック音楽の説明とともに、第一線で活躍している音楽家による演奏を体験することで、音楽を通してヨーロッパの歴史と文化への関心と理解を深める機会になるとともに、来館者を新ヨーロッパ展示場へと誘導した。

写真で見る東日本大震災と被災文化遺産のレスキュー

概要：本事業は9月開催の企画展『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』で使用した写真パネルを用い、本企画展のプレ展示をかねて実施した。実施にあたっては、東日本大震災において人間文化研究機構の一員として活動した国立民族学博物館、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館の写真パネルとともに、東北太平洋沖地震被災文化財等救援委員会の現地本部が置かれた仙台市博物館で開催した震災復興パネル展の写真展示をおこなった。

この展示により、9月27日より開催の企画展「記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産」の効果的な広報活動をおこなうと共に、昨年度実施した民博をはじめとする人間文化研究機構3機関及び民博教員が携わった愛 deer プロジェクト東北地方への支援活動を来館者に解説することができた。

夏休み観覧無料企画『世界の夏を楽しもう』

概要：夏の節電対策に対する取り組み「7/21～8/26の観覧無料化」をより効果的に実施するため、小中学生及び家族連れを主な対象として、夏の楽しい過ごし方や涼の取り方などを紹介した。

世界各地の夏の過ごし方や涼の取り方などを教員が展示場で話す「真夏サロン」、涼を感じる館内の展示資料をめぐるワークシートを作成することを中心に、ものづくりワークショップなど「夏」をテーマにした各種イベントを通して、世界の文化への関心と理解を深める機会となるとともに、民博の魅力を広く社会にアピールすることで館の知名度を高めることができ、来館者の増加につながった。

中国展示にかかる時空間画像データ表示装置の開発

申請者：野林厚志（研究戦略センター教授）

概要：本事業は、これまでに民博に蓄積されてきた画像データを活用し、現地社会が変容していく動態を時間軸と空間軸にそって可視化させるためのデータ表示プログラムを開発するものであり、特別展「みんぱくキッズワールド」の携帯型展示資料情報表示端末、特別展「ウメサオタダ展」のPhotoviewer、本館展示場「探究ひろば」のイメージファインダーでの開発経験を十分に生かし、それらを拡張、進展させた連続性を持ったものである。

本プログラム開発により、本館教員の研究、調査活動を通じて蓄積されてきた中国地域に於ける民族誌画像データを、撮影年、民族、撮影された主題、背景にもとづき、分類、検索して表示することが実現し、

画像資料が持つ学術資源としての価値を高めるとともに、将来的に蓄積されていく新たな資料と連動させることによって、時代と空間について拡張性をもったデータベースとして学術研究にきわめて有効なツールとなることが期待できる。

『鵜鳥神楽——みんぱく公演』

申請者：杉本良男（民族文化研究部教授）

概要：みんぱくでは震災後速やかに被災地支援の方針を打ち出し、有形・無形の文化遺産の復興支援を中心に活動を展開しており、その取り組みの一環として連携展示「記憶をつなぐ——津波被害と文化遺産」を開催したが、本公演ではその関連イベントとして、民博施設内で鵜鳥神楽の実演をおこなった。

この公演により、展示内容についてより理解が深まる機会となり、また、これまで伝承されてきた三陸沿岸部の文化を実際に見て、触れ合うことで、来館者に東日本大震災についての関心をもってもらうことができた。

日本の文化展示におけるつくりものコーナーの構築等

概要：2012年度は日本展示場の祭りと芸能、日々の暮らしが新構築の対象であり、祭りや芸能のセクションで最大の新構築となるコーナーの作りものの展示においては、熊本県山都町の巨大な造り物「金剛力士像」を中心に、穀類や野菜を材料としてつくられる富山県福岡町のつくりもん「蘭陵王」、瀬戸物を材料とした島根県平田の平田一式飾り「義経と弁慶」を展示した。

これまでの祭りや芸能関係の展示では、神事中心に構成されていたこともあり民衆の造形感覚や創作力を必ずしも十分に引き上げられてこなかったが、各地の祭事において人びとが造形に様々な趣向を凝らしたつくりものを展示することで、来館者に対してモノの持つ迫力や造形感覚、創作力がより伝わる展示が実現した。

新ヨーロッパ展示関連みんぱく映画会

概要：本事業は、2012年3月にオープンした新ヨーロッパ展示を広報するため企画された新ヨーロッパ展示PR事業の一環として実施した映画会である。

作品の選定にあたっては、ヨーロッパ展示が取りあげたヨーロッパの現状に関わるテーマとして「移民と労働者」をとりあげ、ヨーロッパの多様な歴史・文化・信仰から生み出された生活様式、世界を変えることになった近代の産業革命以後の文化、グローバル化した現代の人の移動と文化の交流が生み出す想像力を実感し、ヨーロッパ社会と文化への関心と理解を深める機会になるとともに、来館者を新ヨーロッパ展示場へ誘導する効果を生み出すことができた。

南部藩壽松院年行司支配太神楽みんぱく公演に係る撮影業務委託等

概要：東日本大震災で被災した文化遺産レスキュー活動を通じての民博の被災地支援について広く知ってもらうため、企画展『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』の関連事業として神楽公演を実施するにあたり、そのビデオ撮影及び写真撮影を委託した。これにより、今後の民博の研究・教育活動及び広報活動に活用可能な本公演の記録映像及び記録写真を収録することができた。

新ヨーロッパ展示PR事業関連 パンセミナー

概要：今回のパンセミナーでは「ヨーロッパ展示」リニューアルの記念イベントの一環として、2013年1月から3月にかけて、ヨーロッパ各地に根づくパン文化を4回にわたり紹介した。毎回のパンセミナーでは、フィンランド、ルーマニア、ドイツ、イタリアの特色あるパンと文化や宗教とのかかわりについて、各地のパンを味わいながら、民博研究者とゲストの話を参加者が聞いた。

本セミナーを通してヨーロッパのパンと文化や宗教とのかかわりを実感し、ヨーロッパ文化への関心と理解を深める機会となったと同時に、参加者をヨーロッパ展示場へ誘導する効果を生み出した。

梅棹資料室整備

申請者：杉本良男（民族文化研究部教授）

概要：情報システム課事務室の第1計算機室への移転に伴い、空き室となった本館3階事務室および映像機器利用コーナーを「梅棹資料室」として使用するため、床・天井等の必要な整備をおこなった。

本整備により、「梅棹資料室」の床面積は約2倍となり、梅棹資料の集約、整理保存管理が容易におこなうことが可能となった。また、梅棹資料に一部占有されていた「みんなく準備室」及び「みんなく図書室書庫」は本来の目的に沿った利活用が可能となった。

スマートフォン利用者に対するあらたな広報手段の開発

申請者：飯田 卓（民族社会研究部准教授）

概要：スマートフォン用専用アプリの開発を通して、展示者側と利用者側をつなぐ新たな仕組みのあり方を模索する。民博ではまだ実施していないスマートフォン利用者向けのサービスを、特別展開催に関連したかたちで実験的に実施した。

スマートフォン利用者は、特別展に関する情報をいつでもどこでもアプリを通じて享受し、特別展へのアクセスが容易になっただけでなく、展示者側もアンケートを通じて利用者からのフィードバックを容易に収集することができた。今後は、特別展期間中の利用状況を分析することで、より効果的な普及を期待できる。

（その他、館の整備、運営などに関するもの15件）

みんなく研究懇談会

第240回 2012年6月27日

伊藤敦規 「民族学博物館とソース・コミュニティとの標本資料情報協働管理について」

第241回 2012年7月25日

川瀬 慈 「民族誌映画制作における映像ナラティブの探求」

第242回 2012年9月26日

河合洋尚 「中国人類学における漢族研究の動向」

第243回 2012年10月24日

曹 建南 「日本における超自然的茶の文化」

第244回 2012年11月21日

宮本万里 「『環境にやさしい我々』という自画像および主体をめぐる文化の政治について——現代ブータンの国立公園の事例から」

第245回 2012年12月19日

Gordan Nikolov “Folk pottery in Macedonia: Field experiences”

第246回 2013年1月23日

加賀谷真梨 「＜地域共同体＞の再定位に挑む——沖縄離島社会における高齢者福祉の展開に着目して」

第247回 2013年2月27日

松本雄一 「“周縁”社会における文明の初期形成——アンデス形成期の事例から」

2-2 外部資金による研究

科学研究費補助金による研究プロジェクト

2012年度科学研究費補助金 採択課題一覧

区分	種目	研究課題	研究代表者	研究年度
新規	基盤研究（A） 一般	世界の中のアフリカ史の再構築	竹沢尚一郎	2012 ～2015
	基盤研究（A） 一般	アラブ世界の都市部中流層文化とアラビアンナイト ——エジプト系伝承形成の謎を解く	西尾哲夫	2012 ～2016
	基盤研究（B） 一般	劣化の進んだ図書・文書資料の長期保存に向けた大量強化法の開発	園田直子	2012 ～2014
	基盤研究（B） 一般	映像を用いた東南アジアのゴング文化の音楽人類学的研究	福岡正太	2012 ～2014

新	基盤研究 (C) 一般	博物館における全天周科学映像の開発および評価に関する人文・社会学的研究	松岡葉月	2012 ～2014	
	若手研究 (B)	中古品と非正規品の越境取引にみる現代アフリカの消費文化に関する研究	小川さやか	2012 ～2015	
	若手研究 (B)	現代エジプトのオルタナティヴ・モダニティとしての空手実践に関する社会人類学的研究	相島葉月	2012 ～2015	
	研究活動スタート支援	ベトナム中部地域におけるゴング文化の動態——楽器の製造・流通に着目して	柳沢英輔	2012 ～2013	
	研究活動スタート支援	生理用品の流入による女性の身体観の変容：パプアニューギニアの事例から	新本万里子	2012 ～2013	
	研究活動スタート支援	現代沖縄の高等教育機関における琉球芸能の継承と創生に関する研究	呉屋淳子	2012 ～2013	
	規	研究成果公開促進費 (学術図書)	ブルガリアにおけるヨーグルトをめぐる諸言語の生成と展開	マリア・ヨトヴァ	2012
		特別研究員奨励費	タンザニアにおける狩猟採集民の生業複合に関する研究	八塚春名	2012 ～2014
		特別研究員奨励費	民族的モノの再生と保存に関わる人類学的研究——トルコ絨毯の修繕と展示を中心にして	田村うらら	2012 ～2014
		特別研究員奨励費	タイにおける仏教僧ネットワークにみるコミュニティの編成過程に関する人類学的研究	岡部真由美	2012 ～2014
	特別研究員奨励費	内モンゴルにおけるシャマニズムと民間医療に関する文化人類学的研究	小長谷有紀 Caijilahu	2012 ～2014	
継	基盤研究 (S)	権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築	關 雄二	2011 ～2015	
	基盤研究 (A) 一般	モンゴル・中央アジアにおける社会主義的近代化に関する比較研究	小長谷有紀	2009 ～2013	
	基盤研究 (A) 一般	物質文化を通じた新たなアフリカ像の構築——国際協働による在来知と外来知の体系的検証	吉田憲司	2009 ～2012	
	基盤研究 (A) 海外	大規模災害被災地における環境変化と脆弱性克服に関する研究	林 勲男	2008 ～2012	
	基盤研究 (A) 海外	ギャロン系諸言語の緊急国際共同調査研究	長野泰彦	2009 ～2012	
	基盤研究 (A) 海外	熱帯地域における農民の家畜利用に関する環境史的研究	池谷和信	2009 ～2012	
	基盤研究 (A) 海外	ロシア極東森林地帯における文化の環境適応	佐々木史郎	2009 ～2012	
	基盤研究 (A) 海外	熱帯高地における環境開発の地域間比較研究——「高地文明」の発見に向けて	山本紀夫	2011 ～2015	
	基盤研究 (B) 一般	マダガスカルにおける森林資源と文化の持続——民族樹木学を起点とした地域研究	飯田 卓	2010 ～2012	
	続	基盤研究 (B) 一般	中東およびヨーロッパにおける驚異譚の比較文学的研究	山中由里子	2010 ～2014
		基盤研究 (B) 一般	社会的包摂のための実践人類学的研究	鈴木 紀	2011 ～2013
		基盤研究 (B) 海外	北アメリカ地域における先住民生存捕鯨と先住権	岸上伸啓	2009 ～2013
		基盤研究 (B) 海外	東アジアにおけるコリアン・ネットワークの人類学的研究	朝倉敏夫	2009 ～2012
		基盤研究 (B) 海外	中国の「国境文化」の人類学的研究	塚田誠之	2010 ～2012
		基盤研究 (B) 海外	台湾原住民族の民族分類と再編に関する人類学的研究：学術、制度、当事者の相互作用	野林厚志	2010 ～2013
		基盤研究 (B) 海外	旧スペイン領南米における集住政策と先住民社会へのその影響の地域間比較	齋藤 晃	2010 ～2012

	基盤研究 (B) 海外	東南アジア大陸部におけるコミュニティ運動	田辺繁治	2011 ～2013
	基盤研究 (B) 海外	インド音楽・舞踏のグローバル化に関する総合的研究	寺田吉孝	2011 ～2013
	基盤研究 (B) 海外	南日本・東南アジアの野生サトイモの民族植物学的・遺伝子学的緊急研究	Peter J. Matthews	2011 ～2013
	基盤研究 (B) 海外	宗教と移民のアイデンティティ・共生： 南アジア系ディアスポラを事例として	辻 輝之	2011 ～2014
	基盤研究 (C) 一般	移民女性の言語問題——ハンディ克服のための言語習得戦略と 言語支援とのかかわり	金 美善	2010 ～2012
	基盤研究 (C) 一般	21世紀の市民運動に関する文化人類学的研究 ——ベルリン外国人集住地区の事例	森 明子	2010 ～2013
	基盤研究 (C) 一般	アジア、ヨーロッパ、アフリカに関わるテキスタイル・グロー バリゼーションの研究	吉本 忍	2011 ～2013
	基盤研究 (C) 一般	現代中国の人々の生活実践に関する人類学的ライフヒストリ ー・アプローチ	韓 敏	2011 ～2013
	基盤研究 (C) 一般	瀬戸内海及び西日本における多島海世界の民俗芸能の研究	笹原亮二	2011 ～2014
継	若手研究 (A)	グローバル化時代の国籍とパスポートに関する文化人類学的研 究	陳 天璽	2010 ～2013
	若手研究 (B)	伝統的技術の戦略的継承法 ——現代インドの手工芸文化を中心とした民族芸術学的研究	上羽陽子	2010 ～2012
続	若手研究 (B)	実業家・富田儀作の高麗青磁復興事業を事例とした植民地のエ ージェントの人類学的研究	太田心平	2010 ～2012
	若手研究 (B)	オセアニアの紛争に関する文化人類学的研究： フィジー諸島共和国の事例から	丹羽典生	2010 ～2012
	若手研究 (B)	ブータンにおける環境保護行政と村落社会の価値体系の再編に 関する政治人類学的研究	宮本万里	2010 ～2013
	若手研究 (B)	東南アジア大陸部における焼畑の変容過程の比較研究	増野高司	2011 ～2013
	若手研究 (B)	チャム系住民とイスラームの関係に関する地域間比較研究	吉本康子	2011 ～2013
	若手研究 (B)	生産現場における人とモノの関係性にみる社会主義経験の多様 性と普遍性	風戸真理	2011 ～2014
	特別研究員奨励費	聖地におけるスピリチュアルな体験と癒しの人類学的研究 ——現代のイギリスを事例に	河西瑛里子	2010 ～2012
	特別研究員奨励費	東アジア古代国家形成期における織物文化の特質に関する民族 考古学的研究	東村純子	2011 ～2013
	特別研究員奨励費	民族誌記述による一般歌掛け論の人類学的構築	梶丸 岳	2011 ～2013
	特別研究員奨励費	互助実践の外延的拡大とその位相 ——ラオス北西部と奈良県中山間地域における比較研究	森 一代	2011 ～2013

【新規】

基盤研究 (A) 一般

世界の中のアフリカ史の再構築

代表者 竹沢尚一郎

目的・内容

本研究の目的は、経済、政治、交易、宗教、生態、考古などの諸分野を専門とし、地域的にもアフリカ全土をカバーする研究者の結集により、『アフリカの歴史』全5巻を完成させることにある。

歴史研究は当該の諸社会の深い理解のための前提条件であるが、わが国のアフリカ史研究は立ち遅れた状況にある。そのため、上記の目的の達成のためには、多数の研究者による長期にわたる共同研究が不可欠である。

本研究はこうした観点から構想されたものであり、本研究が実現されたなら、アフリカ史研究はもちろん、文化

人類学、地域研究、国際関係論、政治学、開発研究などの諸分野の一層の発展のために多大な貢献をなすとともに、とりわけ文化人類学的なアフリカ研究をさらに発展させるための基礎的資料となるはずである。

活動報告

本研究の最終目的である『アフリカの歴史』全5巻を世界的に評価される水準にするには、1) 斬新な問題意識の構築と、2) 未公刊史料の開拓、および3) 世界各国の研究者との緊密な連携が不可欠である。

本年度は、まず本研究に参加する研究者全員が参加する研究会を組織して、徹底した討議を通じて1)の斬新な問題意識の構築をめざした。

また、2)の未交換資料の開拓のために、各研究者が現地に赴いて研究を進めた。具体的には、アフリカ各国での考古学の発掘調査の実施やその最新の知見の吸収、各地域の資料館や文書館での一次史料の入手、口頭伝承の収集とその分析につとめた。

さらに、3)の世界的な研究ネットワークの拡充に関して、各自がこれまでに築いたネットワークの連携を強化した。

本研究はアフリカ全土をカバーし、なおかつ通時的にも、歴史の始まりから現代までをカバーするものであるため、以下の分担を行った。

地域別分担 北アフリカ担当=大稔哲也、高宮いづみ（連携研究者）。東アフリカ担当=鈴木英明、松田素二（連携研究者）、富永智津子（研究協力者）。西アフリカ担当=竹沢尚一郎、坂井信三。中部アフリカ担当=杉村和彦、武内進一（連携研究者）。南部アフリカ担当=北川勝彦。

分野別分担 政治史=松田素二、武内進一。経済史=北川勝彦、富永智津子、武内進一。対外交渉史=竹沢尚一郎、大稔哲也、富永智津子。生態史=杉村和彦。農耕史=杉村和彦、竹沢尚一郎。オーラルヒストリー=坂井信三、松田素二。ジェンダー史=富永智津子。考古学=竹沢尚一郎、鈴木英明、高宮いづみ。

テーマ的には、以下の課題を念頭に置きながら、各研究者が研究を遂行した。1) 新たな歴史資料の発掘（考古学、碑文、旅行記、行政文書、植民地資料、口述記録等）。2) アフリカ史記述のための単位の設定。3) 世界の中のアフリカ史記述の実現（中東、ヨーロッパ、南北アメリカ、アジアとの関係）。4) オーラルヒストリーを歴史記述に採用するための手続きの明確化。5) 環境変化と社会経済システムの変容の関係を重視。6) アフリカ史研究の意義の明確化（世界史・人類史の視点からの明確化）。

本年度は、このうちとりわけ1)、2)、3)に重点を置いて、研究を進めた。

基盤研究 (A) 一般

アラブ世界の都市部中流層文化とアラビアンナイト——エジプト系伝承形成の謎を解く

代表者 西尾哲夫

目的・内容

中世の中東で成立し、世界文学となったアラビアンナイト（千一夜物語）は、シリアで私家本として伝承されていたが、近世エジプトにおける都市部中流層の台頭にとまなう中間アラビア語の誕生がきっかけとなって、現在のようになった。

本研究では、新発見の写本も含めて従来は未研究だったエジプト系全写本の分析によって、その編集過程と言語的特性を明らかにするとともに、相反する価値観が併存してきた理由ならびに異文化交流による成立過程を解明する。また中間アラビア語の発生と伝播を通じて顕著にみられる、アラブ世界に特徴的な言語社会的位相を分析し、フェイスブック革命に代表される社会変動メカニズムを解明する。

活動報告

本研究では、前述した目的を達成するために、アラビアンナイト形成に関する新仮説、1) エジプトではシリア系物語群を核とする複数の伝承が並行的に存在し「いくつものアラビアンナイト」が流布していたこと、2) エジプト系伝承形成には中流層の文字文化をめぐる社会変化が関係していること、3) 複数伝承併存状況がガラン訳以降に終焉しヨーロッパ化された文学伝統の中で標準化が進行したことを実証するため、具体的に以下の研究項目を実施した。

- 1) 文学伝統の地域民衆化で形成されたエジプト系写本群の分類と系統の分析として、①全エジプト系写本中の物語構成情報データベースの作成、②新発見の非標準写本の校訂出版と系統の分析、③非標準伝承になる物語の系統分析を実施した。これらは全期間にわたる研究であり、順次他の写本を対象とする。
- 2) 地域民衆の口語が文字化された中間アラビア語の歴史の実態と民衆文学変容の分析として、①「カルカット第二版」の計量文献学的分析と民衆文化語彙辞典の編纂→全期間、②国民共通語としての中間アラビア語使用実態の分析とそのための海外調査→2月～3月のべ30日、③国民共通文化形成における民衆文化の現代的変容の分析とそのための海外調査→2月～3月のべ30日を実施した。

- 3) アラビアンナイトをめぐるヨーロッパの文学伝統の物語伝承への影響の比較分析として、①マルドリユス遺贈コレクションの調査とマルドリユス版形成過程の分析とそのため海外調査1月～3月のべ30日、②アラブ世界での再受容と文学伝統の関係の分析とそのため海外調査→2月～3月のべ30日、③日本での受容と文学伝統の関係の分析とそのため国内調査→1月～2月を実施した。

得られた結果を基にして、研究会を開催し、研究情報を研究分担者間で共有し、研究計画全体の実施方法に関する検討を行う。さらに得られた成果を取りまとめ学会発表や論文執筆を行う。

※アラブ世界は現在、広域にわたって民主化運動のさなかにあり、情勢が不安定である。従って、上記の海外調査は調査者の安全を考慮し、調査地域や日程を変更する可能性がある。この件に関しては研究会等で十分に検討する。

基盤研究 (B) 一般

劣化の進んだ図書・文書資料の長期保存に向けた大量強化法の開発

代表者 園田直子

目的・内容

本研究の目的は、日本の酸性紙研究で未解決となっている課題、実践レベルでの紙資料の大量強化処理と、現在稼働している気相型の脱酸性化処理法の弱点克服、これらに新たな展開を提示することにある。前者では、強化剤の重合度や溶剤を再検証するとともに、柔軟剤や保湿剤の添加を検討し、手法の最適化をはかる。また、新たに紙表面にナノ繊維を紡糸して補強する可能性を検討する。後者では、従来の脱酸性化処理法（ドライ・アンモニア・エチレン法）の改良法として、酸性物質の中和剤を揮発させて酸性紙に直接付着させる手法を検討する。本研究では、技術改良の成果を自然科学的に検証したうえで、開発した手法の文化財への適用の判断までを総合的に行う。

活動報告

本研究は、日本の酸性紙研究で未解決となっている課題のうち、1) 実践レベルでの紙資料の大量強化処理、2) 既存の気相型脱酸性化処理法の弱点克服、これらに新たな展開を提示することを目的としている。

- 1) 紙資料の強化処理の一手法であるフリース法を科学的に検証した。フリース法とは、脆弱化した紙資料の表面に新たな強化繊維層を薄く均一に貼り付ける方法である。強化繊維により新たな強度を得ることができ、既にドイツでは実用化されている。しかしながら、薄い繊維層を使用しても表面を覆ってしまうため、文字情報が読みにくくなるという欠点をもつ。そこで、①強化繊維層の厚さ、②強化繊維のバルブ化条件、③強化繊維の種類、これらを検討し、劣化抑制効果を検証した。また、④楮の薄紙の表打ちによる強化法を併せて試験し、劣化抑制効果を比較した。結果、フリース層の厚さは坪量 2 g/m^2 程度であれば比較的紙質劣化を阻害することなく、強化物性が最適であることが分かった。楮繊維のバルブ化条件として、ヘミセルロース分や微細繊維の水洗除去の有無を比べたが、顕著な差異は認められなかった。強化繊維の種類では、楮、三桠、雁皮のいずれにおいても強化効果が確認できた。
- 2) 従来のドライ・アンモニア・酸化エチレン法の改良法として、酸性物質の中和剤であるエタノールアミン類の一種ジエタノールアミン（DEA）を揮発させ、酸性紙に直接付着させる方法を検討した。DEAを用いた気相処理により、良好なpH上昇効果が得られることが分かった。また、脱酸性化処理後の試料は、通常環境条件下の保存において、pHの低下はほとんど認められなかった。DEA処理は、 105°C 及び $80^\circ\text{C}/65\% \text{ r.h.}$ の加速劣化処理条件において、酸性上質紙の耐折強さ、ゼロスパン引張強さの劣化抑制効果を示した。

上記結果をもとに、1)と2)のそれぞれにおいて次年度の研究を進める準備が整った。

基盤研究 (B) 一般

映像を用いた東南アジアのゴング文化の音楽人類学的研究

代表者 福岡正太

目的・内容

東南アジア諸地域において、ゴングは、霊的な力を備えた音具、楽器、権力を示す財産、交易品などとして重要な位置を占めてきた。この研究は、東南アジア諸地域のゴング文化の特徴と相互の関連を、現地調査と映像記録作成を通じて明らかにし、東南アジアのゴング文化を総合的に理解することを目的としている。特に、1) これまで研究の少なかった地域のゴング文化の調査、2) 各地におけるゴング製作と調律技術の比較、3) 主にゴング流通からみた地域間の相互関連の解明に重点をおく。また、映像を重要な研究手段として位置づけ、現地における映像上映と意見交換を通じて、研究成果をフィードバックし、ゴング文化を支える人びととともに東南アジアのゴング文化についての新たな知を構築する試みをおこなう。

活動報告

2012年度には、1) ベトナム中部、ラオス南部、タイ、2) フィリピン、3) ジャワ島、バリ島、ロンボク島にて調査撮影等をおこなった。

- 1) ベトナム中部及びラオス南部は、カンボジア北部やフィリピン・ルソン島とともに、平ゴングを用いるアンサンブルを特徴としている。これらの地域のゴング演奏等を調査撮影するとともに、ホイアン近郊の村にて、現在も平ゴングが製造されていることを確認し、調査撮影をおこなった。ラオスやカンボジアにおいては、これまで平ゴングの製造を確認できていないが、今後、これらの地域が平ゴング流通においてどのようにつながっているのかを明らかにする端緒となるだろう。また、タイにおける小型こぶつきゴング製造過程の調査撮影の成果と合わせて、他地域におけるゴングの製造や調律の技術との比較研究の素材としても重要である。
- 2) フィリピンは、治安上の問題により、ゴング・アンサンブルをもつ地域の調査撮影は困難な状況にあるため、過去に国立民族学博物館が撮影した映像の上映会をマニラ等においておこなった。上記地域を出身地とする人々の参加を得て、彼らのコミュニティにおけるゴング・アンサンブルの重要性を明らかにするための手がかりとすることができた。
- 3) ジャワ島、バリ島、ロンボク島では、ゴングの製造と流通の過程について、調査撮影をおこなった。特に大型こぶつきゴングの製造については、ジャワ島中部が東南アジア島嶼部のセンターとして機能していることが明らかになってきた。一方、小型ゴングの製造や調律作業等は、ゴングが使用される地域でおこなわれる傾向が強く、ゴング関連楽器の製造と流通における分業が見られることも明らかになっている。また、マレー半島からジャワ島へのゴング製造の注文も多いことが明らかになり、今後、マレーシアにおける調査により、島嶼部のゴング流通やゴング文化の動態を明らかにすることができるだろう。

基盤研究 (C) 一般

博物館における全天周科学映像の開発および評価に関する人文・社会学的研究

代表者 松岡葉月

目的・内容

代表者は一般の人々が人文あるいは自然科学の様々な切り口から科学に関心を持てるように、研究者の視点から文理融合の新たな手だてにおいて、天文・宇宙分野の科学映像「誰も知らなかった星座～南米天の川の暗黒星雲」を企画・制作した。さらに宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究所を窓口として普及までの手だてを整えた。

本研究は、この科学映像を全天周映像化し、博物館などのドーム型スクリーンで上映し、全天周科学映像による視聴者への影響・効果を、これまでに成されていなかった人文・社会学的側面から明らかにすることを目的とする。つまり、視聴者の多様な視聴特性を、人間工学的分析ではなく、視聴者の社会文化的背景と心理的、教育的影響との関わりから分析する。さらに、通常の平面版映像の上映効果との比較も踏まえて、全天周映像の特性と視聴者への影響、および研究者の視点からの映像を効果的に伝える方法を明確化する。

活動報告

研究者による全天周映像の制作・普及という国内でも初の試みにおいて、対処すべき課題が明確化できつつあるとともに、博物館・科学館での上映を経て、文理融合の手だてにおける映像の視聴者への影響・効果を人文・社会学的側面から検討するための調査・解析を進めている。本研究では、学術・教育目的の普及の観点から、全天周映像の構成要素（連番画像と音声ファイル）を無償提供しているが、投影ではドームスクリーンの仕様に応じた編集作業を必要とする。上映協力館は編集発注経費を自己負担する事情により、上映協力は編集施設をもつ館が多い傾向がある。また、家族向けの娯楽的内容を好む博物館などが少なく、研究者による学術映像は敬遠されがちでもある。しかし、上映館では幅広い層の視聴者から高評価を得られており、文理融合的観点からの学術映像が、幅広い視聴者に受容されたり、幅広い視聴者に刺激を与えたりする可能性について、各館に理解を得られつつある。

全天周映像の特質は、臨場感や没入感であるが、高精細画像という条件が、必ずしも臨場感や没入感には直結しないことが明らかとなった。視聴者の意見から人的要因（視聴者属性、心理的側面）と、環境要因（元画像画素値、プロジェクター性能、スクリーン径、博物館立地条件）の調査観点が得られ、これらの相互観点から分析を進めている。さらに、全天周映像は通常の平面映像とは異なる視聴環境が生じるため、平面映像との比較を踏まえて視聴特性を分析する必要がある。これまでに双方の投影方法において協力館を得られ、アンケートなどにおいて理解度や満足度などを定量的に評価する方法や、自由記述の言葉から抽出したキーワードを用いた分散分析によって視聴特性を分析しており、年齢や視聴経験から特定の傾向が導き出せつつある。以上の研究成果を博物館学や天文学関係の国内外の学会等で発表している。発表に際し、独自の球形立体表示装置を開発し教育普及を手がけている研究者から、全天周映像ならではの臨場感を見出すための新たな調査指針も得られ、意見交換を図りながら研究を進め

ている。

若手研究 (B)

中古品と非正規品の越境交易にみる現代アフリカの消費文化に関する研究

代表者 小川さやか

目的・内容

中古品（リサイクル品）と非正規品（コピー商品、バッタ品）は、近代特有の消費文化から生みだされた特徴的なモノである。中古品は、産業革命以降の大量生産・廃棄の消費システム（使い捨て文化）から生みだされたモノであり、非正規品はイメージや記号の消費に特徴付けられる消費文化を流用して生みだされたモノである。本研究の対象地域であるアフリカはこの2つの商品の最大の消費地である。

本研究の目的は、先進国や新興国で廃棄／生産され、アフリカ諸国に輸出されているこの2つの商品が、同諸国間を越境交易で循環し消費される課程と、この「モノの履歴」における価値変化の実態を現地調査を通じて明らかにすることにある。また、そこから従来の西欧中心的な消費文化論を、「廃棄から再消費」あるいは「コピーから消費」の世界から再考し、文化人類学の立場から新たな消費文化論を構想することを目指す。

活動報告

中古品・非正規品は、日本をふくむ先進諸国の消費文化（使い捨て文化や、イメージや記号の消費にもとづく消費文化）とふかく関連して生みだされた特別な商品である。本研究の目的は、欧米やアジア諸国で廃棄／生産され、アフリカ諸国に輸出されているこの2つの商品が、東アフリカ諸国間を越境交易で循環し消費される過程と、この「モノの履歴」における価値変化の実態を、現地調査を通じて明らかにすることにある。また、そこから従来の西欧中心的な消費文化論を、「廃棄から再消費」あるいは「コピーから消費」の世界から再考し、文化人類学の立場から新たな消費文化論を構想することを目指している。

本年度は、『民博通信』（国立民族学博物館）および学術雑誌『アスティオン』（サントリー文化財団）に古着の流通のしくみとアフリカにおける古着の消費について考察した小論・論文を発表した。ここでは古着輸入の是非をグローバルな経済関係に留まらず、現地の商人および消費者によるミクロな実践に即して検討する必要性を指摘した。また『発展途上国とリユース報告書』（小島道一・福西隆弘編、アジア経済研究所）に、タンザニアの消費者による中古衣料品と中国・東南アジア製衣料品の購買行動を、両製品の品質面や供給システムの違いに着目して比較分析した論文を発表した。

国際学会・シンポジウム等での発表として、7月に南アフリカで開かれた世界史学会において「セカンド・ハンドの歴史」に関する分科会をおこない、中古衣料品の流通システムの変容について発表したほか、2月に国立民族学博物館において国際シンポジウム『布を使う人、布に包まれる身体』（機関研究プロジェクト『布と人間の人類学的研究』（代表：関本照夫））において、アフリカにおける中古衣料品と非正規品（ばちもん）の流通・消費に関する研究発表をおこなった。

若手研究 (B)

現代エジプトのオルタナティブ・モダニティとしての空手実践に関する社会人類学的研究

代表者 相島葉月

目的・内容

中東におけるモダニティの系譜を探求するに際し、「社会階層」は最も有用な切り口の1つである。近年、新自由主義経済の広がりにより、学歴や所得で中流層と下流層を差異化することがより困難になる中、「教養」の有無を指標とする新たな「階層観」が構築されつつある。この文脈において本研究は、エジプトのスポーツ実践に象徴された「身体化された教養」をめぐるポリティクスを、西洋的近代性に代わる、独自のモダニティを創出する試みとして考察する。エジプトを代表する大衆のスポーツである空手道コミュニティ（競技者、指導者、父兄）の事例より、中流層的な倫理観とモダニティの関係性を再考する。

活動報告

2012年度の目標は、エジプトで空手道が「大衆のスポーツ」として受容された歴史的経緯の把握し、空手家コミュニティの形成と発展の過程を考察することであった。国営日刊紙アル＝アハラーム新聞で空手を紹介する記事が初めて掲載されたのが1972年3月に遡ることから、1960年代後半もしくは1970年代初頭から空手の稽古が行われてきたのではないかという仮説のもとにエジプトでの現地調査を始めた。

60歳代の空手家への聞き取り調査を行った結果、1969年頃より上流階級向けの会員制スポーツクラブにて日本大使館職員による空手の稽古が細々と行われていたことが判明した。1971年にブルース・リー主演のカンフー映画『ビ

「ボス」が大流行したのをきっかけに、自己防衛（al-difa' 'an al-nafs）を目的としたスポーツとして空手人気が一気に高まったという。1967年の第三次中東戦争でイスラエルに大敗を期して以来、軍事力の向上のため取り入れられた空手道が「大衆的スポーツ」として認識されるようになった背景には、中国拳法などの格闘シーンを取り入れた香港のアクション映画の流行が深く関わっている。カンフー映画をみてブルース・リーに憧れた者が空手を始めたとはいえ、「東洋」をひとくりにし、日本と中国の格闘技を混同していた様子は見られなかった。カンフー映画の流行が空手の普及に貢献した過程については今後の調査で明らかにしたい。

また、空手の大衆化には政府の青少年教育政策も関わっていたことを裏付ける資料も見つかった。カンフー映画の流行により空手の知名度が向上したとはいえ、空手道の競技者は軍人か高級スポーツクラブの会員である富裕層に限られていた。しかし、1980年代以降に空手が青年及びスポーツ省の推奨スポーツに指定され、公営の文化施設で空手教室が開かれたことが大衆化につながったと言える。

研究活動スタート支援

ベトナム中部地域におけるゴング文化の動態——楽器の製造・流通に着目して

代表者 柳沢英輔

目的・内容

本研究では、東南アジアにおけるゴング文化の総合的な理解に向けた一歩として、ベトナム中部地域におけるゴング文化の動態を、楽器の製造・流通に着目して明らかにする。具体的には、ベトナム中部高原の少数民族村落および中部沿岸部にあるキン族のゴング製作工房において実施する現地調査によって、ゴングの製造・流通の実態を明らかにし、ベトナムのゴング文化の動態について考察することを目的とする。

活動報告

本年度は、ベトナム中部地域におけるゴングの製造と流通の実態について明らかにするため現地調査を行った。現地調査は、2012年10月、2013年2月～3月の間に行った。中部クアンナム省にあるキン族が経営するゴング製作工房においてゴングの製作方法に関する調査を行った。具体的には、ゴング製作職人へ聞き取り調査を行い、ゴングの製作工程をビデオカメラを用いて詳細に記録・分析した。その結果、キン族のゴング製作者は、少数民族ごとに異なる需要に合わせて、ゴングの鑄造に用いる材料の選定や調音などを行っていることが分かった。ゴング製作者は少数民族に直接ゴングを販売する他、国道沿いの路面店でもゴングをはじめとする金属工芸品を販売していることが分かった。また中部ダナン市内の書店において、関連する資料を収集した。

ベトナム中部高原コントゥム省、および、ジャライ省の複数の少数民族村落で、ゴングの所有者、ゴング調律師などに対し、ゴングの取引について聞き取り調査を行った。人々は必要に応じて直接ゴングを売買しており、それらは村落や少数民族の垣根を越えて行われていることが分かった。またジャライ族のゴング調律師が各地域を回って使われていないゴングセットを収集（購入）し、適切な音階に調律して、必要とする村に売却するなど仲買人としての役割を果たしている事例も確認した。

以上より、当該地域におけるゴング製作・流通の実態について、その一部を把握することができた。来年度、現地で収集した資料をもとに学術論文および研究会などで、研究成果を公表する予定である。

研究活動スタート支援

生理用品の流入による女性の身体観の変容：パプアニューギニアの事例から

代表者 新本万里子

目的・内容

本研究は、モノの受容・流通が起こす身体観の変容を、ジェンダーの視点から文化人類学的に考察することを目的とした。具体的には、メラネシアにおける生理用品（ナプキンなど西洋起源の道具）の受容を事例に、月経にまつわる慣行や、その使用による身体観の変容を明らかにすることを目的とした。

月経と出産などの生理的現象を忌避する社会は広く世界各地にみられ、死の不浄などとともに、文化人類学においては「ケガレ」として理論化されてきた。そうした先行研究を踏まえたうえで、メラネシアにおける身体観の変容を、女性たちの生理用品受け入れの経験という次元で考察するために、月経の禁忌が発達したパプアニューギニアの村落を調査地として取り上げ研究を進めていく。

活動報告

本年度は、東セピック州マプリック地区ニヤミクム村において予備調査を実施し、パプアニューギニア大学図書館のほか、マプリック地区で活動している NGO などで資料収集を行った。

調査村では、20代から80代までの女性29名に、これまでに使用した月経処置の道具、使用の仕方、使用感、廃棄

の仕方について聞き取りを行った。その結果、月経処置の道具は、1) 月経小屋のなかに敷いたヤシ科植物の仏炎苞（実を包むように成長する羽状の葉） → 2) 布（仏炎苞の上に敷く） → 3) 布（パンツをはいて固定する）、または4) 生理用ナプキン、というように変遷し、世代間で月経処置の経験が異なることが明らかになった。このうち、1)の月経小屋はすでに現存しておらず（2006年までは確認できた）計測できなかった。月経小屋を使用した経験のある女性から、複数の月経中の女性が一緒に過ごすことがあったこと、直接仏炎苞に座るため肌がくっつくという不快感があったこと、月経中でも森へ行き薪集めなどを行ったこと、泉で頻繁に体を洗ったことなどを聞き取った。女性たちが次第に月経小屋を利用しなくなるのは、ナプキンの普及を要因としており、これらの普及には、流通ルートの確保と学校での保健授業が関連していることも明らかになった。

これまで、月経小屋にまつわる慣行は、その存在こそが知られていたが基礎的なデータの水準で存在していなかった。本年度のデータ収集は、そうしたデータの欠落を埋めるとともに、生理用品というモノの普及と、身体的な感覚、月経についての意識の関係を明らかにするのにつながるものである。

研究活動スタート支援

現代沖縄の高等教育機関における琉球芸能の継承と創生に関する研究

代表者 呉屋淳子

目的・内容

本研究は、高等教育機関に設けられた伝統芸能の教授形態に注目し、伝統芸能が創生されるメカニズムを明らかにすることを目的とする。

現代沖縄の若手芸能実演家たちは、徒弟制の中で芸能を身につけることに加え、高等教育機関でも琉球芸能を修練し、実践的活動を展開している。こうした新しい教授基盤の登場は、従来にはなかった「流派」を越えた美意識とパフォーマンスを身につけた新しい琉球芸能の担い手を創出し、琉球芸能の発展と創造に繋がっている。そこで、若手芸能実演家からの聞き取り、高等教育機関で目指される〈教授システム〉、行政文書の分析から高等教育機関で「琉球芸能」が創生される様相、「伝統」と「創造」のはざままで揺れ動く彼らの琉球芸能の継承をめぐる取り組みと実践の再帰的關係を考察する。これらを通して公的な教育機関で伝統芸能を「教育する」という行為が及ぼす影響を明らかにする。

活動報告

- 1) 沖縄県立芸術大学の琉球芸能専攻を在学または修了した若手芸能実践家のライフストーリーから現代沖縄の伝統芸能の継承に関する実態の分析を行った。その際、沖芸の琉球芸能専攻を修了した若手芸能実践家のライフストーリーから学習者が「継承の主体」となっていく様子に着目した。本研究のキーインフォーマントの協力を得て、「研究所」での活動、彼らが歩んできた芸能人生においてどのように芸を学習し、そして継承者としての自覚を身につけてきたかについて具体的な継承の実態を明らかにした。
- 2) 「研究所」と高等教育機関は、教育形態や継承内容が異なるものの、沖芸に在学または修了した若手芸能実演家らはこの双方の場において芸を磨いた経験を持っている。1)で明らかになったことを踏まえ、それぞれの場における教授の特徴を明らかにし、公的な教育機関で伝統芸能を「教育する」という行為が及ぼす影響について検討した。その成果は、2013年1月の国立歴史民俗博物館で開催された共同研究会で発表した。
- 3) 「伝統」と「創造」のはざままで揺れ動く彼らの伝統芸能の継承をめぐる取り組みと実践の再帰的關係を考察した。その結果、彼らの「二重的な教授の経験」、つまり、従来の修練の場である「研究所」に加え、高等教育機関において芸能を修練は「沖縄らしさ（Okinawaness）」をいかに表現するかという問いに向き合う切っ掛けとなっていた。また、このような経験は、沖縄人としてのアイデンティティを再考する機会ともなっており、芸能を「創造」することにも繋がっていた。

研究成果公開促進費（学術図書）

ブルガリアにおけるヨーグルトをめぐる諸言語の生成と展開

代表者 マリア・ヨトヴァ

目的・内容

- 1) 刊行の目的：ブルガリア研究の空白を埋める

ブルガリアは、冷戦時代の枠組において、東欧のなかでもソ連に最も忠実な国として冷視されてきた。研究面でもソ連圏と同一視され、個別の研究はほぼ皆無であった。こうした背景において本書は、ブルガリアの代名詞でもあるヨーグルトを対象とした初めての文化人類学的研究の成果である。ヨーグルトを主題として、1940年代から現在まで、ブルガリア人の生活文化と国民意識の変容を解明し、従来の研究の空白を埋めることが、本書刊行

の大きな目的である。

2) 刊行の内容：ブルガリアにおけるヨーグルトをめぐる諸言説の生成と展開

本書は、ブルガリアと日本を架橋するヨーグルトをめぐる様々な言説を取り上げ、歴史的に生成されてきた経緯をたどりながら、ヨーグルトが伝統的な食品からグローバルな健康食品、そしてナショナル・アイデンティティを包摂する食品へと変化していく過程を考察した文化人類学的研究の成果である。具体的な考察点は、①科学研究における“ブルガリアヨーグルト”という言説の誕生、②社会主義期における“ブルガリアヨーグルト”の確立、③“ブルガリアヨーグルト”の国際化、④ポスト社会主義期における“ブルガリアヨーグルト”の再帰性、という4点である。

そこから本書では、ブルガリアという小国家がソ連やEUの「属国」ないし「周縁国」として軽視されてきた歴史を背景に、輝かしい言説を包摂するヨーグルトが自己規定のために極めて重要な役割を担っていることを結論として導き出した。また、ヨーグルトのナショナル・アイデンティティ化過程における日本との関わりに注目し、その極めて大きな役割を明らかにした。現在も、グローバルとローカルの対立の中でヨーグルトをめぐる、新たな言説が生まれている。ただし、この複数の声にずれ・対立があるとしても、主体同士の対話の中で相互に影響が見られ、自国文化を称賛する点では共鳴しているところも見出される。本書は、これらの言説を抽出し、ヨーグルトが理想的な自画像を提示する上で、ブルガリアの人々にとっていかに重要な存在であるかを論じている。

成果刊行物

マリア・ヨトヴァ

2012 『ヨーグルトとブルガリア——生成された言説とその展開』 大阪：東方出版株式会社。

特別研究員奨励費

タンザニアにおける狩猟採集民の生業複合に関する研究

代表者 八塚春名

目的・内容

本研究の目的は、アフリカの狩猟採集社会を対象に、これまであまり注目されてこなかった狩猟採集民の生業複合に正面から取り組み、今日のアフリカの狩猟採集社会における農耕の多様な展開を明らかにすることである。このことをとおして、狩猟採集社会をめぐる狩猟採集か農耕かといった二元論を突破し、狩猟採集と農耕のあいだにある人びとの生業実践のグラデーションを明らかにする。近年、狩猟採集民は先住民の議論や文化観光に取り込まれることで、実際の生業実践よりも狩猟採集のイメージばかりが注目されがちだが、本研究をとおして、グローバル化するアフリカ経済のもとで、狩猟採集民がローカルに実践する多彩な生業展開のあり方を提示する。そのために、以下の3つの課題を設定する。

- 1) 狩猟採集社会の農耕実践を把握する
- 2) 土地利用の推移を聞き取りやGIS分析および過去の画像・映像資料を利用して解明する。
- 3) 狩猟採集以外の生業活動をおこなうに至った社会的背景を明らかにする

調査地としては主にタンザニア中央部のサンダウェ社会と北部のハツツァ社会を予定しており、比較のためにカメルーンのピグミー社会とボツワナのサン社会での調査も計画している。以上を総括し、アフリカ狩猟採集社会における狩猟採集と農耕とのあいだのグラデーションを、その実態と背景を含めて明確に示す。

活動報告

本研究の目的は、アフリカの狩猟採集社会を対象に、これまであまり注目されてこなかった狩猟採集民の生業複合に正面から取り組み、今日のアフリカの狩猟採集社会における農耕の多様な展開を明らかにすることである。このことをとおして、狩猟採集社会をめぐる「狩猟採集か農耕か」といった二元論を突破し、両者のあいだにある人びとの生業実践のグラデーションを明らかにしたい。主な研究対象はタンザニアに暮らすサンダウェとハツツァという2民族である。

2012年度は本研究の初年度であり、サンダウェとハツツァの生業に関する一次資料収集を目的として、タンザニアでの3か月半にわたる現地調査をおこなった。ドドマ州チェンバ県において、サンダウェの近年の農耕や狩猟採集に関する動向を把握するとともに、彼らの養蜂に注目してデータを収集した。この現地調査から、養蜂の技術や知識、ハチミツの収量といった基礎情報に加え、養蜂と他生業との関係性や生計における重要性について明らかにした。一方、ハツツァに関する調査はアルーシャ州のマンゴラ地区でおこない、生計維持の仕組みを主に観光業と食事に注目して明らかにした。同時に、同地域に暮らす農耕や牧畜をおこなう人びとにも、生計に関する聞き取りを実施した。以上の調査から、ハツツァ社会における農耕や農作物の位置付け、近隣民族との関係といった点についても、おおよそ把握することができた。

また、国際学会2件、国内学会1件、および複数の研究会での報告をおこなった。

特別研究員奨励費

民族的モノの再生と保存に関わる人類学的研究——トルコ絨毯の修繕と展示を中心にして

代表者 田村うらら

目的・内容

本研究の目的は、トルコ絨毯というグローバルな価値をもつ民族工芸品の再生と保存の営みを、トルコ国内外において仔細に検討することを通して、民族的・ローカルなモノが、生産の文脈を離れて流通し消費される際に、いかにモノが捉え直され、モノが人びとを組織するかを明らかにすることである。さらに、絨毯生産における共同性、絨毯生産者たちの絨毯消費の社会性、絨毯流通における価値の交渉と再交渉という申請者のこれまでの研究と連結させることにより、ローカルなモノの意義を多面的に明らかにし、かつそれらが現代において創造的に再生産され続ける条件の理論化を目指す。なお、より広い文脈における本研究の目的は、以下2点に要約される。

- 1) 第1に、経済人類学と物質文化研究の接点において、人間文化の基層を探る、新たな地平を切り拓くことである。
- 2) 第2に、申請者自身の従来の調査研究を土台として、現代の諸民族文化の多様性に対する、悲観的な消滅の語りと、主体的で政治的な「文化の客体化」の語りを乗り越え止揚することにより、民族手工芸品の新たな存続の可能性を探るという点である。

第2の点を強調するならば、本研究が、販売額や収入の増加などという市場価値と直接的に連動する数字によってのみ測られてきた文化保護／復興のあり方を転換する契機に繋がれば、文化人類学的社会貢献として意義深いことと考える。商品性がローカルな文脈での価値を瓦解させないバランス点を一定程度理論化することに成功すれば、市場経済に従属しすぎず、かつ内発的な創造性を確保しうる、現代的伝統文化のより自律的で（必ずしも市場経済世界における他者を志向しない）創造的な方向性の基礎理論となりうるだろう。

活動報告

日本学術振興会特別研究員（PD）として、上記研究課題に3年かけて取り組むべく、その初年度を、国立民族学博物館（以下、民博）を研究従事機関とし、関本照夫特任教授に受入れをお願いした。当該年度の具体的な研究活動の主なものとしては、理論や事例を中心とする文献研究、論文執筆活動、現地調査、および単著出版に向けた準備作業が挙げられる。

民博においては、関本教授に逐次ご指導を賜ったことに加え、文献収集や共同研究会およびシンポジウム等への参加、関連企画展の観覧などを通して、有意義な意見・情報・資料などを得た。特に、「モノの人に対するエイジェンシー性」への再考を促す契機を得られたのは貴重であった。

成果発表の最大のもは、単著出版である。8月頃、期待より約1年早く出版助成が内定したため、予定を繰り上げて単著を年度内に出版するに至った。その準備過程で、文献等の精読等とおしてさらに理論的な鍛錬を行い、当研究課題と共通する課題について大いに前進があった。論文については、今年度発表に至ったものは、当研究課題の範疇ではなかったが、7月にSenri Ethnological Studiesに英語論文“Turkish Carpets in Motion: The Various Phases of Local Consumption and Incidental Commoditization”を寄稿した。

また、5月と3月に延べ5週間程度のトルコ現地調査を行い、絨毯修繕師や絨毯商にたいする観察・インタビュー、博物館等訪問などを通して、民族工芸の1つである絨毯の保存や展示に関わる現状について子細な情報を得た。

以上、展示と保存という営みを中心としながらも、広くモノ研究を人類学的に展開することの意義と多角的視点について、今後につながる多くの示唆を得ると同時に逐次成果発表に生かすことができた。

特別研究員奨励費

タイにおける仏教僧ネットワークにみるコミュニティの編成過程に関する人類学的研究

代表者 岡部真由美

目的・内容

本研究の目的は、タイにおける仏教僧ネットワークを対象に、近代化・グローバル化が進行する現代世界においてコミュニティが動的に編成される過程を解明することである。より具体的には、第1に、1960年代以降の開発の進展とそれに伴う急速な社会変化を背景として、上座部仏教の僧侶たちが、国家・サンガ・地域社会という既存の脈絡を越えたネットワークを形成してきた歴史的経緯と現状を、第2に、僧侶たちが、ネットワーク外部の諸勢力、制度や集団との接合過程をつうじて創出する、価値や倫理ならびに共同性の特質を、北タイ地域を中心とする現地調査から明らかにする。これを踏まえ、本研究では、人類学および関連諸分野におけるコミュニティ研究の問題点を乗り越えることが目指される。

活動報告

3年間の研究期間のうち、初年度にあたる本年度は、北タイ地域における仏教僧ネットワークにかんする基礎的なデータ収集のための現地調査を中心として、以下のような研究活動を実施した。

まず、現地調査は、1) 2012年10月～11月における12日間と、2) 2013年1月～2月における30日間との2度に分けて行った。調査では、とくに「北タイ・コミュニティ開発僧ネットワーク」という一僧侶グループに着目し、1) では、同グループに参加するメンバー僧侶の個人レベルでの活動状況を把握するために、僧侶たちへのインタビューと観察を行い、また2) では、同グループ結成の歴史的経緯と現状や、集合レベルでの活動状況を把握するために、同グループの拠点のある北タイ・チェンマイ県を中心として、関係者（僧侶、元僧侶、NGOワーカーなど）への聞き取りを行った。さらに、2) については、他地域との関連性について明らかにするため、首都バンコクおよび東北タイ3県においても関係者への聞き取りを行った。

その結果、1) 北タイにおいても、東北タイにおいても、1980年代後半～1990年代にはすでに、地域開発に取り組む僧侶たちが、国内外NGOの影響を受けながら、互いの開発活動について意見交換することを目的とした僧侶グループを複数結成していたこと、2) それに対して、「北タイ・コミュニティ開発僧ネットワーク」は、特定の師弟関係や地域に限定されない僧侶たちによって構成される点に特徴を有していること、3) 個々の僧侶は、この僧侶グループに参加することによって、地域開発にかんするさまざまな類の知識を交換・共有するとともに、そこで獲得された知識を用いて、個別の寺院や地域コミュニティにおける自らの実践を再構成していること、である。

とくに3) については、僧侶が寺院や地域コミュニティを基盤とする地縁や血縁のほか、さらには地域を越えて広がる在家者のネットワークなどを独自に組み合わせて展開していることが明らかとなった。

こうした調査結果の分析と、先行研究の検討とを併せて行うことで、仏教僧ネットワークの形成をとおして生み出される、僧侶の新たなコミュニティの編成について理解するためには、今後は、地域開発に取り組むことで自己アイデンティティを模索する僧侶が、新たなコミュニティへの参加をとおしていかに知識を交換・共有しているのか、また僧侶が属する複数のコミュニティ（サンガや地域コミュニティ）の重層性をいかに横断しているのか、といった点について、民族誌的なデータを収集し、考察する必要があることが分かった。

なお、これらの研究活動の成果は、2012年度中に発表した、論文2本と口頭発表2本のなかですでに公表した。

特別研究員奨励費

内モンゴルにおけるシャマニズムと民間医療に関する文化人類学的研究

代表者 小長谷有紀/Caijilahu

目的・内容

1940年代から1970年代にかけて、近代中国において「社会主義改造」、「文化大革命」などの社会主義的イデオロギーによる洗脳運動が全国的におこなわれた。しかし、1980年代以来の内モンゴル東部地域においてはシャマニズムが復活しつつある。シャマニズムは現在、多民族的中国の宗教政策、医療政策、民族政策に対応した柔軟性を発揮しながら、モンゴル人社会の日常と絡んで生き残っている。シャマニズム的諸活動のかなで、治療行為は重要な部分をなしており、依頼者の心身両方の要求を満たしている。

本研究では、そういった民間医療と絡んでいるシャマニズムの各種儀礼を対象に、オルタナティブ医療と制度的医療衛生と関連する諸問題を文化人類学的に捉える。そして、中国において近代と伝統、大宗教と小宗教、漢文化と民族文化が交差するカテゴリーの中で続発する文化対立の諸問題を解決しようと試みる宗教政策、民族政策、医療衛生政策の本質と軌跡を解明することが強く求められるなか、シャマニズムを支持する人々と依頼者の視点から、シャマニズムと仏教、オルタナティブ医療と制度的医療衛生との間に発生する多元的医療の諸問題をエスニシティの問題として究明する。さらに、そういった諸問題が存在する内モンゴル東部のホルチンとフルンボイル両地域を相対化する目的で、モンゴル国に赴き、ダルハドやブリアートの間で生き残っているシャマニズムに関するフィールドワークをおこない、豊富な事例のデータを活用して、多様な医療の選択肢があるなかシャマニズムの治療が選択される状況をエスニシティの問題として論じる研究へと収斂させていく。

活動報告

中国内モンゴル東部地域においてシャマニズムが復活しつつある。本研究の目的は、多民族的社会主義中国の宗教政策、医療衛生政策、民族政策を視野にいれながら、民間医療と絡んでいるシャマニズムの各種儀礼を対象に、オルタナティブ医療と制度的医療衛生との間に発生する多元的医療の諸問題を文化人類学的に捉えることである。この研究は、中国において近代と伝統、大宗教と小宗教、漢文化と民族文化が交差するカテゴリーの中で続発する文化対立の諸問題を解決しようとする諸政策の本質と軌跡を学問的に解明することが強く求められるなか、その分野に対する新しい知見を提供することである。

本年度は研究計画通りに以下のような作業をおこなった。

まず、東京大学図書室、大阪大学図書館、国会図書館、国立民族学博物館図書室などの国内の諸施設において、オルタナティブ医療論、エスニシティ論、及びシャマニズムの治療に関する研究の最新情報を収集した。次に、海外において、中国内モンゴルにおけるオルタナティブ医療、医療衛生政策、民族政策、宗教政策に関する文献を渉猟する目的で、中国の国家図書館と北京大学図書館などの諸施設へ出張した。最後に、医学史、医療人類学及びシャマニズムをあつかった研究会に参加し、内モンゴルにおけるオルタナティブ医療、エスニシティ論、及びシャマニズムの治療などについて、得られた資料を取りまとめ学会発表をおこなった。

そして、以上の資料調査と学術交流で得られたデータを基に、1) オルタナティブ医療とエスニシティ問題の関係性に注目した研究史を整理し、最新研究に対する分析をおこない、書評などを執筆した。2) 中国の民族医療衛生政策、民族政策、宗教政策などに関する文献を解説・分析したうえ、それらの政策が如何にして内モンゴルのシャマニズム、オルタナティブ医療、エスニシティ問題などを影響したかを考察し、学術論文を執筆中である。

【継続】

基盤研究 (S)

権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築

代表者 關 雄二

目的・内容

本研究の目的は、50年以上続く日本のアンデス文明研究の成果を踏襲しながらも権力という新たな分析視点と分野横断的な手法を考古学調査に導入し（ミクロ・レベル）、文明初期における complex society の成立過程を追究する（メソ・レベル）とともに人類史における文明形成を理論的に解明することにある。本研究では権力生成の特徴を、経済、軍事、イデオロギーという権力資源間の関係性に注目しながら帰納的に抽出する。具体的には、アンデス文明初期にあたる形成期（前3000年～紀元前後）に焦点を合わせ、ペルー北高地のパコパンパ遺跡を調査し遺構や遺物の分析を分野横断的に進める（ミクロ・レベル）。さらに、同時期の遺跡のデータと比較することで文明初期の多様な社会状況を把握する（メソ・レベル）。ここから得られた文明形成論を、中米および旧大陸の文明形成過程と比較し、相対化する作業も併せて行う（マクロ・レベル）。

活動報告

アンデス文明初期における権力の変容をさぐるため、形成期（前3000年～紀元前後）の祭祀遺跡パコパンパ（ペルー北高地）を3か月にわたって調査し、遺構、出土遺物の分析を行い基礎資料の収集に努めた。とくに、金製リングや銀製の針を副葬した墓を発見した点は秀逸であった。これまで金製品を伴う埋葬は、同遺跡後期（前800～500年）の初頭、しかも建築完成前の脈絡でしか確認されておらず、この発見により完成後にも社会的差異が存在していたことがわかった。人骨と獣骨の食性解析からは、同遺跡後期に導入されたトウモロコシが豊かな副葬品を持つ墓の被葬者よりも簡素な墓の被葬者の方でより多く消費されていた可能性が示された。新種の食糧・飲料が社会的地位の高い人間のイニシアティブで導入されたとは限らないことになる。また動物の移動性を探るべくシカとラクダ科動物の歯を用いたストロンチウム分析を行った結果、ラクダ科動物の生育環境がシカと比べて一定であることが判明した。飼育場所を特定するデータではないが、トウモロコシを摂取した個体が多いことから、遺跡周辺での飼育が想定される。

この他、考古学GISデータベースの作成を進めた。さらに、同じペルー北高地に位置するクントゥル・ワシ遺跡、ヘケテペケ谷中流域でも調査を展開し、文明初期の多様な社会状況の把握に努めた。これらのデータの統合を図るべく2013年3月に山形大学でワークショップを開催し、また成果の一部は、内外の学術誌、出版物で公表するとともに、2012年7月にウィーンで開催された国際アメリカニスト会議においてシンポジウムを組織し討議した。さらに2013年1月にはマヤ文明研究者を招聘し、経済面での比較を主とするシンポジウム（東京）、また同年2月には米国、ペルーの研究者を招聘し、アンデス文明国家形成時代のシンポジウムを開催し、比較というマクロレベルの研究を実施し高い評価を得た。

基盤研究 (A) 一般

モンゴル・中央アジアにおける社会主義的近代化に関する比較研究

代表者 小長谷有紀

目的・内容

本研究は、現代ユーラシアを理解するには社会主義のもとでの変容に関する把握を欠かすことはできないという観点から、当時の公的な「記録写真」と、ポスト社会主義の現在から語り得る私的な「記憶」との、異なる2種類

の資料を併用して対比的に分析し、その成果を国際的に発信するものである。

具体的にはロシア連邦ブリヤート共和国、モンゴル国、カザフスタン共和国、キルギス共和国、ウズベキスタン共和国の5か国を対象とする。社会主義的近代化という共通の歴史に着目し、その実践を比較し、普遍性と個性性を明らかにして地域理解を促進する。

比較研究の方法として、公的な記録写真から当時のプロパガンダと、人々の語りを組み合わせて分析し、過去と現在の認識を共に明らかにする。写真という物質文化を援用しながら、歴史学、文化人類学、政治学の人文系諸学の協業を果たし、更に地域差の分析に際して自然科学系諸学と連携し、新しい知見を得る。

活動報告

モンゴルについては、社会主義的近代化を代表する典型的な分野として国营農場に焦点をあて、その実態に関する資料を整理して基礎データとして刊行するとともに、農業に関連する口述資料の分析を進めた。とりわけ農業と寺院との親和性、伝統的農業との差異、環境上の問題点などに焦点をあてて、国際会議で発表し、論文を英語、モンゴル語で刊行した。なお、現代においてシャマニズムが再興されている地域もまた国营農場地帯であり、現代の文化現象がいかに社会主義時代の近代化と密接に結びついているかという歴史的關係性があきらかになった。

ウズベキスタンについては、新聞、雑誌、論文等の記事を利用し、モスクワからの政策的まなざしとその現地化を分析し、社会主義的近代化の支配的言説ならびにその現地化や現地での言説との齟齬をあきらかにした。一方、伝統的な都市コミュニティが、支配的な言説に内包された画一的な近代化に対して、柔軟な適応力を発揮したことも、オーラルヒストリーからあきらかになった。

キルギス（クルグスタン）については、農村コミュニティを対象として、イデオロギーに支配されない民間力をナラティブからあきらかにしようと試みた。

以上のように、全体として、オーラルヒストリーを有効に活用することができるとともに、オーラルヒストリー以外の写真、新聞、ポスターなど支配的な公共の言説に関するナラティブ資料も対比的にあつかうことができた。

また、地域間比較としては、カザフスタンとモンゴル、モンゴルとブリヤート・モンゴルについて比較考察した。

基盤研究 (A) 一般

物質文化を通じた新たなアフリカ像の構築——国際協働による在来知と外来知の体系的検証

代表者 吉田憲司

目的・内容

本研究は、現代ユーランアを理解するには社会主義のもとでの変容に関する把握を欠かすことはできないという観点から、当時の公的な「記録写真」と、ポスト社会主義の現在から語り得る私的な「記憶」との、異なる2種類の資料を併用して対比的に分析し、その成果を国際的に発信するものである。

具体的にはロシア連邦ブリヤート共和国、モンゴル国、カザフスタン共和国、キルギス共和国、ウズベキスタン共和国の5か国を対象とする。社会主義的近代化という共通の歴史に着目し、その実践を比較し、普遍性と個性性を明らかにして地域理解を促進する。

比較研究の方法として、公的な記録写真から当時のプロパガンダと、人々の語りを組み合わせて分析し、過去と現在の認識を共に明らかにする。写真という物質文化を援用しながら、歴史学、文化人類学、政治学の人文系諸学の協業を果たし、更に地域差の分析に際して自然科学系諸学と連携し、新しい知見を得る。

活動報告

2012年度（最終年度）には、まず5月に国立民族学博物館（民博）で日本アフリカ学会学術大会を開催するのに合わせて、国際シンポジウム「アートと博物館は社会の再生に貢献しうるか？」を開催し、内戦後のモザンビークで民間に残された武器を農具と交換に回収し、その武器でアートの作品を制作して平和構築を進めるというTAE（Transformação de Armas em Enxadas）「武器を農具に」の活動に焦点をあてて、アートや博物館の平和構築に向けた可能性を検証した。これをうけて、研究代表者の吉田憲司は10月にモザンビークへ赴き、TAEのプロジェクトによる作品（後に民博で収蔵）の製作の全過程を追跡・記録するとともに、このプロジェクトの評価を行った。吉田はあわせてザンビアで仮面文化の新たな展開を調査した。

研究分担者・連携研究者では、亀井哲也が南アフリカにおけるビーズ文化の歴史的展開について、井関和代がエチオピアにおける織りと編みの技術の由来について、栗田和明がマラウイとタンザニアにおける生活物資の国際移動について、それぞれ現地調査を行った。また、飯田卓と川口幸也はマダガスカルにおける木彫技術の現代的展開について調査した。その成果は、民博における特別展「マダガスカル 霧の森のくらし」で公開した。

一方、本研究計画を通じたアフリカにおけるビーズの研究については、神奈川県立近代美術館・葉山にて「国立民族学博物館コレクション ビーズ・イン・アフリカ」を開催し、その成果を公表した。

一連の研究活動により、アフリカの物質文化について、在来の知・技術の内的展開と外界との接触・交流による変容を具体的に跡づけることができた。また、本研究は、その成果を公開シンポジウムや展示という形で公開することで「物質文化を通じた新たなアフリカ像」を実践的に提示するものとなった。

基盤研究 (A) 海外

大規模災害被災地における環境変化と脆弱性克服に関する研究

代表者 林 勲男

目的・内容

大規模自然災害による自然及び社会環境の変化を、被災地での現地調査に基づき、その地域社会は被災をいかに受け止め、その社会の持つ脆弱性をどう評価し、その克服に向けてどのような取り組みをしているのかの実態を明らかにすることを目的としている。

調査研究対象地域は、1998年7月のパプアニューギニアのアイタベ津波災害被災地であるサンダウン州、2001年1月発生のインド西部地震被災地のグジャラート州カッチ県、2004年12月発生のインド洋地震津波災害被災地であるインドネシアのアチェ州、南インドのタミルナドゥ州、スリランカのマータラ県・ハンバントタ県、タイのブーケット県・パンガー県、また東日本大震災被災地である岩手県・宮城県・福島県の沿岸部を比較研究のための調査対象地としている。

活動報告

本年度の現地調査は、研究代表者の林 勲男がパプアニューギニアのサンダウン州において、災害後の再定住地での土地権問題と生業について現地調査を実施した。

2004年のインド洋地震津波災害被災地調査としては、研究分担者の高桑史子がスリランカ南部および南東部の復興住宅団地での被災者の生活に関して調査した。研究分担者の杉本良男は南インドで、津波災害復興過程での宗教の役割に関する調査を実施した。インドネシアのバンダアチェでは、研究協力者の齋藤千恵が被災者の居住地移転と復興住宅に関する調査を実施した。タイでは研究協力者の鈴木佑記がパンガー県とブーケット県にて、被災地の観光開発に伴う土地問題について調査をおこなった。

インド西部地震被災地に関しては、研究協力者である金谷美和がグジャラート州において集団移転に関する調査をおこなった。

研究分担者の田中 聡は比較研究のため、インドネシアのバンダアチェにて、住宅建設に関する耐震性への認識について現地調査をおこなった。林は比較研究のため新潟県中越地震被災地、東日本大震災による東北被災地、インドネシアのバンダアチェにて、脆弱性克服の取り組みと土地利用について現地調査を実施した。研究協力者の柄谷友香は、比較研究のため、東日本大震災被災地の岩手県沿岸部にて、地域コミュニティ再建に関する調査を実施した。

研究協力者の牧 紀男と山本直彦は本年度の現地調査は、別の調査資金で実施した。

基盤研究 (A) 海外

ギャロン系諸言語の緊急国際共同調査研究

代表者 長野泰彦

目的・内容

ギャロン語は、チベット・ビルマ諸語の複数の下位言語グループに亘る文法的特徴を兼ね備えた言語（繫聯言語）で、チベット・ビルマ諸語の歴史を探究する上で不可欠の研究対象である。本計画では、ギャロン語及びギャロン系言語群の語彙と形態統辞論的な文法的特徴（形態統辞法）を網羅的に記述し、より精確なギャロン祖語を再構するとともに、そのデータベースを作成・公開することによって、チベット・ビルマ系諸言語の系統関係と下位分類を精密化することを目的とする。また、これを通じて、歴史言語学の主要な方法である「比較方法」に「接触・基層」の視点を取り入れることがどこまで有効であるかを検証する。

活動報告

81のギャロン語方言を共通の400・1,200語語彙調査票により記述し、同時に文の基本構造が分かる200の例文を蒐集した。

2012年度はこれらのデータベース整備を主に行い、調査結果をWEBの地図上で検索できるシステムを開発し、国立民族学博物館のデータベースとして公開する準備を行った。プログラム開発は2012年度中に完成し、2013年7月に一般公開できる予定である。

このデータベースとの関連において、各方言の音声・音韻Inventory及び語彙索引を、語彙と200例文の音声データとともに国立民族学博物館の調査報告として2014年度内に刊行予定である。

ギャロン系諸語が基層をなしている可能性が高い、未解読古文獻言語、シャンシュン語の構造解明のため、新シャンシュン語データベース作成をも行い、比較研究を行った。これと関連して、北京の故宮博物院が所蔵する『川番譯語』を解析し、そのチベット字が表す言語がギャロン語であることを実証した。現地調査は限定的な補遺調査に留めた。

基盤研究 (A) 海外

熱帯地域における農民の家畜利用に関する環境史的研究

代表者 池谷和信

目的・内容

本研究では、熱帯地域における農民の家畜飼育をめぐる資源利用に注目することで、過去100年間における資源利用の過去と現在を環境史的に把握することを目的とする。具体的には、熱帯地域を対象にして、ブタ、ニワトリ、ウシ、水牛、アヒルなどの家畜利用の現状およびその歴史の変遷を明らかにすることである。また、家畜生産システムは、「移動型」、「(日帰り・泊まり)放牧型」、「舎飼い型」の3つに分類し、それらによって家畜飼育空間の拡大の仕方が異なるという仮定のもとに対象地域を位置づける。本研究を通じて、熱帯農民の家畜利用はどのような特性を持ってきたものであるのか。また、彼らの家畜のなかで、在来家畜とされていたものも、歴史の変遷を検討する。本研究では、これまで熱帯の地域研究において基礎資料がほとんどなかった農民の家畜利用の事例を通じて、新たな「熱帯家畜文化学」を構築することをめざす。

活動報告

まず2012年6月において、研究メンバー全員が国立民族学博物館に集まり、研究成果をまとめた論文の刊行に向けた中身の検討をおこなった。本プロジェクトは、各個人の研究は蓄積されてきたが、組織全体としての統合がまだまだ不十分であるため、家畜利用や環境史や在来家畜などのキー概念が議論された。とりわけ、今回の中心的な研究成果として「モンスーンアジアの家畜文化複合」の概念の持つ意義について検討した。

まず、アフリカの農民は、池谷・研究分担者の佐藤廉也・上田 元が担当した。池谷(移動型)は、ボツワナおよびナイジェリアの農村を対象にして、地域社会のなかで最も社会経済的に重要なウシに注目して、彼らの放牧資源利用の形を示す地図を作成した。佐藤(放牧型)は、エチオピア国家の周辺に位置する焼畑農村を調査地に選定して、地域社会のあり方の違いを明らかにした。上田(舎飼い型)は、ケニア西部の農民の家畜飼育や資源利用に注目し、農民の家畜利用を生業全体のなかで位置づけた。

次に、南アジアでは、池谷・上羽陽子・篠田 隆が担当した。池谷(移動型)は、バングラデシュでの農民のブタ遊牧におけるブタ群の移動ルートを跡づけることをおこない、遊牧を成立させている条件の維持を考察した。上羽(移動型)は、ネパール東部地域で、羊の毛の加工技術やウシ放牧の資源利用を示す地図の作成に努めた。篠田(放牧型)は、インド・グジャラート州での水牛やウシの利用実態とその変化について調査を進めていく。渡辺和之(舎飼い型)は、ネパール西部のヒンドゥー社会にみられるブタの伝統的飼養のあり方に注目した。

東南アジアの農村は、高井康弘が担当した。高井(放牧型)は、タイ国内での水牛の調査を継続し、山地の土地利用の1つとして水牛の放牧地の地図を作成した。以上のように、本研究による成果をすみやかにまとめて、本研究の事例の持つ理論的な位置づけについて論議すること、さらには国際シンポジウムを開催すること、および論文を刊行する予定である。

連携研究者の増野高司・辻 貴志は、フィリピンの海岸部において漁民がおこなう農業および家畜利用の実態について研究した。また研究協力者の中井信介は家畜の飼養形態を強く意識しながら、タイにおいてウシやブタを中心とする家畜飼育に関する調査を実施した。

基盤研究 (A) 海外

ロシア極東森林地帯における文化の環境適応

代表者 佐々木史郎

目的・内容

本研究は、極東ロシア南部の冷温帯及び亜寒帯森林地帯に暮らす人々の文化の特性を環境適応という観点から明らかにすることを目的としている。その適応すべき環境には、自然環境だけでなく、政治経済的な要因によって歴史的に形成される人為な環境(「歴史的環境」)をも含めることにする。つまり、ある地域の文化と所与の自然環境・歴史的環境との間にどのような相互作用が見られるのかを明らかにする。そのために、本研究では調査、分析方法として文化人類学と民族考古学を柱に、生態学人類学、歴史学、民俗学、環境学の手法を援用する。また、従来の文化人類学や民族考古学では先住民族に焦点を当てがちだったが、本研究では調査対象を先住民族に限らず、ヨー

ロップパロシアなどから移住してきた移民の社会にも広げる。現状では先住民族と移民が隣接・共存する村が多く、彼らが協力して所与の環境に適応しようとする現実を的確に捉えるためである。

活動報告

2012年度は事前調査を1回、実地調査を4回、そして4年間の調査研究の成果公開のためのシンポジウムを1回実施した。

事前調査は2012年5月12日～17日にロシア連邦ウラジオストーク市においてこの年度の調査についてロシア側の研究協力者と打ち合わせを行い、さらにウスリースク市の近郊において前年度の考古学調査に関する補足調査を行った。

本調査では、まず8月1日～11日にかけて研究代表者がロシア連邦トゥヴァ共和国東部山岳地帯でトナカイ飼育狩猟民の現状調査を行った。次いで9月9日～19日には、研究代表者と連携研究者の他、ロシアと中国の研究協力者が加わって、日中ロ3か国の研究者による中国黒竜江省の赫哲族（ロシアのナーナイと同じ民族）の生業と居住形態に関する合同調査を行った。引き続き、1人の連携研究者が9月19日～21日に中国内モンゴル自治区でエヴェンキの食文化の調査実施し、さらに11月29日～12月9日の日程で、研究代表者と連携研究者がロシア連邦ハバロフスク地方のコンドン村で、ナーナイの狩猟と氷下漁に関する実地調査を行った。これにより、本調査研究プロジェクトによる実地調査の予定はすべて完了した。

3月には4日～8日の日程で、ロシア連邦立極東大学とロシア科学アカデミー極東支部極東諸民族歴史学考古学民族学研究所（両者ともウラジオストーク）で研究成果を公開するための国際シンポジウム「ロシア極東森林地域における文化の環境適応」を実施した。そこにはこの科研の調査プロジェクトに参加した日ロ両国の研究者全員が集まり、研究報告と討論を行った。

基盤研究 (A) 海外

熱帯高地における環境開発の地域間比較研究——「高地文明」の発見に向けて

代表者 山本紀夫

目的・内容

熱帯高地は、これまで辺境とみなされ、ほとんど注目されなかった地域であるが、そこは古くから多数の人口を擁し、高度な文明も成立、発達した可能性が大きい。また、近年はアンデスやチベットなどの高地において急激に人口が膨張し、環境変化の動きが加速するとともに、環境破壊の問題も深刻になっている。本研究の目的は、このような熱帯高地に焦点をあて、そこでの環境と人間との相互関係を環境開発および地域間比較の視点から究明することである。さらに、研究代表者が40年あまりに及ぶフィールドワークをもとに提唱するに至った「高地文明」の仮説を検証確立することも大きな目的とする。これらの目的を達成することにより、熱帯高地における環境と人間の関係、とくに環境を改変し文明を成立させるに至った人類史の基本的枠組みが明らかとなる。

活動報告

前年度の調査に引き続き、分担研究者の月原敏博がブータンおよびネパールにおいて2度にわたり約1か月間の現地調査をおこなった。また、研究代表者の山本紀夫と連携研究者の本江昭夫はネパール東部のクンプ地方において2週間の現地踏査をおこない、アンデスとの比較調査を試みた。さらに、研究代表者の山本、分担研究者の大山修一、連携研究者の杉山三郎、稲村哲也がメキシコにおいて環境利用および遺跡分布に関する2週間の踏査をおこなった後、杉山はペルーおよびアメリカ合衆国において約1か月間の比較調査を実施、大山もペルーにおいて中米との比較調査をおこなった。さらに、連携研究者の川本 芳はブータンからタシ・ドルジ博士（ブータン農業省畜産局）を日本に招聘し、京都大学霊長類研究所において在来家畜の起源に関する遺伝学的研究を共同でおこなった。

調査地への経路は、ブータンへはバンコク経由ティンブー着、そこからは陸路、メキシコへは空路でメキシコ・シティー着、そこからは陸路、ネパールへは空路でカトマンドゥへ、そこからは陸路である。

基盤研究 (B) 一般

マダガスカルにおける森林資源と文化の持続——民族樹木学を起点とした地域研究

代表者 飯田 卓

目的・内容

生物多様性のホットスポットと目されながら脱森林化が著しいマダガスカルにおいて、森林資源と「生活の知恵」を保全継承するため、村落生活者による木材資源利用を調査し、その過程で森林行政と文化行政の連携も試みながら、成果を効果的に役立てるための研究交流をおこなう。

現地調査においては、2つの方法を主として用いる。1) 樹種ごとの生育状況やその経年変化を把握するため、森

林内に多数の調査区を設置する森林生態学的手法（多点プロット調査法）と、2) 樹種・樹齢ごとの利用法や利用頻度、その経年変化を把握するため、木材標本を見せながら聞き込みをおこなう社会学的調査法（エリシテーション調査法）である。両者の結果は、木材サンプルの材質分析の結果などと総合し、特定の樹種・樹齢に偏った木材利用を分散させるための提言に反映させる。

活動報告

7月から9月にかけての2か月間、飯田、吉田 彰、伊達仁美および研究協力者3名が交替しながら調査地を訪れ、現地調査をおこなった。とくに、前年度に予定していながら実行できなかった森林生態学的調査を集中的におこなった。研究協力者3名のうち1名は、前年度経費から今年度に繰り越した分の経費によって現地調査を遂行した。

調査は実り多いもので、これまで調査地近辺での分布が確認されていなかったヤシ科植物が確認された（もしくは新種の可能性もある）ほか、6か所120平方メートルの調査区に100種あまりの樹木種を確認するなど、当初予想されていた以上に森林生態系の多様度が高いことが明らかとなった。いずれの成果も分析途中であり、発表にむけて準備をしている。

また、調査区において葉と材のサンプリングをおこない、材の機能特性を推定するための資料を得た。また、建材や家具材として用いる樹種40種あまりに関しては、木材サンプリングをおこなってじっさいに材の機能特性を測定した。これらの結果は分析中だが、どのような機能特性の材がどのような用途に用いられており、特定の樹種が減少した場合にはどのような樹種が代替となり得るかを分析していく予定である。

このほか、2013年3月に代表者が所属する国立民族学博物館で、調査地のくらしに関する特別展「マダガスカル 霧の森のくらし」を開催した。これに関連して、家屋建設のようすや家財所有状況の記録もおこなったので、今後この資料も分析し、これまでに得られた資料とつき合わせて考察を深める予定である。

基盤研究 (B) 一般

中東およびヨーロッパにおける驚異譚の比較文学的研究

代表者 山中由里子

目的・内容

本研究が対象とする驚異譚とは、ラテン語で「ミラビリア」、アラビア語・ペルシア語で「アジャーイブ」と呼ばれる、辺境・異界・太古の怪異な事物や生き物についての言説であり、東西の歴史書、博物誌・地誌、物語、旅行記・見聞記などに登場する。本研究の主要な軸は次の3点である。

- 1) 驚異譚を比較研究することによって、実際にその言説の語り手によってどのように定義され、位置づけられてきたかを明らかにする。複数の文化圏に共通するモチーフや逸話を関連作品から抽出し、分類を試みる。
- 2) 知識の伝播や未踏の地の発見を促した歴史的な文脈を把握した上で、博物学・人文地理学の発展の流れを明らかにする。視覚的表象にも注目し、中東とヨーロッパにおける世界観の変遷と相互の影響関係を辿る。
- 3) 宗教・言語・文化による相違点を浮かびあがらせる一方、異なる文化圏の驚異譚の根底に共通して流れる想像の力と語りの力を明らかにする。

活動報告

国立民族学博物館における共同研究「驚異譚にみる文化交流の諸相——中東・ヨーロッパを中心に」と連携させ、研究会を3回開き、研究代表者と分担者は本研究課題と各自の専門テーマの関連について発表を行った。また、本研究の分担者以外にも発表を依頼し、活発に議論を行った。

1回目の会では、驚異を媒介する「目撃者」としての旅人のトポスを採りあげた。驚きは「見る」という視覚体験によってまず目撃者に生じ、その目撃の共有が驚異譚であるともいえる。誰かが「見てきた」、すなわちそれは存在したという前提がなければ、読者は驚きを共有できない。作り話とわかっている話は、悲哀や熱情、興奮などの感情を喚起したとしても、日常的にはあり得ない奇異の存在に対する驚きにはつながらない。目撃者が必ずしも実在した人物ではなかったり、あるいは実在した人物の目撃情報とされていてもそれが史実ではありえない場合でも、「誰それが実際に見た」という証言が、驚異譚の信憑性を高める仕掛けとして機能していることがわかった。

2回目は「驚異の視覚化」というテーマを採りあげた。驚異を描いて「見せる」ことは、二次的な目撃者を作り出すという行為に等しい。中世の場合、画家自身が驚異を目撃しているわけではなく、驚異譚のテキストから想像し、自身が知っているもののかたちの誇張や、通常はありえない奇妙なもの組み合わせで視覚的なイメージが創生されていった。

3回目は、「驚異の編纂」をテーマとした。旅行記などに含まれていた驚異の目撃譚がもとの文脈から抽出され、博物誌や百科事典といった知識の集大成として編纂される過程をヨーロッパと中東の場合で比較した。

今年度から、各会のテーマに関連した事例紹介を発表者以外からもつづけている。研究発表に劣らない事例紹介

によって議論がより充実し、歴史的、地域的な大きな展開を把握することができた。

基盤研究 (B) 一般

社会的包摂のための実践人類学的研究

代表者 鈴木 紀

目的・内容

本研究の目的は、現代社会の課題である「社会的包摂」を国際的に推進するための支援のあり方を提言することにある。社会的包摂とは、社会から排除された人々を再び社会に取り込もうとする試みを意味する。従来、社会的包摂は一国家の内政課題として理解され、その前提で国家単位の研究が行われてきた。これに対し本研究は社会的包摂をグローバルな課題として位置付ける。これにより先行研究で提唱されていた官・民（企業）・市民セクターの相互補完からなる「公共性」概念を、グローバルな文脈に置いて再考する必要性が生じてくる。とりわけ本研究はグローバルな公共性における市民の役割に焦点をあて、官や民によるグローバル支援活動との軋轢や、協働の可能性を検討する。そのために5種類の支援活動（フェアトレード運動、国際協力NGO活動、国際協力ボランティア活動、都市在住の先住民族支援活動、無国籍者支援活動）の事例研究を実施する。

活動報告

- 1) 研究会の開催：6月と12月に研究会を開催し、各自が担当する社会的包摂の事例研究の進捗状況を報告した。
- 2) 調査：研究代表者と研究分担者は、各自が担当する課題に関する調査を実施した。

鈴木 紀は、国際フェアトレードラベル機構の認証をうけたボリビアのカカオ生産者組合を訪問し、フェアトレードの成果と、フェアトレードを契機とする生産者と消費者の交流について調査した。

岸上伸啓は、カナダ・モントリオールの先住民団体マキヴィクとアバタック文化研究所、先住民友好センターにおいて都市在住イヌイットの社会的包摂に関する調査を行うとともに、カナダ政府やケベック州政府、モントリオール市、イヌイット政府の都市在住イヌイットへの政策や支援に関する調査を行った。

白川千尋は、青年海外協力隊員の活動、活動の背景にある価値観や考え方、活動対象者との相互関係のあり方などに関する調査をラオスとタイで行った。

鈴木七美は、アメリカ合衆国とカナダで手工芸品のフェアトレードを推進する団体 Ten Thousand Villages に関し、各ショップの地域の特徴・多機能化の状況と社会的包摂に関する参与観察・聞き取り調査を実施した。

関根久雄は、ソロモン諸島マライタ州およびウェスタン州における NGO による有機農法普及プロジェクトや観光開発プロジェクトの実施プロセス、州社会から国家に向けられる低開発の語りなどに現れる人々の感情に注目し、ソロモン諸島民にとっての近代化および開発の今日的意味を探るための調査を実施した。

陳 天璽は、無国籍者を社会的に包摂するために試みられている支援と実践について研究した。無国籍者の社会的包摂を行う際、困難となっている問題、成功した事例など、NGO での参与観察を通して分析した。
- 3) 公開ワークショップ：2012年6月に日本文化人類学会において「グローバル支援の人類学——支援研究から人類学的支援へ」分科会発表を行った。また2013年3月にアメリカ応用人類学会において「Anthropology of Global Supporting」分科会発表を行った。

基盤研究 (B) 海外

北アメリカ地域における先住民生存捕鯨と先住権

代表者 岸上伸啓

目的・内容

米国やカナダでは先住民の「伝統的な生業」(狩猟漁撈)活動の継続は先住権のひとつと考えられており、アラスカ・イヌピアットやカナダ・イヌイットにはホッキョククジラを捕獲し、利用する権利がそれぞれの国家によって承認されている。本研究の目的は、現代の先住民生存捕鯨が、いかなる政治的、経済的、社会的、環境的条件のもとでどのように実施され、それが捕鯨コミュニティの維持や変化にいかに関与しているかを、北アメリカ先住民の事例を通して解明することである。さらに、それらの捕鯨を分析することによって、先住権が具現化された実態とはどのようなものであるかを解明する。

活動報告

2012年度は、カナダにおけるイヌイットの捕鯨の現状についてオタワの漁業海洋省において2012年5月20日から5月27日まで調査を実施するとともに、米国アラスカ州バロー村で捕鯨祭ナルカックおよび鯨肉の村外への流通に関する参与調査および聞き取り調査を2012年6月25日から7月4日まで実施した。また、米国とカナダの先住権や先住民運動に関する文献調査を実施した。さらに、アラスカ先住民とカナダ・イヌイットの捕鯨の法的な根拠や問

題点について先住権や先住民運動との関係から調査を行うとともに、北海道道立北方民族博物館において環北太平洋地域の北方先住民による捕鯨やイルカなど小型鯨類の捕獲に関する情報を収集した。

カナダでは先住権の一部としてイヌイトによる捕鯨が、約50年間の中断を経て1990年代に復活し、実施されているが、狩猟・解体・分配の技術の継承が不十分であるという問題や巨額の経費を必要とするという問題があり、ヌナヴト準州以外では捕鯨は休止状態にあることが判明した。一方、アラスカでは気候変動の悪影響を受けながらも沿岸部のイヌピアットは捕鯨を実施し、捕鯨祭などを通じて鯨肉などの村全体での共食や分配が実践されており、彼らのアイデンティティの基盤であり続けている。

本年度は、これまで国内外の調査で収集してきたアラスカ先住民の捕鯨に関する資料や情報を分析し、その成果を中間報告として英文報告書を作成し調査地に還元するとともに、民博のホームページで公開した。また、成果の一部を3本の学術論文として出版し、2012年9月開催の日本カナダ学会や同年11月開催の日本文化人類学会一般公開シンポジウムなどで口頭報告を行った。さらに現代の捕鯨民イヌピアットの民族誌を作成するための準備を進めた。

基盤研究 (B) 海外

東アジアにおけるコリアン・ネットワークの人類学的研究

代表者 朝倉敏夫

目的・内容

21世紀を迎え、民族の混交は幾多の問題をはらみながら、ますます進行している。なかでも、朝鮮半島から拡散したコリアンは、ホスト社会に適応しつつも、コリアンどうして協同している。また、ホスト社会に包摂されながら、融合されず、時に排除される。この点で独特の存在である。

本研究は、先行プロジェクトにより蓄積した基礎データと国際的な研究協力体制を活かし、第1に東アジアのコリアン・ネットワークに根差した生活文化を明らかにする。ここでは、本国のコリアンとの違いも焦点となる。その結果、第2にコリアン・ネットワークを形作る「適応—協同」の原理と、コリアン・ネットワークを取り巻く「包摂—排除」の原理を解明する。

これらにより、ボーダーレス化する東アジアで、民族の適応と協同、包摂と排除の動きがどう働いているかに迫り、民族の混交という社会のリスクを透明化する一助としたい。

活動報告

本年度は過去3か年の研究成果を総合的に検討し、全体としての成果公刊に向けた活動をおこないつつ、研究代表者・研究分担者・連携研究者の各自が個別での成果公刊準備もおこなった。このため、韓国へ渡航し、補足調査をおこなった。

基盤研究 (B) 海外

中国の「国境文化」の人類学的研究

代表者 塚田誠之

目的・内容

中国は陸上で14か国もの隣接国と国境を接している。人為的に区切られた国境は、人々の生活圏を分断して形成されてきた。国境はウイグル・チベットなどに見られるように往々、民族問題の火種になってきた。また、国境地域はエネルギー資源の宝庫であり、経済圏が形成されてきた。中央政府は国家統合のためにも、国境地域をきわめて重視してきた。その国家の境界としての位置付けは民族の文化やアイデンティティ形成に多大な影響を及ぼしてきた。国境地域では、民族のネットワークによる結びつきが強く、文化の特徴が明確で、アイデンティティが保たれ、独自の国境文化が形成されてきた。本研究は中国南北の比較検討を通して、民族文化の核心を把握する。そのことはひいては民族紛争の未然の防止につながり、人間の安全保障に寄与するであろう。

活動報告

本年度は最終年度にあたり、中国の「国境文化」の問題点の検証を行うとともに、研究に一層の厚みと奥行を得るため、中国とその隣接諸国の双方から、人々の結びつきや、移動の実態、移動と政治との関わり、儀礼の実態に重点を置いて、締めくくりに実地調査を行った。また、国際学会で成果の報告をも行った。塚田は中国とベトナムで、中越国境地域に居住するチワン族およびベトナム側の民族とのネットワークを通じた結びつきについて、とくに擬制的な親族「ラオトン」関係について多くの新たな事例を得て、その特徴について整理を行うとともに、中越両国の民族性の違いについて展望を得た。また、国境を流れる瀑布が観光地化されている現状と現地の住民の間でその利益をめぐる不均衡な状況が見られることなど問題点を明らかにした。長谷川 清は中国・ミャンマー国境地域の徳宏タイ族自治州で調査を行い、1980年代以降に流入した漢族移民がローカル権力と交渉しつつ、地域ブラン

ド創出の表出と国境文化の形成に主体的な役割を演じていることを明らかにした。樫永真佐夫は、ベトナム、ラオスの国境文化に関する現地調査を黒タイの各村落を中心に行い、国境を挟んで両国に住む黒タイの文化に関する相互影響関係、国境貿易の村落生活に対する影響を明らかにした。大野 旭は中国北部の内モンゴル自治区とモンゴル国との隣接地帯、とくに旧満州国領内のハイラル市と満洲里周辺で調査を行い、満洲国時代から現在に至るまでの国境地帯をはさんだモンゴル系諸集団の移動がいかに政治と国際関係と連動しているかという点を明らかにした。吉野 晃はタイのユーミエン（ヤオ）の儀礼について調査を行い、儀礼への女性の参加など最新の傾向を明らかにした。松本ますみは、回族の世俗化と現代化について、米国サンディエゴで開かれたアジア研究協会の学会で報告をした。このように調査活動を通じて、中国南北の「国境文化」の核心の把握に接近し得た。

基盤研究 (B) 海外

台湾原住民族の民族分類と再編に関する人類学的研究：学術、制度、当事者の相互作用

代表者 野林厚志

目的・内容

本研究の目的は、1)台湾のオーストロネシア系先住諸民族（「原住民族」）が台湾の日本統治期（1895～1945年）に複数の民族集団へと分類されてきた歴史的背景を明らかにする、2)現在の台湾社会における民族認定の様相とそれにもとづく民族集団の再編に、従前の歴史的背景がどのような影響を与えているかを現地調査によって明らかにする、3)1)と2)の結果にもとづき、民族の分類という営為をめぐる先住民族、先住民族含む現地社会、および分類を行ってきた施政者や研究者の関係についての人類学的モデルを引き出す、以上の3点である。

日本統治期に収集された学術資料の分析と再評価を現地調査と連結させて行い、既存の歴史資料のデータとしての質を高める。その上で、当事者たる原住民族自身が民族分類に対して有してきた認識のありかたにせまり、学術、制度、当事者の相互作用の動態を明らかにすることを狙う。

活動報告

本年度は研究計画にしたがい、研究代表者ならびに研究分担者はそれぞれの担当項目に関する現地調査を実施した。これらの成果は同課題名と同じ標題の中間報告書としてまとめ、電子ファイル化（PDF・A4版122頁）し、関連諸分野の内外の研究者に配信した。従来の科学研究費補助金による研究成果は終了年度に紙媒体による研究報告書をまとめるものが多かったが、本課題では中間時の成果を公開し、他の研究者による批判的検討により議論をきたえ、後半の研究活動をより洗練していくことを企図した。

代表者、分担者の協働した研究活動としては、2012年7月に台湾から現地研究協力者を招聘し、国立民族学博物館における日本統治時代に台湾で収集された衣類資料の調査と分析、その結果に関わるワークショップを実施し、12月には当該研究課題である原住民族の分類の歴史性と現代の表象に関わるワークショップを現地研究協力者を招聘して福岡大学で実施した。また、代表者、分担者ともに、4月には天理大学で開催された国際学術シンポジウム「台湾原住民の音楽と文化」に、8月には台湾の台北科技大学・台湾原住民族文化園區において開催された国際シンポジウムである第5回台日原住民族研究論壇に出席し、発表者、議長、コメンテーターを、内外の研究者の参加する複数のセッションでつとめ、研究情報の交換や成果の国際的な公開を行った。従来の科学研究費補助金による研究活動は、代表者、分担者が個別に国際シンポジウム等に参加するものが多いが、当該課題では各人のそうした研究活動に加えて、研究課題の参加者がそれぞれの成果を相補させながら外部研究者とともに議論をねりあげる機会を意図的に増やし、海外学術調査の特徴を活かした実績を当該年度はとくに強化した。

基盤研究 (B) 海外

旧スペイン領南米における集住政策と先住民社会へのその影響の地域間比較

代表者 齋藤 晃

目的・内容

16世紀初めから19世紀初めまで続いたスペインによる植民地統治は、南米の先住民社会を大きく変えたが、スペインが実施した諸政策のうち、集住政策ほど甚大な影響を及ぼしたものはない。広範囲に分散する集落を、計画的に造られた町に統合するこの政策は、植民地全土で実施されたが、在来の居住形態、社会組織、権力関係、アイデンティティを革新し、今日の先住民共同体の基盤を形成したと考えられる。しかし、従来の研究は地域的に限定されたものがほとんどで、この政策の評価も「成功」と「失敗」の両極を揺れ動いている。本研究は、南米の広い地域の事例を比較することで、集住政策の歴史的意義を総合的に解明する。

活動報告

第54回国際アメリカニスト会議の一環として、7月15日から20日にかけて、ウィーン大学（オーストリア）にお

いて「スペイン領南米における集住政策と先住民社会へのその効果」と題する国際シンポジウムを開催した。このシンポジウムでは、海外共同研究者を含めたメンバーが一堂に会し、研究成果を発表し、議論を交わした。従来の研究では、集住政策は南米の先住民の社会と文化を全面的に否定し、ヨーロッパの制度や価値を強制するものとみなされてきた。そして、その効果はもっぱら攪乱や破壊などの否定的なものだったと考えられてきた。それに対して、このシンポジウムでは、さまざまな事例の検討を通じて、次の2点を明らかにした。

- 1) 先住民が集住政策の客体から主体に転身し、本来抑圧的な制度を飼い慣らし、支配と被支配の狭間で自分たちの利益を追求したこと。
- 2) 集住政策により先住民に押しつけられた制度や価値が、在来の制度や価値と予想外のかたちで接合し、そこから社会の再編と文化の再生の複雑なプロセスが生じたこと。

8月7日から10日にかけて、サン・イグナシオ・デ・ベラスコ（ボリビア）で開催された第14回国際イエズス会ミッション会議に齋藤 晃と武田和久が参加し、辺境地域の修道会の集住政策について報告を行った。また、8月23日と9月6日、リマ（ペルー）の教皇庁立ペルーカトリカ大学において、ペルー在住の海外共同研究者の参加を得て、アンデス南部とボリビア東部の集住政策に焦点を当てた公開セミナーを開催した。国内では、6月30日と12月27日、国立民族学博物館において、国内メンバーによる研究会を開催した。

これまでの研究の最終成果として、スペイン語の論文集を刊行すべく、準備を進めた。この論文集は教皇庁立ペルーカトリカ大学出版会から刊行される予定である。

基盤研究（B）海外

東南アジア大陸部におけるコミュニティ運動

代表者 田辺繁治

目的・内容

本研究の目的は、近年、東南アジアで勃興しつつある新しいタイプのコミュニティ（共同体）の実態を運動の視点から捉えることによって、そこに参加する人々の現在と未来に向けた想像力、情動および社会変革のイメージと、それを実現しようとする関係性、組織や手段を人類学的に解明することである。本研究では、特に宗教、環境や医療などに注目し、人々がコミュニティに参加し、あるいはコミュニティを作り上げながら、いかに〈生〉の多様な局面に関わる社会変革を志向していくかを明らかにする。そこでは、コミュニティが異質な勢力、制度や集団との組み合わせ〈アセンブレッジ〉の中で接合していく実態を描きだすとともに、その過程において創出される共同性、価値や倫理の様態を解明することが目指される。以上をふまえ、本研究は、タイを中心に、東南アジア大陸部におけるコミュニティ運動について、海外共同研究者とともに各地の事例を調査するものである。

活動報告

本年度は、運動をとおしてコミュニティ内部で形成されつつある新たな共同性に注目して調査を行い、そうした共同性を支えている価値や倫理の内容を把握することを目指した。さらに、それらが外部の個人、集団、コミュニティとの接合によって拡大していく過程にも注目しながら調査を進めた。

- 1) 代表者の田辺は、隠者パンのユートピア空間が瞑想中の「夢想」を基に構築されてきたこと、および隠者と女性修行者との間に新たな共同性が芽生えていることを明らかにした。
- 2) 松田素二は、北タイの3つのコミュニティをとりあげ、上からの「統治」と下からの「対応」から生まれる共同実践の事例を収集し、生活主義的思想の可能性を追究した。
- 3) 西井涼子は、ビルマ国境のメーソットにおけるムスリム・コミュニティの構成、ダツワ運動の歴史、および現在のダツワ運動に対する住民たちの態度についてのデータを収集した。
- 4) 平井京之介は、北部・中部タイのコミュニティ博物館を調査し、博物館活動を通してコミュニティの伝統や観光資源化など、新たな共同性や価値が創出されつつあることを解明した。
- 5) 阿部利洋は、カンボジア・パイリンにおける教育事情を調査し、パイリン国際学校およびタイ国境プロンの私立学校において教師たちの生活、学校運営に関するデータを収集した。
- 6) 古谷伸子は、チェンマイの民間治療師のネットワーク化の経緯を明らかにし、さらに治療師たちの知識伝達、生薬生産、クライアントとの相互行為についてのデータを収集した。
- 7) 岡部真由美は、北タイ開発僧ネットワークに参加したタイ・ヤイ人僧侶が主催するビルマ国境の仏法センターにおいて、村人との関係、「庇護者」と呼ばれる寄進者との関係などを解明した。

また2013年3月7～8日には、タイ・チェンマイ大学において海外共同研究者とともにワークショップを開催し、各自の研究経過を報告して比較検討し、分析の方向性を探るとともに、来年度の調査計画を画定した。

基盤研究 (B) 海外

インド音楽・舞踏のグローバル化に関する総合的研究

代表者 寺田吉孝

目的・内容

本研究では、インド音楽・舞踏の現代的展開と変容をグローバル化との関連で考察するために、インド国内における音楽変容と、インドにおける音楽・舞踏文化に大きな影響力をもつ在外インド系コミュニティにおけるインド音楽・舞踏の実践を関連づけて考察する。地域間を結ぶ個人・団体の特定、かれらの活動内容や交流の実態の把握、音響としての音楽への影響に関する考察をおこなう。音楽・芸能における変化は内的要因だけではなく、グローバル化を背景とする音楽・舞踏文化の変質がその主要因になっている点を具体的に示すことができると考える。

本研究は、これまでの南インド古典音楽の研究蓄積を土台にしなが、北インド古典音楽や南北の古典舞踏を調査対象に加え、インド音楽・舞踏とグローバル化との複合的な関係を包括的・総合的に考察するものである。

活動報告

研究代表者・寺田吉孝は、南インド、チェンナイ市において現地調査を実施した。チェンナイで毎年12月～1月にかけて開かれる音楽・舞踏祭に参加し、国外在住のインド系音楽家、舞踏家の公演活動の実態について調査をおこなった。特に昨年現地調査をおこなったカナダ、トロント市在住のインド系舞踏家とチェンナイ在住の師匠たちの関係や、在外舞踏家を支援する団体の組織や活動について理解を深めることができた。また、以前から注目しているインターネットを利用した音楽教授についても追加調査をおこない、個人ベースの利用が一般化するとともに、音楽院などが組織的に海外の弟子を募集するなど、インターネット教授の多様化が進行していることが明らかになった。

研究分担者・田森雅一は、昨年度に引き続きラジャスタン州ジャイプルで現地調査を実施した。昨年度調査を開始したグローバルな活動を展開する芸能集団「ラジャスタン・ルーツ」について追加調査をおこなうとともに、古典音楽の伴奏を世襲的職業としてきたカーストに属する演奏家、関係者に聞き取りをおこない、グローバル化を背景とした音楽ジャンルと社会関係の変化に関する情報を収集した。

研究協力者・竹村嘉晃は、シンガポールのインド系コミュニティの音楽芸能実践について現地調査をおこなった。現地におけるインド音楽の演奏、教授を精力的に推進してきたバスカル芸術院、シンガポール・インド芸術ソサエティ、シンガポール・インディアン・オーケストラなどの関係者に、活動の実態や国外のインド系コミュニティとの人的ネットワークに関する聞き取り調査をおこなった。演奏ツアーなどによるインド在住演奏家の欧米訪問の増加が、インドと欧米の中継地であるシンガポールにおけるインド音楽の活性化につながっている点が明らかになった。

基盤研究 (B) 海外

南日本・東南アジアの野生サトイモの民族植物学的・遺伝子学的緊急研究

代表者 Peter J. Matthews

目的・内容

南日本、東南アジアにおける野生サトイモ (*Colocasia esculenta*) の民族植物学的調査 (現地におけるサトイモの歴史・用途・管理などに関して) を行う。遺伝子比較により、南日本 (琉球列島) の野生サトイモの起源を同定する。植物の自然史・文化史、琉球列島におけるヒトの定住と生活の歴史、必要とされる野生サトイモの個体群の保全といった観点から、得られた成果を解釈する。

2011年度にベトナムとフィリピンで行った野外調査に続き、これらの地域における野生サトイモと他の種のサトイモ属 (*Colocasia*) の遺伝的関連に注目する。

活動報告

2012年度、ベトナム北部とフィリピン北部・中部・南部で野外調査を行った。全地域において野生種のサトイモ・野生種の他の *Colocasia* を、またフィリピン中部と南部において野生種と栽培種のクワズイモ (*Alocasia macrorrhizos*) を観察し植物標本を収集した。

サトイモ科 (*Araceae*) のクロロプラストDNA (cpDNA) 分析に最適であるさまざまな遺伝子座を同定した。(Ahmed et al. 2012) 現在、これを用いて、アジア・太平洋地域から収集された多くの標本 (野外調査により新たに加えられたものと国立民族学博物館内に保管されているDNAアーカイブからのもの) について分析を進めている。

これから研究成果として公表を予定していることは、1) 熱帯の2倍体サトイモの多くは1つの大きな母系cpDNA系統に属していて、インドーアジアに起源をもつと考えられる 2) 温帯の (寒冷な気候に適応した) 3倍体サトイ

モの多くは2番目に大きいcpDNA系統に属していて、東アジアに起源をもつと考えられる 3) 野生種には多くのcpDNAの系統があるがこのうち2つの系統のみが大部分の栽培種サトイモに寄与している 4) ベトナム北部で収集した標本の中には、形態学上は異なっているが、類似のあるいは同一の葉緑体ゲノムを示すものがあることから、この地域において異種間の交配が起こったと考えられる。ベトナムの野生種サトイモはこれまでに見つかった南と北の双方の系統を起源としているのかもしれない。食用の植物として、また、ブタの餌として人類が利用し伝播した結果として、この野生種のサトイモの交配が起こった可能性もある。

基盤研究 (B) 海外

宗教と移民のアイデンティティ・共生：南アジア系ディアスポラを事例として

代表者 辻 輝之

目的・内容

本研究は、南アジア系移民・ディアスポラを事例として、1) 宗教が受入社会における移民のアイデンティティ、「コミュニティ」の形成に如何なる影響を与えているか、2) 宗教「伝統」の再構築と展開が多文化、多人種、多宗教を特徴とする受入社会において、彼らと他集団との共生、ひいては、その社会の統合と安定に如何なる影響を及ぼしているか、について民族誌的手法を用いてデータを収集して考察し、宗教と社会に関する既存の概念、理論的枠組の再検討に寄与することを目指す。

活動報告

【第1四半期（4～6月）】4月及び5月にトリニダッドにおけるフィールドワークを2度実施し、カトリック教会へのヒンドゥー教徒による巡礼について、参与観察と聞き取り調査を行うと同時に、当地大学、ナショナルアーカイブスおよび大司教古文書館にて史料収集を行った。

【第2四半期（7～9月）】セント・ルイス大学 Center for Intercultural Studies において前年度および本年度第1四半期までに収集したデータの分析を進め、その結果を基に、9月末までに査読学術雑誌 *American Ethnologist* に論文を投稿した。同期に予定していた南フロリダでのフィールドワークは、トリニダッドの事例研究の進捗状況に鑑み中止したが、その代わりに前年度の予備調査の結果をまとめ、プロポーザルを作成してアメリカ宗教学会に提出した。

【第3四半期（10～12月）】前年度から纏めてきた書籍出版計画書が完成し、11月半ばのアメリカ人類学会においていくつかの出版社に査読のため提出した。また、同月には先に提出したプロポーザルが受け入れられたため、アメリカ宗教学会の特別セッション North American Hinduism において、南フロリダにおける予備調査の結果について発表を行った。論題は Between “Indian” and “West Indian”: Ethnoreligiosity and Social Capital Development of the Indo-Caribbean Migrants in South Florida.

【第4四半期（1～3月）】9月末に提出した学術論文が査読の結果、掲載が見送られることとなり、査読者の示唆を参考に論文の書き直しを行うとともに、さらにデータの分析を継続した。併せて、2月28日、3月1日の両日、セント・ルイス大学において国際学会 Perspectives on Interculturality が開催され、論文発表をおこなった。論題は A Theoretical Proposal on Cultural Mixing, (still) a “Miracle Begging for Analysis.” また、同年4月11～17日に開催されるアメリカ人類学会宗教人類学部会学会での発表が受諾された。論題は Sharing Mothers: Religious Conflict, Statue’s Play, and the Simultaneity of Origins.

基盤研究 (C) 一般

移民女性の言語問題——ハンディ克服のための言語習得戦略と言語支援とのかかわり

代表者 金 美善

目的・内容

本研究は、グローバル化に伴う人々の移動を「女性」と「言語問題」に焦点を絞り、移民女性を取り巻く困難な社会状況を社会言語学的観点から捉え、さらに移民女性の言語問題を当事者の戦略とホスト社会の支援との関係を明らかにしようとするものである。移民女性は、出身国においても教育、識字、性差別によるハンディを抱えている場合が多いが、これらは移民ホスト社会において、一層彼女たちを循環的苦境に追いやり、社会参加や上昇の機会を制限している。この問題はさらに女性が育てる次世代の教育等に引き継がれ、移民受け入れ社会にとっても解決すべき深刻な問題である。本研究は、主に日本において今後も増加することが予想される移民女性に焦点を当て、特に移民女性の、識字や言語運用能力不足に起因する社会参加からの除外などの諸問題の所在を、主に社会言語学的観点から明らかにし、その改善のための施策の可能性を国際比較により探らうとする。

活動報告

本研究は、グローバル化に伴う人々の移動を「女性」と「言語問題」に焦点を絞り、社会言語学的観点から捉えようとするものである。当年度には以下のような研究調査を行った。研究代表者の金は、まず、韓国外国人労働支援センター（ソウル市）とアンサン移住者センター（アンサン市）を訪問し、移住者への言語支援状況についての情報を得た。次に、全羅南道、ムアン郡庁を訪問し、移住女性に対する生活支援についてインタビュー調査をした。また郡庁委託のハングル教室を訪問し、アジアからの移住女性の授業参加状況を観察し、彼女らの言語問題（言語習得、韓国語でのコミュニケーションなど）について聞き取り調査を行った。調査の際にはインタビュー内容を録音し、談話資料を確保することもできた。今回の調査では韓国の移住者に対する公的支援がいかに関事者に活用されているのか、またどのような問題点を残しているのかを知り、さらに移民女性の韓国語習得の過程を分析できる資料が得られた。

研究分担者の庄司博史は、フィンランドにおいて、移民関連行政を全体として管理、調整する部門で、移民女性の統計や生活状況に関し責任者および職員に対しインタビューを実施した。移民の識字問題はおもに雇用の機会の提供、および雇用現場での不自由の軽減のため該当者を対象に教育をおこなってきた。アフリカ、中東出身の家庭女性、高齢の女性などに社会参加をうながし、啓蒙をすすめる観点から識字教育が始まったのは近年で、民間NGOおよびそれを支援する形で行政が参与する。参与観察をおこなった施設は、保育所との併設、女性の文化活動を提供するものなど使用の便宜性をたかめるほか、教育メソッドにおいても従前とは根本的にことなる方法が実施されている。また非識字者全体の把握のため、若年者層にもみられる潜在的非識字者の発見方法が試行されていることなどが明らかになった。

基盤研究 (C) 一般

21世紀の市民運動に関する文化人類学的研究——ベルリン外国人集住地区の事例

代表者 森 明子

目的・内容

本研究は、19世紀以来西欧を中心として近代世界を構成してきた社会原理が見直しを迫られているという認識のもとに、市民運動を、新しい社会像を構築しようとするボトムアップの試みとしてとらえて、研究するものである。ベルリンの外国人が集住する地区の都市再生プロジェクトと、それと並行的に行われている市民団体、移民、行政、運動家らの市民運動に焦点をあてて、その展開のプロセスを明らかにする。この分析を通して、21世紀の新しい社会像を提言することをめざす。

活動報告

本研究は、19世紀以来西欧を中心として近代世界を構成してきた社会原理が見直しを迫られているという認識から出発し、ベルリンの街区で都市再生プロジェクトがいかに関展しているのか明らかにしようとするものである。対象とするのは、外国人が集住するベルリンの街区で、都市再生プロジェクトに多様なエージェントが関わっていることに注目している。

2012年度は11月から12月にかけて20日間の現地調査を行った。昨年度にひきつづき当地で展開した都市再生プロジェクトと市民の関わりについて、その過程をあとづける資料を収集した。とくにキンダーラーデン運動に焦点をあてて、その複数の関係者に詳細なインタビュー調査を行った。

キンダーラーデンとは、小規模の託児所／保育所機能をもつ装置で、地域住民の隣人関係、社会関係をいかに構築するかという問題とも密接に結びつき、都市再生プロジェクトとも直接に連続している。本研究はキンダーラーデンを運動としてとらえて、市民運動や都市再生プロジェクトの一環として検討する視点を打ち出し、冷戦時代から冷戦後にかけて、ベルリンの社会編成のあり方がどのように展開しているかを明らかにしようとしている。本年度の調査では、キンダーラーデンを実際に企画・運営している個人へのインタビューの対象を拡大するとともに、内容も深化させた。キンダーラーデンの実践が、運営主体によって、ひじょうに多様であり、問題意識や運営方針も異なることを具体的に明らかに示すデータを収集した。また、現地調査に先立って、6月に開催された日本文化人類学会において、昨年度までの調査をもとに分析した結果を、中間段階での研究成果として口頭発表した。

基盤研究 (C) 一般

アジア、ヨーロッパ、アフリカに関わるテキスタイル・グローバリゼーションの研究

代表者 吉本 忍

目的・内容

本研究は、現在アジア、アフリカにおいて民族衣装の素材として広く使用されているプリント更紗が、インドネ

シアやインドの伝統的染織技法とデザインをもとにして、ヨーロッパの植民地支配を背景にしたグローバルな交易と産業革命による技術革新によって創出され、広く展開してきた歴史的経緯を、サンプル帳を始めとする資料の検討によって実証的に明らかにするものである。本研究を通して、私たちが経験する伝統工芸の変革と文化の創出の場面におけるグローバル化の功罪などの本質的意義について批判的視座を提示することを目的とする。

活動報告

本研究の目的は、現在アジア、アフリカにおいて民族衣装の素材として広く使用されているプリント更紗が、インドネシアやインドの伝統的染織技法とデザインをもとにして、ヨーロッパの植民地支配を背景にしたグローバルな交易と産業革命による技術革新によって創出され、広く展開してきた歴史的経緯を、サンプル帳をはじめとする資料の検討によって実証的に明らかにするものである。

2012年度、研究分担者の金谷美和は、3月にオランダのフリスコ社ミュージアムとロッテルダム世界博物館において19世紀末から20世紀初頭にかけてプリント会社が作成したプリント更紗のサンプル帳の調査を行った。昨年度における調査によって、研究代表者の吉本と、分担者の金谷は、グローバルな交易と技術革新が契機となってプリント更紗がアジア、アフリカ向けにオランダで生産されたことを明らかにするような、以下のような貴重な資料を発見した。

1) 東アフリカ向けプリント更紗製品のサンプル、2) 英領インドで収集された染織品、3) 東アフリカで収集された初期カンガのサンプル、4) インドネシア向け、東アフリカ向けのイミテーション・パティック。

これら資料のうち1)～3)について重点的に調査を行い、画像の電子データ撮影、文字資料についての一部解説を行った。さらに、昨年度の調査によって入手したオランダ語の文献2点の翻訳を行った。

また、旧大阪府産業デザインセンターから寄贈されたプリント更紗の資料のうち、東アフリカ向けの日本製プリント製品について、研究補助者とともに、画像データの撮影、文字データの整理、入力を進めた。

基盤研究 (C) 一般

現代中国の人々の生活実践に関する人類学的ライフヒストリー・アプローチ

代表者 韓 敏

目的・内容

本研究の目的は、ライフヒストリーの手法を用い、安徽省都市部と農村に在住している8人とその家族に焦点を当てて、人々の生活実践レベルにおける社会主義革命の意義及びグローバル化による中国の社会変化の様態とメカニズムを考察すると同時に、人類学研究におけるライフヒストリー・アプローチの有効性を再検討し、ライフヒストリーの比較研究の理論的構築を試みることにあつた。具体的に3つの視点からアプローチしていく。

- 1) 社会主義革命のイデオロギー、諸制度、市場経済体制の下に導入されたグローバルな理念と生活様式がいかに個人に受け入れられたのか？
- 2) 受容された概念や生活様式は、どのような意識と環境の下に如何に実践されているのか？
- 3) 複数の個人とその家族のライフヒストリーを比較し、共通点と多様性を見いだす。

活動報告

2010年度と2011年度の調査データを整理しながら、福建、上海、瀋陽、内蒙古で新たなインフォーマントと出会い、15の共通調査項目（出産、命名、嫉、学校教育、働き・仕事、消費、交友、恋愛、結婚、家族、子育て、扶養、エージング、死、祭祀）について、ライフヒストリーの聞き取り調査を行い、生活実践レベルにおける社会主義革命の意義およびグローバル化による中国の社会変化と持続性を考察した。

- 1) 安徽省蕭縣村落で収集された李氏の日記（1990～1991年）を電子ファイル化した。人民公社解散後、1人暮らしの70代の李氏の人生を分析するための素材を整理した。
- 2) 福建省安溪県でウーロン茶鉄観音の传承人 魏 月徳氏およびウーロン茶の作法、石獅市永寧郷で父系親族集団の責任者および彼の主催した祖先崇拜について、参与観察を行い、聞き取り調査を行った。
- 3) 瀋陽市で社会主義国家建設の初期段階における女性の社会進出について引き続き当時の経験者の聞き取り調査を行った。また、遼寧省老幹部大学を訪問し、当大学における定年退職した人びとの活動内容を観察し、大学教務の責任者たちにインタビューし、現代中国の家庭における学習の特徴および「学習型社会（生涯学習の社会）」作りのため、大学が果たした役割について紹介してもらった。
- 4) 上海で70代の夫婦から4世代の嫁の結婚持参財を中心に聞き取り調査を行った。
- 5) 研究協力者の白氏が内蒙古自治区87才の遊牧民阿氏についてライフヒストリー、「3・8紅旗手」（女性労働模範）の認定経緯（1977年内蒙古自治区による認定）、旱害、水害、風害、雪害などを乗り越えた放牧の経験、家畜の改良、畜舎の改善などを調査した。

基盤研究 (C) 一般

瀬戸内海及び西日本における多島海世界の民俗芸能の研究

代表者 笹原亮二

目的・内容

西日本各地には、瀬戸内海や五島灘・玄海灘等、多くの島々が存在する多島海の世界がある。そこでは古来、漁業・商業・交通等を生業とする海の民と、彼らを保護・支配する海の領主の活動圏として、島・海・沿岸地域から成る「領域」が形成されてきた。また、各海域は国内外を巡る航路上に位置し、人・物・情報が往来する「道」として外部と頻繁な交流・交渉が見られた。一方、個々の島は地理的制約から、天候等の自然状況や政治的・社会的要因により外部と隔絶し易く、個性や自律性を有する「コミュニティ」が形成された。更に、瀬戸内海は平家等の強大な政治勢力の活躍の場となり、五島灘や玄海灘は「異国」との境界となる等、それぞれ独自の地域性が形作られた。こうした海域の「領域」「道」「コミュニティ」という特質と各々の地域性が相俟って、各々の海域独自の歴史や社会が展開していった。

こうした海域の島々や沿岸地域には、海域外と共通しつつも各海域独自の特徴的な民俗芸能が分布する。その一方で、同一海域の同種の芸能にも様々な差異が認められる。こうした民俗芸能の多様性は、「領域」「道」「コミュニティ」という特質と地域性が交錯しつつ展開してきた、各海域の歴史的環境と民俗芸能の密接な関係の存在を示している。研究では、そうした海域の島と海と沿岸地域を一体として「島嶼世界」と捉え、それぞれの島嶼世界における民俗芸能の実態を、「領域」「道」「コミュニティ」の特質と地域性の中で歴史的に形成・伝承されてきた島嶼世界の民俗文化として解明する。

活動報告

本研究は島々・海・沿岸地域を一体の島嶼世界と捉え、そこでの民俗芸能を歴史的に形成・伝承されてきた島嶼世界の民俗文化として解明することを目指し、瀬戸内海をはじめ、西日本各地の多島海の世界における島々と沿岸地域の民俗芸能について調査を行い、相互比較を試みるものである。

2012年度は、瀬戸内海の島々と本州・四国の沿岸地域の各地の民俗芸能を中心に現地調査を行った。調査を行ったのは、継獅子（愛媛県今治市）・御田植祭（愛媛県西予市）・盆踊（岡山県笠岡市・愛媛県今治市）・踊念仏（岡山県真庭市）・祝島の神舞神事（山口県上関町）・風流踊（山口県山口市・長門市）・だんじりの巡行に伴う芸能（岡山県笠岡市・広島県三原市）・神幸祭に関わる芸能（愛媛県松山市・今治市・伊方町・宇和島市）・地芝居（愛媛県松山市・岡山県奈義町）・神明祭に関わる芸能（山口県上関町・広島県竹原市）・藤縄神楽（愛媛県大洲市）等である。

加えて、現地調査を行った民俗芸能を初めとした各地の民俗芸能に関する論文・調査報告書等の文献等の調査・収集や情報収集を、各地の図書館等において実施した。調査を行ったのは、岡山県立図書館・笠岡市立中央図書館・広島県立図書館・広島市立中央図書館・福山市立中央図書館・呉市中央図書館・竹原市立図書館・山口県立山口図書館・山口市立中央図書館・防府市立防府図書館・周南市立德山図書館・柳井市立柳井図書館・萩博物館・香川県立図書館・愛媛県立図書館・松山市立中央図書館・今治市立中央図書館等である。

こうした各地の民俗芸能に関する文献等の関連資料の調査を現地調査と並行して行うことで、本研究全体をより適切かつ効果的に進めることができた。また、各地の民俗芸能はそれが行われる祭と不即不離なので、祭自体の分布・内容構成等の地域的なあり方を把握することの重要性・必要性を確認した。

若手研究 (A)

グローバル化時代の国籍とパスポートに関する文化人類学的研究

代表者 陳 天璽

目的・内容

本研究「グローバル時代の国籍とパスポートに関する文化人類学的研究」は、国籍やパスポートに注目することを通し、1) こうした国家の制度が人々の行動や意識に与えた影響を明らかにするとともに、2) 人々にとって国籍やパスポートがどんな意味を持っているのかを考察する。特に、3) 一国家の枠組みのみでは捉えきれない人びと——重国籍者や無国籍者——が所有するパスポートから、国家間のズレや歪みを浮き彫りにし、現代社会における人間の安全保障を究明する。本研究は実際のパスポートを収集・比較検討することを通し、以上の目的を解明しようと考えており、こうした研究はこれまでなされておらず独創性にとみ、新たな知見を発見することが期待される。

活動報告

本年度は、これまで行ってきた無国籍者についての日本や海外での調査を継続して行った。その成果は、以下の通り。

1) 2011年4月、タイのマヒドン大学で行われた国際シンポジウムにおいて、研究者は日本における無国籍者の実態

とそれに対する支援について発表を行い、また英文論文を投稿発表した。

- 2) これまで本研究プロジェクトを通して行ってきた無国籍者に関する調査を踏まえ、2011年5月に開催された移民政策学会において『『在留カード』導入と無国籍問題を考える』と題するミニシンポジウムを行い、そこで、「日本における無国籍者に類型」と題する発表を行った。その後、同発表を論文として執筆し、同学会の特集として掲載された。
- 3) 無国籍状態となっている難民の子ども達に注目し、「難民の子どもたちの国籍とアイデンティティ」と題するシンポジウムを2011年6月上智大学で開催した。なお、その一部は、NHKのEテレ「ハートネットTV」において取り上げられ、2012年2月「日本に暮らす無国籍者」と題する番組として放送された（その後、多数回再放送された）。番組において、研究者は本調査の成果をもとに無国籍について解説を行った。
- 4) 本研究課題ではアメリカにおける重国籍の子ども達が、国籍・パスポート・そしてアイデンティティをいかに使い分けているのか、そして家族はどのような対応を行っているのかについても調査を行ってきたが、その研究成果の一部を、2012年11月サンフランシスコで行われたアメリカ人類学会において発表した。

若手研究 (B)

伝統的技術の戦略的継承法——現代インドの手工芸文化を中心とした民族芸術学的研究

代表者 上羽陽子

目的・内容

本研究は、ものづくりの「作り手の個人の創意工夫」や「伝統的技術の戦略的継承法」に実践的にアプローチし、製作者が伝統的形態の継承と現代的な要素の採用をいかに戦略的に選択しているか観察分析をおこない、その製作と流通の歴史を掘り起こすことによって、「伝統的」とされてきた手工芸品の社会・文化的意義をめぐる従来の視点を大きく変えることを目的とする。現代インドにおける自給自足的に製作される染織布をはじめ、インド国内外向けの商品用手工芸品、通過儀礼用染織布、さらにインド独立運動の象徴ともなった手紡ぎ手織り布を対象に、日本および世界の手工芸文化との比較を行い、独自の民族芸術学的視点によるモデルを提供するものである。

活動報告

本年度は、インド、デリーにおいて手工芸に関する現地調査を実施した（2013年1月23日～2月14日）。デリーにおいては、年に1度開催されるインド最大規模のインド手工芸祭の調査をおこなった。インド手工芸祭には、インド中からクラフト制作者や染織品の作り手自らが店を出し、その数は1,000店舗以上になる。そのため、インド全体の染織品の現状をつかむのに最適な場所である。ここでは、インド手工芸祭の組織や運営、インド手工芸の領域における染織品の役割や位置づけなどを把握した。

またこれまで、グジャラート州の女神儀礼布の制作現場における伝統的技術の継承や作り手個人の創意工夫について研究をおこなってきたが、今回は都市部におけるその販売の様子、とりわけ販売者がどのように販路を獲得しているのか、買い手がなにを求めているのか、モノがどのように流通しているのかなどの調査をすることができ、おおまかな動向を把握することができた。

成果公開については、論文として『国立民族学博物館研究報告』（査読有）に投稿し、掲載された。また民族芸術学会大会をはじめ各種講演にてその成果を公開した。

若手研究 (B)

実業家・富田儀作の高麗青磁復興事業を事例とした植民地のエージェントの人類学的研究

代表者 太田心平

目的・内容

本研究には2つの目的がある。第1の目的は、植民地朝鮮において日本人実業家の富田儀作が行った高麗青磁復興事業と、彼の一族による朝鮮工芸品の世界流通、およびそれらが今日の高麗青磁の認識や制作に与えた影響を明らかにするという、史実の究明と地域研究への貢献である。

第2の目的は、これを通して人類学、特に植民地研究とエージェンシー論と物質文化研究へ理論的に貢献することにある。実業家と呼ばれる多面的な活動をおこなう人びとは、植民地の文化に介入し、植民地を脱した現在の文化にも影を落とす存在であった。だが、その多面性ゆえに研究に時間がかかり、後回しにされてきた経緯がある。申請者は、硬直が見られる当該分野の諸議論に対し、これまでの議論の偏りを修正する立場から、第2段階の研究を展開し、発信していく。

活動報告

本年度は、本研究の最終年度であり、これまでにおこなってきた調査研究の内容を補足し、成果を公刊するため

の作業にあてた。

これまでの2年間には、植民地朝鮮において高麗青磁の制作技法が復興した過程を記録した日本語、韓国語、英語の文献資料を、当時に手書きされたメモや書簡を含めて収集してきた。また、現在におこなわれている高麗青磁の制作技法と、それに関する制作者たちの語りを収集してきた。

本年度は、以上の蓄積を補足しながら活用して、主として3種類の成果をとりまとめた。

第1に、こうした近代の文献資料と現代の語りを対比させて分析し、両者がどう連続し、あるいは連続していないのかを分析した。これにより、物質文化の局面的生成過程と長期的連続過程を明らかにした。

第2に、近代の植民地朝鮮における高麗青磁の位相をひもとき、同じ朝鮮の伝統的な物質文化のなかでも、近代日本の知識人たちにオーデットされることで復興した朝鮮白磁や木工芸などと、そうではなかった高麗青磁との差異は、どういった点に起因するのかという考察をおこなった。

第3に、上記の2点とのかかわりから、高麗青磁の復興を主導しつつも忘れられた存在としての富田儀作についての総合的な情報整理を進め、その記録を公刊、発信準備中である。

若手研究 (B)

オセアニアの紛争に関する文化人類学的研究：フィジー諸島共和国の事例から

代表者 丹羽典生

目的・内容

本研究は、近年増大している第三世界の紛争の特質の一端を、オセアニアの事例、ことにフィジー諸島を中心に解明することを目的としている。オセアニアにおいては、植民地時代の政治闘争以降の政治的に安定した時期を経て独立をはさみ、1990年代後半以降、暴動から民族紛争、クーデターまでさまざまな政治的問題が起きている。本研究では、人間の安全保障、平和構築など紛争に関する新たな視点からの理論構築や事例分析を踏まえた上で、人類学的なミクロな視点からの分析を活用しながら、紛争に関する文化人類学的考察を行う。最終的には、比較の視点からオセアニアの紛争の特質を明らかにし、さらには学際的な紛争研究へと昇華させる。

活動報告

調査は、イギリスのロンドンにおける古文書館にて、本研究課題と関係する歴史的資料に関する調査と収集を行った。19世紀から20世紀にかけての資料を閲覧することで、ことに20世紀の植民地時代の正確な情報を得ることができた。

本年度は最終年度ということで、成果公開を中心に行った。具体的には、国内のシンポジウム1件と国際シンポジウム2件を行った。

この目的及び研究ネットワークの構築と研究成果の交際の発信のために、オランダのアムステルダム大学、一橋大学にてオセアニア及び紛争関係の研究者と情報交換とシンポジウムのための打ち合わせを行った。この点は、国際シンポジウム「グローバル化における紛争と宗教的社会運動——オセアニアにおける共生の技法」及び、国際シンポジウム「Identifying New Topics in Fijian Studies」の形で、生かすことができた。両シンポジウムに関しては、現在その成果をどのようなかたちで出版に結びつけるか、参加者とのあいだで話し合いを行っている。

また、具体的な成果としては、編著1冊（『現代オセアニアの〈紛争〉——脱植民地期以降のフィールドから』）、論文3本、口頭発表10回（内国際シンポジウム4回、日本の共同研究会など6回）を行うことで、成果の公開を行った。それ以外では、フィンランドのヘルシンキ大学にて、オセアニア研究者と打ち合わせを行うことで、将来の共同研究に向けた話し合いを行った。

若手研究 (B)

ブータンにおける環境保護行政と村落社会の価値体系の再編に関する政治人類学的研究

代表者 宮本万里

目的・内容

現代社会において地球環境保護の理念と技術が普遍的な価値として位置づけられる中、ブータンは経済的な指標でみれば最貧国のひとつながら、君主制の下で伝統文化および自然環境の保護を経済発展に優先させるとし、意識的な政治選択を実施してきた数少ない国である。しかし、近年の急速な民主化への動きは、君主制下での一元的で厳格な森林管理を環境保全成功の秘訣としてきたブータンの属性を大きく変えつつある。本研究では、選挙や分権化をとおした民主化プロセスのなかで、自然保護区に暮らす村落社会の人々の価値体系がいかなる形でゆさぶられ、どのように再編されつつあるのか、その過程を政府や環境NGOを含めた複数のアクターによる日常的で多面的な交渉過程のなかから描き出していく。

活動報告

2012年度の研究では、国立ウゲン・ワンチュック環境保全研究所との研究連携のもと、ブータンの村落地域における価値体系の変容を、自然資源利用の変化を手がかりに描き出そうと試みた。ブータンは古くは薬草の国とうたわれるほど、薬効のある植物資源が多いことで知られている。しかしながら、近年は保健省による近代病院制度の拡張政策の結果、国内の遠隔地においても近代医療へのアクセスが拡大している。多くの村で基本的な医薬品を手に入れることが出来、村の人々が土着の医療知識に触れることは少なくなっている。しかしながら、中央ブータンではまだ薬草やその利用についての知識を持つ者が残されている。今年度は夏期にブータンの連携機関とフィールド調査に関する会議を実施し、カウンターパートとの打ち合わせを行ったのち、春期の調査ではトンサ県の2つの村で主要なインフォーマントを同定し、植物標本採集と利用に関する知識の収集とその変容に関して聞き取り調査を行った。

トンサ県の調査対象村はジグメ・センゲ・ワンチュック国立公園のなかに位置するノブジ村とジャンピ村である。ジャンピ村はブータンの先住民といわれるモンパの人々が居住する村であり、仏教以前からボン教が信仰され、モンパ特有の呪術師であるパウが幾人も転生して多様な治癒儀礼に従事してきた。今回の調査では、そうした儀礼の観察も実施しつつ、もともと狩猟採集を生業としてきたモンパ社会の信仰や自然観を含む価値体系の理解につとめた。モンパ社会の事例は、従来農耕牧畜文化と仏教をブータンの国民文化として排他的に表象してきた政府の政策に対する批判的な検討を促すものであり、またデモクラシーを含む分権化と、集権化あるいは国民統合、そして自然保護という名で人々を規律化する統治システムとが入れ子状に共存する現代ブータンの政治文化の現状をも浮き彫りにしているといえるだろう。

若手研究 (B)

東南アジア大陸部における焼畑の変容過程の比較研究

代表者 増野高司

目的・内容

東南アジア大陸部の各国においては、土地管理および森林保護の観点から焼畑を抑制する政策が実施された結果、焼畑を営んできた住民の生計をいかに維持するのが現在の緊急課題となっている。

本研究は、すでに焼畑の衰退が進んだタイと、焼畑の変容が急速に進行しつつあるラオスやベトナムなど、東南アジア大陸部に位置する各国の村落を事例として、世帯レベルでの畑地利用歴に着目し、国家政策や商品経済の影響に伴う生計活動の変化を比較分析することで、両国における焼畑の変容過程の特徴を示すことを目的とする。そして従来、焼畑が卓越してきた東南アジア大陸部における、焼畑やその跡地の管理や住民の生計維持に向けた指針を提示する。

活動報告

2012年度には、タイ北部および東北部、およびベトナム北部の農村において現地調査を実施した。具体的には、2012年11月および2013年1月にタイ北部の農村、2012年7月に東北タイの農村、2012年8月および12月にベトナム北部の農村を訪問し、稲作の栽培様式に着目し、焼畑の実施状況および衰退状況について調査を実施した。さらに、例えば、出稼ぎそして小規模な家畜飼育や森林産物の採集など、稲作以外におこなわれる生業および経済活動に着目し、焼畑衰退後の生計維持手段に関する調査を実施した。

その研究成果について、2012年度には4編の学術論文を執筆するとともに、9回の学術発表をおこなった。とくにタイ北部のミエン族が暮らす農村における生業および経済活動の変化に関して論じた論文を出版した (Masuno, Takashi 2012. "Peasant Transitions and Changes in Livestock Husbandry: A Comparison of Three Mien Villages in Northern Thailand". *The Journal of Thai Studies* 12: 43-63.)。この論文では、焼畑が衰退した農村において、陸稲の栽培が継続されることが多いこと、そしてブタやニワトリなどの世帯レベルでの小規模な家畜飼育が継続されていること、換金作物への食害が頻発によりウシ飼育が困難になっていることを報告した。また、小規模な家畜飼育が農業を引退した高齢者にとって重要な日々の活動になっていることを指摘した。

若手研究 (B)

チャム系住民とイスラームの関係に関する地域間比較研究

代表者 吉本康子

目的・内容

本研究の目的は、ベトナム中部から東南アジア、中国・海南島およびアメリカ西海岸などに拡散し、ムスリムとして暮らすチャム系住民の宗教実践、とりわけ、イスラームの共通項とされる諸実践を比較検討することで、イス

ラームの要素とローカルな要素の交渉過程の多様性および民族・宗教ネットワークの関係性について検証することを目的とする。

具体的には、1) 地域におけるイスラームの歴史的背景、国家による位置づけ（センサス上の分類、エスニシティ、人口比率）、自称（語源、他者との差異化の根源）、2) 礼拝空間、3) 制度、4) 礼拝・儀礼的实践についての名称・語源、5) クルアーン、儀礼に使用される書物（チャム語写本の使用状況）などについて比較検討し、各地における「イスラーム」の展開に関する新資料を提示し、さらに、「イスラームの統一性」という視点の有効性について検証する。

活動報告

2012年度は、国内において先行研究及び先行資料を収集し、前年度までに収集することができた資料・史料と併せて、ベトナム、カンボジア、タイ、アメリカ合衆国のチャム系ムスリムを対象とする宗教実践の比較検討を行った。とりわけ、従来の研究においてクルアーンと同一視され、現在もベトナム中南部のチャムに用いられているイスラーム写本に着目し、その継承・使用・拡散状況について検討した。本年度の活動を通して、チャムのイスラーム写本は、1) 東南アジアの中でも早期にイスラームを受容したとされるにも関わらず未だ空白部分が多いベトナム中南部の歴史を、「当事者の視点」から解明していくための第一次資料となる可能性があること、2) 本研究課題が着目する「イスラームの共通項」のひとつ「クルアーン」の地域的展開のあり方と多様性を示す資料となる可能性があることが明らかになった。

若手研究 (B)

生産現場における人とモノの関係性にみる社会主義経験の多様性と普遍性

代表者 風戸真理

目的・内容

本研究は、ポスト社会主義の諸社会におけるモノ生産の場において、生産者である人と生産されるモノとのあいだにどのような関係が取り結ぶもできたのかを、革命以前・社会主義期・体制変化後の各時期で比較検討する。私のこれまでの研究からは、モンゴルにおいては社会主義期に商品世界からはみ出す家畜が存在していた。これらは国家公認の正史である文書記録には記されていない。私はモノに関する人々の語りを収集することで、ふつうの人びとの視線から見た歴史を再構成することを企図している。この方法は、社会主義をはじめとする急激な近代化を経験した諸社会についての、「書かれなかった」もうひとつの歴史の側面をすくい上げるのに有効である。他方で、人と生産物とのあいだに見られる特別な関係は、社会主義がモンゴルの生産現場で実践されるさいにローカライズされてしまった結果なのだろうか。モンゴルにおける社会主義化の特徴を、他の国で社会主義が実現されるとき、あるいは他の国で近代化が具現化されるときと比較しながら解明する。

活動報告

当該年度に実施した研究の具体的な内容は、6月に文化人類学会加し、口頭発表「モンゴルにおけるフェルト製作の技術と社会的背景——『母フェルト』をめぐって」をおこない、モンゴルのフェルト製作のあり方を、その技術的側面に加えて、ローカルな社会関係の側面から明らかにした。7月から9月には、モンゴル国の遊牧地域においてフィールドワークをおこない、移動式住居「ゲル」とその部品であるフェルトなどの作り方と使い方について聞き取り調査した。

出版成果としては、風戸（2013）「ポスト社会主義国における職業と人生選択——カザフスタンのある朝鮮人の事例より」はカザフスタンにおける職業選択を中心とする人生選択に焦点を当て、社会主義期とポスト社会主義期の労働と生活のあり方およびその理念を検討した。風戸（2012）「モンゴル国の社会変化と遊牧民——世界のくらしと文化 モンゴル国（1）」からの4回の連載は変化するモンゴル国における不変項である畜産物に依存した食生活のあり方や食事のメニューに関するモンゴルの内的な論理について論じた。Kazato（2012）“The Felt Making Process and Social Relationships in Mongolia Using The Ehe Esgii (Mother Felt)”では「母フェルト」が、巨大フェルトを大量に複製する合理的な手段であり、かつフェルト製作に関する在来知識が家族や世帯間で継承される手がかかりとなっていることを指摘した。

執筆中の成果として、ゲルの生産・使用・補修に関する調査結果がある。ゲルは、社会主義期以前、社会主義期、体制変化後という時代の変化と、個人のライフサイクルに応じて、その素材、使い方、補修のしかたが変わっていた。すなわちゲルは、移動性の高さに加えて、素材やサイズ、使い方を使い手の都合や時代状況に合わせて変えられるという自在性を特徴とするといえるだろう。

以上の成果の意義と重要性は、ポスト社会主義諸社会のモノ生産の場における人間とモノとの関係を時代ごとに比較検討し、モノにまつわる記憶を手がかりとして、ふつうの人びとから見たポスト社会主義の歴史を描き進めた

点にある。

特別研究員奨励費

聖地におけるスピリチュアルな体験と癒しの人類学的研究——現代のイギリスを事例に

代表者 河西瑛里子

目的・内容

本研究の目的は次の2点である。1) ある個人のスピリチュアルな危機からの回復を、聖地という特定の場所に焦点をあて、聖地と癒しの関係を分析する。2) 現代の聖地における新しい癒しのあり方を考察する。この2点を明らかにするため、スピリチュアリティと呼ばれる活動が盛んで、それゆえに現代の聖地として名高いイギリスのグラストンベリーにおいて、聞き取り調査と参与観察を実施する。

調査の中心は1)である。当地を何らかの視点で聖地とみなし、当地に根ざして活動している宗教的グループにかかわりを持ち、人生を変えてしまうようなスピリチュアルな危機を経験した人を対象とする。具体的には、危機のきっかけ、生じた身体と精神の症状、出会った実践とそれによる生き方の変化を、聞き取り調査と定期的な集まりにおける参与観察により明らかにする。その際、かかわっているグループとの関係、他のメンバーや町の住人との関係、グラストンベリーという土地との関係に注目し、当地に対する聖地としてのまなざし、癒しと関連している当地の要素を比較検討する。2)については、1)で得られた知見をより一般化して、聖地における癒しについて総合的に明らかにしていく。

活動報告

本年度は2011年度までの現地調査の成果と図書館等での先行研究の整理をもとに、研究成果を発表した。

1) 研究会などでの発表

6月に「トラウマ経験と記憶の組織化をめぐる領域横断的研究」研究会（京都大学人文科学研究所）で口頭発表をおこなった。フェミニズムとネオペイガニズム（ヨーロッパに土着の宗教とされる信仰の復興運動）が融合したような女神運動に携わる人々を取り上げて、彼らが、現代社会に特有の離婚や死別といった理由で失った親しい人と人との関係を女神運動の仲間たちに求めつつも、欧米近代の特徴とされる個人主義志向から互いの関係性が深まりすぎること避けている姿を示した。

2) 論文などの執筆

スピリチュアリティに関心があり、癒しを求めてグラストンベリーにやってくる人々を迎え入れた地元民が、新しい住人をどのように受け入れたのかを明らかにした論文、「オルタナティブと対峙する地元民——イギリスのグラストンベリーにおけるニューエイジ産業をめくって」を『宗教と社会』に発表した。本論分は、先行研究では報告が少ない現代の聖地に暮らすホスト社会の人々が、自らの利害関係や関心に合わせて、新しい住人を多様な形で受け入れていく様子を取り上げており、本研究で研究対象とした人々を鏡像として映し出したといえる。

また、2012年に刊行された『世界宗教百科典』ではネオペイガニズムの項を、『聖地巡礼ツーリズム』では「グラストンベリー」の項を執筆した。さらに、スピリチュアルな体験と癒しについて、人間関係の濃密さと希薄さのバランスに注目した博士論文を提出した。

以上の調査や研究によって、新しい形での宗教現象とされるスピリチュアリティのもつ癒しの1つの側面を、聖地や人間関係という視点から明らかにすることができた。

特別研究員奨励費

東アジア古代国家形成期における織物文化の特質に関する民族考古学的研究

代表者 東村純子

目的・内容

本研究では、東アジアの古代社会において各種の織物がどのような技術生産体系のもとでつくられたのか（紡織技術の形態と織物生産体系の相関）、誰がどのような意識をもってつくったのか、あるいはつくらせたのか（織物の製作者と使用者の行為主体性）、その歴史的脈絡について民族考古学を基軸とする研究手法により明らかにし、東アジアの古代国家形成史のなかに位置づけることを目的とする。

調査対象は、中国新石器時代から唐代併行期（韓国では初期鉄器～統一新羅時代、日本では弥生～奈良時代）の考古資料と、中国、台湾、朝鮮半島、日本（一部、東南アジアを含む）民族資料とする。

研究内容は1) 東アジアにおける出土紡織具の型式学的研究、2) 民族考古学からみた布文化システムのモデル構築、3) 古代の紡織と女性労働に関する史的考察、の大きく3つで構成される。1)と2)は民族誌データとの比較から考古資料を解釈する民族考古学、3)は性差の視点から人間の行動を解釈するジェンダー考古学の手法により紡織活

動の具体相を明らかにしようとするものである。東アジア地域の紡織にかかわる考古資料・民族資料に即し、製作者と使用者の双方向から検討を加え、クラフト・スペシャリゼーションや織物の規格化、価値の創出と変容を明らかにする。

活動報告

東アジアの古代社会における織物文化の特質を明らかにするため、以下の通り、研究を実施した。

1) 出土紡織具の調査

国内では新出資料を中心とする弥生時代～古代の紡織具を調査し、中国・韓国の出土紡織具について文献調査を行った。昨年度より継続してきた紡織具の分析に基づき、東アジアにおける輪状系・直状系製織技術の出現と広がりについて、国立伽耶文化財研究所・国立金海博物館の『나무, 사람 그리고 문화』等で報告した。

2) 出土織物の調査

弥生時代から飛鳥時代までの平織の麻織物片、絹織物片についてマイクروسコープを用いた観察を行った。麻と絹織物の織り組織の特徴を整理するとともに、麻の繊維を撚りつなぎ、紡錘で撚りをかける製糸法についてアジア周辺諸国の民族・民俗例と比較検討した。その成果の一部は、2012年6月の国際学会“Society for East Asian Archaeology”や、奈良文化財研究所の『保存科学研究集会2012』で口頭発表を行った。

3) 紡織にかかわる民族資料の調査

台湾原住民族、及びベトナム少数民族の腰機による機織技術、織物と衣装製作について現地調査を行った。腰機による機織りの身体技術を記録し、考古資料の分析・解釈のための基礎資料として整理した。また、腰機を用いる伝統的な手法と高機などを駆使する手法の相違、製織技術と衣装製作との関連についてそれぞれの社会的背景を踏まえ考察を進めた。

以上の調査を通して、地理的・歴史的に広い視野から東アジアの織物文化の研究を発展させていくための見通しを得ることができた。

特別研究員奨励費

民族誌記述による一般歌掛け論の人類学的構築

代表者 梶丸 岳

目的・内容

本研究の目的は、ラオスと日本の歌掛けの民族誌記述を行い、それと先行研究のさらなる分析を合わせて、歌掛けの一般的特質を明らかにすることである。

ラオスでは、フアパン県で歌われているカップ・サムヌアの記述を行う。ここでの目標はこれまでまったく記録のない歌掛けの、現代における基本的状況を明らかにすることである。歌掛けの映像による記録、それに基づく歌詞や旋律の具体的記述と分析から、カップ・サムヌアのコミュニケーションとしての特徴を明らかにしていく。その上で、伝統文化の保存、そしてその現代性について考察を進める。

一方、日本の歌掛けでは、秋田県の金澤八幡宮伝統掛唄の記述を行う。歌詞そのものを記録することはもちろん、掛唄を映像で記録して具体的な相互行為の分析を行い、掛唄を取り巻く社会的状況とのかかわりを含めて総合的に記述していく。特に掛唄の学習過程や次世代育成の様子、歌い手同士の関係について重点的に調査し、掛唄の民族誌的記述を行う。

歌掛けの一般的特質の解明は、これらの研究および、これまで行ってきた中国貴州省における歌掛け「山歌」の研究を合わせ、一般歌掛け論を構築することを目的とする。これまでの成果を踏まえ、歌掛けの言語的特徴、相互行為のあり方を既存の理論と接合させ、コミュニケーション、そして社会的意味についての理論を確立する。

活動報告

本研究の目的は、ラオスのサムヌアで歌われている歌掛け「カップ・サムヌア」と、日本の秋田県で歌われている歌掛け「掛唄」の民族誌記述を行い、先行研究のさらなる分析を合わせて、歌掛けの一般的特質を明らかにすることである。本研究の意義はこれまで注目されてこなかった歌掛けについて、言語人類学的方法論に基づいて個別の事例を包括的に記述し、それらを総合することでその特徴を明らかにし、さらにその文化的価値を明らかにして人間のコミュニケーションや文化の可能性と豊かさの一端を新たに示すことにある。本年度はこれまでに得た資料を元に掛唄の社会的状況やその歌い方についての基本的な分析を行い、掛唄の言語人類学的記述を進めた。また、ラオスにのべ7か月滞在して正式な調査許可を得るための手続きを進めるとともに、ラオス国立大学にてラオス語の研修を受けた。2012年12月に調査に必要な手続きをすべて完了して一時帰国後、2013年1月末から2か月間ラオスのサムヌアに滞在し、カップ・サムヌアをビデオに収録するとともにいくつか掛け合いの書き起こしも行った。さらにこの歌掛けと歌い手たちをめぐる社会的環境に関する現地調査を進めた。さらにこれまで行ってきた中国貴

州省の歌掛け「山歌」についての民族誌を最終的にまとめ上げ、3月末に上梓した。またこれと掛唄の調査結果を比較対照することで、歌掛けの一般的特質の解明を進めた。以上によって、本年度は本研究目的を達成するために前年度からさらに一步具体的事例の蓄積と分析を推し進めたといえる。次年度は以上の成果を踏まえ、ラオスにおけるさらなる現地調査と資料の分析を中心に研究を推進し目的達成を目指す予定である。

特別研究員奨励費

互助実践の外延的拡大とその位相——ラオス北西部と奈良県中山間地域における比較研究

代表者 森 一代

目的・内容

本研究は、日本の山間地域における住民の互助実践を比較することで、将来的に村落の衰退が危惧されるラオスに、高度成長期以降の日本の経験がいかにかに活かせるかを、実証的に提示することである。そのためには、

- 1) ラオスの互助実践がどのような問題を抱えているのか
- 2) 日本における1970年代以降の互助実践がどのような問題を抱え、それをいかに乗り越えて来たか（若しくは乗り越えられなかったか）
- 3) 前項から明らかになった日本の経験をいかにラオスの事例に補完させることができるか

以上の3点を明らかにする必要がある。これらを具体的な「問い」として設定し、日本の中山間地域（奈良県吉野郡十津川村神納川地区）とラオス北西部（ラオス国ボーケオ県トンブン郡、バクター郡）における文献およびフィールド調査をもとに実証する。

活動報告

本研究は、ラオスと限界集落化の危機に直面する日本の中山間地域の住民の互助体系について、考察し、互助の適用が可能であるかを検討するものである。

2012年度は、前年度から継続して、紀伊半島豪雨災害からの復興を目指して活動しているボランティアグループや個人ボランティアに聞き取り調査をおこなった。とくに、復興ツリーの設置を目指して募金活動をしているグループと、災害や復興の情報をインターネットを通じて提供している個人ボランティアの活動に着目し、詳細な活動内容を収集した。災害から1年半を経てボランティアとしての立ち位置を、これからどのように展開させればいいのか、さまざまな可能性を検討しつつ、現活動を維持していることが明らかになった。

また、2013年1月から2月まで、ラオス国ボーケオ県バクター郡のカム族の調査村に滞在し、参与観察を通じて相互扶助の実態について調査した。具体的には、破傷風に感染した患者家族がどのように治療費用を捻出し看病にあたっているのかについて、親族や地元住民からインタビューをおこなった。その結果、昨年は見受けられなかったバンコクやチェンライへの労働移動による送金が、貴重な送金源になっていることが分かった。首都ビエンチャンへの出稼ぎはなだらかな減少傾向にあり、まずはチェンライで経験を積んだうえで、より高い賃金が期待されるバンコクへ親類や友人のつてを辿って移動しているということが明らかになった。

受託研究

「アジアにおける新しい博物館・博物館学創出のための研究交流」

委 託 者：日本学術振興会（研究拠点形成事業B. アジア・アフリカ学術基盤形成型）

共同研究代表者：園田直子

実施期間：2012年4月1日～2015年3月31日

目的と概要

博物館は、単に資料を収集・保存・展示するだけの場ではなく、特に途上国においては国家・民族としてのアイデンティティを確立する場であり、また観光振興の要として、教育施設として、あるいは戦乱・災害からの復興の拠点としての役割を持つ。そのため、アジア・アフリカにおける自立的・持続的な博物館活動ならびに人材育成は、緊急の課題となっている。

大学共同利用機関法人・人間文化研究機構・国立民族学博物館は、過去18年間、途上国を対象に、博物館学ならびに博物館の実践的技術を学ぶ研修を実施してきた。研修に参加したアジアの国ぐにのうち、タイ、ミャンマー、モンゴルでは、日本で研修を受けた人びとの間で国内ネットワークが構築されており、自国の文化的・社会的背景に即した博物館学・博物館研究を模索しているところである。

本事業では、国立民族学博物館が今までに培ったネットワークの新たな展開として、若手の人材育成を視野に入れながら、博物館学を中心とした実践的な学術基盤の形成をはかる。タイ、ミャンマー、モンゴルで博物館学の教

育研究を行い、博物館活動や人材育成の中核をになう専門家とともに、日本をふくむ4か国での博物館学の研究成果や博物館活動の事例を共有し、共通の基盤をつくる。そのうえで、従来の受動的立場（「展示される」側）から主体的立場（「展示する」側）へと変容する、現代のアジアにおける博物館の潮流を明らかにし、アジア独自の博物館学・博物館研究のモデルをつくりあげる。

本事業の最終目標は、今までの欧米主流の博物館学・博物館研究とは異なる、アジアの文化的・社会的背景に即した独自の博物館学・博物館研究が創出されることであり、そのうえで、タイ、ミャンマー、モンゴルにおいて自立的・持続的な博物館活動ならびに人材育成の研究基盤が形成されることである。

実施状況

初年度の2012年度は、日本とモンゴルにおける博物館・博物館学の比較研究と研究交流を実施した。具体的には、モンゴルのカラコルムとウランバートルにて、共同研究会とセミナーからなるミュージアム会議（ミュージアム・クリルタイ）を開催した。

ミュージアム・クリルタイでは、日本とモンゴル両国の博物館学・博物館の専門家や教育研究者が研究成果や実践事例を発表し討論することで、従来の〈日本＝研修実施側〉、〈モンゴル＝研修を受ける側〉という図式を超えた、互いに研究成果や実践事例を共有しあう新たな研究協力体制を構築することができた。さらには、モンゴル国内の博物館学・博物館の専門家や教育研究者が集まったことで、モンゴル国内における博物館ネットワーク強化に貢献することができた。

成果

ミュージアム・クリルタイには、日本とモンゴルの研究者だけでなく、タイとミャンマーのコーディネーターが参加し討論に加わることで情報と知見の共有をはかった。これにより、本事業終了後、参画した研究者が共同で、アジア独自の博物館学・博物館研究を創出するための共通基盤をつくる第一歩がふみだせた。

ミュージアム・クリルタイの最終日は、モンゴル全国の博物館や、大学の関連部局の若手人材を対象とし、被災した博物館・文化遺産の復興支援をテーマとした公開セミナー「災害と文化遺産——東日本大震災の事例から」を開催した。災害が博物館や文化遺産にもたらす影響、文化遺産の復興支援の意義が、本事業に関連する研究者間のみならず、次世代の研究者にも広く普及・共有され、モンゴルにおいて博物館や文化遺産の災害に備える契機となった。

ミュージアム・クリルタイが契機となり、日本とモンゴル間のこれまでの研究交流の絆が一層強まった。今後、モンゴルで、博物館・博物館学に係わる研究を進めるとともに、若手人材育成をしていくうえで、日本側が協力していくことが再確認された。なお、モンゴル側コーディネーターのIchinkhorloo Lkhagvasuren氏は、2013年度JSPS外国人招聘研究者としての採用が決定し、8月より、日本側拠点機関である国立民族学博物館の外来研究員となる。モンゴルとの共同研究が、より密接に遂行できる環境が整った。

タイ、モンゴル、ミャンマーは、それぞれ博物館・博物館学がおかれている文化的・社会的背景が異なる。モンゴルでの経験をふまえて、それぞれの国の状況を鑑みながら、2013年度はミャンマー、2014年度はタイで共同研究会・セミナーを企画、開催する。最終的には、アジアから世界へ、博物館学・博物館に関する研究成果・活動事例を発信し、欧米が主軸になりがちな博物館学・博物館研究に新たな切り口をひらくことを課題としている。本事業が終了した後は、それぞれの国において自立的かつ持続的な博物館活動ならびに人材育成が構築されるよう、共同研究会・セミナーを通じて基盤形成に貢献する。

委託者：日本学術振興会（アジア・アフリカ学術基盤形成事業）

担当教員：竹沢尚一郎

研究期間：2010年4月1日～2013年3月31日

目的と概要

ユネスコによる世界遺産の制度化により、アフリカ諸国の文化遺産に関する関心は著しく高まっている。しかしながら、世界遺産に登録されている総件数890（2007年現在）に対し、サハラ砂漠以南のアフリカ諸国の登録件数79、うち文化遺産42と、その数はきわめてかぎられている。その理由は、ひとつには、アフリカ諸国の考古学調査が進んでいないために、文化遺産の価値が十分に認識されていないことである。それに加えて、アフリカの多くの国では、文化財の保護や社会的活用のための制度設計ができていないという課題もある。

本学術基盤形成事業においては、西アフリカ・マリ共和国の文化省文化財保護局およびバマコ大学と協力しながら、1)文化財の発掘・調査に当たる人材の育成と、2)文化財の保護および社会的活用に関する人材を育成する。マリのように深い歴史がありながら、研究資金の制約がある国家においては、この2つの領域は同一人物が兼任していることが多く、この両面における啓発は大きな意義がある。さらに、3)文化財の保護とその社会的活用のために

地域社会とどのように協力するかのノウハウを概念化し、博物館などでの展示・公開の作業を通じて、文化財のもつ価値を地域住民と国民に対して公にしていける作業を実施することで、文化財の公共的活用という研究課題に応えていく。また、4) 本研究期間中に、わが国の若手研究者を現地で開催させるなどして、彼らの育成にも尽力する。

実施状況

本年度は、11月にマリから拠点機関の研究者2名を招聘し、今後の研究協力体制について協議し、2つの機関のあいだで研究協力協定を締結する予定であった。しかし、文面についてマリ政府の承認が得られなかったために、今後研究協力の具体的内容について詰めていくこととした。

その後、1月に竹沢がマリに行き、研究協力協定を提携する予定であったが、マリ側の政情不安により日本国政府の渡航禁止措置が出され、渡航できなかった。今後、機会を見て、研究協力協定書に調印する予定である。

成果

マリからの研究者を招聘した際に、わが国で研究会を実施し、本研究の成果を伝えた。わが国ではアフリカ考古学は未開発の分野であるが、若手研究者を中心に10名近くの参加があり、わが国におけるアフリカ考古学の普及と発展に寄与することができた。

1月から2月にかけて、本事業の日本側コーディネーターである竹沢がマリに行き、現地の研究拠点の研究者と共に考古学発掘を行う予定であった。しかし、マリにおける政情不安のために、日本政府から渡航禁止措置が出され、渡航できなかったために、本年度はこの面での成果はない。

その一方で、アメリカ合衆国のイエール大学出版会より、これまでの共同研究の成果についての出版依頼が出ているため、マリ側研究者とメール等で情報を交換し、出版に向けた話し合いと執筆を行っている。

3月には、これまでの共同研究の成果を日本のアフリカ研究者に公開するために、研究会を開催した。

マリにおける博物館展示の改善を通じて、マリ社会に研究成果を還元する予定であったが、マリにおける政情不安のために実現できなかった。

3年間の受託研究の期間中に、日本とマリの間の学術発展および文化交流のために貢献する予定であったが、マリにおける政情不安のために、その実現が中途までで終わったことは残念である。

一方、共同研究の成果については、欧米における主要な学術研究誌に発表しており、それが評価されて、アメリカ合衆国のイエール大学出版会より学術書の出版依頼が届いている。今後はこの本の執筆を通じて、本研究の成果を世界中に伝えていく予定である。

本研究交流事業により発表された論文は、2012年度論文総数1本、相手国参加研究者との共著1本である。

現代南アジア研究の国際的ネットワークの形成

委 託 者：日本学術振興会（頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム）

担当教員：三尾 稔

研究期間：2010年10月15日～2013年3月31日

目的と概要

1) 現代南アジア研究の多元的なグローバル化のために

現在、インド・南アジアは、広域アジアおよび欧米との人・資本・モノの活発な移動・交流によって緊密なグローバル化を伴う経済成長を遂げている。それは、ネオリベラリズムに巻き込まれるという受身の過程ではなく、むしろインド・南アジアが地域独自の強みを生かして、グローバル化の動き自体を多元化していく過程である。本事業では、グローバル化するインド・南アジア地域の発展経路を長期的・総合的に解明し、現代世界における比較と連鎖のなかにおける地域の再編過程を明らかにする。この課題に取り組むために、若手研究者派遣と国際共同研究を核として、日・印・英の研究協力ネットワークを形成する。非西洋世界で独自の近代化を遂げた日本が、国際的な現代インド・南アジア研究ネットワークのハブとなることは、知の多元的なグローバル化を推進するうえで有効であろう。

2) 「現代インド地域研究」拠点を基盤とした国際共同研究と若手研究者派遣

全国6拠点からなる「現代インド地域研究」は、国内の現代インド・南アジア研究のネットワーク型拠点形成を推進するために2010年度より発足した。この現代インド地域研究組織を基盤として、将来の日本において現代インド・南アジア研究を担う若手研究者を海外派遣し、国際共同研究を行う。日本における現代南アジア研究は、個々の研究者をみれば国際的に高い水準にあり、個人レベルの国際的な学術交流も進んでいるものの、組織的なかたちでの国際的共同研究や若手の頭脳循環が十分に行われているとはいえない。現代インド地域研究組織の発足により国内の研究者や研究機関による連携の基盤は整った。本事業を通じて、個人や個々の機関が築いてきた海外研究者・機関との協力関係を、日本における現代南アジア研究者の共有の資源として利用できる組織体制を

作り上げ、国内における連携と日・印・英の国際ネットワーク形成とを、相乗効果をもたせて組織的に展開する。これによって日本の現代南アジア研究の国際的な位置づけを高め、国際的な研究連携を飛躍的に進展させる。

3) 日・印・英の三角交流による研究ネットワーク構築

日本では国立民族学博物館を代表機関とし、京都大学・東京大学・東京外国語大学・広島大学・龍谷大学が協力機関となる。これらの研究機関や大学におかれた6拠点は現代インド地域研究組織を構成する機関であり、それぞれの担当研究者は拠点代表（拠点長・センター長など）でもある。相手側となる海外研究機関は、インドにおいてはデリー大学および国立インド統計研究所であり、イギリスではロンドン大学およびエジンバラ大学である。日本の6つの研究機関、インドの2機関、イギリスの2機関の緊密な国際的なネットワークを形成することにより、現在、世界的にはインドとイギリスが中心となっている現代南アジア研究に、日本が研究ハブの1つとして参加していくことが可能になるだろう。それは現代南アジア研究に、当事者と旧宗主国とは異なる第3の視点をとりいれて研究を多元化し、知のグローバル化を進展することにつながる。

同一の若手研究者をインドおよびイギリスに派遣することによって、両方の研究状況や研究者を知悉した研究者を育てていく。また日本から研究者を派遣して行う国際ワークショップをインドとイギリスで開催することを通じ、共同研究参加者による三角交流を進展する。その場合、若手研究者には相手側機関との学术交流に基づき、国際ワークショップの企画運営に積極的に携わせる。3年目にはイギリスでしめくくりの国際シンポジウムを開催し、その成果をインドとイギリスで共同英文出版することを目指す。

4) 日本における現代南アジア研究の国際戦略

世界の南アジア地域研究においては、地域当事国であるインドと旧宗主国であるイギリスがこれまで中心的な位置を占めてきた。その研究においては「近代西洋と伝統インド」の対比を前提として南アジアを理解しようとするポストコロニアル的な枠組みが支配的であった。しかしインドがグローバル化する世界とのつながりにおいて経済成長を遂げ、国際政治においても影響力を強めている現在、むしろインドを多元的な世界を構成する地域のひとつと捉えて、その発展経路を把握し、地球規模の視野からインドあるいは南アジアと世界のつながりを理解する必要が生まれている。換言すれば「ポストコロニアル・インドからグローバル・インドへ」と、視座を転換する必要がある。この視座の転換において、西洋とは異なる独自の近代を發展させ、学術的には「東アジア型發展モデル」を提起してきた日本は、世界諸地域の多元的なグローバル化が進みつつある現状を理解するうえで重要な貢献をなしうる立場にあると言えよう。グローバル・インドの發展経路を地球の視野の比較と連鎖のなかで理解するための新たな地域研究の展開にあたって、日本がインドおよびイギリスと研究ネットワークを構築する意義は極めて大きい。

実施状況および成果

一昨年度から派遣を開始した若手研究者2名は、今年度も引き続き派遣を継続した（一昨年度からの派遣継続者3名のうち1名は派遣開始時には想定できないほどに本務校における職務が繁忙化したため期間通算での派遣日数が10か月に満たないため、研究支援補助者としての派遣に切り替えた）。この2名は、本事業が掲げる3つの国際共同研究課題のうち、2)「多様性のネットワーク：成長の社会文化的基盤」に密接に関連する研究テーマでの研究を推進し、順調に調査研究を進め、日本語および英語で研究成果を公開した。

一方、昨年度から派遣を継続している2名は、1)「民主化とガバナンス：成長の政治行政的基盤」に密接に関連する調査・研究を行って、海外の学会や研究会での発表や意見交換、あるいは単著の公刊など積極的に研究成果を発信している。

また、研究課題1)と2)は、相互に連携して海外での国際研究集会を2回開催して、これまでの研究成果を総合して公開し、これらのテーマに関する国際的な研究の推進に貢献した。まず、エジンバラ大学に継続派遣してきた、課題1)の研究者1名と課題2)の研究者1名が、エジンバラ大学南アジア研究センターの研究者の助言を受けつつ国際研究ワークショップを企画し、2012年10月17日にエジンバラ大学において“Social Movements and the Subaltern in Postcolonial South Asia”と題するワークショップを開催した。このワークショップでは、インド国内における多様な社会的ネットワークがいかに社会運動として結実しインドのガバナンスに影響を与えているのかを具体的な事例に基づいて検討することが主たるテーマとなった。ワークショップでは、上記2名の若手研究者が発表を行ったほか、エジンバラ大学をはじめイギリスの研究機関から4名の研究者が発表を行った。また、主担当研究者である三尾、担当研究者田辺明生（京都大学）、下記研究課題3)によって派遣中の若手研究者も参加し、ワークショップでの発表された研究を踏まえ、イギリスの研究者とインド型發展経路の特徴やその可能性と限界について討論を行った。ワークショップには30名の参加があり、密度の濃い討論が行われた。この成果は、エジンバラ大学南アジア研究センターの協力により、同センターがウェブ出版している研究雑誌“The South Asianist”として公開された。

このワークショップの準備と平行しつつ、より総合的な観点からの国際シンポジウムの開催準備を進め、2012年

12月21日、22日の2日間インド・ナガランド州コヒマ市において“Looking Beyond the State: The Changing Forms of Inclusion and Exclusion in India”と題する国際シンポジウムを開催した。シンポジウムの企画は、主担当研究者である三尾とインドの相手側研究機関の1つであるデリー大学のDasgupta教授が主導した。また企画構想段階で、担当研究者5名とも主としてメールによる意見交換を行った。さらに課題1)および2)の派遣若手研究者がプログラム作成、発表論文の取りまとめ等の準備作業に携わった。シンポジウムの主たる狙いは、グローバル化が進展する中で特にこれまでインド社会の周辺に抑圧されてきた社会層がどのような形で国内外に多様なネットワークを形成し、新しい政治・経済・社会的現実に対応しているのか、またそれがインドの政治や経済にどのようなインパクトを持つのかを事例に基づいて考察することにあった。日本側からは、課題1)と2)の若手派遣研究者全て(研究支援補助者1名を含む)が参加し、3名が研究発表を行った他、コメンテーターや司会者として役割を果たした。また主担当研究者三尾、担当研究者の栗屋利江(東京外国語大学)と田辺も参加し、コメンテーターや発表者となり、インドの政治・社会変容やインド型の発展経路モデルについての討論を行った。インドやイギリスからも12名の研究者が研究発表を行った(うち2名はイギリスの研究相手機関であるエジンバラ大学からの参加)他、2日間でのべ120名余りが出席して熱のこもった議論が行われた。

ナガランド州は、インドの辺境地帯にあり、長く分離独立運動が行われてきた経緯があることから国際シンポジウムが行われることが稀な地域であった。この国際シンポジウムは人文・社会科学分野ではこの地域初の企画となった。この地で、日・印・英3か国の研究者を集めて国際シンポジウムを開催できたことは、それ自体が大きな成果であり、日本の南アジア研究のプレゼンスをインドに示す上で意義深いものとなった。事実、このシンポジウムは現地の英字新聞3紙で速報されている。この研究の成果は、本プロジェクトと密接な連携関係にある人間文化研究機構「現代インド地域研究」プロジェクトから順次刊行が計画されている英文叢書の1巻として出版する計画である。

本年度は、これに加えて新たに1名の研究者をインド、ついでイギリスに派遣した。この研究者は3)「持続的発展：成長の環境・経済的基盤」に関連する研究課題を追求したほか、エジンバラで開催された国際ワークショップにも出席し経済学の観点から討論に参加した。

また主担当研究者の三尾は、インド(デリー大学、ナガランド州コヒマ市)とイギリス(エジンバラ大学)に赴き、派遣研究者の研究活動状況を把握するとともに、上記の2つの国際研究集会の企画と実施にあたった。

一方、担当研究者の水島 司(東京大学)は本事業予算を活用して、本事業が掲げる3つの国際共同研究課題のうち3)「持続的発展：成長の環境・経済的基盤」に関連した経済統計関連資料の取得とデータベース化作業を継続した。この成果は上記「現代インド地域研究」プロジェクトでの成果公開の中で統合的に公開される予定である。

本事業の研究活動内容を内外の研究者コミュニティに広報することを目的とした、日本語版と英語版双方のニュースレターの刊行は、研究者の派遣やシンポジウムの開催を優先させたため今年度も見送らざるを得なかったが、本プロジェクトでの連携によって協力関係が深まったエジンバラ大学南アジア研究センターのウェブ・ジャーナルをほぼ1号分使って研究成果の公開にあてており、プロジェクトからの情報発信は十分に出来ていると判断される。

動物生態資源のセミドメスティケーション化の開発

委託者：京都大学東南アジア研究所(環境研究総合推進費)

担当教員：池谷和信

研究期間：2011年4月1日～2012年3月9日

目的と概要

本研究では、動物生態資源のなかでペッカーリーを中心とした中型の哺乳類に注目することで、商業狩猟がアマゾンの現場で具体的にどのように行われて、獲得された毛皮や肉はどのように利用されているのか、その実際を生態人類学の視点から明らかにすることを目的とする。同時に、これらの狩猟活動がアマゾンの動物資源を維持するために持続的な資源利用であるのか否か、およびペッカーリーを中心とした野生動物資源のセミドメスティケーション化は果たして可能であるのか否かについて考察する。

筆者は、本プロジェクトにおいて、アマゾン農民の経済活動のなかで動物資源利用に注目してきた。これまでペルーのロレト州に暮らす先住民・マイフーナ・インディアンを村を対象にして、ペッカーリー猟の実際とそこから得られた肉や毛皮の流通を把握してきた(Ikeya 2012)。その一方で、ウカヤリ州プカルパの町での皮商人の実態を報告した(Ikeya 2011)。これらの結果、ペルーアマゾンでは毎年13万頭以上の野生ペッカーリーが捕獲され皮が商品として流通していることが明らかになった。しかし、これらの活動が持続可能な生産・流通であるのか否かは明らかにされていない。本研究は、ペルーのロレト州の州都イキトスとその周辺域を主な対象にして、ペルーアマゾンにおけるペッカーリーの皮商人の活動実践とその流通について把握することをとおして、アマゾンの自然資源に対する

持続的利用モデルを構築することを目的とする。

実施状況

筆者は、2012年8～9月にかけて約3週間にわたり現地調査を行った。主な内容は、1)市内の皮商人の全体の状況を把握すること、2)そのなかから1件を選定してより詳細に皮の売買が行われている港や店での直接観察すること、3)皮商人の年次変化を把握するために市内の役所での統計資料の収集を行った。なお、皮には、1枚当たり4.91円の税金が支払われていた。取引制限枚数・クォーターは、毎年、中央政府によって決められた枚数である。

成果

これまでに数量的な把握が困難であった狩猟研究に関して、仲買人からの資料を中心に収集することでかなりの程度、数値による資料を提示できた。

本研究成果であるアマゾン・動物資源利用（狩猟）モデルは、アフリカやアジアにおいては動物保護のために狩猟禁止や自給用狩猟に限定されることが強い状況下において、熱帯における新たな動物・人関係を構築することができるものである。

研究成果の発表状況は以下のとおりである。

・誌上发表

- 1) 池谷和信 (2012) 「野生でもない家畜でもないアマゾンの動物との関係性——熱帯の生き物文化に学ぶ」『生き物文化誌学会ニュースレター』28、29合併号: 11-13。
- 2) Ikeya K. (2013) Peccary Hide Traders and Peruvian Amazon Distribution. *The Proceedings of the International Workshop on "Incentive of Local community for REDD and Semi-domestication of Non-timber Forest Products"* pp.59-67.

・口頭発表

- 1) 池谷和信 (2012) 「ペルーアマゾンにおけるベッカリー猟について」第22回日本熱帯生態学会、横浜国立大学
- 2) 池谷和信 (2012) 「アマゾンの動物と人——肉、皮、ペット」第48回生き物文化誌学会、山形県鶴岡市
- 3) 池谷和信 (2012) 「アマゾンの生き物文化と現代社会——世界的に希少なアマゾン資料を保持する鶴岡からの発信」出羽庄内国際村・アマゾン民族館
- 4) Ikeya K. (2013) Peccary Hide Traders and Peruvian Amazon Distribution. *The International Workshop on "Incentive of Local Community for REDD and Semi-domestication of Non-timber Forest Products"* (Global Environment Research Fund: E-1002, Ministry of Environment, Japan)
- 5) 池谷和信 (2013) 「世界の多様な自然と環境——熱帯雨林と人」大阪府高齢者大学校

被災の共同体から地域の復興へ——被災後の人びとの行動の記録化とそれに基づく新たな社会モデルの構築

委託者：三井物産（三井物産株式会社環境基金）

担当教員：竹沢尚一郎

研究期間：2011年6月1日～2014年9月30日

目的と概要

- 1) 岩手県大槌町、山田町、宮古市などで、被災者の被災後の行動と、かれらが形成した組織のあり方に重点をおいて映像記録と録音記録を作成する。
- 2) 先におこなった映像と録音を文字化し、社会モデルの構築のための材料とする。
- 3) 映像化および録音された資料の文字化を継続し、その分析をおこなう。
- 4) 海外の博物館や研究所と、将来の展示やシンポジウムの実施に向けて協議を始める。

実施状況

- 1) 岩手県大槌町、釜石市、山田町で、被災者が形成した団体の地域復興に向けた取り組みを記録した。
- 2) 2011年の6～12月に実施した映像記録の文字化を完成させ、それに基づく社会モデルの構築作業を開始した。
- 3) 岩手県下の市町村のまちづくりに協力するために「岩手まちづくりネットワーク」を立ち上げた。
- 4) (新たに加わった項目) そこでの発表を元に論文「津波の破壊に対抗する被災コミュニティ——岩手県大槌町の避難所に見る地域原理」を執筆し『国立民族学博物館研究報告』に受理された。
- 5) 被災後の人びとの行動のビデオ記録を文字化し、それをもとに被災者の行動をパターン化した。
- 6) その成果を研究会等で発表して検討した。
- 7) (新しく加えた事項) 展示に向けて、海外の博物館と協議を進めたほか、国際シンポジウムを開催した。
- 8) (新しく加えた事項) 望まれる共同体と社会をモデル化し、それを基に著書を発表した。

成果

研究成果に基づいて、以下の論文を発表し、2つの学会で口頭発表をおこなった。

- 1) 竹沢尚一郎 「被災後を生きる」『月刊みんぱく』36(4): 22-23。
- 2) 竹沢尚一郎 「東日本大震災と人類学——人類学は被災地に対してなにができるのか」(日本文化人類学会第46回学術大会、2012年6月23日)。
- 3) 竹沢尚一郎 「東日本大震災後の語り」(日本宗教学会第71回学術大会、2012年9月8日)。
- 4) 竹沢尚一郎 「津波の破壊に対抗する被災コミュニティ——岩手県大槌町の避難所に見る地域原理」『国立民族学博物館研究報告』37(2): 127-197。
- 5) 竹沢尚一郎 『被災後を生きる』(中央公論新社、2013年1月刊)を出版した。
- 6) 海外での展示に向けて、2013年3月24日に国際シンポジウムを実施した。
- 7) 日本文化人類学会(2012年6月23日)、日本宗教学会(2012年9月9日)で研究発表をおこなった。

民間などの研究助成金による研究活動**・寄附金**

特別展「マダガスカル 霧の森のくらし」運営助成金 ————— 住友商事株式会社
 順益台湾原住民博物館研究賛助金 ————— 順益台湾原住民博物館
 吉田ゆか子機関研究員研究助成金 ————— 三島海雲記念財団

間接経費による研究環境整備事業**研究活動の推進に係る経費(シンポジウムや講演会の組織化及び支援)**

申請者：岸上伸啓

使用目的等：

研究戦略センターは、機関研究員(1名)を2012年5月1日より2013年3月31日まで雇用し、科学研究費に基づく研究プロジェクトの成果を研究者コミュニティおよび社会一般に還元するためのシンポジウムや講演会の組織化および支援を行った。さらに、研究開発に関する調査分析、外部資金の獲得支援、研究開発プロジェクトのマネジメント、民博の研究広報の支援などを行った。これにより、民博における科学研究費プロジェクトの成果を、本館がイニシアティブをとる形で研究者コミュニティおよび社会一般に還元する上で多大の成果をあげた。また、新たな研究の立案を検討することによって、民博の共同利用性を高めた。

研究成果展開事業に係る経費(資料整理とデータベースの作成)

申請者：菊澤律子

使用目的等：

ベルゲン大学で開発された言語の歴史(比較)統語論的研究のためのデータベースの高度化のため、既存のオーストロネシア諸語に関するデータの再処理(データ使用の目的にあわせた再分析のための整理および下処理)および入力を行った。歴史(比較)統語論の研究は新しい分野であり、研究方法自体がまだ確立していない。そのなかで、ベルゲン大学が開発したデータベースを、当初の目的であるインドヨーロッパ諸族だけでなく、他の語族に生かすための高度化を行うことは、大きな意義をもつ。本事業を行うことにより、このデータベースの高度化事業のために具体的に必要な研究内容を明らかにすることができ、その成果をもって、ベルゲン大学との共同研究に結びつけることができた。

研究広報事業に係る経費(モンゴルにおける寺院と農耕に関するオーラル・ヒストリーの国際発信)

申請者：小長谷有紀

使用目的等：

モンゴルの社会主義的近代化に関して、すでにSER41(日本語)、42(モンゴル語)、71(日本語)、72(モンゴル語)が出ており、その英訳本がSER96として出ている。これらのシリーズの一環として日本語とモンゴル語をあわせて、解題論文を付して出版するための準備をおこなった。出版公開により、カラコラムないしハラホリン地域の位置づけが明確になり、遊牧世界における中心地の役割が明確になる。新しい着眼点をもった口述史の貴重な資料として国際発信することができる。

研究広報事業に係る経費（研究成果出版のための翻訳作業）

申請者：關 雄二

使用目的等：

一昨年に終了したペルーの遺跡に関わる地質学的調査の成果をスペイン語で4出版するための翻訳をおこなった。ペルー考古学において理化学的調査はほとんど行われておらず、文明形成過程を多角的視点から捉えることが可能となり、国際学界に対して大きな貢献となった。

研究活動の推進に係る経費（動植物標本資料室の管理・運営の補助）

申請者：MATTHEWS, Peter J.

使用目的等：

2012年度、動植物標本資料室は、本館の教員、および学術振興会外国人招聘研究者等により大いに活用された。この動植物標本資料室の整理・運営の補助業務により、多種多様な研究の技術的な側面に対応し、今後においても室の管理・運営に大いに役立って行くものと考えている。

研究活動の推進に係る経費（資料作成）

申請者：飯田 卓

使用目的等：

マダガスカルの木製生活財に関わって科研費補助金で作成したデータベース資料の高度化をはかり、2013年3月から開催した特別展「マダガスカル 霧の森のくらし」観覧者に提供できるよう整理し、調査した3世帯すべてが所有する生活財（家財）が一覧できるデータベースとして公開した。（データベース項目は、①パノラマムービー写真に写っているものから選ぶ、②用途などに応じて分類されたリストから選ぶ、という2つの方法から検索できる。）

研究広報事業に係る経費（国際ワークショップへの参加）

申請者：三尾 稔

使用目的等：

ハイデルベルグ大学南アジア研究所で2012年11月8日、9日に開催された国際研究ワークショップ“Navaratri in South Asia: Transformation, Innovation and Regional Varieties”に出席し、申請者の研究成果の一部を発表した。発表内容は、科学研究費による研究に基づくものであり、その成果を当該分野に専門的関心を持つ国際的研究者コミュニティに向けて直接公開できた。またハイデルベルグ大学は、「グローバル化状況におけるヨーロッパとアジア」をテーマに学際的な大型プロジェクトを主導している。ワークショップ終了後には、このプロジェクトとの協同のもとで日本で獲得を目指している競争的資金による研究の国際的展開を図るための協議も行うことができた。

研究活動の推進に係る経費（資料整理とデータベースの作成）

申請者：森 明子

使用目的等：

一昨年に終了した科研費による日独の民俗学の展開に関する比較研究で得られた資料を整理し、データ化するとともに、分析の一部を英語論文としてその校閲を行った。研究活動を国際的な議論の場に発信するもので、海外研究者との研究協力、意見交換に大きな効果をあげた。

研究広報事業に係る経費（梅棹忠夫アーカイブズ研究プロジェクト）

申請者：久保正敏

使用目的等：

資料整理と索引情報作成、フィールドノート約8,000（130冊相当）のスキヤン・画像電子化、劣化フィールドノート39冊の修復と保存用中性紙保管箱への収納、文明学シンポジウム（1983年第1回～1988年第17回）にて梅棹忠夫が発表した文明学に関する論文を海外研究者に供するための梅棹文明学・英訳出版の準備などを行った。膨大なアーカイブズ資料を整理・分析することにより、資料間の関係を明らかにして、梅棹学の根幹を把握するとともに、日本の民族学研究史の解明につながることを期待できる。2012年度は、前年度に引き続き、劣化の進んだ最も古い時期の資料を中心に電子化を行うとともに、それらの資料の修復と保管を進めた。これによって、原資料を毀損することなく複数の研究者の閲覧に供することが可能となった。今後も、古い資料から順次資料の電子化を進めるとともに、資料相互の関係性を反映した構造化によって研究者による発見を共有する仕組みの構築を目指したい。

研究成果展開事業に係る経費（国際シンポジウムの開催）

申請者：菊澤律子

使用目的等：

共同研究「言語の系統関係を探る——その方法論と歴史学研究における意味」の最終年度にあたり、次年度以降への更なる研究の進展等を図るため、研究会および成果公開の国際シンポジウム「樹について考える」を2013年2月10日に本館第4セミナー室で日英同時通訳により開催した。ろうの研究者への情報保障として、日本語による発表は日本語通訳、英語による発表は要約筆記を提供、また、内外の研究者との今後の議論の発展に結び付けるため、ウェブ配信も行った。

「樹」、すなわち系統樹モデルは、これまで言語の系統関係を示すために広く使われてきたが、近年のフィールドワーク等による広範な言語データにより、単純な樹の図式では表しきれない言語間の相互関係が解明できるようになってきた。また、情報処理技術や統計学の進展を応用した新しいモデルを利用する研究も出てきている。このような状況のなかで、伝統的なモデルがどのような意味を持つのか、その限界をも含めて再認識する必要が生じている。遺伝学、生物学、系統学等、「樹」を利用する他分野の研究者による発表も織り込みながら、「樹」によって何が表現でき、何が表現できないのか、その理論的示唆と、言語の歴史にあてはまる意味について再考する。言語学における系統樹について新しい視点からのアプローチへの可能性へと結びつけることができたと考えている。

研究広報事業に係る経費（みんぱくりポジトリ掲載データの精度アップ）

申請者：韓 敏

使用目的等：

画質の質に影響する不要なノイズ（線・汚れ等）を、e-typist ソフトを使用し、できる限り除去するなどして精度アップを行い、データの再登録を行った。ネットワークを通じた研究成果の公表により、論文・著書引用件数の増加につながる閲覧件数やダウンロード件数が増加した。

研究活動の推進に係る経費（フェイス島出土遺物データのデジタル化と外来遺物の鑑定）

申請者：印東道子

使用目的等：

島嶼間の移動をしめす出土岩石の鉱物鑑定を行った。鑑定を行った4点の資料は、すべて出土したフェイス島では入手できない岩石である。鉱物鑑定の結果、そのうち3点は石英脈と泥岩であり、歴史的に交易関係のあるヤップ島産の可能性が高い。また、1点はヤップ島にはほとんどない玄武岩であるため、東方のカロリン諸島か、西南のパラオのものか、さらに手法を変えた分析が必要であることがわかった。

（その他、館の整備、運営などに関するもの4件）

2-3 研究成果の公開**刊行物****●国立民族学博物館研究報告**

37巻1号（2012年11月15日発行）

• 論文

インド・グジャラート州アーメダバード市における女神儀礼用染色布の製作技術の現状 —— 上羽陽子
カムチベット語香格里拉県巴拉 [mBalhag] 方言の方言特徴 —— 鈴木博之

• 研究ノート

梅棹忠夫のモンゴル調査におけるスケッチ資料 —— 小長谷有紀

37巻2号（2013年1月15日発行）

• 論文

津波の破壊に対抗する被災コミュニティ——大槌町の避難所に見る地域原理と他者との関係性 —— 竹沢尚一郎
空間概念としての客家——「客家の故郷」建設活動をめぐって —— 河合洋尚

• 研究ノート

ベトナム中部高原山岳少数民族の伝統的集会施設「ニャーロン」の現在

——コントゥム省, ジャライ省の事例から —— 柳沢英輔

37巻3号 (2013年3月1日発行)

• 論文

タイのコミュニティ博物館についての一考察——博物館か, 寺院か? —— 平井京之介

親族システムの理念と実践——マレーシア, オラン・アスリ社会の母系制 —— 信田敏宏

Putting “Tehrangeles” on the Map:

A Consideration of Space and Place for Migrants —— Atsuko Tsubakihara

• 研究ノート

インド音楽の近代化とマスメディア

——ラジオ放送が北インド古典音楽と音楽家の生活世界に与えたインパクト —— 田森雅一

米国アラスカ州バロー村におけるイヌピアットの捕鯨祭ナルカタックについて

——祝宴における共食と鯨肉の分配を中心に —— 岸上伸啓

37巻4号 (2013年3月29日発行)

• 論文

チングス・ハーン崇拝の近代的起源——日本とモンゴルの応答関係から —— 小長谷有紀

• 研究ノート

「ジャスミン革命」の淵源と二つの近代——タミーミー著『ラーシド・ガンヌーシー』再読による

〈イスラームと民主主義〉再考——(Azzam Tamimi, Rachid Ghannouchi: *A Democrat within*

Islamism. Oxford: Oxford University Press. 2001. 268p.) —— 森まり子

• 資料

民族誌資料の制作者名遡及調査——『ホピ製』木彫人形資料を事例として —— 伊藤敦規

● Senri Ethnological Studies

No.80 (2013年1月21日発行)

Nanami Suzuki (ed.) *The Anthropology of Aging and Well-being: Searching for the Space and Time to Cultivate Life Together*.

No.81 (2013年1月31日発行)

Akiko Mori (ed.) *The Anthropology of Europe as Seen from Japan: Considering Contemporary Forms and Meanings of the Social*.

No.82 (2013年3月31日発行)

Hirochika Nakamaki and Mitchell Sedgwick (eds.) *Business and Anthropology: A Focus on Sacred Space*.

● Senri Ethnological Reports (国立民族学博物館調査報告)

No.106 (2012年8月31日発行)

杉本星子編『情報化時代のローカル・コミュニティ——ICTを活用した地域ネットワークの構築』

No.107 (2012年10月31日発行)

Interviews Conducted by Yuki Konagaya and I. Lkhagvasuren, Translated by Mary Rossabi, Edited and Introduced by Morris Rossabi, *A Herder, a Trader, and a Lawyer: Three Twentieth-Century Mongolian Leaders*.

No.108 (2012年12月10日発行)

土方久功著, 須藤健一・清水久夫編『土方久功日記 IV』

No.109 (2013年1月25日発行)

塚田誠之編『西南中国少数民族の文化資源の“いま”』

No.110 (2013年2月1日発行)

小長谷有紀・S. チョローン共著『モンゴル国営農場資料集』

No.111 (2013年3月27日発行)

小長谷有紀・堀田あゆみ編著『梅棹忠夫のモンゴル調査スケッチ原画集』

No.112 (2013年3月28日発行)

Yuki Konagaya and Maqsooda S. Sarfi (eds.) *Development Trajectories for Mongolian Women in and after Transition.*

No.113 (2013年3月29日発行)

M.И. Клягина-Кондратьева/С.Чулуун, Т.И.Юсупова (M. E.クリヤーギナ-コンドラティエワ著, S. チョローン・T. I. ユスポワ編) Монголын Бурханы Шашны Соёл: Хэнтий, Хангайн сүм, Хийдийн Судалгаа (モンゴル寺院——ヘンテイ、ハンガイにおける寺院の研究).

●民博通信

No.137 (2012年6月29日発行)

評論・展望 使い捨て文化の裏側から新たな消費文化論へ——アフリカにおける中古・非正規衣料品の流通・消費から 小川さやか

No.138 (2012年9月28日発行)

評論・展望 機関研究のアウトリーチ——みんなくワールドシネマの試み 鈴木 紀

No.139 (2012年12月28日発行)

評論・展望 研究公演『ホピの踊りと音楽』の交渉過程で得られた民族誌的知見 伊藤敦規

No.140 (2013年3月28日発行)

評論・展望 フォーラムとしてのミュージアム、その後 吉田憲司

●研究年報2011 (2012年12月20日発行)

●外部出版

日置弘一郎・中牧弘允編『会社神話の経営人類学』東方出版, 2012

柄木田康之・須藤健一編『オセアニアと公共圏——フィールドワークからみた重層性』昭和堂, 2012

信田敏宏・小池 誠編『生をつなぐ——親族研究の新たな地平』風響社, 2013

丹羽典生・石森大知編『現代オセアニアの〈紛争〉——脱植民地期以降のフィールドから』昭和堂, 2013

●共同研究の成果

日置弘一郎・中牧弘允編『会社神話の経営人類学』東方出版, 2012

* 共同研究「会社神話の経営人類学」(2005~2006年度)

白川千尋・川田牧人編『呪術の人類学』人文書院, 2012

* 共同研究「知識と行為の相互関係からみる呪術的諸実践」(2007~2009年度)

小池 誠・信田敏宏編『生をつなぐ家——親族研究の新たな地平』風響社, 2013

* 共同研究「家の人類学——新たなる親族研究に向けて」(2005~2008年度)

Akiko Mori (eds.) *The Anthropology of Europe as Seen from Japan: Considering Contemporary Forms and Meanings of the Social* (Senri Ethnological Studies No.81) National Museum of Ethnology, 2013

* 共同研究「ソーシャル概念の再検討——ヨーロッパ人類学の問いかけ」(2006~2009年度)

丹羽典生・石森大知編『現代オセアニアの〈紛争〉——脱植民地期以降のフィールドから』昭和堂, 2013

* 共同研究「オセアニアにおける独立期以降の〈紛争〉に関する比較民族誌的研究」(2009~2012年度)

吉本 忍編著・柳悦州作図『世界の織機と織物』国立民族学博物館, 2013

* 共同研究「手織機と織物の通文化的研究」(2010~2013年度)

国立民族学博物館学術情報リポジトリ

本館では共同研究の成果等を学術成果として出版し、国内外の研究者に広く配布してきたが、より公開度を高めるために、機関リポジトリを構築することとした。一般公開後3年経過した「みんぱくりポジトリ」は、昨年に引き続き国立情報学研究所(NII)の「最先端学術情報基盤整備(CSI)連携促進委託事業」に、2012年度も採択された。この外部資金と館内の予算措置により、今年度も恒常的な館内刊行物の登録以外に、『研究年報2010』掲載業績を基に個人業績の抽出・許諾・登録作業を行った。また、懸案となっていた低精度の登録PDFにおいては、PDFの再作成・再登録を実施し、年度内に終了した。さらに、『リポジトリ運用指針』の多言語版は、精査した英語版を元にして、スペイン語・ドイツ語・フランス語・ロシア語について再度翻訳を行うと同時に利便性の向上をはかるためにリポジトリ検索画面のレイアウト変更も行った。

2013年3月末現在のコンテンツ登録件数は3,852件であり、これは日本135機関中46位、世界1,654機関中757位(スペイン高等科学研究所CSIC作成のRANKING WEB of REPOSITORIES)にランキングされた。今年度新たに登録したコンテンツは254件であり、今後も年間約200件のペースで登録可能であると考えている。コンテンツのダウンロード数は、2012年度月平均約25,000ダウンロードであり、昨年度よりも約4,000ダウンロード増加している。

2012年10月には、自然科学研究機構核融合科学研究所主催の「大学共同利用機関におけるリポジトリ」に関する情報交換会」に協力し、イベント運営を全面的にバックアップし本館セミナー室にてシンポジウムを開催した。それにより大学共同利用機関間での有益な情報交換を行うことができた。

学術講演会

●国立民族学博物館公開講演会

「だから人類は地球を歩いた——太平洋へ アメリカへ」

実施日 2012年10月26日

場 所 日経ホール

主 催 国立民族学博物館、日本経済新聞社

参加者 564人

講演1 「海を越えてオセアニアへ」

講 師 印東道子

内 容 我々ホモ・サピエンスは、20万年前にアフリカで誕生して以来、地球のほぼ全域へと拡散した。それ以前の人類が進出しなかった海洋世界へも移動したことは大きな特徴であった。オーストラリアからポリネシアまで、海を舞台に繰り広げられた人類の拡散ドラマについて、最近の研究を交えて紹介し、移動の背景について考えた。

講演2 「最初のアメリカ人の足あと」

講 師 關 雄二

内 容 ユーラシア大陸に拡散した初期人類はやがてアメリカ大陸に渡る。しかし、意外なことにその最初のアメリカ人が、いつ、どのような経路でたどり着いたのかという点について結論は出ておらず、また移住の波が何回あったのかについても定説はない。こうした謎が残る人類の足跡を最近の研究を交えながら概観した。

パネルディスカッション

池谷和信×印東道子×陳 天璽

司 会 平井京之介

内 容 現在、地球上のほとんどの地域に人類が暮らしている。これほど広い範囲に地理的に分布する動物は人類だけである。なぜ人類だけがこれほど広範囲にわたって移動したのであろうか。そして、なぜ人類だけに移動ができたのであろうか。人類にとって、移動はどのような意味を持つのであろうか。このパネルディスカッションでは、これらの問題をもう一度考えてみた。そして、現代の狩猟採集民の移動と、最初の日本人の移動を、比較の対象として取り上げた。

「なんだ日本の文化って?—芸能から MANGA まで」

実施日 2013年3月22日

場 所 毎日新聞社オーバルホール

主 催 国立民族学博物館、毎日新聞社

参加者 315人

講演1 「境界を演じる人びと」

講 師 笹原亮二

内 容 九州南部から奄美群島にかけては沖縄と九州以北双方の民俗文化が接する境界領域とされてきた。同様の傾向は芸能や音楽においても認められるが、その棲み分けは、異国や異文化を意図的に演じる場合もあって相当錯綜している。こうした芸能や音楽の実態を通じ、国や文化の境界について改めて考えてみた。

講演2 「香港人／台湾人になることは日本人になること——戦後のアイデンティティ形成と日本文化の役割」

講 師 王 向華（香港大学グローバル創造的産業プログラム主任）

内 容 近年、漫画や音楽など世界各地における日本のポピュラー文化の流行がマス・メディアで盛んに報じられるようになった。しかし、日本文化の受け入れられ方はそれぞれの国で異なっている。今回の講演では、第二次世界大戦後の香港と台湾のアイデンティティ形成における日本文化の役割を、2つの国の日本文化を受け入れた経済政治的な背景の違いに着目して比較した。

パネルディスカッション

関 一敏（九州大学人間環境学研究院教授）×王 向華×笹原亮二

司 会 小川さやか

内 容 奄美大島で演じられる音楽や芸能と、台湾や香港において絶大な人気を誇る日本のボーイズラブ・ミックやJ-POPアイドル。ひとくちに日本文化といっても、ずいぶんと異なっているように見える。パネルディスカッションでは、民俗芸能から MANGA までをつなげて「日本の文化って何だ?」を考えるヒントを一緒に模索した。

2-4 学会開催

学会開催

2012年5月26日～27日 第49回日本アフリカ学会

2012年12月9日 地域研究コンソーシアム次世代ワークショップ「現代の紛争をめぐる地域間比較研究に向けて——アフリカとオセアニアの事例から考える」

2013年1月8日～9日 国際研究フォーラム『国際共同取材、中国・ロシア・モンゴル国のトゥパ人たち——テュルク系とモンゴル系のあいだ』

2013年2月15日 国際シンポジウム『モンゴル国における鉱業開発の諸問題——歴史的視点から』

2013年3月17日 国際シンポジウム「文化を展示すること——日本とヨーロッパの遠近法を考える」

2-5 研究員制度

外来研究員

DE ST. MAURICE, Gregory A. (デ セイント モーリス グレゴリー エイ) アメリカ ピッツバーグ大学大学院博士課程 (Ph.D. Candidate)

研究課題：地域に根ざすローカリズムの可能性と現代における京都の食文化

McGUIRE, Jennifer (マグワイア ジェニファー) アメリカ オックスフォード大学博士課程 (Ph.D. Candidate)

研究課題：日本におけるろう者のための高等学校教育——五感、社会、自己意識の形成

SCHNELL, Scott Randall (シュネル スコット ランダル) アメリカ Department of Anthropology, University of Iowa, Associate Professor

研究課題：自然との共生——東北日本におけるマタギの狩猟伝統と自然環境の管理責任

KERR, Hui-Ying (ケール・ホイ イェン) イギリス Royal College of Art/Victoria & Albert Museum 大学院生 (博士課程)

研究課題：バブル期 (1986-1991年) の日本のデザインに関する総合的研究

MCHUGH, Christopher James (マキュー クリストファー ジェームス) イギリス サンダーランド大学大学院生

研究課題：ジョージ・ブラウン・コレクションの再文脈化に関する実践的研究
——市民参加による陶芸制作を通じて

塩谷 サルフィ マクスーダ (シオタニ サルフィ マクスーダ) インド Visiting faculty Center of Central Asian Studies University of Kashmir

研究課題：「移行期」前後におけるモンゴル女性の発展の軌跡

金山 晶 (金 晶) (カナヤマ アキ) 韓国

研究課題：東アフリカ地域の牧畜民にみられる抜歯慣習について

金 美善 (キム ミソン) 韓国 関西大学非常勤講師

研究課題：移民女性の言語問題——ハンディ克服のための言語習得戦略と言語支援とのかかわり

崔 承燕 (チェ スンヨン) 韓国 全南大学BK事業団博士後 (post-doctoral) 研究員

研究課題：海洋シルクロード地域の織物と織機に関する動向調査

豊山亜希 (呉 亜希) (トヨヤマ アキ(オ アヒ)) 韓国 関西大学文学部総合情報学部非常勤講師

研究課題：コロニアル/ポストコロニアル言説としてのインド美術史の脱構築
——植民地インドにおける造形活動実践と文化行政の再検討から

財吉拉胡 (サイジラホ) 中国 日本学術振興会外国人特別研究員

研究課題：内モンゴルにおけるシャマニズムと民間医療に関する文化人類学的研究

斯 琴 (スチン) 中国 内モンゴル農業大学人文社会科学学院非常勤講師

研究課題：オイラド・モンゴルにおける口頭伝承と口承史

馬 茜 (バ セン) 中国 中国北京市中央民族大学民族学社会学学院民族学博士課程

研究課題：開発主義言説における人間という概念の検討——中国寧夏回族の観光開発プロジェクトを中心に

南 誠（梁 雪江）（ミナミ マコト） 中国 長崎大学水産環境科学総合研究科助教

研究課題：「中国帰国者」のコミュニティにおける文化の変容に関する研究

YOTOVA, Mariya Ivanova（ヨトヴァ・マリア・イヴァノヴァ） ブルガリア 滋賀県立大学非常勤講師

研究課題：食をめぐる文化の表象——日本とブルガリアの博物館展示の比較をとおして

MARZEC, Agnieszka（マジェツツ・アグネシカ） ポーランド TECC 語学学校非常勤講師

研究課題：日本における日本人・ヨーロッパ人の国際家族の文化適応

ICHINKHORLOO, Lkhagvasuren（イチンホルロー ルハグワスレン） モンゴル モンゴル国立科学技術大学人文
学舎教授

研究課題：オイラド・モンゴル研究の新展開

FIRSOVA, Varvara（フィルソヴァ ヴァルヴァラ） ロシア ロシア科学アカデミー図書館アジア・アフリカ文学
部研究員

研究課題：日本における外国人コミュニティの形成——南アジアからの移住と日本の多文化主義

相島葉月（あいしま はつき） 日本 英国マンチェスター大学人文学部中東研究学科講師

研究課題：現代エジプトのオルタナティヴ・モダニティとしての空手実践に関する社会人類学的研究

荒田 恵（あらた めぐみ） 日本

研究課題：アンデス形成期祭祀遺跡における工芸品製作

伊藤まり子（いとう まりこ） 日本 京都外国語大学/和歌山市立医師会看護専門学校非常勤講師

研究課題：現代ベトナム北部地域の都市における女性の「親密性」に関する人類学的研究

伊藤 悟（いとう さとる） 日本

研究課題：中国徳宏タイ族社会の音文化——感性と感覚の人類学

岩佐光広（いわさ みつひろ） 日本 高知大学教育研究部講師

研究課題：交錯する態度への民族誌的接近——連辞符人類学の再考、そしてその先へ

岩谷洋史（いわたに ひろふみ） 日本 立命館大学/関西大学非常勤講師

研究課題：人類学的な資料の情報化に関する研究

魚津（東村）純子（うおづ（ひがしむら）じゅんこ） 日本 日本学術振興会特別研究員

研究課題：東アジア古代国家形成期における織物文化の特質に関する民族考古学的研究

浮ヶ谷幸代（うきがや さちよ） 日本 相模女子大学人間社会学部教授

研究課題：サファリングとケアの人類学的研究

大場千景（おおば ちかげ） 日本

研究課題：無文字社会における社会変動と歴史意識の動態

岡 晋（おか すずむ） 日本

研究課題：中国雲南省ナシ族の「出自集団」の構成と変成についての研究

岡部真由美（おかべ まゆみ） 日本 日本学術振興会特別研究員

研究課題：タイにおける仏教僧ネットワークにみるコミュニティの編成過程に関する人類学的研究

- 岡本尚子（おかもと なおこ） 日本 国際基督教大学高等学校教務員
研究課題：アラビアンナイト伝説訳者 J.-C. マルドリュスに関する遺贈コレクションによる研究
- 越智郁乃（おち いくの） 日本
研究課題：沖縄における米軍返還地の開発とコミュニティ再編に関する人類学的研究
- 落合雪野（おちあい ゆきの） 日本 鹿児島大学総合研究博物館准教授
研究課題：プラント・マテリアルをめぐる価値づけと関係性
- 小野林太郎（おの りんたろう） 日本 東海大学海洋学部専任講師
研究課題：アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類学的研究：
資源利用と物質文化の時空間比較
- 風戸真理（かざと まり） 日本 神戸山手大学現代社会学部非常勤講師
研究課題：生産現場における人とモノの関係性にみる社会主義経験の多様性と普遍性
- 梶丸 岳（かじまる がく） 日本 日本学術振興会特別研究員
研究課題：民族誌記述による一般歌掛論の人類学的構築
- 金子正徳（かねこ まさのり） 日本 三重大学人文学部非常勤講師
研究課題：東南アジア島嶼部における民族・文化動態の研究
- 金谷美和（かねたに みわ） 日本 京都大学地球環境学堂三才学林研究員、大阪芸術大学芸術学部非常勤講師
研究課題：グローバル化のなかのインド染織品
- 上池あつ子（かみいけ あつこ） 日本 甲南大学経済学部非常勤講師
研究課題：インドにおける伝統医薬に関する研究
- 川田順造（かわだ じゅんぞう） 日本 神奈川大学特別招聘教授
研究課題：日本の「近代化」をアジア・アフリカ諸社会との比較で再検討する
- 河西瑛里子（かわにし えりこ） 日本 日本学術振興会特別研究員
研究課題：聖地におけるスピリチュアルな体験と癒しの人類学的研究——現代のイギリスを事例に
- 神田每実（かんだ つねみ） 日本 愛知県立芸術大学美術学部彫刻専攻准教授
研究課題：造形美術様式と風土の関係
- 岸本誠司（きしもと せいじ） 日本 東北公益文科大学非常勤講師
研究課題：東アジアにおける在来農業とマメ科作物に関する民俗学的研究
- 窪田 暁（くぼた さとる） 日本
研究課題：ドミニカ共和国からアメリカに渡る「野球移民」の民族誌
- 熊谷瑞恵（くまがい みずえ） 日本 ウイグル・アカデミー外国人研究員
研究課題：牧畜文化とイスラーム——中央アジアからの分析のこころみ
- 桑山敬己（くわやま たかみ） 日本 北海道大学大学院文学研究科教授
研究課題：海外における人類学的日本研究の総合的分析

古賀章一（こが しょういち） 日本 大阪市立大学大学院創造都市研究科客員研究員
研究課題：中国の環境ガバナンスと国際協力に関する研究

五月女賢司（さおとめ けんじ） 日本 吹田市立博物館学芸員
研究課題：博物館資源を活用したユニバーサル展示・教育に関する実践的研究

坂田博美（さかた ひろみ） 日本 富山大学経済学部教授
研究課題：手芸をめぐる消費文化研究：フィールドワークに基づく消費者行動分析

佐藤吉文（さとう よしふみ） 日本
研究課題：先スペイン期アンデスにおける初期国家と地域間交流との関係に関する研究

眞田岳彦（さなだ たけひこ） 日本 女子美術大学大学院教授
研究課題：気候風土に育まれた人の幸福観と文様、装飾、記号との造形デザイン研究

重信幸彦（しげのぶ ゆきひこ） 日本 北九州市立大学基盤教育センター教授
研究課題：日本におけるネイティブ人類学/民俗学の成立と文化運動——1930年代から1960年代まで

新本万里子（しんもと まりこ） 日本 広島大学大学院総合科学研究科研究員
研究課題：生理用品の流入による女性の身体観の変容——パプアニューギニアの事例から

鈴木博之（すずき ひろゆき） 日本 Laboratoire Parole et Langage (CNRS) PD 非常勤研究員
研究課題：中国雲南省チベット語諸方言の形成過程に関する歴史言語学的研究

関根康正（せきね やすまさ） 日本 関西学院大学社会学部教授
研究課題：ストリート・ウィズダムとローカリティの創出に関する人類学的研究

添野 勉（そえの つとむ） 日本 淑徳大学非常勤講師
研究課題：社会集団の写真資料に対する分類・メタデータ付与手法の研究

田口理恵（たぐち りえ） 日本 東海大学海洋学部海洋文明学科准教授
研究課題：アジアにおける自然と文化の重層的関係に関連する民族誌資料の調査研究

武田和久（たけだ かずひさ） 日本 日本学術振興会海外特別研究員
研究課題：南米ラプラタ地域イエズス会布教区の先住民社会組織に関する歴史学的研究

竹村嘉晃（たけむら よしあき） 日本 和歌山県立医科大学/奈良大学/関西大学非常勤講師
研究課題：ダンス・エスノグラフィーに関する理論的研究——南アジア芸能を事例に

田村うらら（たむら うらら） 日本 日本学術振興会特別研究員
研究課題：民族的モノの再生と保存に関わる人類学的研究——トルコ絨毯の修繕と展示を中心にして

田森雅一（たもり まさかず） 日本 東洋英和女学院大学人間科学部非常勤講師
研究課題：インド音楽・舞踊の近代化とグローバル化に関する人類学的研究

辻 貴志（つじ たかし） 日本 近畿大学経営学部/岡山理科大学総合情報学部非常勤講師
研究課題：フィリピン・パラワン島南部先住少数民族モルボッグの家畜利用にかんする生態人類学的研究

辻 輝之（つじ てるゆき） 日本
研究課題：宗教と移民のアイデンティティ・共生——南アジア系ディアスポラを事例として

- 津田浩司（つだ こうじ） 日本 東京大学大学院総合文化研究科准教授
研究課題：「国家英雄」から見るインドネシアの地方と民族の生成と再生
- 出水 力（でみず つとむ） 日本 大阪産業大学経営学部教授
研究課題：海外でのモノづくりに関する研究
- 土佐桂子（とさ けいこ） 日本 東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授
研究課題：「統制」と公共性の人類学的研究——ミャンマーにおけるモノ・情報・コミュニティ
- 友永雄吾（ともなが ゆうご） 日本 佛教大学/大阪産業大学非常勤講師
研究課題：オーストラリア南東部先住民の資源管理に関する伝統的知識の活用とその継承メカニズムの解明に関する研究
- 中井信介（なかい しんすけ） 日本 大谷大学非常勤講師
研究課題：生業活動の域内多様度に関する人類学的研究——東南アジア大陸部におけるモンの事例
- 中道静香（なかみち しずか） 日本 天理大学非常勤講師
研究課題：アラビア語方言記述の歴史とその社会的役割の変容
- 中村真里絵（なかむら まりえ） 日本 岡山理科大学/四條畷学園短期大学非常勤講師
研究課題：タイにおける土器づくりの職人集団の形成に関する人類学研究
- 奈倉京子（なぐら きょうこ） 日本 静岡県立大学国際関係学部専任講師
研究課題：帰還移民の比較民族誌的研究——帰還・故郷をめぐる概念と生活世界
- 成定洋子（なりさだ ようこ） 日本 金城学院大学非常勤講師、東京学芸大学男女共同参画支援室特任准教授・主任研究員
研究課題：イギリスのフラット・シェアにおける親密性に関する人類学的研究
- 名和克郎（なわ かつお） 日本 東京大学東洋文化研究所准教授
研究課題：ネパールにおける「包摂」をめぐる言説と社会動態に関する比較民族誌的研究
- 橋本裕之（はしもと ひろゆき） 日本 盛岡大学文学部教授
研究課題：災害復興における在来知——無形文化の再生と記憶の継承
- 福原弘識（ふくはら ひろのり） 日本
研究課題：初期国家形成と社会組織の動態：テオティワカンのアパートメント・コンパウンドから
- 藤井和子（ふじい かずこ） 日本 大阪国際大学非常勤講師
研究課題：韓国植民地期の文化に関する人類学的研究——群山月明会会員の聴き取り調査から
- 堀内正樹（ほりうち まさき） 日本 成蹊大学文学部教授
研究課題：非境界型世界の研究——中東的な人間関係のしくみ
- 前川真裕子（まえかわ まゆこ） 日本
研究課題：ジャポニズムの系譜とテクノ・オリエンタリズム
- 真崎克彦（まさき かつひこ） 日本 清泉女子大学地球市民学科准教授
研究課題：アジア・アフリカ地域社会における〈デモクラシー〉の人類学——参加・運動・ガバナンス

増野高司（ますの たかし） 日本

研究課題：東南アジア大陸部における焼畑の変容過程の比較研究

松井生子（まつい なるこ） 日本

研究課題：「民族」の差異化と接合をめぐる実践

——在カンボジア・ベトナム人の上座仏教との関わり方を中心に

松岡葉月（まつおか はつき） 日本

研究課題：博物館における全天周科学映像の開発および評価に関する人文・社会学的研究

松川恭子（まつかわ きょうこ） 日本 奈良大学社会学部准教授

研究課題：グローバリゼーションの中で変容する南アジア芸能の人類学的研究

道信良子（みちのぶ りょうこ） 日本 札幌医科大学医療人育成センター教養教育研究部門准教授

研究課題：現代の保健・医療・福祉の現場における「子どものいのち」

三牧純子（みまき じゅんこ） 日本 独立行政法人国際協力機構職員

研究課題：沿岸部のコミュニティの災害対応力と高齢化についての研究

宮脇千絵（みやわき ちえ） 日本

研究課題：中国雲南省におけるモンの装いにみる自己表象に関する人類学的研究

村尾静二（むらお せいじ） 日本 総合研究大学融合推進センター助教

研究課題：映像の共有人類学——映像をわかちあうための方法と理論

森 一代（もり かずよ） 日本 日本学術振興会特別研究員

研究課題：互助実践の外延的拡大とその位相——ラオス北西部と奈良県中山間地域における比較研究

八重清敏（やえ きよとし） 日本 彫刻師

研究課題：マキリの研究——マキリ（小刀）の製作技法について

八木百合子（やぎ ゆりこ） 日本

研究課題：現代ペルー社会における聖女崇拝の展開に関する研究

八塚春名（やつか はるな） 日本 日本学術振興会特別研究員

研究課題：タンザニアにおける狩猟採集民の生業複合に関する研究

柳沢英輔（やなぎさわ えいすけ） 日本 青山学院大学総合文化政策学部付置 ACL 特別研究員

研究課題：ベトナム中部地域におけるゴング文化の動態——楽器の製造と流通に着目して

山田孝子（やまだ たかこ） 日本 独立行政法人日本学術振興会学術システム研究センター専門研究員

研究課題：チベットの基層文化に関する研究——自然、生態、信仰

吉岡由佳（よしおか ゆか） 日本 くらしき作陽大学助教

研究課題：アジア系アメリカ詩における「声」の研究

吉根憲一（よしね けんいち） 日本 彫刻師補

研究課題：アイヌの木工とその工具について——木彫盆の製作技法と道具の種類について

吉本康子（よしもと やすこ） 日本 神戸学院大学/園田学園女子大学/放送大学講師
研究課題：チャム系住民とイスラームとの関係に関する地域間比較研究

劉 麟玉（りゅう りんぎょく） 日本 奈良教育大学教育学部准教授
研究課題：音盤を通してみる声の近代——台湾・上海・日本で発売されたレコードの比較研究を中心に

特別共同利用研究員

本館は、大学共同利用機関として研究活動を展開すると同時に、大学院教育の一環として、全国の国公私立大学の博士後期課程に在籍する学生を、当該大学院生の所属する大学院研究科からの委託を受けて特別共同利用研究員として受け入れ、一定の期間、特定の研究課題に関して研究指導をおこなっている。

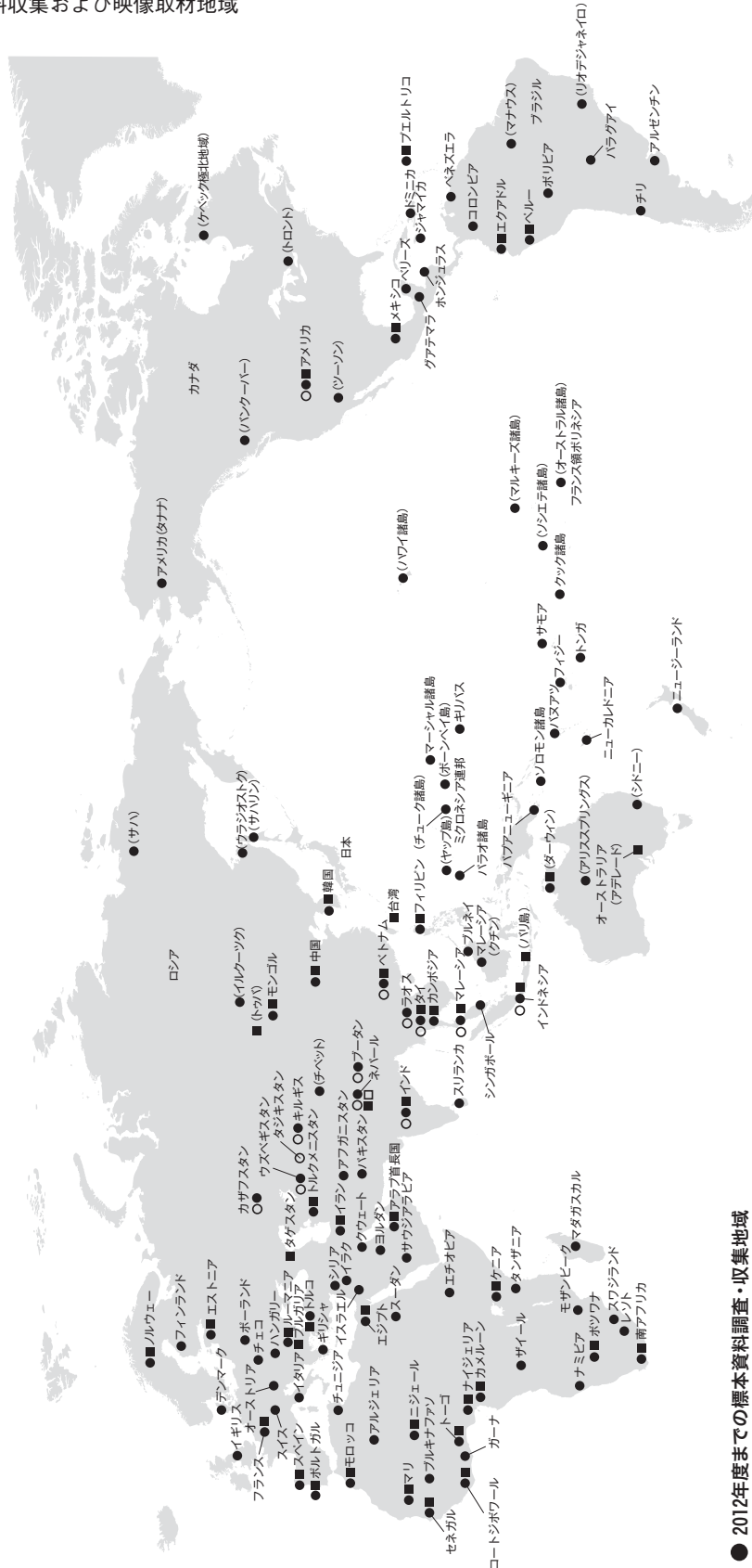
特別共同利用研究員は、各々の特定の研究課題に応じて指導教員から研究指導を受け、本館の諸施設を利用し研究を遂行するだけでなく、本館に設置されている、総合研究大学院大学文化科学研究科の講義を受けることができる。

2012年度は、国立大学2人、私立大学1人の、合計3人の大学院生を受け入れた。

2-6 データの利用

標本資料および映像音響資料に関するデータ

● 標本資料収集および映像取材地域



● 2012年度までの標本資料調査・収集地域
○ 2013年度の標本資料調査・収集計画地域

■ 2012年度までの映像取材地域
□ 2013年度の映像取材計画地域

●標本資料の収集・利用状況

・収集

朝倉敏夫	韓国	84点(急須他)	2012年8月27日～9月7日
韓 敏	中国	194点(位牌、経典他)	2012年12月6日～12月12日
			2013年3月24日～3月29日
陳 天璽	中国、台湾他	68点(手紙、写真、竜舞他)	2013年1月17日
			2013年2月12日
			2013年3月5日～3月6日
野林厚志	台湾	49点(衣装他)	2013年3月23日～3月26日
吉田憲司	モザンビーク	13点(彫刻他)	2012年10月12日～10月22日

・2013年3月31日現在の収蔵資料数

海外資料／175,623点 国内資料／159,830点(未登録資料含む) 総点数／335,453点(未登録資料含む)

・大学・博物館等への貸し出し

総点数／973点

●映像音響資料の収集・利用状況

・取材

笹原亮二	滋賀県長浜市「日本展示新構築のための長浜曳山祭の映像資料の製作」	2012年4月14日～15日
小長谷有紀	ロシア連邦トゥバ共和国、中国新疆ウイグル自治区、モンゴル国ボブド県 「ロシア・モンゴル・中国におけるトゥバの現代変容に関する取材」	2012年7月26日～8月18日
韓 敏	中国福建省「漢族の祖先祭祀、四合院の映像取材及び文房四宝・磁器の資料収集」	2012年12月6日～12日

・2012年3月現在の収蔵資料数

映像資料／7,878点 音響資料／62,651点 総点数／70,529点

・映像音響資料の貸し出し

利用総件数／175件(内、大学23件) 資料利用総点数／1,039点(内、大学129点)

館内利用など

利用件数／98件 資料利用点数／709点

特別利用(館外での上映・試聴など)

利用件数／77件 資料利用点数／330点

文献図書資料の収集・整理・利用状況

●2012年度図書室の活動

1. 利用者サービス

- 1) カウンター前に図書室からのお知らせボードを、図書室入口にはデジタルサイネージ(電子掲示板)を設置した。
- 2) 一般利用者への利用案内をカラー印刷で作成、また、10月よりツアーマップの配布を開始した。
- 3) 一般利用者の来室時の受付を簡略化し、氏名確認ができるものの提示は不要とした。(初回登録時のみ確認)

2. 利用者研修会の開催——教育・研究支援

- 1) 2012年4月4日 外来研究員オリエンテーションにて案内 15名参加
- 2) 2012年4月11日 総研大新入生ガイダンスにて案内 8名参加

3. 資料整備関係

- 1) 蔵書点検を兼ねた資料IDのラベル貼りと無断持ち出し防止用磁気テープの装着を約20万冊処理し（3か年計画の最終年）、必要に応じて修理や箱入れ等を行った。
- 2) 遡及入力を引き続き実施し、約41,000冊を登録した。
- 3) 研究業績の点検、整理を行い、3か年計画の1年目として、6,750件の整理を行った。また、研究業績棚を教員氏名の50音順に並べかえ、氏名見出しを整備した。
- 4) 雑誌コーナーの新作雑誌棚に、当年度分と前年度分を配架するように整備した。
- 5) 地図室資料の点検を行い、整理およびデータ化を検討した。その結果をふまえて、整備事業を開始した。

4. オンライン資料関係

- 1) データベース（The Making of the Modern World I & II、Western Travellers in the Islamic World Online）を導入した。

5. 施設整備

- 1) 地震発生時の書架資料落下防止対策のため、書庫3～5層の書架上段2段に落下防止テープを貼付。書庫2層荷捌きコーナーに書架を増設（約2,250冊分の収容能力増加）
- 2) 書庫エレベータ内にレスキューキャビネットを設置した。
- 3) 図書室シャッターの改修を行った。
- 4) 書庫階段部の壁を白く塗装した。これにより、照明効果が高まり、避難経路としての安全性が高められた。
- 5) 未整理梅棹資料を一元管理し、効率的に整理を進めるため、準備室に集密書架を設置した。

6. 他機関との連携（みんぱく図書室見学ツアー開催）

- 1) 博物館学集中コース（JICA）オリエンテーション（2012年9月20日 10名参加）
- 2) 若手研究者奨励セミナー（2012年11月30日 13名参加）
- 3) 大阪大学コミュニティデザインセンター
「アート・アーカイブズ概論」集中講義（2012年12月27日 10名参加）

7. 広報、社会貢献その他

- 1) 「みんぱく図書室ニュース」を月に一度発行し、図書室の情報提供を行った。
- 2) 中学生の職場体験学習受入れ。
豊中市立第十一中学校（2012年11月7日 2年生男子2名）
箕面市立止々呂美中学校（2012年11月7日 2年生女子1名）
豊中市立第十二中学校（2012年11月14日 2年生男子1名）
吹田市立山田東中学校（2012年11月14日 2年生男子1名）

●2012年度新規受入数

日本語図書	2,062点	外国語図書	3,314点		
AV資料他	266点	製本雑誌	744点	合計	6,386点

●2013年3月末現在の蔵書数

日本語図書	261,415点	外国語図書	388,370点	合計	649,785点
日本語雑誌	9,985種	外国語雑誌	6,773種	合計	16,758種
HRAF	385ファイル	HRAF原典（テキスト）	7,141冊		

●利用状況（2012年度）

入室者	全体	14,587人
	館外者	1,764人
時間外入室者		144人
うち日曜、祝日		41人
貸出	図書	11,162冊
	雑誌	430冊
うち館外貸出図書		3,603冊
HRAF 利用受付		16件
		(カウンター受付件数)

文献複写	受付	国内（うち謝絶）	2,341 (254)件
		国外（うち謝絶）	73 (19)件
	来室*	3,955 件	
	依頼	国内	305 (12)件
国外		16 (9)件	
現物貸借	受付	国内	1,091 (75)件
		国外	332 (6)件
	依頼	国内	4 (2)件
		国外	4 (2)件
事項調査	受付	73 件	

*うち大学等の機関1,070件

民族学資料共同利用窓口

本館の所蔵する民族学資料は多岐に渡り、館内外における諸分野の研究や教育、他の博物館への貸し付けなどを通して社会に還元し利用されるためには、各種問い合わせに効率よく対応する必要があった。そうした観点から、2006年度から「民族学資料共同利用窓口」が設置された。

2012年度の問い合わせ利用件数は、422件であった。

問い合わせ者別	(件)	問い合わせ者の所属機関別	(件)		
教員（大学）	58	公的機関	大学・大学図書館	103	
大学院生	9		博物館・美術館	30	
大学生	20		小・中・高	14	
学生（専門学校等）	0		その他教育機関	1	
教員（小・中・高）	11		研究機関	1	
学生（小・中・高）	0		公共図書館	8	
博物館・美術館関係	24		地方公共団体	7	
図書館	28		団体	3	
教育・研究機関	6		民間	研究機関	1
マスコミ関係	33			会社	63
会社・団体	45	団体		10	
一般	75	個人	館外	79	
民博教職員	113		館内	102	
計	422	計	422		

資料の利用目的 (件)

調査・研究		業務用		その他	
研究*1	129	展示用	20	刊行物作成	4
論文作成	12	番組制作	29	館の事業	27
学習*2	4	出版物作製	30	参考資料	0
図書館から	28	参考資料	7	資料の複製	16
授業で利用	37	その他	4	小計	47
その他	71	小計	90		
小計	281	寄贈申出	4		
		その他	0		
		小計	4		
		合計	422		

注) *1 大学生以上の調査を「研究」とする

*2 高校生以下の調査を「学習」とする

民族学研究アーカイブズの構築

本館には発足以来、民族学者の研究ノートや原稿、フィールドワークで生成、収集された映像・録音記録など、さまざまな資料が蓄積されている。2005年、民博創設30年を迎えるにあたり、民族学研究の拠点である本館が備えるべき機能の1つとして、アーカイブズ管理体制整備の必要性が検討され、かつ、これらの資料・情報を公開し、研究・教育での共同利用や社会還元に供してその価値を再認識しようと、「民族学研究アーカイブズ」の構築事業が開始された。

2007年度に、民族学研究アーカイブズ Home Page を立ち上げ、これまで青木文教、大内青琥、桂米之助、菊沢季生、篠田 統、土方久功、馬淵東一、及び「日本文化の地域類型研究会」アーカイブ、松尾三憲旧蔵絵葉書コレクションなどの資料リスト作成等を行い、その成果を順次公開している。

2012年度は昨年度に引き続きリスト作成整理業務の外部委託を行い、木内信敬アーカイブ資料について整理を終えた。また、土方久功アーカイブ資料のうち、ノート全40冊のデジタル化を完了した。

リストを公開し、利用に供しているアーカイブは12件である。2012年度の利用状況は閲覧10件、特別利用2件であった。

データベースの作成・利用状況

●館外公開しているデータベース

・標本資料目録データベース

本館が所蔵する標本資料（生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など）の情報。ほぼすべての資料について、標本名、地域、民族、寸法・重量、受入年度などの基本情報を収録（画像付き）。

2011年度までの作成件数	245,337
2012年度の作成件数	18,128
2012年度のアクセス件数	71,949

・標本資料詳細情報データベース

本館が所蔵する標本資料（生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など）の情報。標本名、現地名、訳名、収集地、使用地、使用民族、使用年代、用途・使用法、製作地、製作法・材料など、より詳しい情報を収録（画像付き）。

2011年度までの作成件数	47,196
2012年度の作成件数	217
2012年度のアクセス件数	4,557

・標本資料記事索引データベース

本館関連出版物から所蔵標本資料の解説部分を抽出し、その書誌事項を標本資料別に整理した情報。

2011年度までの作成件数	40,337
2012年度の作成件数	4,186
2012年度のアクセス件数	1,912

・韓国生活財データベース

ソウルの李さん一家の生活財を網羅した情報。アパートの中にあったすべての物について、配置と入手方法、物にまつわる家族の思い出を記録（画像付き）。

2011年度までの作成件数	7,827
2012年度の作成件数	0
2012年度のアクセス件数	3,937

・George Brown Collection (ジョージブラウンコレクション)

宣教師であり神学博士でもあったジョージ・ブラウン氏が19世紀から20世紀初頭にかけて南太平洋諸島で収集し、現在、本館に収蔵されている民族誌資料に関する基本情報（画像付き）。

2011年度までの作成件数	2,992
2012年度の作成件数	0
2012年度のアクセス件数	1,289

・映像資料目録データベース

本館が所蔵する映画フィルム、ビデオテープ、DVD等の情報（写真資料は除く）。

2011年度までの作成件数	7,825
2012年度の作成件数	28
2012年度のアクセス件数	4,464

・ビデオテークデータベース

本館展示場で提供しているビデオテーク番組の情報。ビデオテークブースと同じメニューで番組を探したり、キーワードで検索が可能。

2011年度までの作成件数	606
2012年度の作成件数	20
2012年度のアクセス件数	8,073

・音楽・芸能の映像データベース

本館が世界各地で取材したビデオ映像から、音楽演奏や芸能に関係する部分を、1曲または1テーマごとに抽出した動画データベース。映像は館内限定公開。

2011年度までの作成件数	849
2012年度の作成件数	0
2012年度のアクセス件数	382

・ネパール写真データベース（日本語版・英語版）

「西北ネパール学術探検隊」（1958年）に参加した高山龍三氏（当時、大阪市立大学大学院生）らがネパールで撮影した写真、および、同隊が収集し、現在本館に収蔵されている標本資料の情報（画像付き）。

2011年度までの作成件数	3,879
2012年度の作成件数	0
2012年度のアクセス件数	3,243

・松尾三憲旧蔵絵葉書コレクション

松尾三憲氏が、1919（大正8）年から1923（大正12）年までの海軍在職中に、訓練航海の途上訪れた現地で購入求めた絵葉書の情報（画像付き）。高精細でデジタル化した絵葉書画像の連続的な拡大が可能。

2011年度までの作成件数	169
2012年度の作成件数	0
2012年度のアクセス件数	1,578

・音響資料目録データベース

本館が所蔵するレコード、CD、テープ等の情報。

2011年度までの作成件数	62,453
2012年度の作成件数	0
2012年度のアクセス件数	1,479

・音響資料曲目データベース

本館が所蔵する音響資料について、音楽の曲単位、および昔話の一話単位の情報。

2011年度までの作成件数	346,772
2012年度の作成件数	0
2012年度のアクセス件数	902

・図書・雑誌目録データベース

本館が所蔵する図書・雑誌の書誌・所蔵情報。

2011年度までの作成件数	660,560
2012年度の作成件数	5,983
2012年度のアクセス件数	175,952

・梅棹忠夫著作目録（1934～）データベース

本館初代館長、梅棹忠夫氏の論文・著書から本の帯の推薦文まで、あらゆる著作を網羅した目録データベース。

2011年度までの作成件数	—
2012年度の作成件数	6,473
2012年度のアクセス件数	1,513

・中西コレクションデータベース——世界の文字資料

世界のさまざまな文字で書かれた図書・新聞・手稿・標本などの資料に関する分析情報と書誌情報、文字サンプルの画像。これらの資料は、中西印刷株式会社・故中西亮氏が世界各地で収集。

- | | |
|---------------|--------|
| 2011年度までの作成件数 | 2,729 |
| 2012年度の作成件数 | 0 |
| 2012年度のアクセス件数 | 28,802 |
- ・吉川「シュメール語辞書」データベース
吉川 守氏（広島大学名誉教授）が40年ほどの年月をかけて完成させた、シュメール語の研究ノート。親字33,450語をキーワードに検索・閲覧できる。
- | | |
|---------------|-----------------------|
| 2011年度までの作成件数 | キーワード33,450語（40,596頁） |
| 2012年度の作成件数 | 0 |
| 2012年度のアクセス件数 | 552 |
- ・Talking Dictionary of Khinina-ang Bontok（ボントック語音声画像辞書）
Lawrence A. Reid氏（ハワイ大学名誉教授）が編集した、フィリピン・ルソン島北部で話されるボントック語のギナン方言の辞書。語の派生関係、例文、音声・画像などのデータを結びつけたマルチメディア・データベース辞書。
- | | |
|---------------|-------------|
| 2011年度までの作成件数 | 見出し語 7,636語 |
| 2012年度の作成件数 | 1 |
| 2012年度のアクセス件数 | 統計情報なし |
- ・日本昔話資料データベース（稲田浩二コレクション）
稲田浩二氏（当時京都女子大学教授）らのグループが、1967年から1978年にかけて日本各地29道府県で現地録音取材した日本昔話資料（446本のテープ・約190時間）の情報（音声付き）。音声は館内限定公開。
- | | |
|---------------|-------|
| 2011年度までの作成件数 | 3,696 |
| 2012年度の作成件数 | 0 |
| 2012年度のアクセス件数 | 593 |
- ・衣服・アクセサリデータベース
本館が所蔵する衣服標本資料とアクセサリ標本資料の詳細分析情報、および関連フィールド写真の情報（画像付き）。
- | | |
|---------------|--------|
| 2011年度までの作成件数 | 18,990 |
| 2012年度の作成件数 | 587 |
| 2012年度のアクセス件数 | 22,844 |
- ・身装文献データベース
身装文化に関する雑誌記事、図書の索引情報。1) 服装関連日本語雑誌記事（カレント）、2) 服装関連日本語雑誌記事（戦前編）、3) 服装関連外国語雑誌記事、4) 服装関連日本語図書、5) 服装関連外国語民族誌で構成。
- | | |
|---------------|---------|
| 2011年度までの作成件数 | 144,944 |
| 2012年度の作成件数 | 6,925 |
| 2012年度のアクセス件数 | 21,357 |
- ・近代日本の身装電子年表
洋装がまだ日本に定着していなかった1868年（明治元年）から1945年（昭和20年）の日本を対象とした身装関連の電子年表。「事件」と「現況」、「その年の画像」、「回顧」、テキスト画像で構成される。当時の新聞記事と身装関連雑誌から情報を収録。
- | | |
|---------------|-------|
| 2011年度までの作成件数 | 9,858 |
| 2012年度の作成件数 | 191 |
| 2012年度のアクセス件数 | 2,312 |
- 館内で利用できるデータベース
- ・標本資料詳細情報データベース（館内専用）
本館が所蔵する標本資料（生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など）の情報。標本名、現地名、訳名、収集地、使用地、使用民族、使用年代、用途・使用法、製作地、製作法・材料など、より詳しい情報を収録（画像付き）。
- | | |
|---------------|---------|
| 2011年度までの作成件数 | 245,403 |
|---------------|---------|

2012年度の作成件数	16,397
2012年度のアクセス件数	38,756

・カナダ先住民版画データベース

本館が所蔵する代表的なカナダ先住民版画の基本情報と解説（画像付き）。特別展「自然のこえ 命のかたち——カナダ先住民の生み出す美」（2009年）の展示資料を中心に収録。

2011年度までの作成件数	158
2012年度の作成件数	0
2012年度のアクセス件数	65

・音楽・芸能の映像データベース

本館が世界各地で取材したビデオ映像から、音楽演奏や芸能に関する部分を、1曲または1テーマごとに抽出した動画データベース。映像は館内限定公開。

2011年度までの作成件数	849
2012年度の作成件数	0
2012年度のアクセス件数	90

・朝枝利男コレクションデータベース

朝枝利男氏が1930年代にアメリカの学術調査団に同行し撮影した、南太平洋の人々や動植物の写真に関する情報（画像付き）。

2011年度までの作成件数	3,966
2012年度の作成件数	0
2012年度のアクセス件数	12

・タイ民族誌映像データベース——精霊ダンス

田辺繁治氏（本館名誉教授）が調査したタイの精霊ダンスの写真情報（画像付き）。精霊ダンスの系統、開催地域、祭主から写真群を閲覧できる。写真は調査報告（タイ語）とも関連づけられている。

2011年度までの作成件数	10,082
2012年度の作成件数	0
2012年度のアクセス件数	15

・東南アジア稲作民族文化総合調査団写真データベース

日本民族学協会が1957年から1964年にかけて三次にわたり東南アジアに派遣した調査団のうち、第一次調査団（1957年）と第二次調査団（1960年）が記録した写真の情報（画像付き）。

2011年度までの作成件数	4,393
2012年度の作成件数	0
2012年度のアクセス件数	839

・オーストラリア・アボリジニ研究フィールド写真データベース

小山修三氏（本館名誉教授）が、1980年から2000年にかけて、オーストラリア・アボリジニ文化の調査で記録した、儀礼から風景までの多彩な写真の情報（画像付き）。

2011年度までの作成件数	8,043
2012年度の作成件数	0
2012年度のアクセス件数	2,256

・西北ネパール及びマナスル写真データベース

「西北ネパール学術探検隊」（1958年～1959年）が撮影した写真の情報（画像付き）。一部に「日本山岳会第一次マナスル登山隊」（1953年）科学班（推定）の写真を含む。本館に移管された旧文部省史料館資料の一部。

2011年度までの作成件数	620
2012年度の作成件数	0
2012年度のアクセス件数	57

・京都大学学術調査隊写真コレクション

「京都大学アフリカ学術調査隊」（1961年～1967年）が撮影した写真の情報（画像付き）。

2011年度までの作成件数	11,663
2012年度の作成件数	0
2012年度のアクセス件数	1,362

・梅棹忠夫写真コレクション

本館初代館長の梅棹忠夫氏が、世界各地における調査研究活動の過程で撮影した写真の情報（画像付き）。

2011年度までの作成件数	35,420
2012年度の作成件数	0
2012年度のアクセス件数	7,005

・日本昔話資料（稲田コレクション）データベース

稲田浩二氏（当時京都女子大学教授）らのグループが、1967年から1978年にかけて日本各地29道府県で現地録音取材した日本昔話資料（446本のテープ・約190時間）の情報（音声付き）。音声は館内限定公開。

2011年度までの作成件数	3,696
2012年度の作成件数	0
2012年度のアクセス件数	30

・国内資料調査報告集データベース

日本国内における、1) 民具などの標本資料類の所在、2) 伝統技術伝承者の所在、3) 民族・民俗映像記録の所在、4) 民俗関係出版物の所在、に関する情報。本館が委嘱した国内資料調査委員による調査報告集（1980年～2003年）をデータベース化。

2011年度までの作成件数	21,373
2012年度の作成件数	0
2012年度のアクセス件数	1,004

●2012年度に館外公開されたデータベース

・梅棹忠夫著作目録（1934～）データベース（2012年12月25日公開）

●2012年度に館内公開されたデータベース

なし

2-7 みんなく施設の利用

博物館施設の利用状況

●国立民族学博物館（展示場）を利用した大学・研究機関等（50音順、カッコ内は人数）

藍野大学（187）、芦屋大学（7）、インドネシアの大学（7）、エスモード大阪校（34）、追手門学院大学（16）、大阪栄養専門学校（59）、大阪学院大学（6）、大阪教育大学（60）、大阪芸術大学（131）、大阪経済大学（16）、大阪工業技術専門学校（7）、大阪国際大学（103）、大阪コミュニケーションアート専門学校（11）、大阪産業大学（182）、大阪樟蔭女子大学（100）、大阪成蹊大学（194）、大阪総合デザイン専門学校（246）、大阪体育大学（2）、大阪大学（204）、大阪府立大学（9）、大阪文化国際学校（13）、大阪文化服装学院、岡山県立大学（16）、岡山大学（2）、香川大学（6）、関西大学（67）、関西学院大学（39）、関東学院大学（11）、きのくに国際高等専修学校（5）、京都市立芸術大学（95）、京都外国語大学（18）、京都川島テキスタイルスクール（14）、京都教育大学（14）、京都芸術デザイン専門学校（169）、京都工芸繊維大学（11）、京都嵯峨芸術大学（93）、京都産業大学（30）、京都精華大学（66）、京都造形芸術大学（174）、京都大学（16）、京都橘大学（330）、京都ノートルダム女子大学（14）、京都文教大学（11）、共立女子大学（11）、高知大学（17）、甲南女子大学（10）、甲南大学（9）、神戸学院大学（80）、神戸芸術工科大学（21）、神戸女学院大学（52）、神戸女子大学（90）、神戸大学（20）、神戸大学大学院（30）、国土館大学（4）、滋賀県立大学（16）、就実大学（91）、昭和女子大学（48）、杉野服飾大学（26）、杉野服飾短期大学（44）、駿台観光&外語専門学校（6）、成安造形大学（11）、摂南大学（57）、専門学校アートカレッジ神戸（53）、千里金蘭大学（61）、宝塚大学（3）、タキイ研究農場付属園芸専門学校（84）、東京芸術大学（22）、同志社女子大学（20）、同志社大学（18）、東北学院大学（78）、東北生活文化大学（27）、東洋学園東洋Fデザイン専門学校（8）、獨協大学（14）、富山大学（14）、ドレスメーカー学院（99）、名古屋学芸大学（83）、奈良芸術短期大学（54）、奈良女子大学（42）、奈良大学（9）、花園大学（8）、阪南大学（41）、姫路獨協大学（3）、兵庫教育大学（25）、フェリス学院大学（3）、福井大学（10）、佛教大学（6）、北海学園大学（31）、武庫川女子大学（48）、武庫川女子大学大学院（6）、明治大学（13）、立教大学（16）、立正大学（13）、立命館大学（46）、龍谷大学（62）、早稲田大学（17）

*注 利用申請手続きを行った大学・研究機関等

・来館目的（アンケート回答より、順不同抜粋）

授 業	<ul style="list-style-type: none"> ・新入生のための初年次導入教育プログラム ・「アートミュージアム実習Ⅱ」 ・「都市社会学Ⅰ」、「社会学概論Ⅰ」 ・博物館実習 ・文化人類学の学外授業 ・文学部歴史文化学科の演習 ・人間科学講座新入生セミナー ・人類学専攻演習 ・「基礎演習」 ・「地域社会連携型フィールドワーク科目拡充支援事業」 ・「裁判外紛争処理」演習
-----	--

●国立民族学博物館キャンパスメンバーズ利用実績（カッコ内は人数）

大阪大学、京都文教大学、同志社大学 文化情報学部・文化情報学研究科、千里金蘭大学（1,326）

施設の整備状況

博物館施設の整備状況

1) 障害を有する方々への配慮についての取組状況

来館者等に安心・安全な施設環境を提供するため引き続きバリアフリー化を計画し、来館者用エレベーター（1号機）を視覚障害者等のため、音声ガイド装置付きに改修を行うとともに、特別展示館西側出口及び守衛室前出入口の扉を自動扉に改修整備を行った。また、正面玄関アプローチの土間の石割れ・目地補修を行うとともに、講堂1・2階和式便所に手摺りを取り付け、障害のある方や高齢者の方々などの安全に配慮した整備を行った。

2) 既存施設・設備の有効活用への取組状況

- ・施設設備の使用状況を把握するため館内部署と協議しつつ、共同利用スペースの創出など、施設の有効活用に取り組んだ。
- ・第2電子計算機室にサーバを集約したことにより空き室となった第1電子計算機室を情報システム課事務室として整備し、情報システム課事務室跡を梅棹資料室に整備した。また、梅棹資料室の跡を国際学術交流室、戦略プロジェクト室として用途変更した。

3) 施設の維持管理の取組状況

- ・常設展示場のうち日本の文化展示場を新構築展示施工に合わせて老朽化した床材の修繕を実施した。
- ・衛生的環境を確保するため、今年度も館内害虫駆除を行った。
- ・館内の防犯対策として、老朽化した守衛室監視カメラ制御装置の取替修繕を行い館内の安全性を高めた。
- ・自主点検及び保全業務の報告書に基づいて、予防保全・不良箇所を含めて計画的に改修計画を推進し、修繕経費の抑制を図った。

4) 省エネルギー対策等や地球温暖化対策に対する取組状況

- ・昨年に引き続き、夏季及び冬季における省エネルギーへの取組について館内に周知したほか、館内各所に節電、節水の貼紙をし、教職員へ一層の意識啓発を行った。
- ・受変電設備の変圧器を超高効率型変圧器に取替え、無駄な電力消費（約200Kw/日）を削減した。
- ・省エネ仕様の機器への取替を計画し、3階サーバ室の水冷式空調設備を高効率な空冷式空調設備に取替え、節電・節水を図った。また、講堂ホール照明器具のランプを白熱灯ハイビーム150W型からLEDハイビーム18Wに取替えるとともに、特別展示館照明器具も同様に白熱灯ハイビーム150W型からLEDハイビーム18Wに取替を行った。さらに建物外周ドライエリアの照明器具を水銀灯400W型からLED80W器具に取替を行い、省エネとランプの長寿命化によるメンテナンス費用の抑制を図った。
- ・2011年度に引き続き常時点灯している階段室等の照明器具を省エネ型またはセンサー付き照明器具に順次取替えた。

